
けいおん！～ピュアガールズ～

エイジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！〜ピュアガールズ〜

【Nコード】

N9932N

【作者名】

エイジ

【あらすじ】

私、綾瀬ちひろは広島からこの桜ヶ丘に引っ越してきた。

お母さんがいない私は、お父さんと二人暮らしで家事一切をこなす毎日。

そんな私が入学する事になった私立桜ヶ丘高校は、地元では有名な進学校。

友達、出来るかな……？

でも、友達が出来たとしても、それ以上を決して求めてはいけな
い……。

それが、“あの人”の願いだから……。

）
）

私、東雲海衣奈は一見すれば普通の女の子に見えるかもしれない。

ただ、皆と決定的に違う事がひとつ……。

私の言葉は無機質なうえに、耳ではなく目でしか分からない……。

私の言葉は口ではなく指で紡がれる……。

携帯という、普及率の高い文明の利器を通して、ね……。

平沢唯ちゃん、妹の憂ちゃん、真鍋和ちゃん。

同世代の友達が三人しかいなかった私に、遂に新しい友達が出来た
……。

その子は広島から引っ越してきた、一見したら地味な女の子。

でも、そんな一人の女の子との出会いが、私の環境を少しずつ変え

25 >°

プロローグ「桜ヶ丘のある春の一日」(前書き)

小説は初めてなので、文章表現に未熟な所が多々あるかと思われるますが、目を通して頂けると幸いです。

あと、現実世界が忙しいので遅筆がちになりますが、一生懸命執筆してまいりますのでよろしくお願ひします。

さて、いきなり長めのプロローグです。

前半はオリキャラのみ、後半は大人気の妹が登場します。

それでは、どうぞ御覧ください。

プロローグ「桜ヶ丘のある春の一日」

まだ景色をほとんど知らない街、桜ヶ丘に引っ越して来て、もう3日目の朝。

私、綾瀬ちひろは玄関先で、今日から新しい会社へ出勤するお父さんを送り出すところだった。

「お父さん、忘れ物は無い？」

「ああ、大丈夫だ。財布に免許証は持ったし……。あ、あと、ちひろが作ってくれた弁当。他は忘れても、これだけは絶対忘れちゃいけないからな」

お父さんはそう言って、私が朝5時起きで作った弁当を高々と掲げた。

その表情はなんだか誇らしげで、とても嬉しそう。

ちなみに私のお父さんは、もうアラフォーとは思えないほど若く見

えて、しかもハンサム。

しかも仕事も出来て人望も厚く、言う事無しのお父さん。

そんな完璧に見えるお父さんにも他の人は知らない、ううん、絶対に知られたくはない裏の顔があつた……。

「そ、そんな……大袈裟だよ……」

「大袈裟なもんか。俺の愛する一人娘が一生懸命作ってくれた弁当だぞ。お昼が楽しみだなあ」

「……そんなに言われると、何だか恥ずかしいな……」

「蓋を開けて、ご飯の上に海苔なんかで『お父さん大好き』なんて書かれてたら、会社の人達に冷やかされて食べ辛くなっちゃうなあ……」

「え！？……えっと……、鶏そぼろと炒り卵をいたって普通に敷き詰めたご飯なんだけど……」

「なっ！？……そ、それじゃあ、ハムとかのおかずがハート型に切り抜かれてるとか……」

「……た、タコさんウインナーなら入ってるけど……」

「！！？……。……もう会社に行きたくない……」

「お、お父さん！？しっかりして……」

膝から崩れ落ちて、まるでこの世が終わったかのような絶望感漂う表情をしているお父さん。

このお父さんは娘の作る弁当に、一体何を求めているんだろう？

それじゃあまるで、ラブラブな新婚さんの愛妻弁当だよ……。。

超が付くほどの親バカなお父さんとの会話は突然に一人妄想のスイッチが入って、こんな感じに收拾するのが困難な状況に陥ってしまった事が多々ある。

この親バカっぷりは、私が物心ついた頃には既に始まっていた。

私がお父さんとお母さんの最初で最後の子供だったから、尚更溺愛されてるんだと思う。

とりあえず会社への出勤時間が迫っている事だし、落ち込んでいるお父さんをなだめる事にした。

確実に立ち上がらせる事の出来る、恥ずかしいけれど復活必至の言葉をお父さんの耳元で囁いた。

「弁当なんかで表現しなくても、私はお父さんの事が、……大好き……なんだから……」

「!?!?……ダイスキ……、だいすき……、大好き……」

お父さんが『大好き』という言葉のリフレインし始めたら、もう九分九厘復活は間違いない。

その証拠に、悲しげだった瞳が輝きを取り戻し出してるから。

「……そうか……そうだよな。ちひろは俺の事が大好きなんだもんなあ!!ハアアアツ、ハツハツハツハアアアツ!!」

「クスツ、良かったあ、元気になって」

高らかな笑い声と共にお父さんが完全復活を果たして、これでようやく一安心。

会社に遅刻する心配もなくなったみたい。

ちなみに私の台詞はお世辞でもなんでもなくて、私はお父さんが本当に大好きで尊敬もしている。

だって、お母さんが亡くなってからというもの、男手ひとつで私を育ててくれてるんだもの。

感謝してもしきれないくらい、本当に感謝してる……。

親バカはちょっぴり困惑気味なんだけどね……。

「さあ、お父さん。そろそろ会社に行かないと遅刻しちゃっよ」

「そうだな。じゃあ、行ってくるぞ。……あ、そうだ……」

「ん？どうかしたの」

玄関をくぐりかけたお父さんが、何かを思い出したらしく急に振り向いた。

「…すまん、ちひろ…。荷物の荷解き、残り全てお前一人に任せる事になってしまった…」

さっきまでとは正反対の、神妙な面持ちで私に詫び始めたお父さん。確かにこの家には、まだ開けていない段ボール箱が幾つもあった、今日からは私一人で荷解きしなくちゃいけない。

私は別に気にしてなかったけれど、お父さんは気に掛けてくれたんだ……。

そんなお父さんの何気ない優しさが、また大好きな理由でもあるんだよね。

「大丈夫。無理せず少しずつ荷解きしていくから。私の事は気にしないでお仕事、頑張ってきてね」

「…分かった。何かあったら、遠慮せずにメールなり電話なりしてきていいからな」

「うんっ、分かった。気をつけて、いつてらっしゃい」

お父さんは、ようやく車に乗って会社へと出勤していった。

さて、と……。今日は荷解き以外にもしなくちゃいけない事があるから、頑張らなくちゃ。

）

）

今、お昼の2時ちょっと前。

春めいて一番暖かい時間帯に、台所のテーブルの上にも、ちょっとした春が訪れていた。

テーブルの上には、午前中から仕込んでいた手作りの苺たっぷりロールケーキが何本も並んでいた。

今日はこれを持って、遅くなった御近所への御挨拶に伺う事にする。

既製品でもいいんだけど、これからお世話になる人達に心のこもった贈り物をしたいと考えて、手作りのロールケーキを作ってみたの。

気に入ってもらえるといいんだけど……。

それに、どんな人達が住んでいるんだろう……。

期待と不安が交錯する中、私は出来たてのロールケーキを持って玄関を出た。

）

私が抱えていた心配は、すぐに解消された。

御近所の方は皆さん優しい人ばかりで、お返しをくれる人もいる。

これなら御近所付き合いも上手くいきそう。

さあ、これが最後の一軒……、なんだけど……。

私の顔は自然と訪れた家の上の方を向いていた。

「……うわぁ……、凄い家……」

白を基調とした家は、生まれて初めて見る三階建て。

駐車場には高級車が停まってて、二階にはウッドデッキの様な空間も見える。

近所の家の中でも、一際目を惹く建物だった。

一体どんな人が住んでるんだろう？

ロールケーキじゃなくて、フルーツの詰め合わせなんか良かったのかなぁ？

一抹の不安が拭えないまま、私は意を決してチャイムのボタンを押した……。

〜 ピンポーン……

「はあ〜〜〜い」

家の中から聞こえてきたのは、予想もしていなかった可愛い女の子の声。

てつきり豪華な衣裳やアクセサリを身に纏った派手な女性が出てくるんじゃないかと勝手に思い込んでいたから、少し安心した。

ガチャッ

玄関から出てきたのは声に比例した、可愛い顔の女の子。

髪を後ろで束ねた短めのポニーテールが特徴で、春らしいピンクを基調にした服装が、その可愛らしさを更に引き立てていた。

「……………あのお……………どちら様ですか……………」

「……はっ！？」、「ごめんなさい、私ったら……」

可愛さに見とれてて、女の子を待惚けにさせてしまった…。

第一印象が大事なのに、これじゃあただのおかしな人と思われちゃう……。

慌ててる心をなんとか落ち着かせて、私は自己紹介を始めた。

「この度、近所に引っ越してきました綾瀬ちひろと言います。本日は遅ればせながら、御挨拶の方に伺いました」

……ちょっと挨拶が堅かったかなあ……？

「これは御丁寧な御挨拶、ありがとうございます」

目の前の女の子は、私と同等の丁寧な口調とお辞儀で受け答えをした。

しっかりした子なんだなあ…。

「これ、つまらないものですが、手作りのロールケーキです。よろしかったら御家族の皆さんで召し上がってください」

「うわあ、ありがとうございます。甘い物、大好きなんです」

とびっきりの笑顔でケーキを受け取る女の子に、思わずドキッとしちゃった。

本当に可愛い……。

「…あ、すみません。紹介が遅れました。私、平沢憂と言います。今度、中学3年生になります」

「そんなんですか。私は今度、高校に入学するんです」

「じゃあ、私より一つ年上なんですね。ちなみに綾瀬さんはどちらの高校に入られるんですか？」

「えっと……、桜ヶ丘高校という所に……」

「えっ！？桜ヶ丘ですか？あそこは、この辺では有名な進学校で成績が良くないと入れないんですよ。綾瀬さんて頭脳明晰なんですね。憧れます……」

平沢さんが羨望のまなざしで私を見つめてくる。

途端に恥ずかしくなって、顔が赤くなっていくのが自分でも分かった……。

「実は私のお姉ちゃんも今度、桜ヶ丘に入学するんです」

「…あ、平沢さん、お姉さんがいるんですか？」

「綾瀬さんの方が年上なんですから敬語使わなくていいんですよ。私の事は憂って呼んでください」

「あ、えっと……憂ちゃん、お姉さんがいるの？」

「はい。私の自慢のお姉ちゃんです」

憂ちゃんの自慢のお姉さんかあ……。

これだけしつかりした妹さんだから、よほど嫉の厳しいお姉さんなのかな？

「もし、よろしかったらこのケーキと一緒にお茶しませんか？お姉ちゃん、今出掛けてますけど、もう少ししたら帰ってくると思いますから……」

憂ちゃんのお姉さんかあ……。正直会ってみたい気はする。けれど……。

「ごめんなさい……。気持ちは嬉しいんだけど、まだ荷解きが終わってなくて、急がないといけないから……」

「…ああ、そうですね。もう入学式まで日がないですもんね」

「ごめんなさい……」

残念そうな表情の憂ちゃんに罪悪感を感じて、胸が痛い……。

けれど、あと3日したら高校の入学式が始まってしまふ。

正直、時間が無いの……。

「いいんですよ、気にしないでください。落ち着いたら是非、また遊びに来てください」

「…ありがとう、憂ちゃん」

）

もう、夕日が傾いてきてる。

名残惜しいけれど、憂ちゃんと別れて家に帰ってきた私は荷解きを再会した。

憂ちゃん、本当に可愛かったなあ……。

私、一人っ子だから、あんな妹さんがいるお姉さんが、正直羨しい。

憂ちゃんのお姉さんかあ……。

お友達に……なれるかなあ？

3日後に控えた入学式が楽しみで、忙しいはずの荷解きも、なんだか楽しくなっていた。

あ、そうだ。

お父さんが帰ってくる前に、晩ご飯を作らなくちゃ。

引っ越しの関係で外食やコンビニ弁当が続いていただけに、片付いた台所でようやく料理が作れる喜びを噛み締めながら、エプロンを腰に巻いた。

プロローグ「桜ヶ丘のある春の一日」(後書き)

長いプロローグにお付き合い頂きまして、ありがとうございます。

今回は天然の姉と幼馴染み、そしてもう一人オリキャラが登場します。

これからもどうぞ、よろしく願います。

第1話「声なき声と、新たなる出会い」（前書き）

プロローグからの間隔が開いてしまい、大変失礼いたしました。

並びに、長々とした駄文にもかかわらず感想を頂いたり、お気に入り登録をしてくださった方々、ひいてはこの作品を読んで頂いた皆さんに、深く御礼を申し上げます。

そして、ようやく本作第1話ですが……。

前回の後書きで天然と幼馴染みが登場と書いてはいましたが、最後の方のみの登場になります。

半分以上、オリキャラでの構成になっています。

そして、入学式の1日だけで長々とした文章が、あと2話ほど続きます。

それでは前書き自体が長くなりましたが、本編を御覧ください。

第1話「声なき声と、新たなる出会い」

「ふっ……ふわああああっ……ふにゅにゅ……」

もう何回目の欠伸なんだろう？

今、朝の7時半。

真新しい制服に身を包んで玄関を出ると、春特有の暖かい日差しが絶え間なく降り注ぐ。

この暖かさは心身共にポカポカにしてくれるけれど、同時に抗う事の出来ない眠気を呼び起こしてしまうから、困っちゃうなあ……。

昨日の夜遅くに荷解きが終わって、寝る事が出来たのは日付変更線を越えた後だったし……。

今朝はいつも通り洗濯、朝御飯とお父さんのお弁当作りに加えて、今日からいよいよ高校に通う為、その準備も含めて朝5起き……。

そして何より、今日からの高校生活に期待と不安が交錯して、ドキドキしてほとんど眠れなかったのが一番大きいかな？

これじゃあ、まるで遠足前の小学生みたい……。

しっかりしなきゃ！今日から私、高校生になるんだもの。

ちなみに今日、お父さんは会社で用事があるみたいで、30分くらい前に早めに出社していった。

でも、あのお父さんが私の初めてのブレザー姿を目の当たりにして、放っておく訳なんてないもんね……。

右手に使い古したデジタルカメラを握り、私の部屋をスタジオ代わりにして、《ちひろの輝かしい成長記録》という名の、凄く恥ずかしい撮影会を始めたのだ……。

あんなポーズやこんなポーズを強要されて、更には私自身の意思では絶対に喋る事のない台詞まで喋らされたなあ……。

絶対に他人様には見せられない内容が赤裸々に収録されちゃった……。

さすがの私も恥ずかしいからと精一杯嫌がったんだけど、ハイテンションになってるお父さんにしたら『その恥じらいがまたいいっ！』と、かえって撮影意欲をそそる結果になっちゃって……。

隙があれば逃げる事も出来たけど、断った時のお父さんの落ち込んだ顔を想像したら、とても出来なかった……。

もう二度とお父さんの悲しむ顔なんて、見たくはないから……。

それはそれとして、あんなモノが他人の目に触れてしまったら、大変な事になっちゃうよお……。

「……………？」「ヒョコッ」

「ひゃんっ！？」

突然、私の顔面すれすれに顔を覗いてくる女の子に驚いて、思わず声がつわずつちやった……。

彼女は私と同じ桜ヶ丘高校の制服を着ていて、引越しの挨拶の時に知り合ったばかりの女の子。

「……………えつとお……………、確か東雲海衣奈さん……………、ですよね？」

「……………」コクッ

東雲さんは私と同年で、セミロングの綺麗な髪とお姉さんの優しい雰囲気な顔立ちが特徴的な、一見したら普通の女の子。

……………けれど、東雲さんの口からは一切言葉を聞く事は出来ない……………。
喋らないのか、喋る事が出来ないのか、どっちなのかは分からないし、私から聞くことはしなかった……………。

どんな人だって、他人に土足で踏み込まれたくない領域があるから……………。

それは、私も同じかな……………。

そんな東雲さんとの会話は、一体どうするかという……………。

〳〳〳……………

私の携帯が鳴りだして、開いてみると【メールあり 1件】の文字が表示されている。

メールボックスを開けてみると、こう書かれていた。

『驚かせちゃったみたいね。ごめんなさい』

「…え？いいえ、私こそすみませんでした。急に大きい声出したりして、驚かせてしまって……」

『私なら大丈夫だから、心配しないで。もしよかったら、一緒に登校しない？』

「…あ、は、はいっ。喜んで」

そして私は、東雲さんと高校へ登校する道を歩き始めた。

突然誘ってもらえて、ちょっぴり驚きもしたけれど、嬉しさの方が先行してた。

東雲さんは常に右手にピンクの携帯を持っている。

その携帯から送信されてくるメールが、東雲さんとの唯一の会話手段。

しかも手元は一切見ない、高速のブラインドタッチ！！

パソコンでは見た事あるけど、携帯でブラインドタッチする人は初めて見た。

メール中の視線は常に会話する人を見つめていて、その時の東雲さんの顔の表情がメール文の感情表現に繋がっているみたい。

『そういえば綾瀬さん、さっき顔が赤かったけど、どうかしたの？』

「ふえっ！？な、なんでもないんです。ほ、本当ですっ……………」

『…顔を赤くして焦りながら言われても、説得力無いわよ…』

「あつっ……………ごめんなさい…」

あの撮影会の内容を思い出した事と、赤い顔を見られた事が恥ずかしくなって、また顔がほてっていくのが分かった……………。

『何か恥ずかしい事でもあったの？』

「ふえっ！？……………そ、そんな事……………ない……………ですっ……………」

『…綾瀬さんて、嘘をつくのが苦手な人なのね。真っ赤な顔が更に真っ赤よ……………』

「…そうみたいですネ…」

『綾瀬さんて、とても純情で面白い人ね。話していて、とても楽しいわ』

……それって、褒められてるんでしょうか？けなされてるんでしょうか？

『さあ、どっちでしょう？』

「心の中読まれてる!?!」

『そんな人間離れた事しなくても、さっきの会話に疑問符だらけの表情してたから、何を考えているかは大体分かっちゃった。だから少し、カマをかけてみたの』

やっぱり私、からかわれてる気がする……。

ペロツと舌を出して少し意地悪そうな笑顔をする東雲さん。

そんな東雲さんに仕返してて訳じゃないけど、私は少しばかり意地悪そうな質問を投げ掛けた。

「それじゃあ今、私が東雲さんの事をどう思っているか分かりますか？」

作為的に無表情な顔で問い掛けると、東雲さんはあからさまに困惑

気味だった。

『え？……えっと、もしかして少しからかった事、……怒ってる？』

オロオロとろたえた顔で困った顔をしている東雲さん。

…私は恥ずかしいけど、勇気を出してさっきの質問に答えた。

「違います……。こんな会話が出来る私達は、もう友達なのかなって、そう思っただんです……」

『…綾瀬さん……』

まだ会ってからたったの3日しか経っていないのに、もう友達と言えるのかどうか、不安があった……。

もしかしたら、私の独りよがりかもしれないし……。

『…私達って友達じゃなかったの？』

「……え？」

『初めて会った3日前の時点で友達になれたと、私は思ってたつも

りよ
『よ』

「…ほ、本当ですか！？……よかったあ、嬉しい！！」

これで憂ちゃん以外にもまた一人、お友達が出来たあ！！

その何物にも代えがたい喜びは今、私の表情にしっかりと表れている。

カシャッ、ピロリーン

「……………え？」

『いい笑顔ね。ベストショットいただきっ』

嬉しさのあまり警戒心が皆無だった私は、携帯のカメラで東雲さんに今の顔をしっかりと撮られていた。

「な、何いきなり撮ってるんですか！？は、恥ずかしいから消去してください」

必死の思いで東雲さんの携帯に手を伸ばすけれど悲しいかな、虚しくも空を切ってしまう……。

『もう遅いわ。保存&待ち受け登録完了しちゃった、テヘッ』

「テヘッ、じゃないですよ。待ち受けなんてもってのほかです……」

『あら、だってもう私達、友達なんでしょ？なら、友達の待ち受け画面があってもおかしくないじゃない』

「いくら何でも、心の準備も出来てないうちに撮られた写真はダメですう！！」

東雲さんは、またしても意地悪そうな笑顔を浮かべて、早速待ち受けにした恥ずかしい画面を私に見せつけている。

私は東雲さんの携帯をどうにか取るうとするけど、素早い身のこなしで難なくかわされてしまう……。

寝不足じゃなかったから、身体がスムーズに動くのになあ……。

……あ、それ以前に私、運動音痴だった……。

）

）

結局待ち受けを消去する事は叶わずに、気がつけば高校の校門の前に、いつの間にか辿り着いていた。

「…………ハア、ハア、ハア…………」

『大丈夫、綾瀬さん？』

「…………だ、大丈夫…………ですう…………、はひっ…………。ハア、ハア…………」

『…………うん、全然大丈夫じゃないわね…………』

余計な体力を使って、入学式前に息切れ？動悸？目眩という、高校生にはまだ早すぎる症状が現われた…………。

東雲さんがハンカチで私の汗を拭ってくれる。

優しいなあ、東雲さん。

膝に手を置きながら、目の前に広がる壮大な景色に心を奪われた…………。

「これが…………桜ヶ丘高校…………」

『そうよ。この地元では知らない人はいないわね』

この桜ヶ丘では有名な進学校にして、女子高でもある桜ヶ丘高校。

奥にそびえる伝統を感じる学び舎に、素直に感動をおぼえた。

これから三年間、お世話になる高校を目の当たりにして、なんだか胸の奥が熱くなってくるのが分かった……。

『綾瀬さん』

「はい……」

『危ないわ』

「はい……、え？」

「遅刻、遅刻ううううっ！どいて、どいてええええっ」

「へ？えええええっ！？」

急げや急げといった感じで猛然と走ってくる女の子が、気がつけば私の目の前まで突進してきた。

人は突然に危険を察知すると、身体が動かなくなるという事を今、身を持って痛感した……。

ドッシン

「きゃっ!?!」「あっっ!?!」「

そして私は、東雲さんの忠告も虚しく、思い切りぶつかって派手に地面に転げてしまった……。

「……いたたあ……」

「あわわ、ご、ごめんなさい。急いでだから……。大丈夫ですか?」

私を心配してくれているみたいで、多分私にぶつかってきた女の子が、私の近くに駆け寄ってきた。

多分、というのは眼鏡が無くて目の前がぼやけて、よく見えないから……。

「……め、眼鏡、眼鏡……」

四つん這いになって落ちた眼鏡を探してみるけど、手応えはまったく無し……。

なんてお約束な展開……。

「えっと、眼鏡、メガネ…、あ、あったあったあ！！はい、これどうぞ」

女の子が私の眼鏡を見つけてくれた。

私の右手に眼鏡が置かれた感触が伝わって、眼鏡を掛けるとようやく周りの景色がくつきり鮮やかに写し出された。

目の前にいる見知らぬ顔の女の子はショートボブにヘアピンが特徴的で、とても可愛かった。

「本当にごめんなさい。怪我とかしてませんか？」

「あ、はい。大丈夫です。怪我もしてませんし、眼鏡も壊れてないですから」

「…よかったあ…」

ホッと胸を撫で下ろす女の子に私はふと、デジャヴを覚えた。

この顔立ちと声、何となく覚えが……。

『相変わらずそそっかしいわね、唯ちゃんは……』

「…え？あ、ミーナちゃんだ」

東雲さんと唯ちゃんと呼ばれてる女の子との会話メールが、何故か私の携帯にも打ち込まれていた。

『唯ちゃん。私はミーナじゃなくて、み？い？な。伸ばしたらダメっていつも言ってるでしょ？』

「ええ　っ！？ミーナちゃんていいと思うけどなあ。発音は一緒だよ？」

『間を伸ばされると、なんだかチャラチャラした感じに聞こえるから嫌なの』

東雲さん、結構細かいこだわりを持つてるんだ……。

一応、私も気に留めておく事にした。

『それよりも唯ちゃん。まだ8時ちょっとなのに、何をそんなに急いでるの？』

「へ？……あれ、本当だあ！！時間、見間違えたあ……」

『そんな事だろうと思ったわ……。高校生になっても相変わらずみた

いね』

「いやあ、それほどでも……」

『…あの…、褒めてる訳じゃないから…』

唯ちゃんという女の子と東雲さんは、どうやら昔からの友達みたい。会話が私達よりも親密な喋り方だから、すぐに分かるもの。

「あれっ？あそこにいるの、和ちゃんだ。それじゃあ私、先に行ってるね」

『はいはい、いってらっしゃい』

「おはよう、和ちゃん」

「あら、唯じゃない。おはよう」

そして唯ちゃんと和ちゃんと呼ばれてる女の子は、一緒に校舎の方へと歩いていった。

『あ、ごめんなさい、綾瀬さん。待ち惚けさせちゃったわね』

「あ……いいえ、全然。それよりも、あの唯ちゃんて女の子、東雲さんのお友達なんですね」

『ええ、そうよ。彼女の名前は平沢唯。私と唯ちゃんと、さつき和ちゃんと呼ばれてた真鍋和ちゃんの3人は、昔からの幼馴染みな』

「幼馴染み、ですか。なんだか羨しいですね、そういう関係って……」

『そういうものかしらね？私からしたら、幼稚園から小？中学と一緒の腐れ縁ってだけよ。でも、悪い気がしないのは確かね』

私には幼馴染みなんて言える人なんていなかった……。まして……。

『さあ、私達もそろそろ行きましようか。クラス割りの発表とかも見たいし』

「そうですね。東雲さんと同じクラスだといいですね」

『あら、嬉しい事言ってくれるわね』

そして、私達は2人揃って左足から校門を潜り抜けた。

高校生活の最初は、友達と足並みを揃えたいと2人して思いついた

事だった。

これから、楽しい高校生活が始まるんだ……。

一体、どんな事が待ち受けているんだろう……？

私の心の中で、期待と不安が葛藤を繰り返していた……。

第1話「声なき声と、新たなる出会い」(後書き)

入学式にすら辿り着いていない文章で失礼いたしました……。

次回は今までに出たキャラが総出演します(と言っても、まだ2話分しかいませんが……)。

次回はなるべく早く投稿したいと思います。

これからも、どうぞよろしくお願いします。

第2話「転校生？な私」（前書き）

暫く振りの更新となりました。

やはり現実が忙しくて、更新はすぐには出来ないみたいです……。

それでも頑張って執筆していきますので、どうかよろしくお願いします。

それでは第2話をどうぞ、御覧ください。

第2話「転校生？な私」

途中、何度となく睡魔に襲われながらも入学式を無事に終えて、私は1年3組の教室にいた。

黒板に書き記されていた席の割り当て表を見てみると、窓側の一番後ろ。

眼鏡を掛けているから後ろの席になる事は多いけれど、隅っこの席は初めて。

席に座って周りを見ると、多分同じ中学だったと思う仲の良い幾つかのグループが、楽しそうに語り合っていた。

そんな会話のやり取りを、私は席に座ってただ呆然と見ているだけしか出来なかった……。

そして誰も気付かないくらいの静かなため息を、一つ吐いた……。

……だって、誰も知っている人が、いないもの……。

入学式前に張り出されたクラス分けの紙には、あいいうえお順で名前が書かれていた。

私は1年3組の一番左上に、すぐ名前を見つけられた。

つまり出席番号一番という、何かと指名されやすい目立つ存在になっ
てしまう可能性が大きくなっちゃった……。

まあ、今までもそうだったから慣れてるけど、恥ずかしがり屋の私
にとっては悲しい現実を突き付けられてしまった訳で……。

でも、もっと悲しいのは、その中に東雲さんの名前は無くて、お隣
りの1年2組という結果……。

淋しい気持ちはもちろんあったけれど、東雲さんに気を遣わせたく
なかったから「仕方ないですよ、こればかりは」と無理矢理笑顔で
振る舞った。

でも、やっぱり淋しいな……。

時が流れれば、自然とお友達は出来ると思う。

でも、それは私自身のただの憶測にしか過ぎない。

もし、このまま誰ともお友達になれなかったら……。

急に不安が押し寄せて、周りの楽しそうな雰囲気の皆との壁を感じ出した……。

……あの時と一緒に……。

あの辛い日々の始まりは、こんな感じのスタートだった……。

もう、あんな想いはしたくないのに……。

「まったくもう、なかなかこないから探してみたら、案の定だったわ」

私の負の連鎖を断ち切ってくれたのは、聞き覚えのある声だった。

俯き加減だった顔をあげてみると教室の扉を開けて、さっき見掛けた二人の女の子が入ってきた。

「えへへっ、間違っつて隣のクラスに行っちゃった」

「他の人が座るはずの席で堂々と居眠りしてるんだもの。恥ずかしいっいたらなかったわ」

「昨日の夜はワクワクしてなかなか眠れなかったんだあ」

「遠足前の小学生じゃないんだから……」

私もそうでした、ごめんなさい!!

「唯ちゃんらしいわね」

「唯は高校生になっても変わらないなあ」

「いやあ、それほどでもあ……」

「別に褒められてないから」

このクラス、平沢さんを知っている人が結構いるみたい。

平沢さんと真鍋さんのおかしな会話のやり取りに皆、堪らず笑って

る。

なんだか微笑ましくっておかしくって、つい私もつられて笑っちゃった。

さっきまで落ち込んでたのになぁ……。

「えっと、私の席はと……、窓際の後ろから二番目かぁ……。凄く良い場所だね」

「寝るにはうってつけよね」

「なんで分かったの、和ちゃん!？」

「分かるわよ、そのくらいは。何年幼馴染みやってると思ってるの?」

またまた教室内は大爆笑。

真鍋さんて平沢さんの事をよく熟知してるんだなぁ、さすが幼馴染み。

「唯、早く席に着かないとそろそろ担任の先生が来るわよ」

「はい」

え？平沢さんがこっちの方に向かって歩いて来る……。

さっき、確か窓際の後ろから二番目って……、私の前の席！？

「前、失礼しまーす。……って、あれ？」

前の席に座ろうとした平沢さんと目が逢ったので、席に座ったまま取り敢えず軽く会釈した。

すると、最初はきよとした顔をしてたけれど、徐々にその顔は満面の笑みへと変わっていった。

「さっきの人だあ！！同じクラスだったんだね」

「……は、はひっ……」

平沢さんは私の両手を握り、上下に激しく振って喜びを目一杯表現していた。

ただ平沢さん、そんなに激しく振ったら腕がちぎれちゃうよ……。

「ようし皆、席に着いて」

いいタイミングで女性の先生が入ってきて、この激しい揺れから解放された。

…はずなのに、なんだかまだ揺れてる気がするよお…。

「この1年3組の担任になった、近衛^{このえまどか}円佳です。担当は体育、趣味は食べ歩きとロックコンサートに行く事。これから一年間、よろしく」

サツパリとした挨拶を済ませた先生は、髪型はショートカットで体型はスレンダー。

綺麗や可愛いではなくて、ボーイッシュという言葉が似合うカッコいい顔立ちが魅力的。

それが証拠に、周りの女子生徒の何人かが黄色い声をあげていた。

確かにカッコいいなあ。性別に関係なく人気がありそう。

「よし、この流れで窓際の列から自己紹介、いってみようか」

え、いきなり自己紹介？しかも私達の列から！？

どうしよう、凄く緊張してきた……。

一番前の人から自己紹介が始まって、段々私の番が近付いてくるにつれて、さらに緊張感と心拍数が上がってきた……。

そして私の前の席、平沢さんの番。

椅子から立ち上がった平沢さんは、明るく元気に自己紹介を始めた。

「初めまして、平沢唯です。好きな物は甘い物と可愛い物です。苦手なのは夏の暑さと勉強全般です。桜ヶ丘に合格する事が出来たのは、同じクラスにいる真鍋和ちゃんと私の妹のサポート、そして私の努力の賜物と思ってます。これから、よろしくお願いします」

…えっとお、これは反応に困るなあ…。

拍手をしながら笑ってる人もいるし、真鍋さんは呆れた顔をしている。

先生に至っては唾然としてるし……。

「…ま、まあ、正直でいいんじゃないかな……。それじゃあ、次の人……」

いよいよ私の番……。

席を立つた私に、皆の視線が自然と向けられる。

緊張も最高潮に達して、何を喋っているのかも分からなくなるくらいに、頭が真っ白になっていた……。

「…えっと、あの……」

言葉が上手く出でこない……。

高鳴る心音だけが聞こえてきて、身体も震えが止まらない……。

今、何をしてるんだっけ？

それさえも分からなくなっちゃったよお……。

ギユツ「!?!」

そんな時、私の両手を優しく握る感触を感じた。

その手の温もりの持ち主は、目の前に座っている平沢さんのものだった。

「大丈夫だよ。そのままの自分を出せばいいんだよ」

平沢さんは優しく、人懐っこい笑顔でそう言ってくれた。

「唯はそのまますぎるわよ」

「ええーっ！？そんなぁ……」

またしても真鍋さんの言い得て妙なツツコミで、教室内は笑いにもまれた。

その笑いで私の緊張感も不思議とほぐれてきた。

「ありがとうございます、平沢さん。なんだか落ち着きました」

「よかったね。ちなみにさっきの発言は、笑いで落ち着く事を見越したうえでのものだったのです」

「それは絶対ないわね」

「和ちゃん！？さっきからどうして話の腰を折るのぉ……」

またしても教室内は割れんばかりの大爆笑。

もう平沢さんと真鍋さんは有名人の地位、確保ですね。

「ほらほら平沢さん、静かに。自己紹介が進まないから」

「はい……」

先生の一言で静かになった教室に、落ち着きを取り戻した私の声が響き渡った。

「皆さん、初めまして。綾瀬ちひろといたします。実は私、この桜ヶ丘に5日前に引っ越して来たばかりで、分からない事だらけです。色々ご迷惑をお掛けする事があるかもしれませんが、どうかよろしくお願いいたします」

どうにか自己紹介も終わって椅子に座ると、大きく安堵のため息を吐いた。

「凄い！！綾瀬さんて転校生なんだね」

平沢さんが好奇心に満ちた目で私を見ている。

転校生ってそんなに凄いもののかなあ？

それ以前に、私って転校生？別に他の学校から来たわけじゃないから、こっぴつ場合ってどういふ表現があうんだろう？

「じゃあ、綾瀬さんが分からない事は教えてあげるように。あと皆、仲良くしてあげてね」

「……………はい」「……」

すっかり転校生扱いになっちゃった私はこの後、席を囲まれて質問責めに……。

戸惑いもしたけれど、これで皆と近付けた気がする。

これって、平沢さんのおかげかな？

私は心の中で“ありがとう”をそっと呟いた。

）
）

高校生活初日を終えて、下校時間。

私はとある理由から平沢さん、真鍋さんと一緒に下校していた。

2組の教室を覗いてみたけれど、東雲さんはもう既にいなかった…

…。

出来れば、一緒に帰りたかったなあ……。

「…本当にすみません…。無理を言ってしまったて…」

「いいのよ。だって引越して来て、まだ5日目でしょ？道が分からなくても不思議じゃないもの」

真鍋さんの言う通り、私は帰り道が分からなくなっていた。

実は私、荷解きが忙しくて、登校する道の下見がまったく出来なかった……。

だから、同じ制服を着た人の後ろについていけば学校まで辿り着けるといって、短絡的な作戦を考えていた。

結果、東雲さんと一緒だったから無事に登校する事が出来ただけで、帰り道の事までは全然考えていなかったの……。

それにいざ帰り道となると、行きとはまったく別の景色になってしまい、いよいよ分からなくなってしまっ……。

本当に短絡的でした……。

「ねえねえ？ちいちゃん」

「…ち、ちいちゃん？私の事、ですか？」

「そつだよ。ちひろちゃんだから、略してちいちゃん」

出会って僅か2時間ちよつとで、もうあだ名で呼び始めた平沢さん。

私、ちひろやちひろちゃんと呼ばれた事が多かったけど、あだ名で呼ばれたのは今までほとんど無かった。

あつても、あまりいいあだ名じゃなかったし……。

だから戸惑ったけれど、同時に仲良しさんになれたみたいで、嬉しくもあった。

「ちいちゃんてミーナちゃんと一緒にいたみたいだけど、御近所さんなの？」

『そつよ。つい先日、引越しの御挨拶に来てるから』

「東雲さん」

「あ、ミーナちゃん」

「海衣奈じゃない。帰ったのかと思ったわ」

『ちょっとした用があったね。さっき終わったところ。で、唯ちゃん。ミーナじゃなくてみいなよ、分かった？』

「うん、分かったよ、ミーナちゃん」

『うん、全然分かってないわね……』

東雲さんが後ろから息を切らせながら、走って追いついてきた。

多分、一緒に帰りたい一心で走ってきたんだと思う。

ジンワリと汗をかいていたので、私のハンカチで丁寧に拭いた。

『ありがとう。教室に私がいなくて淋しかったでしょ？』

「ふえっ！？そ、それは……、えっと……」

『はいはい。綾瀬さん、本当に可愛いわあ』

「ふええ……」

本心を突かれて、しどろもどろになってしまっ。

また真っ赤になっているんだろうなあ、私の顔……。

そこに、私を淋しがり屋の子供扱いしている東雲さんが頭を撫でてくるから、余計に恥ずかしくて顔全体がほてってしまう。

「あ、いいなあ、ミーナちゃん。私も私もお」

『ミーナって言わないの』

「ひ、平沢さんまでえ……………」

平沢さんも撫で始めて、多分もう私の髪の毛はクシャクシャになってる……………。

「ほら、二人とも。綾瀬さんが迷惑がってるから止めなさい」

「『はい』」

言えない……………。ちょっと嬉しい気分になってたなんて……………。

「ところで海衣奈の御近所っていうことは、唯の御近所でもあるんだけど綾瀬さん、行ってないかしら？」

「えー！？そうなんですか」

「そうだよ。私とミーナちゃんは家が御近所さんなんだよ」

『そうよ。よく唯ちゃんの家にも遊びに行ってるから』

知らなかった……。

あれ？ということとは私、平沢さんの家に引っ越しの挨拶に行ってる可能性があるはずなんだけど……。

ここで、私はようやく数日前の事を思い出した。

引っ越しの挨拶で最後に伺った三階建ての家……。

出てきた女の子の名前は、確か……。

「あ、あのお、平沢さん？」

「なあに？ちいちゃん」

「平沢さんて確か妹さんがいるって、自己紹介で言っていましたよね？」

「うん、いるよ？憂って名前の妹なんだけど、私に似てて可愛いんだあ」

『「顔だけはね」』

「なんでなんでえ！？しかも、なんでハモるのぉ？」

ええええええっ！？

あのよく出来た可愛い妹さん、憂ちゃんのお姉さんて、平沢唯さん！？

確かに二人とも名字が平沢さんだ……。

ビックリを通り越して、啞然としてしまった……。

正直申し訳ないんだけど、あまりにも正反対すぎる気がするなあ……。

「あ、そうだ。ミーナちゃん、和ちゃん。ちいちゃんも家に呼ぼうよ」

『そうね。人数がいた方が盛り上がるしね。って、だからミーナって伸ばさないの！』

「いいわね。一応、憂にも聞いておいたほうがいいわよ？」

「うん、早速聞いてみる」

平沢さんが携帯で憂ちゃんに電話をかけている横で、私の頭の上には幾つもの？マークが浮かび上がっていた。

そんな私を察してくれたのか、真鍋さんが補足の説明をしてくれた。

「あのね、実はこれから憂が私達の高校入学のお祝いをしてくれる事になってるんだけど、もしよかったら綾瀬さんも是非」

『来て来て。綾瀬さんの歓迎会もしたいし』

「憂もOKだよ。ちいちゃんに会いたいから是非だつて」

突然のお誘いに嬉しさと戸惑いを感じながらも、断る理由なんて何処にもない私は二つ返事で了解した。

「は、はい。私でよければ喜んで……」

「わあい！！楽しくなるね」

「じゃあ早く行きましょう」

『ほら、綾瀬さん。唯ちゃんの家が見えてきたわ』

バンザイして喜ぶ平沢さんに、それにつられて笑顔になる真鍋さん。

そして東雲さんが指差す方向に、見覚えのある白い三階建ての建物が、すぐそこに見えてきた。

そして家の前に着くと、平沢さんが玄関を勢いよく開けた。

「憂いーっ、帰ったよお」

「あ、お姉ちゃんお帰りなさい。皆さんもいらっしやい」

こうして私は思わぬ形で、あの憂ちゃんと早い再会を果たした……。

第2話「転校生？な私」（後書き）

今回は平沢家での皆の団欒風景を描きます。

ここでちひろの過去に関する事や、海衣奈の疑問に少し触れていきます。

また、ゆっくりの更新になりますが、必ず書き上げますのでお待ちください。

第3話「お祝いのパーティー」（前書き）

暫く振りの更新となりました。

今回でようやく、入学式の日長い一日が終わります。

そして、終盤辺りから急にシリアスな展開になります。

文章力は相変わらずですが、どうぞ御覧ください。

第3話「お祝いのパーティー」

今、お昼の1時になるうとしている頃。

平沢さんの家に招かれた私達は今、二階にあるリビングに集まっていた。

テーブルの上には、憂ちゃんが腕によりをかけた、美味しそうな料理が所狭しと並んでいた。

トロトロ卵のオムライス、ボンゴレビアンコ、トンカツ、エビフライ、ハンバーグ、シーフードサラダ、ミネストローネスープ……。

…今から大食い大会でもするのかなあ……？

でも、どれも本当に美味しそう……。

「うわぁ、美味しそう……！早く食べようよ」

「……憂、結構張り切ったのね……」

『……昼からスタミナつきそうね……』

憂ちゃんを気遣って一応笑顔だけど、少々引き気味の真鍋さんと東雲さん。

それに対して、食べる気満々の平沢さん。

この量の料理だから、急に私が一人増えても何の問題もなかったんだ……。

そして、憂ちゃんがウーロン茶の入ったコップを持って立ち上がると、皆も順次コップを手に持ち始めたので、私もそれに従った。

「えー、それでは皆さん、桜ヶ丘高校入学、おめでとございます」

「『『』ありがとうございます』』』』」

「そして綾瀬ちひろさん、桜ヶ丘へようこそ」

「…あ、ありがとうございます……」

「それでは、乾杯……」

「『『』乾杯……』』』』」

コップを皆と軽く合わせると、心地良い音が響き渡る。

急に招かれて緊張していたせいか、喉がカラカラになっていた私は烏龍茶を一気に飲み干した。

「…ふう…」

「おお！？ちいちゃん、いい飲みっぷり。注いであげるね」

「あ、どうも………」

空になったコップに、隣りに座っている平沢さんが烏龍茶を注いでくれた。

それを合図に、憂ちゃんから私との出会いに関する会話が始まった。

「お姉ちゃんから電話で聞いた時は本当にビックリしました。綾瀬さんとお姉ちゃんと同じクラスだったなんて、凄い偶然ですね」

「私もビックリしたよ。朝、衝撃的な出会いをした人が、私の後ろの席なんだもん。それに私より前に憂と知り合ってたんだから、ダブルでビックリだよ」

『時間を見間違えて、遅刻すると勘違いして猛ダツシユで走ってきて、綾瀬さんにぶつかってきたんだもの。衝撃的なのは私達の方よ』

「あはは、面目ない……」

「私からしたら、綾瀬さんと海衣奈が友達になっていた事にビックリしたわ」

皆さんとは本当に幾つもの偶然が重なったの出会いだった。

偶然もこれだけ重なると、運命と呼べるのかもしれない。

『一番最初に綾瀬さんに会った私が、栄えある友達第1号よ』

「じゃあ、私が友達第2号ですね」

「ミーナちゃんが第1号で憂が第2号かあ。それで私は第3号で、和ちゃんは第4号……。第1号の方が良かったなあ……」

「別に友達になるのに順番にこだわらなくてもいいじゃない。それ

に綾瀬さんと私が初めて喋る前に、多数のクラスメイトとお話してるから、第4号にはならないんじゃないかしら？」

「えっ！？それじゃあ第何号になるんだろう？ええっとお……」

「まあ、いいわ。百歩譲って第4号って事で」

私とお友達になった順番で一喜一憂している皆さん。

皆さんを前に緊張して固くなっていた自分が、急に恥ずかしく思えてきた。

まだ私の事もほとんど知らないのに、もうお友達になってくれた事が嬉しかった。

……あの悪夢の様な時とはまったく違う……。

……暖かさなんて微塵も無い、凍てつく視線だけが支配していた、あの頃とは……。

もう、あの頃には絶対に戻りたくない……。だからこそ、皆さんとの出会いを大切にしなければ……。

「…あ、あの……」

「なあに、ちいちゃん？」

「私、皆さんと知り合えて凄く嬉しいです。これからもよろしくお願ひします」

「『』よろしく（お願ひします）！！』」

皆さんの嬉しそうな顔を見ると、なんだかホツとして顔が綻んでくる。

……ゲウウウウウウッ……。

「……あ……」

ホツとして気が抜けた途端に、いきなり腹の虫が豪快に鳴り響いた……。

恥ずかしさで顔を赤くしたら、もう私が犯人ですと言ってるのと同じだよね……。

皆さんの視線が、嫌がおうでも私に集まってくる。

そんなに私を見ないで下さい……。

「……………ぷっ……………、ククッ……………、アハハハハッ……………」

ああっ！？平沢さんがお腹を抱えて笑ってらっしやるー！！

床をゴロゴロと転げながら泣き笑いしてる……。

「ちい、ちいちゃんのお腹が…アハハハハハハッ……………」

「だ、ダメだよ……………お姉…ちゃん、笑っ……………たら……………」

「そ、そうよ……………唯……………、失礼……………でしょ……………」

…憂ちゃん、…真鍋さん、そう言いながらも肩が震えていますけど…。

口元は閉じてるけれど、笑いを堪えてるのが見え見えです……。

東雲さんは携帯で顔を隠しながら、やっぱり肩を震わせた……。

……皆さんに笑いが提供できてなによりです……。

そう割り切らないと、平常心を保っていらなくなる気がした……。

）
）

私達は憂ちゃんの美味しい手料理に舌鼓をうちながら、会話を弾ませていた。

会話というよりは、私への質問タイムになっていた。

「綾瀬さんて、何処から引っ越してきたのかしら？」

「広島です」

「へえ、広島なんだ。もみじまんじゅうにお好み焼きに牡蠣、美味しいよね」

「唯、食べ物だらけじゃない……。日本三景の安芸の宮島とか平和記念公園とか、有名な場所もあるでしょ」

地名を聞いてすぐ食べ物に関連できる平沢さんは、まるで水戸門の兵衛みたい……。

平沢さんらしいと言えばそれまでなんだけど……。

『でも広島から来たと言う割りには、広島弁使っていないわね』

「ええ…、広島弁は怖いイメージが強いですから……。」

『綾瀬さんなら可愛いから、怖くなんてないと思うわよ。ちょっと喋ってみて』

「…か、可愛くなんてないですよ…。そ、それじゃあ、少しだけ……。」

皆さんが静聴して私を見つめてる。

広島弁満載の、よく喋りそうな例文を脳内で探ってみた。

「うち、お好み焼きめっちゃ好きやけえ。けど作るのは、ぶちたいぎいいけんね」

「「「『?????』」「」」

「お好み焼き…好き…作る…、分かんない……」

皆さんの思考が停止して、頭上に？マークがたくさん浮かんでる。

平沢さんに至っては、頭から煙を噴き出していた。

やっぱり分からないかあ……。

「い、今のはですね、《私、お好み焼き凄く大好きです。だけど、作るのは凄く面倒臭いんですよ》っていう意味なんです」

「「「『へえ』」「」」

「分かり辛い方言もありますし、郷に入れば郷に従えって言いますから、普通に喋った方がいいと思ひまして……」

「まあ、それは綾瀬さんの自由だから、とやかくは言わないわ。た

だ、方言ってひとつの文化だから、大切にしたほうがいいと思うわよ」

「…そ、そうですね…」

真鍋さんは高校生とは思えない、含蓄のある事を言っている。

知的な人なんだなあ……。

「綾瀬さんの三つ編みって、凄いいんですね」

憂ちゃんからしたら、ううん、多分皆さんが私の一番の特徴として捉えている部分かもしれない。

私の三つ編みは腰の下辺りまである、かなり長いもの。

「お手入れ、大変じゃないですか？」

「そうね。髪を洗う時は全部解かなくちゃいけないし、その後また編み込むから、大変と言えば大変かなあ」

『髪型を変えてみようって思った事は無いの?』

「ええ、色々試してみたんですけど、これが一番のお気に入りなんです」

『あ、ごめんなさい。ちょっと会話は中断ね』

「え?どうかしたんですか」

突然会話を中断させた東雲さんは、学校のカバンの中から何かを取り出した。

よく見ると、それは携帯電話の交換用バッテリーだった。

『ふう、危なかった…。電池が切れるところだったわ』

「あ、そうですね。携帯での会話は電池、消耗しますよね」

『そうね。だからバッテリーは常に持ち歩いているの。でも、ひとつだと心許無いから常に5つ持ってるのよ』

そう言っただけでテーブルの上に携帯のバッテリーの残り4つと、更に予備と思われる同機種の携帯電話を1台並べた。

「こ、こんなに予備があるんですか？」

『どんな理由で故障したりするかわからないでしょ。備えあれば憂いなしよ』

「…そ、そうですね…」

『それと普段はこんなに喋らないのよ。私はいいとしても、皆の携帯の電池も減っちゃうから。今日は綾瀬さんと喋りたいから特別ね』

『メールは定額プランに入ってるし、携帯2台は家族割で購入してるから。それに週2日バイトしてるから、親に金銭面で迷惑はかけてないわ』

しっかりしてるんだなあ、東雲さんは……。

でも、喋らない東雲さんはどんなバイトをしてるのかなあ？

「ねえねえ、ちいちゃん？」

「なんですか？平沢さん」

「唯でいいよ」

「え？」

「平沢さんと呼ばれると、憂も平沢さんだもん。唯って呼んで欲しいな」

『あ、それなら私も海衣奈って呼んで欲しいな』

「それじゃあ、私も和でいいわ」

「私はもう憂って呼ばれてますから大丈夫ですね」

人を下の名前で呼ぶのって結構勇気があるし、恥ずかしい…。

でも、お友達だもの…。

これからのお付き合いの為に、進まなきゃ……。

「……あ、はい……。じ、じゃあ、……唯さん、海衣奈さん……、和さん……、憂ちゃん……」

「ちいちゃん、顔が真っ赤っ赤だあ……」

『照れちゃって、可愛いわあ』

「それじゃあ、私達も下の名前でちひろって呼んでいいかしら？」

「あ、はい……」

これで少しは前身できたかな？

「ところでちいちゃん。質問なんだけど、ちいちゃんて何人家族なの？」

「……あ……」

普通は何でもない質問かもしれない。

でも、私にとっては心の奥底を抉られるような質問だった…。

「？…ちいちゃん…」

「…家族は、私とお父さんの、二人だけなの…」

「……え……？」

「…お母さんは…、私が中学に入学する前に……事故で……」

「…あ……、ご…ごめんなさい……、私……」

平…、唯さんは凄く申し訳なさそうな顔をしている。

いけない、楽しいパーティーが暗くなっちゃっ…。

「…うっん、気にしないでください。知らなかった事ですから……」

『それじゃあ、家事なんかは全部、ちひろちゃんが……』

「……はい。お父さんは朝早くから夜遅くまで働いています。だから私が家事をしないと……」

『……そうなの。夜一人で淋しくないの？』

「淋しくないと言えば嘘になりますけど……。でも、私を育てる為に一生懸命働いてくれますから。本当にお父さんには感謝してもしきれなくて……」

『偉いわ……。それに、心が強いよね、ちひろちゃん……』

「……そんな事……ないです……」

私は偉くなんてない……。まして、強くなんかもない……。

……これは私自身が招いた結果なの……。

……だから、私にとっては罪滅ぼしでしかないの……。

「……あ、だからこの前の母のロールケーキ、あんなに美味しかったんですね」

気を遣ってくれたのか、急に憂ちゃんが話題を変える為に、それとなく上手く会話を繋げてきた。

「え！？あれってちいちゃんの手作りだったの？てつきりお店のものだとばかり思ってたよお」

『そうね。あれは商品として出せる逸品ね』

「へえ、そんなに美味しかったの。私にも今度、食べさせてもらえるかしら」

「……………皆さん……………」

「もしよかつたら、いつでも夜ご飯、食べに来てください。それと私とお姉ちゃんも綾瀬さんの食事、食べに行っていていいですか？」

「え！？私の、ですか……………？」

『そうね。私もたまには伺おうかしら。和もね』

「ちひろさんさえよければ、ね」

皆さんの優しさがうれしくて、なんだか同時に凄く申し訳なくて…。

目頭がジンワリと熱くなってくるのが分かった……。

でも、堪えなきゃ……。

皆さんに迷惑をかけたくないから……。

半ば強引に笑顔を作って、何事も無かったように振る舞った。

「私の料理でよろしかったら是非、食べに来てください。腕によりをかけますから」

「わあ！！楽しみだね、憂、和ちゃん、ミーナちゃん」

「そうだね、お姉ちゃん」

「唯の場合は、少しは遠慮をしないと見境なく食べるから」

『そうよ。唯ちゃんならちひろちゃん家の冷蔵庫、空にしかねないものね』

「私、そこまで大食いじゃないよお！！」

皆さんの高らかな笑い声がリビングに響き渡る。

こんなに気を許し合い、笑いあえる皆さんが羨しい……。

だって私はこの数年、本当に心の底から笑った事なんて、一度も無いから……。

))

陽も傾いてきて、空がオレンジ色に染まる頃。

パーティーを終えて自宅に戻ってきた私は、ある部屋に佇んでいた。

一階で使う用途の無い、余った部屋の中には漆黒の仏壇が置かれている。

その中央に置かれている淡い緑色の写真立てを、私は両手でそっと持ち上げた。

私と同じ位に長い髪をなびかせて、満開の桜の樹をバックに写し出されている女性。

そこにはいつも変わる事の無い、優しい微笑みがあった。

私はこの満開の桜の時期に、この女性ひとを失った……。

…ううん、正確には……この女性の未来を……、私が奪ってしまっ
た……。

…私の余計なお節介のせいで、二度とこの笑顔を写真以外で見る事
は叶わなくなったの……。

私からは、この罪が一生消える事は無い……。

私は一生、この罪を背負って、そして一生償いながら生きていくの
……。

パーティーの時に堪えていた涙がとめどなく溢れ出して、写真立て
と私の頬を濡らしていった……。

そしていつもの一言を、そっと呟いた……。

「……「うめんなさい……、……お母さん……」

第3話「お祝いのパーティー」（後書き）

次回からいよいよ、軽音部メンバーが登場してきます。

よく考えると、まだ第1期の第1話の冒頭部分しか話が進んでいませんでした…。

先に申し上げますが、この小説は話がゆっくりと進んでいきます。

無駄に長くグダグダと言われればそれまでですが、そこを了承頂けると幸いです。

あと、御感想やポイント、誤字脱字などの御指摘を頂けると作者の励みになります。

それでは、また次話でお会いしましょう。

第4話「けいおん部!」(前書き)

やっと更新出来ました……。

忙しかったとはいえ、多いに反省しています……。

気がつけば2500アクセス、500ユニーク達成していました。

本当に御覧になってくださってる読者の方々には感謝で一杯です。

これを励みに、これからも頑張っていけますので、よろしく願います。

それでは第4話、どうぞ御覧ください。

第4話「けいおん部!」

桜ヶ丘高校に入学してから、早いもので今日で二週間。

入学式の時、満開だった桜の樹も既に葉桜へと姿を変えていた。

有名な進学校だけにレベルの高い、密度の濃い授業内容が続いている。

高校入学前に買い揃えたノートも段々英文や公式、歴史上の人物なんかでビッシリと埋まっていく。

コミュニケーションはというと、クラスメイトの皆さんともようやく馴染んできて、自然に会話出来るようになってきた。

特に仲の良い、唯さんや和さん、海衣奈さんとは時間さえ合えばで
きるだけ一緒に帰るようになっている。

今日もちろん、そのつもりで帰り支度をしていたんだけど……。

「……うん……」

唯さんは机の上に置かれている一枚の用紙を前に、何度も唸っていた……。

いつものホンワカした雰囲気は何処にも無くて、真剣に何かを悩んでいる様子。

何か悩み事なら、お友達として相談にのってあげたいな……。

「あの、唯さん「何を唸ってるのよ、唯？」

唯さんに声を掛けようとしたら、唸っているのを不思議がった和さんに先を越されてしまった。

「あ、和ちゃんにちいちゃん。どの部活に入るうか、まだ迷ってて……」

「えー!?まだ決めてなかったの!?もう学校始まって二週間も経つ

てるよ」

和さんが唯さんに詰め寄り、唯さんは少したじろぎ気味。

よく見ると、唯さんの目の前にある用紙は“入部届”。

まだ部の名前も入部動機も一切書かれていない、真っ白の状態だった。

「でもでもお……、私運動音痴だし、文化系のクラブもよく分からないし……」

え？唯さんも運動音痴だったんだ……。

入学式の日のあの豪快な走り方を見ていたら、そんな風には思えなかったけどなあ……。

でもお仲間がいて、ちょっぴり嬉しい気もするな。

そして和さんかというと、唯さんの言葉に深いため息を一つ、吐いていた。

「……はあ……、……こうやって二ートが出来上がっていくのね……」

「部活やってないだけで二ート!?!」

「……う、うめんなさい……!」

「ほえっ!?!」

「ど、どうしたの、ちひろ!?!急に……」

唯さんも和さんも私が急に謝りだしたから、ビックリした様子だった。

家事をしている以上、完全に帰宅部の私とはいえ、和さんの二ート発言には私も多少罪悪感を感じて、つい謝ってしまった。

「……いえ、私も部活動していませんから……」

「ちひろの場合、家の事してるんだから二ートじゃないわよ。それに唯はね、今まで一度も部活なんてした事ないのよ」

「…うん…、何か始めなくちゃいけないとは思ってるんだけど…」

伝統ある桜ヶ丘高校だけど自由を重んじる校風でもあり、部活も体育系から文化系、同好会と幅広く多種多様に存在している。

その中から一つに絞り込むのは結構大変だし、すぐに決められないのは仕方がないと思う。

「…まあ、しっかり悩んで本当にしたい事を見つけるといいわ」

「…うん、ありがとう、和ちゃん」

…本当にしたい事、かあ…。

私は日々勉強に勤しみ、家事をこなす毎日、それで充分なもの。

ごく普通のありふれた学校生活を求めている私にとって、これ以上は贅沢以外の何物でもない。

それに私には部活動をする暇も、その資格も無いから……。

その翌日。

昼休みの弁当を食べ終えた私は、五時間目の音楽の授業を受ける為、教室を移動中。

ちなみに唯さんは授業で使うプリントを取りに職員室に行っていて、和さんも用事があるとのこと。私は今、一人で向かっていた。

「み~~~~お~~~~っ」

私の後ろから誰かを呼ぶ声と、息を切らせて駆けて来る足音が迫ってきた。

私の横を勢いよく通り抜ける、二人の女の子。

一人は頭にカチューシャをしているのが見えた。

そしてもう一人はセミロングの髪の毛で、私がよく知っている女の

子だった。

「…あれは、海衣奈さん…？」

海衣奈さんとカチューシャの女の子が、綺麗なロングヘアの黒髪の女の子の背後に辿り着く。

ロングヘアをなびかせながら振り返った女の子は、まさしく見返り美人という言葉がお似合いの、綺麗な大人の女性。

私は海衣奈さん達の背後で、離れたところからその会話を聞いていた。

「律に海衣奈まで…、どうしたんだ？」

「クラブ見学行くこっぜい」

「クラブ見学？」

「軽音部だよ、軽音部」

…けい…おんぶ…？

私にはあまり聞き慣れない言葉だった…。

「でも私、文芸部に入ろうと思ってるし……」

「へ！？」

「入部希望の紙も書いたし……」

「……ん~~~~っ……」

どうもけいおん部ではなくて、文芸部に入りたい様子の女の子。

入部届けを手に取ったカチューシャ女の子は次の瞬間、思いも寄らない行動に出た……。

「……ビリッ……」

真ん中から真っ二つに破っちゃった……。

それをなんと、海衣奈さんが二つの紙飛行機に折り畳んで、窓の外へと飛ばしてしまったから、ダブルでビックリ……。

「ああああああっ！？何すんだよ律、海衣奈あ〜っ！？」

「ほらほら、はやくはやくっ」

「ちょ…、待って…」

ロングヘアの女の子はカチューシャの女の子に腕をひかれて、海衣奈さん共々廊下の奥の階段を上がっていった。

海衣奈さんはどうやらしたい事が見つかったみたい。

それにしても……“けいおん”て何だろう…？

この言葉が何故か、しばらく頭から離れなかった……。

）
）

「取り敢えず、軽音楽部って所に入ってみました!!」

「…けいおん…がくぶ…?」

あれから数日後。

教室で唯さん、和さんと机を囲んでお昼を食べていると唯さんが右手を挙げて、声高らかに入部宣言を果たした。

“けいおん”この言葉を唯さんから再び聞く事になるなんて、思いもしなかったなあ……。

「へえ…、どんな事をするの?」

「……なあ……?」

「…へ?」「…え?」

いきなりの問題発言に、私も和さんも開いた口が塞がらなかった……。

今から入部する部の事、何も知らないんですか!?

「軽い音楽って言う位だから簡単な事しかないんだよ、きっと。口笛とか」

「……何?そのやる気の無い部活……」

「……そんな部活、今まで聞いた事ないですよ……」

「え?じゃあ、どんな事するんだろう……」

それは私達が聞きたいぐらいです……。

取り敢えず、その真相を確かめるべく、私達は勧誘のポスターが貼られている掲示板へと向かった。

「ほら、なんかバンドをするみたいよ。ギタリストを募集してるみたい」

“けいおん”は、軽音楽部の略だったんだあ……。

確かに唯さん、軽い音楽って言ってたもんね……。

掲示板に貼つてあるポスターには《バンドをしませんか》という文言と共に《ギタリスト募集》と書いてあった。

「えええっ！？私、ギターなんて弾けないよお……」

「じゃあ、何なら演奏出来るの？」

少し間を置いて、唯さんは突拍子もない答えを出した。

「…………カ、カスタネット…………」

叩いてリズムを取る、ほぼ100%誰でも出来る、あのカスタネットですか？

私は脳内でカスタネットを叩く唯さんを想像してみた……。

(うんたん、うんたんっ、うんたん…………)

…か…………可愛いつ!!可愛すぎますう!!

楽しそうに叩いてリズムを刻む唯さんが頭の中から離れなくて、完全にツボにはまってしまいました…………。

「ほら、見なさい。唯がおかしな事言うから、ちひろが怒りでプルプル震えてるじゃないの」

「えええええっ！？あ、あの、私、何か気に触る事言っちゃったの
お？」

ツボにハマりまくりの私には、アタフタする唯さんがまた可愛く見
えてしまつて、口元を押さえて「可愛いっ！！」と言いつうになる
のを必死に堪えていた。

「ちひろの顔、凄い真っ赤…。よっぱど怒ってるのね……………」

「うわああああん。お願いだからちいちゃん、そんなに怒らない
でえええっ」

私からもお願いします……………。

そんなに可愛い顔で泣きながら、しどろもどろにならないでくださ
い……………。

萌え死んでしまいます……………。

そして、その日の放課後……。

「……ちいちゃん……」

「……な、何ですか……唯さん……」

「……な、何だか怖いね……」

「……そ、そうですね……」

私と唯さんは今、音楽準備室へと向かっている最中。

その途中にはオカルト研究会やUFO研究会など、あまり普通の人では立ち寄らない部室があつて、おまけに何だか通路が暗くて薄気味悪い……。

唯さんは怖いみたいで、私の腕に必死でしがみつかながら歩いてい

そういう私も、実は凄く怖い……。

鼓動がバクバクいってて、唯さんに聞こえるんじゃないかと思うくらい……。

でもせつかく、唯さんや和さんが私を頼ってくれてるんだもの……。

私がすっかりしなくちゃ……。

実はあの後、和さんから……。

）
）

「ちひろ、もしよかったら放課後、唯に付き添って音楽準備室まで行ってもらえないかしら？」

「わ、私ですか!？」

「唯、入部するのを辞めるって言ってるのよ……。」

「…え!?!? そうなんですか……。」

「…うん…。ギターも弾けないのに入部しても、迷惑を掛けるだけだから……。」

「だから、軽音楽部の部室である音楽準備室まで一緒に行って欲しいのよ。唯一人だと心許無くて……。私は用事があつて無理だから……」

私は少し返答に間を置いた……。

私はただ、唯さんの付き添いをするだけだもの……。

入部する訳じゃないんだから、何も問題無いよね……。

……うんっ、大丈夫。

「……分かりました。私でよければ……」

「ありがとう、ちひろ。お願いね」

「ありがとう、ちいちゃん」

）
）

……それで今に至る訳で……。

そして、薄暗い通路を何とか抜け切った私達は階段を昇り、ついに目的地の音楽準備室に辿り着いた。

唯さんはドアノブに手を掛けようとしたけれど、何かに躊躇したらしく、その手を退いた……。

「どうしたんですか、唯さん？」

「軽音楽部っていう位だから、ヘヴィメタっぽい人がいそうだよね……」

「……私、バンドの事はよく分かりませんが、そんな人がいたら確実に校則違反ですよ……」

「……でも、もし仮にそんな人がいたとして、入部を断ったら、私達……、どんな目に遭うんだろう……」

「ど、どんなんて……きゃっ！？ゆ、唯さん……」

「怖いよう、ちいちゃん……」

どう見ても怯えている様子の唯さんは、いきなり私に抱き付いてき

た。

「…だ、大丈夫ですよ…。わ、私が…ついてますから……」

…そう言いつつも、身体も声も震えっ放し…。

やっぱり身体は正直で、私も怖くなってきた…。

せつかく怖いオカルトゾーンを勇氣を出して抜けてきたのに、目的地寸前で二人して怯えてしまうなんて……。

そして、怖さのバロメーターが最高潮に達した、…その時!!

ガシッ!!

「きゃあああああああああああああっ!!」

「ひやあああああっ!!」

いきなり私は背後から肩を掴まれて、あらんかぎりの声で悲鳴をあげてしまった……。

唯さんは私の悲鳴に驚いて、つられて悲鳴をあげた。

「……ふう……っ……」ドサッ

……あれ……、景色が90度……回転……してる……。

「……おい、しっかり……」

「……ちいちゃ……大丈夫……」

唯さんと誰かの声、そして私の意識が段々遠ざかっていく……。

私は怖さのあまり、気を失ってしまったみたい……。

……唯さん……ごめんね……、守って……あげられ……なくって……。

そして、私の意識は完全に闇へと消え去った……。

第4話「けいおん部!」(後書き)

今回はギャグをメインにしてみました、いかがだったでしょうか？

アニメと多少セリフが違ふところがあるかもしれませんが、そこはご愛嬌で……。

今回は、軽音部メンバーが全員集合します。(あずにゃんはまだですが……)

それではまた、次話でお会いしましょう。

第5話「仮？の私」（前書き）

またしても更新が遅くなってしまいました……。

仕事が繁忙期にはいつてしまい、待つていただいてた方には本当に
お詫び申し上げます。

今回、文章が一番長い回となつてしまい、更に時間が掛かつてしま
いました。

そしてようやく、アニメの第1話分が終了します。

どうか最後まで読んでいただけると幸いです。

それでは第5話をどうぞ、御覧下さい。

第5話「仮？の私」

…ペチペチッ、…ペチペチッ

「……………ん……………」

…誰かが、私の頬をリズムよく叩いてる…。

その音と軽い痛みで私は目が覚めた…。

私の目の前には安堵の表情を浮かべた、よく知っている女の子がいた。

「…海衣奈さん…？…あれ…、…私は、一体…」

私の身体を左腕で抱えながら、右手で高速ブラインドタッチした携帯の文章を私に見せてきた。

『ちひろちゃん、気を失っていたのよ。身体、大丈夫？痛い所とか無い？』

その文章で、ようやく私は今し方あった事を思い出した。

音楽準備室の扉の前で、背後から肩を掴まれてビックリした私はそのまま……。

「…は、はい、大丈夫です…」

『良かった…』

「…ちいちゃん…」

「…あ、唯さ…、きゃっ!?!」

海衣奈さんの横にいた唯さんが涙目になりながら、まるで海衣奈さんから私を奪い取る様な感じで私を抱き締めた。

「ぢいちゃん、よ…がっだよ…お……。死んぢやっだがど思ったよ
お………」

『唯ちゃん、縁起でもない事言わないの』

「唯さん、私なら大丈夫ですから。ごめんなさい、心配させてしま
つて………」

私の胸の中で泣きじゃくる唯さんの頭を、お母さんが泣いている子供をあやす様に、そっと撫でる。

すると段々と泣く声は収まってきて、笑顔を取り戻してくれた。

「はあ、気がついてくれて良かったあ……………」

「取り敢えず、ひと安心だな」

海衣奈さんの背後から、何処かで聞いた声がある。

この前、廊下で見掛けたカチューシャの女の子と長い黒髪の女の子だ……………。

「まったく、律が驚かすからいけないんだぞ!!」

「だって、肩に手を置いたぐらいで気絶するなんて普通、有り得ないって!!…………… 澪以外……………」

「…わ、私はそこまでビビリじゃない!!」「ゴンッ!!」

「あ痛っ!!…………… 澪ちゃん、痛い……………」

「自業自得だ、ばか律っ!!」

律さんと呼ばれてる女の子の頭の上には、それは見事なたんこぶが出来上がっていました。

「まあまあ、漣ちゃん、落ち着いて。せっかく来てくれたお二人が怖がってしまうわ」

初めて見る女の子がいる。

眉毛が太くて綺麗な髪の毛と顔立ちの、ムギさんと呼ばれてる女の子が、漣さんと呼ばれる女の子をなだめていた。

なんだか綺麗な人やカッコいい人が多いなあ……。

「ムギの言う通りだな……。お二人ともようこそ、軽音部へ！！」

「歓迎いたしますわあ！！」

え？お二人とも……？

…もしかして、私も頭数に入ってる……？

「さ、平沢さん。入った入った。漣、綾瀬さんをよろしく」

「ん。さあ、綾瀬さんも」

「…え？あ、あの、私は……」

唯さんは律さんに、私は滯さんに手を引かれて音楽準備室の中に入った。

そういえば、どうして私の名前を知ってるんだろう？

多分、唯さんか海衣奈さんが教えたんでしょうね……。

…なんだか、私の手を握ってる滯さんの手、暖かい……。

入学式の日の、唯さんが握ってくれた手の暖かさと一緒に……。

それに滯さんに限らず、律さんやムギさんに海衣奈さんまで、凄く嬉しそうな顔してる。

それは私達が入部すると思っているからにほかならない。

「よおし、ムギ、お茶の準備だ！！」

「はあい……」

喜びの歓迎モードになりつつある皆さんに対して、唯さんと私はここに来た本当の理由が話し辛い状況になりつつあった……。

）
）

「あの……さっきは本当にすみませんでした……。ご迷惑、お掛けしてしまって……」

「気にしない気にしない。私こそ、驚かせちゃってゴメンね」

「い、いえ、そんな……」

「どうぞ、召し上がって」

……えっとお……、ここは軽音楽部ですよね……。

……それ以前に、ここは学校ですよね……。

目の前に出された美味しそうなケーキや紅茶、しいては高級そうなティーカップやお皿を見て、そんな事を思わずにはいらなかった……。

「……じゃあ、頂きます……」

唯さんが紅茶の入ったカップを手に取ったので、私も取り敢えず頂
く事にした。

コクンツ「……………!?!」

…この紅茶、ティーバックや安物の茶葉じゃない!!

マダムが通う高級な紅茶売り場で神々しく陳列されてる様な、一般
人には手の出せない茶葉を使用してる……………!!

……………という事は多分、ケーキも……………。

パクツ「……………!?!」

……………やっぱり!!

この紅茶の風味を壊さず、それでいて味の主張もしつかりとした、
有名なパティシエさんが作り出したと思われる渾身の逸品!!

前に作ったロールケーキが霞んでしまうほどに美味しい!!

もう、さっきまでの疑問は何処かへ消え去って、私は一心不乱に目の前のケーキを食べていた。

だって私、甘い物には目がないから……。

「……あ、あの……綾瀬……さん……？」

「……はい……？……はっ!？」

律さんの声で我に帰った私の目の前には、綺麗になったお皿と空になったティーカップがただ、そこにありました……。

そして、呆然と私を見つめる皆さん……。

私……やってしまいました……。

「……ご、ごめんなさい、私ったら……」

「いいんです。そんなに美味しそうに召し上がって頂けると、なんだかとても嬉しいですね。ケーキとお茶のおかわり、いかがですか？」

私は恥ずかしさから顔を真っ赤にしながらも、しっかりと頷いていた……。

…だって美味しいんだもの…。

ボソツ（…ねえ、ちいちゃん）

ボソツ（…はい、なんですか、唯さん？）

ボソツ（…辞めるの、辞めようかなあ…）

ボソボソツ（え！？まさか唯さん、ケーキが美味しいから辞めるの辞めようとしてるんですか？）

ボソツ（…うん…）

ボソボソツ（ギター弾けないのに、どうするんですか？）

ボソツ（…そうだよね…）

ケーキの誘惑に負けそうになった唯さんを、何とか軌道修正した。

……完食した私が、そんな事言えた義理じゃないけど……。

「そつだ。自己紹介がまだだったっけ。私は軽音楽部の部長でドラム担当の田井中律。よろしく」

カチューシャの人、田井中さんは部長さんだったんだ……。

（さっきまでは苗字が分からなかったから名前で呼んでたけど、初対面の人に失礼だから、苗字で呼ばなくちゃ）

パワフルで明るい感じだから、人を引っ張っていくのには向いているのかも。

「…あ…わ、私はベース担当の秋山澪です…よろしく」

長い黒髪の人、秋山さんは照れ屋さんなのか、頬を真っ赤に染めながらの自己紹介だった。

楽器の事はあまり知らないんだけど、ベースってどんな楽器なのかなあ？

「私はキーボード担当、琴吹紬です。皆からはムギって呼ばれてます」

眉毛の太い美人な人、琴吹さんの手は細くて綺麗……。

清楚な感じで、鍵盤がよく似合いそう……。

『今更自己紹介する事もないと思うけど、一応しておくわね。漣ちゃんと同じく、ベース担当の東雲海衣奈です。よろしくね』

「「ええっ!?!」」

ビックリした声が唯さんと八モっちゃった…。

…軽音楽部にいるんだから別に驚く事ではないけれど、海衣奈さんが楽器を演奏出来るなんて、ちょっとビックリ…。

ただ、ひとつ疑問が…。

「ミーナちゃん、凄いね。楽器が演奏出来たんだあ!!改めて尊敬しちゃった」

『え…!?!?そ、そんな事…ないわよ…』

…唯さん、確か海衣奈さんとは幼馴染みのはずですよ…。

今までその事、知らなかったんですか…??

海衣奈さんは海衣奈さんで、急に褒められて顔が赤くなってる。

そのせいで、唯さんにつっこむのを忘れてます……。

「あ、平沢さんと綾瀬さんは、海衣奈から聞いてるから大丈夫だよ」

あ、海衣奈さんが教えてたんですね……。

取り敢えず、私達の紹介は省略という方向ですね。

「ところで、平沢さんはどんな音楽が好きなの？」

「えっ？」

「好きなギタリストとかいるの？」

「…え、えっと……」

唯さん、田井中さんの突然の質問に、考え込んでるといふより困惑してると言った方が正解なのかな……？

入部するのを辞めに来たのに、音楽に関する質問に答えたら、いよいよ入部する方向へと向かってしまうもの……。

「…え、えつと……、じ……じ……」

…じ？多分「実は私、ギターが弾けないんです」「って言おうとしてるんだ……」。

「ジミ？ヘンドリックス？」

秋山さんが目を輝かせながら、さすがの私でも知っている世界的なギタリストの名前を挙げた。

「いや、……じ……じ……」

「ジミー？ペイジ？」

「おおっ！？」

「…ええつと、……じ……じ……」

「ジェフ？ベック！？」

唯さんがどうにかしようとするほど、色んなギタリストの名

前が拳がってくる。

秋山さん、なんだかとても嬉しそう……。

それにしても、「ジ」で始まるギタリストばかり、こんなにいるんだ……。

「いやあ、さすが平沢さん。ジエフ？ベックが好きだなんて、結構通だね」

「アハハ……ハハ……」

引きつった笑いと共に、大量の冷や汗を掻いてる唯さん……。

「……ごめんなさい、私もどう助け船を出していいのか分からなくなりました……。」

「いやあ、平沢さんみたいな人が入ってくれて良かったあ。実は一週間以内に部員があと一人入部しないと、廃部になるところだったんだ」

「……!!!!!!」

田井中さんにトドメを刺されてしまいました……。

そんな最重要事項を言われた後で、辞めますなんてどうして言えますか……？

どうすればいいの？私達……。

完全に思考能力を奪われた私の横で、唯さんが覚悟を決めた様な表情を見せていた……。

まさか唯さん……、このタイミングで言うんですか……？

「……あの、実は私、『入部するのを辞めさせて下さい』って言いに来たんです！！」

「『『『……え……』』』」

「だって私、ギター弾けないから……」

皆さん、固まっています……。

それもそうですよね……、いきなり天国から地獄へ急転直下なんですから……。

罪悪感に苛まれながらも、私も覚悟を決めた……。

「…す、すみません…。実は私も、ただの付き添いなんです……」
言葉を震わせながらも、何とか言えた……。

…怒られる…、…嫌われる…。

私が一番恐れている事を想像していたら、田井中さんが重い口を開いた……。

「うん、知ってる」

「……えー!？」

…はい?…今、なんと……?

「知ってるよ、平沢さんがギター弾けない事も、綾瀬さんが付き添いだって事も全部」

「ええええええっ!？」

唯さんも私も開いた口が塞がらなかった……。

そんな表情を見て、クスクスと笑い始めた軽音楽部の皆さん。

「だってさっき言ったじゃん。『海衣奈から聞いてるから』って…」

「……み、海衣奈……さん？」

「ミーナちゃん、何で知ってるの？」

笑いを堪えてる海衣奈さんからは、もしかしたらと予想した言葉が返ってきた。

『だって私、お昼に和ちゃんとの会話をこっそり聞いてたから。ごめんなさいね』

海衣奈さんの悪戯っぽい微笑みを、私達は放心状態で見つめるしかなかった…。

「私、ギター弾けないのに皆、どうして歓迎してくれるんですか？」

唯さんがごもつともな質問を投げ掛けた。

「確かにギタリストを募集してるけど、ギターが出来ないから入部を断るなんて事はしないよ」

「律の言う通りだよ。一人でも仲間が多くいた方が、楽しさも広がるし」

「もしよろしければ、これからギターを習ってみてはいかがですか？」

『それがいいわ。私が丁寧に教えてあげるから』

「……でも……」

熱烈なラブコールを贈る皆さんだけど、唯さんはまだ決めかねているみたい。

「それじゃあ、私達の演奏を聴いてみて、それで入るかどうかが決まるとよ」

「演奏してくれるの!？」

田井中さんの提案に見事に食いついてきた唯さん。

軽音楽部だもの、演奏を直に聴くのが一番判断出来ますよね。

）
）

秋山さんと海衣奈さんが前列でギターのような楽器^①ベースを構えて、音程を調整している。

その後ろで田井中さんがドラムを叩く準備を、そして琴吹さんがキーボードの鍵盤をいくつか押さえて、音を出している。

唯さんと私は長椅子に座って、演奏が始まるのを今かと待ち受けていた。

そして皆さんが顔を見合わせると、田井中さんがスティックを高々と掲げた。

「ワン、ツー、スリー、フォー……」

）
）……

田井中さんの掛け声と共に、私でも分かる馴染み深い曲の演奏が始

まった。

「翼をください」

ベースの重厚な音とドラムのリズムに、キーボードの軽快な音程が合わさっていく。

まだなんとなくたどたどしいけれど不思議と心を打つ、優しい感じがする演奏に私も唯さんも聴き入っていた。

サビの部分に入って、キーボードの優しい音が私の胸に響いてくる……。

とても優しくって……、それでいて何だか切なくて……。

このままずっと聴いていたい……。

そんな余韻を残しつつ、演奏は静かに終了した……。

演奏していた皆さんの顔を見ると、楽しそうに笑っている。

唯さんは感動したのか、拍手をしながら立ち上がった。

私も遅ればせながら、拍手と共に立ち上がっていた。

「えへへ……どうだった？ 私達の演奏……」

田井中さんは拍手されてこそばゆかったのか、頭を掻きながら私達に尋ねてきた。

「何て言うか……言葉にしにくいんだけど……」

「うんうん」

唯さん、感動してた雰囲気でしたから、さぞかしい感想を言うんでしょっね。

皆さんも固唾を飲んで、唯さんの感想を待ってます。

「あんまり上手くないですね」

ええええええええええつ!?

確かにたどたどしい所はありましたけど、そこまで言う事はないんじゃないですか、唯さん……。

皆さんは予想もしなかった感想に、完全に放心状態です……。

「でも、何だか凄く楽しそうでした」

「え?」

「私、この部に入部します!!」

唯さんは生き生きとした瞳で、ついに正式な入部宣言を皆さんに告げた。

皆さん、まだ事の次第が飲み込めていない様で、田井中さんと秋山さんはお互いの頬を抓り合っていた。

どうやら痛かったらしく、夢ではない事を確認して……。

「『バンザーーイ!!』」

廃部を免れた軽音楽部の皆さんは、新入部員となった唯さんの周りに集まって、一緒に喜びを分かち合っていた。

良かったですね、唯さん。

本当にしたい事が見つかった。

……これで私は付き添いのお役目、終了ですね……。

私は喜びの輪を背にして、出口の扉へと向かって歩いた……。

くピロリン

『…あ、待ってちひろちゃん。何処へ行くの？』

扉を目前にして、海衣奈さんからのメールで足止めされてしまった……。

そして駆け足で来た海衣奈さんに、前へ回り込まれてしまった……。

「…っ、付き添いが終わったので、これで失礼しよう…」

『付き添いなのは分かってる。ねえ、ちひろちゃんも良かったら軽音部に入ってみない？』

最初に予想していた通り、お誘いが来てしまいました……。

私は最初から用意していた断りの言葉を静かに告げた……。

「海衣奈さんも唯さんも知っていると思いますが、私は家の家事や日々の勉強をしなければいけないので、部活をしている暇が無いんです……」

『それを重々承知の上で誘ってるの。家事をこなすと言ったって、一日中拘束されてる訳ではないでしょ……？放課後のちよっとした時間や、ちひろちゃんのお父さんが帰ってくるまでの空いてる時間を利用すれば……』

「時間の無い中で練習しても、皆さんの様な心に響く演奏が出来る自信がありません……。返って迷惑を掛けるだけです……」

『迷惑なんて思わないわ。それに、迷惑なら既に私だって掛けてるから……』

「……え……？」

『前にも言ったけど、私もバイトをしながらだから、週の内にそん

なに部活には出られないわ……。それでも皆はね、入部する事を了承してくれたの……』

そうだった……。

海衣奈さん、親に迷惑を掛けない様にと携帯の料金は自分で稼いでるって言ってた……。

多分、楽器も同じ様に買ったんでしようね……。

勉強にバイトに部活、これだけ掛け持ちするのは容易な事じゃない……。

本当にしたい事があるからこそ、頑張れるんだと思う……。

「さつきも言っただけど、一人でも仲間が多くいた方が楽しさがひろがると思う。私も律も、ムギも、海衣奈もその想いは同じなんだ」

「そうそう。用事があれば、そっちを優先させてあげるからさ。部長の私が言うんだから大丈夫だって」

「是非、一緒に演奏してみませんか？さつきの演奏、綾瀬さんは『心に響く』と言ってくれてたじゃないですか。それだけで充分きっかけになっています」

「ちいちゃんも一緒に入ろうよ。私一人だけ初心者じゃあ、心許無いもん」

『お願い、綾瀬さん。一緒に部活しましょう……』

……皆さん……。

私も唯さんと同じく、ううん、もしかしたらそれ以上の熱烈なラブコールを受けているのかもしれない……。

皆さんの熱意に心が少し揺らいできた……。

家事に影響さえ無ければ、断る理由は今のところは無い。

ただ一つだけ、皆さんに確かめたい事があった……。

「……あのぉ……、どうして皆さんは、そんなに私にこだわるんですか……？」

「……『え？』……」

「もう部員数は既に達成してるじゃないですか。それに私、唯さんや海衣奈さん以外の方とは今日、会ったばかりですよ」

そんな不躰な質問に、部長の田井中さんは頭を掻きながら答えた。

「だって私達、友達じゃん」

「……友達……」

「一目逢ったら、もうその瞬間から友達だよ。友達になるのに変な理屈も理由も要らないし」

皆さんも田井中さんの意見に笑顔で頷いてる……。

以前は理由も理屈も関係無く、淋しい想いをした私……。

そんな私に分け隔てなく、友達と言ってくれた皆さん……。

嬉しくて、涙がこぼれそうになるのをグッと堪えた……。

「それじゃあ、これにサインしてもらえるかな？」

そう言って律さんが出してきたのは入部届け…なんだけど…。

そこにはマジックで大きく一文字、書き足されていた。

「……………仮……………入部届け……………？」

「そつ。いきなり入部だと大変かもしれないから、まずは体験入部から始めてみてよ」……………体験……………入部……………」

「ちなみに期限は設けないから、どうしても無理だと思ったら辞めていいよ。無理強いはしないし、その時はキツパリとあきらめるから」

ここまでしてくれる皆さんに、これ以上迷惑はかけたくなかった私は……………。

「……………分かりました。取り敢えず、仮入部してみます」

「……………バンザイ!!!!」……………」

私の周りにも幸せの輪が出来て、そして田井中さんの提案で皆で記念写真を撮った。

そして（仮）入部届けにサインをした。

こうして私は、軽音楽部に仮入部する事になったんだけど……。

これから一体どうなるのかな、私……。

第5話「飯？の私」（後書き）

次からは第2話相当のお話となります。

予め申し上げますが、第2話分のお話も少し長くなります。

予定では6話ぐらいですが、多少の誤差が生じるかもしれません。

それではまた、次話でお会いしましょう。

第6話「悪夢と天秤」（前書き）

今回の登場人物は基本、ちひろ一人です。

そして第6話は完全のシリアスになります。

あと、今回の話についての注意書きです。

今回は多少暴力的な表現があります。

そして途中にカタカナ表記のみのセリフがあり、読み辛いかもしれませんが、話の流れでこういう形をとらせて頂きました。

それでも構わないという方は、このまま第6話を御覧下さい。

第6話「悪夢と天秤」

(…あれ……、ここは……?)

見渡す限りの、果てしない漆黒の闇……。

私は闇の中に立っている、…うっん、浮いていると言った方がいいのかな？

(………ろ……)

(………?)

…今、何か聞こえたような…?

(………ひろ……)

(…誰? 誰かいるんですか?)

(…私…よ……、ちひろ……)

私のいる所から少し先に、青白い炎の様なものが揺らめきはじめた。

そして、それは段々人の形へと変わっていく……。

絶対に忘れる事の出来ない顔、そしてあの日の服装そのままの、私の待ち人が現れた……。

(…お、お母……さん……?)

(……ちひろ……)

……また、逢えた……。

あの楽しかった思い出の日々と何ら変わらない、優しい微笑みを私に投げ掛けていた……。

今日こそは、伝えなきゃ……。

あの運命の日、言う事が出来なかった私の胸の想い……、贖罪の言葉を……。

(…お母さん……私、お母さんに謝らなきゃいけない事が……)

(……たくない……)

(……え……?)

お母さんは突然、哀しみとも怒りとも分からない、苦悶の表情を浮かべて、耳を両手で塞いだ……。

(……聞きたくもない、そんな言葉……)

(……お母さん……)

顔を何度となく横に振り、その瞳からは涙がとめどなく溢れていた……。

お母さんに近づこうとしても、その距離が縮まる事は決してなかった……。

(……お母さん……、……私の事、許してはくれないの……?)

(……許す?……許すもナニモ……)

(……お母……さん……?)

お母さんが、段々恐ろしいものへと変わっていく……。

お母さんだったものは、まるで憎悪の化身と言わんばかりの表情を
浮かべている、禍々しい毛むくじゃらの化け物へと変化を遂げた…
…。

(…ワタシガオマエノコト、ユルスワケガナイダロウガアアア
アアッ！！)

化け物はあらんかぎりの雄叫びを挙げて、私を威嚇してきた。

あまりの恐怖に腰が抜けてしまった私に向かって、化け物は一歩ず
つ近づいてくる。

(…オマエガ…ヨケイナコトラシナケレバ…)

(…いや…)

(ワタシハシナナクテモスンダモノヲ…)

(…来ないで…)

(…ヒトコロシ…)

(…言わないで…)

(オマエハトテモユルシガタイ、ヒトゴロシナンドヨオオオツ！)

(嫌あああああつー！)

化け物は私の首を大きい手で掴み、そのまま身体を持ち上げて、その手に尋常じゃない力を込め始めた……。

(……ぐ……ぐるじい……)

(……なぜ、ワタシガアンナニモクルシイオモイヲシテ……)

(……は、はなじで……)

(……なぜ、オマエガシアワセニナラナキヤナラナインダアアアアッー！)

……息が苦しい……。

それ以前に首の骨が軋んで、変な音を立て始めている……。

……このままじゃ……、私……。

(オマエガシアワセニナルナンテ、ゼツタイニユルサナイ……)

(オマエハ、フコウドイツケルノガオニアイダ……)

(サクラガオカニクルマエノ、オマエノヨウニ……)

その直後、首から何か折れる音がして、私の意識はそこで途絶えた……。

）

「いやあああああつー!」

あの化け物に劣らない、凄まじい声で悲鳴を挙げて、私は勢いよく上半身を起こした。

首に手を当てて確かめるけれど、何でもなかった……。

…でも息が苦しくて、ゼイゼイと息遣いが荒くなる……。

まだ春なのに、まるで夏の暑さにやられたかのように尋常じゃない寝汗を掻いていて、パジャマがグッシヨリと濡れていた。

そばに置いてある眼鏡をかけると、そこは夢と同じ暗闇に包まれている……。

不安になって電気を点けるけれど、そこは間違いなく私の部屋だった……。

「……また……あの夢……」

この夢、見たのは今回が初めてじゃない……。

あの悪夢の始まりの日以来、何度となく見続けている……。

特に、私に良い事があると、必ずと言っていいほどこの夢を見てしまう……。

この桜ヶ丘に来てからも、何回か見ている……。

海衣奈さんや憂ちゃんとお友達になった日、入学式のお祝いパーティーの日、そして軽音部に仮入部を決めた日の夜、つまり今……。

携帯に写し出されている今の時間は、午前2時ちょっと。

取り敢えず着替えなきゃ、風邪ひいちゃうし……。

寝汗もひどいし、ついでだからシャワーも浴びよう……。

）
）
シャワーのコックを捻ると、浴室が温かい湯気に包まれる。

汗を流し、ボディークリームで身体を泡立てて、再びシャワーで流す。

ついでだからと、シャンプーをする為に髪の毛を濡らしている時、ふとさっきの悪夢が頭をよぎった……。

（…………ヨケイナコトヲシナケレバ…………）

（…………ワタシハシナズニスンダ…………）

（…………ヒトコロシ…………）

暖まっているはずの身体が悪寒で異常なまでに震え始め、お湯の温度を上げるけど、その震えは一向に止まらない…………。

壁に掛けたたシャワーのお湯の下で、壁に額を擦りつけた。

……私は……人殺しの……？

私はただ、お母さん達の喜ぶ顔が見たかっただけなのに……。

……でも、そのせいでお母さんを死なせてしまったのは、動かし難い事実……。

……ねえ、お母さん……。

……どついたら、お母さんは私を許してくれるの……？

(……フコウドイツツケルノガオニアイダ……)

……私が不幸でいれば許してくれるの……？

……お母さんを不幸にしたんだもの……、これは私に課せられた、一生の償いなんだよね……。

……私は……幸せになったら……いけないんだ……。

…でも、それは皆との縁を切らなければいけない、って事なんだよね……。

暖かい皆…優しい皆…楽しい皆…お友達であり、仲間である皆……。

やっと出来た、掛け替えの無い大切なお友達……。

そんな皆と縁を切るなんて、そんな事私には出来ないよ……。

お母さんを取るの、それとも、お友達をとるの？

…うつん、どちらも大切なものじゃない!!

家と友情を天秤に掛ける事なんて、そんな事考える自体有り得ない!!

…ねえ、お母さん…、答えてよ…。

…私は一体、どうすればいいの…？

写真の中と思い出の中だけで笑ってる、お母さんの真意は何処にあるの……？

私の流した涙はシャワーのお湯に溶け込んで、排水口から流れていった……。

しばらく私は泣き続けて結局、私はこの後、一睡も出来なかった……。

第6話「悪夢と天秤」（後書き）

次回からは軽音部メンバーが復帰します。

仕事が変わらず忙しいですが、なんとか早めの更新が出来る様に頑張りますので、これからもよろしくお願いいたします。

第7話「それぞれの理由」(前書き)

エイジ「この度は間隔を大分開けてしまい、大変申し訳ございませんでした」

ちひろ「どうかされたんですか？」

エイジ「単刀直入に言えば、入院してました」

ちひろ「ええっ！？何の病気ですか？」

エイジ「…盲腸です…。本当に地獄のような痛みでした……」

ちひろ「それで、もう大丈夫なんですか？」

エイジ「おかげさまですっかり良くなりました。退院が出来る、アレが出ましたので」

ちひろ「良かったです……」

エイジ「それでは第7話をどうぞ、御覧下さい」

ちひろ「始まります」

第7話「それぞれの理由」

「唯、ちひろ」

「あ、和ちゃん」「和さん」

「一緒に帰ろう」

放課後。今日も和さんからの一緒に下校のお誘いがきた。

いつもなら即座にOKなんだけど……。

「ごめん。今日どうしても部活に行かなきゃいけないんだ」

「私もです、ごめんなさい……」

「…そう、それじゃあ仕方無いね」

軽音部へ入部した唯さんと、今はまだ体験入部の身の私は、放課後になると音楽準備室に直行している。

仕方無いと言って残念そうな和さんだけど、唯さんが本当にしたい事を見つけて、一番喜んでいたのは和さんだったのを覚えている。

でも、軽音部に入部を決めたのを一番最初に聞いた時の和さんは半信半疑で、マネージャーとして入ったと思ってたみたいだったけど……。

多分、今の和さんの心情は唯さんのしたい事が見つかった事への嬉しさと、一緒にいる時間が減った事への寂しさが半々といったところなのかな……。

そんな複雑そうな和さんをよそに、唯さんの顔はなんだかニヤけた感じの表情だった。

「どうしたの、唯？」

「今日はムギちゃんが美味しいお菓子、持ってきてくれるんだあ〜」

「…へ？ギター演るんじゃないの？」

「……あ、そうだったあ……」

唯さんのお気楽発言に和さんは深いため息を一つ吐いた……。

確かに部活とは言っても、今は音楽準備室でお茶をしながら音楽談

義に花を咲かせる毎日。

だってまだ唯さんにギターが無いから、全員での演奏が出来ないもの……。

それにまだ、私も本当に入部するかどうか決めかねている最中だし……。

「ねえ、ちひろ」

「なんですか、和さん？」

「仮入部とはいえ、家事に影響はしてないの？」

「はい、今のところは大丈夫です。家に帰る時間もそこまで遅くはなってないですし、お父さんも今仕事で帰りが遅いので、それまでに済ませる事は充分可能なので」

「そう……。それならいいんだけど……」

和さんは私が仮入部をして以来、私が無理をしていないかと心配みたい……。

確かに勉強、家事、部活を並行してこなすのは正直大変かもしれない。

でも、あそこまでのラブコールを受けては断る事も出来なかった……

…。

いつかは進退を決断しなければいけないけど、今はこの体験入部を
楽しむ事にしたの。

……また、あの悪夢を見る事にもなると思うけれど……。

）

「「「こんにちは」」」

「「「『こんにちは』」」」

音楽準備室に入ると、もう私達以外の皆さんが勢揃いしていた。

田井中さんの隣り二つの席が空いていたので、取り敢えず座ると琴
吹さんがいつものように、いそいそと紅茶の用意を始め出した。

「ねえ、漣ちゃんはなんでギターじゃなくてベースを選んだの？」

唯さんが秋山さんに、楽器を選んだ理由を聞き始めた。

初心者の私からすると最初、ギターとベースって形がほとんど同じだから、正直あまり違いがよく分からなかった。

調べてみると、ギターはメインの音を演奏するのに対して、ベースはリズムを刻む楽器という事が分かった。

それに、張ってある弦の本数もギターが6本なのに対して、ベースは4本と違っている。

「だってギターは………は、………恥ずかしい………」

「は、恥ずかしい？」

大人な顔立ちの秋山さんが、頬を赤くしながら喋っている。

やっぱり恥かしがり屋さんみたいで、冷静沈着な女性と思い込んでいた私にとって意外でもあり、なんだか可愛くも見えた。

「だってギターって、バンドの中心って感じで先頭に立って演奏しなきゃいけないし、観客の目も自然と集まるだろ………」

「自分がその立場になるって考えただけで………」ポフッ!!

次の瞬間、秋山さんは頭から煙を吹き出して卒倒してしまった。

「大丈夫ですか？秋山さん」

「澪ちゃん、しっかりして」

すんでの所で琴吹さんが背後から支えて、床に倒れ込むのは避けられた。

…そっか、恥かしがり屋さんだからこそ、リズムをとって縁の下で支えていこうと思ってるんですね…。

まあ、もっともと言えばもっともな理由ですよ。

…ただ、それで人前での演奏が出来るのかが、少し疑問に思うんですが…。

「ムギちゃんはキーボード上手いよね。キーボード歴長いの？」

琴吹さんは、皆さんに入れたての香り高い紅茶を差し出しながら答えてくれた。

「私、4才の頃からピアノを習ってたの。コンクールで賞を貰った事もあるのよ」

コンクールで賞!?

お嬢様だとは聞いていたので、やっぱり英才教育を受けていたんだと思う。

とはいえ、それ相応の努力が無ければ賞なんて取れないですよね。

秀才と言われる人もそれなりの努力があって、初めて真価を発揮出来るものだから。

それ以前に、そんな人が何故軽音部に入ったのか、少し疑問です…。

「さあ、いただきますよ」

今日も色とりどりのケーキやお菓子が、寄せ集められた机の上に並べられた。

「……………わぁ……………美味しい……………」

お菓子のあまりの美味しさに頬が緩むと言つより落ちてしまいそう……。

「本当、綾瀬さんて美味しそうに食べるよな」

「なんだか、見ているこつちまで幸せな気分になるから不思議だよ」

「ふえっ!？」

田井中さんと秋山さんが、ケーキを頬張る私を見つめながら微笑んでいた。

仮入部の身なのに、ただ部室にきてお菓子をいただくだけの私って、卑しく思われてないかなあ……。

「す、すみません……。なんだかご馳走になってばかりで……。ご迷惑じゃないですか?」

「そんな事ないって。せつかくの体験入部なんだから楽しんでもらわないとな」

「そうそう。部長の律ですら、この通りお菓子を楽しみまくってるんだから心配はいらないよ」

「楽しい雰囲気をもたせて伝えるのも、部長の重要な役目なの」

『お菓子を食べたいが為に、もっともらしい理由をつけてきたわね』

「そつだよ、悪いか」

「『開き直ってるし……』」

確かにこうしてお茶をするのも楽しいけれど、一番楽しいのはこうやって皆さんのお喋りを聞いている事。

それだけで心が和んでくるし、癒されてくる。

「そういえばずっと疑問に思ってたんだけど、この部屋ってやけに物が揃ってるよね。最近の高校ってこんな感じなのかな？」

唯さんが最もな疑問を投げ掛けてきた。

でも、こんなに高級な食器が揃っている部屋って家庭科室ぐらい、……うっん、ここまでは無理ですよね……。

「ああ、それは私の家から持ってきたのよ」

「自前!?!」

「はい」

「でも琴吹さん、これだけの物をどうやって運び入れたんですか？」

「それは私の家にいる執事やお手伝いさんに頼んで搬入してもらったの」

「執事にお手伝いさんですか!？」

「はい。皆さんと楽しいひと時を過ごせればと思って、10人掛かりで搬入してもらいました」

「そ、そうなんですか……」

何処までもお嬢様な琴吹さんだけど、高飛車な態度なんかは一切無くて、とても親しみやすい性格。

明るくて社交的な琴吹さんが、私は大好きです。

「律ちゃんはドラムって感じだよね」

「なっ!？」

確かに田井中さんは明瞭活発で元気ハツラツとした感じですから、ドラムが凄く似合っています。

「…あ、アタシにもちゃんと凄おしく立派な、聞けば誰でも感動する理由があるんだぞ!!」

「へえ、どんなどんな？」

「わ、私も聞きたいです」

「…それは…えーっと…、あれだ…」

私と唯さんは共に身を乗り出して、田井中さんの答えを待っていた。

憧れのドラマーがいるとか、もしかすると病気を患っている子を勇気づける為とか、そんな理由なのかもと勝手に想像していた。

そして、田井中さんから発せられた期待の答えは……。

「…か、…カッコいいから…」

「…そこ…?」

「…ま、まあ、それも立派な理由だと思いますよ…」

「だってさ!!ギターとかベースとかキーボードとか、指でチマチマチマチマするのを想像しただけで…」

「キイイイイツ！！つてなるんだよ……」

頭を抱えて細かい作業への苛立ちを表現した田井中さん。

初心者からすると、ドラムはただ叩けばいいと思うけれど、実際は熟練した技術がいると田井中さんは言っていた。

豪快だけど繊細さも必要らしく、田井中さん自身も実際のところはそうなのかもしれないなあ……。

「…あの、海衣奈さん…」

『いよいよ私の番ね』

「海衣奈さんはどうしてベースを始めたんですか？」

『まあ、簡単に言えば父の影響かしらね』

「お父さんの、ですか？」

『ええ。父は元々ベーシストで、昔バンドを組んでたって言ったわ。40才になった今でも、時間が出来れば昔のバンド仲間とライブをしているの』

「凄いですね！！すっかり夢と生き甲斐を持ってて、とてもカッコいいです」

『ありがとう、ちひろちゃん。確かにカッコいい、自慢の父なのよね。ベースを弾いている父の姿は凄く輝いてて、憧れの存在でもあるの』

お父さんの話をする海衣奈さんの表情はとても嬉しそうで、どれだけ大好きで尊敬しているかが伺える。

私もお父さんの事が好きだから、なんだか自分の事に嬉しく感じてしまう。

ちなみに私のお父さんの生き甲斐と言えば、仕事と私の事ぐらいしか思い付かないなあ……。

「じゃあ、海衣奈はパ……お父さんからベースを習ってるんだ？」

……気のせいでしょうか……？

漣さん、今もしかしてパパって言いかけませんでしたか？

『ええ、私が小さい頃から手解きを受けてるの。少々スパルタ気味だったけど』

『そんな父が、私を初めてのライブに出してくれたのが小学3年の

時だったわ』

「小学3年生で初ライブですか？凄いですね」

『物凄く緊張してて、手の震えが中々止まらなかったのを今でも覚えてる』

『でも、失敗して父に恥ずかしい想いをさせたくないと思った私は、一生懸命演奏したわ』

『そして演奏が終わって、思いがけない程の沢山の拍手を貰った時に私、達成感から思わず泣いちゃってた』

『そんな私の頭を撫でてくれた父の優しさに、いよいよ涙が止まらなくなって……。あの日の感動は、今でも忘れられないわ』

本当に何かに打ち込んで頑張り抜いた人には、最後に泣く権利があると思う。

それは、誰にも笑う事も邪魔する事の出来ない、不可侵の約束事。

私も一度だけ、ある達成感から人目もはばからず、泣いたことがあった……。

その時がお母さんとの最後の抱擁になるとは、思いもしなかったけど……。

「それじゃあミーナちゃんは、…えっと…セレブじゃなくて、何だっけ、なんかパンみたいな名前のアレ……？」

「はあ？なんだ、それ？」

「まるでなぞなぞだな……」

「私も分からないわ……」

皆さん、唯さんの突然の不可解な言葉に、一様にハテナ顔になります……。

私はもしかしたら、と思う言葉が頭の中にひらめいて、ヤマ感だけと思い切って言ってみた。

「……あのお、唯さん。もしかして、サラブレッドじゃないですか？」

「そう！ーそれだよ、ちいちゃん。さすがだね」

「『……あれで分かるんだ……』」「『……』」

「……当たってました……」

皆さんがビックリしてるけど、私自身が一番ビックリ……。

『サラブレッドだなんて、私は父からすればまだまだ発展途上の身よ。向上の余地はまだあるわ』

「でも、海衣奈のベースを初めて聴いた時、凄く上手いと正直に思った。身震いさえ感じた位だったよ」

「澁からしても、そう感じたんだ。まあ、私も上手いと思ったもんな」

『あ、ありがとう……。でも、澁ちゃんのベースも皆の縁の下の力持ちって感じで私、大好きよ』

「ふえっ!?!」

秋山さんの顔が一気に赤く染まり、顔を俯き加減にして、聞こえるかどうかの小さな声で「ありがとう」と呟いていた。

「…そ、そういうば、平沢さんて、もうギターは買ったの?」

照れ隠しからか、秋山さんが唯さんに質問を振ってきた。

「唯でいいよ」

「え？」

「ほら、私も澪ちゃんの事、澪ちゃんと呼んでるし」

私が入学式の日、お祝いのパーティーで唯さんに言われたのと同じ様な事を秋山さんに言っている。

秋山さんは一時、ためらってはいたけれど、勇気を決した表情でそっと呟いた。

「……ゆ……唯……」

「……かつ、可愛い……!!」

あの美人の秋山さんが少し上目使いで、照れながらも一生懸命に唯さんの名前を口に出している。

唯さんも私も思わず、心の叫びが口に出てしまいました……。

「ところで、唯はギター買ったの？」

田井中さんが照れたままの秋山さんに代わって、唯さんに改めて質問をした。

「……へ？……そっかあ、私、ギター演るんだった」

…唯さん、思い出したかの様に言ってますが、さっきも和さんに同じ事、言われてましたよ……。

「部室は喫茶店じゃないんだぞ。あ、綾瀬さんは仮入部の身なんだから、気にしないでいいから、ね？」

「えへへ……」

「あ、はい……」

秋山さんみたいな美人さんに気にかけてもらえるなんて、何だか嬉しいやら申し訳ないやら、複雑な気分です……。

「ところでギターって幾らぐらいするの、値段？」

そういえば、ギターの値段なんて気にかけた事、無かったなあ……。

唯さんの質問で、その事に初めて気がついた。

「うーん……、安いのは1万円位からあるけど、あんまり安過ぎるのも良くないからな……。5万円位がいいんじゃないかな？」

「じゅ、5万円！？……私の小遣い……、10ヶ月分だ……」

唯さんがギターの値段に驚愕すると同時に絶望感も抱いていた。

……かく言う私も、唯さんと同じ感情を抱いていた……。

だって5万円ですよ、5万円！！

5万円で言ったら、私にしたら大金の部類に入ってしまう金額ですよ……！！

あ、お父さんが安月給という訳じゃ無いんですよ、決して……！！

「高いのになれば10万円以上するのもあるよ」

じゅ……じゅ……まん……？

最早、一介の高校生が容易く持ち歩ける金額じゃないです……。

「部費で落ちませんか？」

唯さんが、なんとも可愛らしい声で田井中さんに問い掛けた。

そっか、その手が……。

「落ちません!!」

田井中さんのこれまた可愛い声と共に、唯さんの僅かな希望は脆くも崩れ去った……。

世の中、そんなに甘くは無いですね……。

「ほら、このお菓子、美味しいわよ」

琴吹さんが差し出してくれたお菓子で、落ち込んでいた唯さんが一気に笑顔になっていった。

美味しい物には人を笑顔にする力がありますから。

「まあ、取り敢えず楽器が無いと何も進まないから……」

「溥の言う通りだな……。よし、次の休みに楽器見に行こうぜ」

『そうね。唯ちゃんにギターを選んで買ってもらわなきゃ』

「それじゃあ、私も着いて行くわね」

「あのお、私も着いて行った方がいいんでしょうか？」

『もちろんよ。これも体験入部の一貫だから。生のギターを見るのも結構楽しいわよ』

生のギターかぁ……。

楽器とはまったくの無縁だったから、一度も見た事なんて無いものね……。

「分かりました、私も行きます」

『それじゃあ今度の日曜日に皆で行きましょう』

「ようし、決定ー!!」

部長の田井中さんの決定で今度の日曜日、楽器を見に行く事が決定した。

楽器店なんて入った事無いからなあ……。

どんな所なんだろう……？

第7話「それぞれの理由」（後書き）

エイジ「いかがだったでしょうか？ちなみに次の話では、久々にあの人を登場させます」

ちひろ「あの人、と言いますと……？」

エイジ「ちひろちゃんの一番身近な人でプロローグ以来、一度も出ていないあの人です」

ちひろ「ああ……」

???「…作者、テメエ、正直俺の事、忘れてただろ？」

エイジ「そ、そんな事ないですよ、本当です!!」

ちひろ「もう、作者さんには作者さんの考えが一応あるんだから。そんな事言っちゃダメでしょ、めっ!!」

???「!!……ちひろに怒られた……。もう生きていけない……」

ちひろ「あ、あの、そんなに落ち込まないで……。大好き……。だから……」

???「!!……そうだよな、ちひろが俺の事、嫌いになる訳無いもんな」

エイジ「あの人が完全復活を遂げた所で、今回はお別れです。また次回お会いしましょう」

「???」おい作者、これから仕事は忙しくなるのか？」

エイジ「…う…、これから超が付く程の繁忙期になりますので、次の更新が何時になるかは正直、お約束出来ない状態です……」

「???」なんてこった……。俺の出番は何時やってくるんだ……」

第8話「スカイブルー」（前書き）

エイジ「皆さん、新年明けまして」

父「もう成人式も鏡開きもセンター試験も終わってるのに、今更おめでとございませすは遅すぎだろー!!」

エイジ「……はい……。年末年始は仕事が繁忙期で忙しくてまったく執筆出来ませんでした」

父「年末年始からも日にちが随分開いてるぞ」

エイジ「話の流れで重要な回に入って来たのと、今回の話の量が今までで一番長くなった事が原因で、時価、掛かりました」

父「なんかお前の前書きは謝ってばっかだな……」

エイジ「反論のしようもありません……」

ちひろ「お父さん、もうそのくらいで許してあげて……。今回は私とお父さんの絡み？もあるみたいだし……」

父「うん、許しちゃう。他ならぬちひろの頼みだからな」

エイジ（切り替え早っ!）

一同「……それでは第8話、始まります」

エイジ「長いので、どうぞゆっくり御覧下さい」

第8話「スカイブルー」

真つ青な空が何処までも広がっている、快晴の日曜日。

私はこんな澄み切った青空が大好き。

太陽の暖かいパワーを身体いっぱい浴びて、元気を分けて貰えるから。

洗濯物だって、そのパワーのお裾分けですっかり乾いてた。

そして今日は、唯さんの楽器選びに付き合っ日。

桜ヶ丘に引越して来てから、買い物以外でお出かけするのは今日が初めて。

ちなみに今日、お父さんは休日出勤で家にはいなくて、家の中は私一人だけ。

部屋で久し振りのおめかしを終えた私は、姿見の前で服装の最終チェックに余念がなかった。

「似合ってる……かなあ？」

春らしくピンクのワンピースを着てみた。スカート部分はドレス状に広がっていて、胸元と袖口にはワンポイントとしてリボンがあしらわれている。

三つ編みの先には黄色いリボンをあしらって、アクセントを付けてみた。

受験や引越し、その他諸々の事情で久し振りのお出かけだから、少し気合いを入れてみたんだけど、……空回り……してないかなあ………？

ピンポーン

チャイムが鳴るのが聞こえて、部屋の窓から外を伺うと、唯さんと海衣奈さんが玄関前にいるのが見えた。

窓の扉を開けて、お二人に声を掛けてみた。

「唯さん、海衣奈さん」

呼び掛けに気付いた唯さんと海衣奈さんが、私の姿を探して頭を右往左往させ、ようやく上にいる私に気がついてくれた。

「あつ、ちいちゃんだあ!!」

「今、下に行きますね〜」

ベッドの上に置きつ放しだった若草色のトートバックを手に持ち、部屋を飛び出した私は階段を降りて、玄関前でピンクのブーツを履き、お二人の前に出ていった。

「お待たせしました」

「うわあ、ちいちゃん、可愛い！！可愛いよあ〜っ」

唯さんが私の手を握りつつ、着ている服を絶賛してくれた。

『本当、可愛いわ。ちひろちゃん、とても似合ってるわよ』

海衣奈さんも褒めてくれる。嬉しいやら恥ずかしいやらで、こそばゆい……。

「…そ、そうですか？気合いだけが空回りしてるんじゃないかと思っただけですけど……」

「そんな事ないよお。お人形さんみたいで可愛い！！」

「きゃっ！！ゆ、唯さん？」

唯さんが思い切り抱き付いてきて、後ろによろけたけれど、なんとか踏みとどまった。

「ん〜っ、ちいちゃん分、補給う〜っ」

「ほ、補給ってなんですか？」

『…そうねえ…、言うなれば、今のちひろちゃんに対する“可愛い萌え”なパワーを補給してるって所かしらね』

「…か、“可愛い萌え”ですか？」

『そう。唯ちゃんは生粋の可愛いもの好きだから』

そういえば入学式の日、自己紹介の時に「可愛い物が大好き」って言ってましたよね……。

頬擦りしている唯さんの表情は、なんとも御満悦気味……。

嫌とは言えない性格の私は為すがままにされていた……。

『それじゃ、せっかくだから私も補給させてもらおうかしら』

「はい？」

カシャッ〜 ピロリーン

『また新しい待ち受け画像、ゲットしちゃった』

「…ま…、またですか………」

海衣奈さんは海衣奈さんで、携帯に私の待ち受け画像を補給して
し……。

入学式の日から数えてどれ位、私の恥ずかしい画像がメモリーカー
ドに補充されてるんだらう……？

まあ、海衣奈さんは個人観賞用で撮っていて、他の誰かに画像を流
出している訳でも無いみたいだから、別にとやかくは言っていない。

それに画像を消去したくても、運動音痴な私が素早い身のこなしの
海衣奈さんから携帯を取り上げるのは至難の業だと分かったので、
それはもう諦めた……。

だから、恥ずかしい写真は撮られない様に気を付けてるんだけど、
今みたいに唯さんに抱き付かれて身動きが効かない時なんかを狙っ
てくるから、どうしようもなくて……。

結局は泣き寝入りするしかないんです……。

『さあ、時間も無いし、そろそろ行きましょう』

「あ、本当だ。約束の時間までそんなに無いや」

「あ、はい。行きましょう」

そして補給を完了し、達成感に浸るお二人と共に、田井中さん達と
待ち合わせしている繁華街のアーケード前へと向かった。

家を出てから30分位経って、ようやく繁華街に辿り着いた。

デパートやファッション関係のビル、オフィスビルなんかが多く立ち並び、歩く人の多さから繁華街の賑わいぶりが伺えてくる。

そして目的地のアーケードに辿り着き、田井中さん達の姿を探すと横断歩道の向こう側に田井中さん、秋山さん、琴吹さんが一緒にいて喋っているのが見えた。

いつも学校で会っている皆さんだけど、休日に私服姿で会うというだけで、また新鮮な気分になってくる。

『律ちゃん、漣ちゃん、ムギちゃん、着いたわよ。道路の向かい側にいるわ』

海衣奈さんがメールを送ると、間もなく受け取った皆さんがこちらに気付き、ちょうど横断歩道の信号も青になった。

「おーーーーーい、こつちこつち」

田井中さんが手を振って呼び掛けると、こちらも合わせて手を振り返した。

「おーーーーーい、みんなあーーーーーっ」

唯さんは満面の笑みで答えて、信号の向こう側へと駆け出した。

『唯ちゃん、危ない!』

「ほえ?」ドンッ

「うわっ!?!ごめんなさい」

海衣奈さんの忠告も虚しく、唯さんは向こう側から渡って来た男性と擦れ違い様にぶつかってしまった。

『だから危ないって言ったのに…』

なおも駆けていく唯さんが横断歩道を渡り切る直前、一人の女性の目の前で急にしゃがみ込んだ。

『唯ちゃん、何してるのかしら?』

「さあ?分からないです……」

唯さんに近付いていくと、何か喋り声が聞こえてきた。

「よーしよしよし、よおーしよしよしよ……」

「……はい？」『……へ？』

まるで ツゴロウさんみたいな声がすると思ったら、唯さんは散歩中の子犬の頭を一心不乱に撫でまくっていた……。

「あと5メートルぐらいなのに……」

「辿り着けない……」

秋山さんと田井中さんも少々呆れ気味の表情を浮かべていた。

『唯ちゃん、嫌がつてるから止めなさい』

「ええーっ!? だってシッポ振って喜んでるよ、このワンちゃん」

『ワンちゃんは喜んでても飼い主さんに迷惑が掛かっているの』

「……はあ~~~~~い……」

海衣奈さんに首根っこを掴まれて、ワンちゃんから引き離された唯

さんは、名残惜しそうに手を振っていた。

「ワンちゃん、バイバーイ」

ワンちゃんは今の言葉を理解したのか、定かじゃないけれど、一回だけ“ワン”と吠えていた。

結局、今の行動が仇となって、ギリギリ約束の時間に間に合うはずだったのが、僅かながらの遅刻になっちゃいました……。

）
）

合流を果たした私達は、アーケードの中を横一列になって歩き始めた。

「唯ちゃん、お金は用意できたの？」

琴吹さんが少し心配そうに唯さんに訪ねた。

「うん。お母さんに無理言って5万円、前借りさせてもらったんだ」

『え？唯ちゃんのお母さん、帰ってきてたの？』

「うん、一昨日の夜、お父さんと一緒に帰ってきたんだ」

唯さんと海衣奈さんのやり取りで思い出したけれど、そういえば私、唯さんの両親にまだ会った事が無い。

いつも唯さんと憂ちゃんしか家にいなかったから……。

「唯さんの御両親で、お仕事か何かされてるんですか？」

「お父さん、海外出張が多い仕事をしてるんだ。それでお父さん一人じゃ大変だから、ってお母さんも着いていくの」

「そうなんですか……。仲良いんですね、御両親」

「うん。仕事ついでに旅行なんかもよく行くんだあ。今回はハワイにダブルレインボーを見に行ったんだって」

「……『ラブラブだあ!!』『』『』『』」

ラブラブかあ……。

うちのお父さんとお母さんも、超が付くほどのラブラブぶりだったなあ……。

……でも、そんな日常を私が壊してしまった……。

お母さんがいなくなった後のお父さんは、あまりにも忍びなかった……。

『ちひろちゃん、どうかしたの？表情がなんだか暗いけど……』

「え？そんな事ないですよ、いたって普通です、はい」

『…そう？それならいいんだけど……』

笑顔でごまかして、なんとか乗り切れた……。

危ない、危ない、表情に出てたみたい……。

皆さんには関係無い事だから、迷惑かけないようにしないと……。

「とにかく、これからお金は計画的に使わなきゃ……」

唯さんが決意も新たに、握り拳を作っていた……んだけど……。

「……いけないんだけど……」

…その言葉とは裏腹に、顔は洋服店のウィンドウを向いている……。

「今なら買えるー!!」

前々から欲しかった服が、この店にはあったみたい。

唯さんは、今持っているお金が楽器を買う為のものだって、完全に

忘れ去ってるかも……。

「じらじら……」

今度は呆れ顔の田井中さんに首根っこを掴まれています……。

「ちよつと見るだけ!！」

唯さんは制止を振り切って、店の中へと入ってしまった……。

「まるで無邪気な子供みたいですね」

なんだかおかしくて、クスリと笑いながら思ったままを言ってみた。

『子供みたいじゃなくて子供そのものよ、まったくもう……』

「まあ、せつかく繁華街まで来たんだし、あたし達も覗いていこう
ぜ」

「律まで……。っておーい、待てってば、律う」

「私達も行きますよ、海衣奈ちゃんもちひろちゃんも」

『ムギちゃんも……。しょうがないわね……。それじゃあ行きましょ

うか、ちひろちゃん』

「あ、は、はい……」

結局、済し崩し的に全員が店の中へと入っていった……。

）
）

「うわあ、こんな服まで置いてあるんだあ」

唯さんが手に取ったのは、色彩が派手で袖も無く、スカート丈の短いステージ衣装というよりも、コスプレ要素の高い服。

仮装パーティーなんかでないと、着る事は絶対無さそう……。

「澪ちゃんなら似合うかも？」

「わ、私なんか似合わないって。それ以前に、こんな恥ずかしいの着れる訳ないだろ……」

顔を真っ赤にして、全力で嫌がる秋山さん。

いや、秋山さんでなくても嫌がりますよ……。

「あ、これ、ちいちゃんなら似合いそう」

「ひよえっ!?!」

突然のキラーパスに驚いた声が裏返っちゃった……。

「そ、そんな衣装、わ、わ、私じゃとても無理ですう……」

秋山さん同様、頭と両手を思い切り振って、全力で拒んだ。

いくらお父さんとの撮影会で耐性がついている私でも、こんな派手な衣装は着た試しが無いから……。

こんなの着たら海衣奈さん、……うっん、皆さんの携帯のカメラが一齐に向けられる可能性が大です……。

「なあ、透、良かったな」

「何がだよ、律?」

「透とちひろって似た者同士だから、仲間が出来て良かったな、って話」

「「ふえっ!?!」」

今度は田井中さんからのキラーパスに、秋山さんと声が被っちゃった……。

「…あ、秋山さんと私って、そんなに似てますか？」

「似てる似てる。だって恥ずかしがり屋さんだし、怖くて気絶するし……。ちひろって澪と同じ匂いがするんだよな」

「…わ、私と秋山さんが似てるなんてそんな……」

私が顔を赤くして、首を横に振っていると、秋山さんが何だか淋しそうにしていた……。

「…私と似てるの、そんなに嫌かな……？」

いけない！！秋山さんは誤解してる。恥ずかしいけれど、誤解を解く為に胸の内を打ち明けた。

「そ、そうじゃないんです！！秋山さんみたいなび、美人で大人な人と、私みたいなのが一緒なんて恐れ多いし、おこがましくて、って意味で……」

「え！？……う……あ……」

秋山さんの顔はこれ以上無いくらい真っ赤になっていて、多分私も今、同じ位ほてっていると思う……。

「…あ…、ありがとう……」

「……………い……………いえ……………」

なんだろう、この変な空気…。

気まずくて秋山さんの顔がまともに見れないよお……………。

「いやあ、良いムードになってますなあ」

「そうですね、田井中殿。ここはひとまず退席して、後は若い者同士で」

「そついたしますか、平沢殿」

「お前ら、これは見合いじゃないんだから、変な小芝居入れるな！
！」

唯さんと田井中さんの変な芝居のお陰？で、この変な空気は消えていった……………。

良く見ると、海衣奈さんはこの状況を携帯のカメラで押さえてるし、
琴吹さんは何故かうつとりとした瞳でこちらを見つめています……………。

また、私は補給されてるみたい……………。

）
）

それから私達はデパ地下で試食したり、ゲームセンターで遊んだり

して、楽しくもあつという間の時間を過ごした。

そして一息入れる為に喫茶店に入った私達は、ホットコーヒーやケーキセット、パフェなんかの思い思いの品を頼んでいた。

ちなみに私は、苺とアイス、生クリームたっぷりのストロベリーパフェを堪能していた。うーん、美味しい！！

そんな楽しいはずのこの空間にただ一人、対極的な表情をしてる人がいた……。

「……み、みんなあ、少しは遠慮してよお……」

唯さんが涙声で皆さんに訴えていた……。

「だって、唯がゲーセンで言ったんだぞ。『モグラ叩きゲームでビリだった人が、後で奢りね』って。誰でしたっけ、ダントツのビリは？」

「……うっ……」

『律ちゃんの言う通りよ。言い出さずペなんだから、諦めて奢りなさいね』

「……」『ゴチになりまーす』「……」

「……しよ、しよんなあ……」

唯さんは、もはや涙目ではなくて泣いている……。

あまりにも可哀相だから、私の分だけでも出そうかな……。

「ん？ちひろじゃないか」

私の名前を呼ばれて、ふとその方向を見ると、スーツ姿の良く知っている男性が立っていた。

「…お、お父さん！？どうしたの？こんな所で……」

「どうしたも何も、俺の会社はここからすぐ近くだからな。外回りの帰りで少し休憩してたんだ」

「…そ、そうだったんだ……」

そつえばお父さんの勤めてる会社自体、何処にあるか知らなかった……。

だからばったり出会って、本当にびっくり……。

「…という事は皆、ちひろの友達なんだね。初めまして、ちひろの

父です。ちひろがいつもお世話になってます」

「『初めまして』」

私以外の人がいる所では、親バカではなくてハンサムなお父さんを演じている。

ううん、演じてるとかじゃないよね…。どっちも私のお父さんなんだもの。

「お父さん、もう会社へ戻るの？」

「ああ、このあともう少し仕事があるからな。ちひろ、これ貰うぞ」

「え？」

そう言うと、お父さんは私達のテーブルにある伝票を取り上げた。

「お父さん、それは私達の伝票……」

「『これは俺の奢りだ』」

「『え！？』」

「…そ、そんな、お父さん、悪いよお……」

「気にするな、ちひろに新しく出来たお友達に挨拶代わりだ」

「『……』ありがとうございませーす」「」「」

「それじゃ俺は行くからな。ちひろ、今日は時間を気にせず、ゆっくりしてこい」

「……うん、ありがとう……」

「それじゃあな」

お父さんはレジで私達の分を含めた会計を済ませると、足早に店を去っていった。

「あれがちひろのお父さんか……。カッコいいなあ!!」

田井中さんはお父さんの格好良さに感嘆とじていた。

「うん、そうだな。ハンサムで優しくて……。理想のお父さん像だな」

秋山さん、褒めすぎです……。

「気前もいいし懐が深いわね、ちひろちゃんのお父さん」

琴吹さんも笑顔で感心しきりです。

「本当、ちいちゃんのお父さんで良い人だね。尊敬しちゃう」

『奢らなくてもよくなったからでしょ？』

「えへへ……」

唯さんと海衣奈さんは以前、家に夕ご飯を食べに来た時にお父さんと会っている。

憂ちゃんと和さんもその時一緒にいたけれど、皆さんもその時、同じ様に驚いた反応をしていた。

これだけの印象を植え付けただけに、本性は絶対に知られてはいけない。

「……ところで私達、何か忘れてない？」

……唯さん、やっぱり忘れてたんですね、今日の目的……。

「楽器だ、楽器！！」

「おおっ！？そうだった」

秋山さんのツッコミで、唯さんはようやく思い出した。

『そういう澁ちゃんだった、すっかり楽しんでて忘れてたんじゃないのっ。』

「なっ！？そ、そんな事はないぞ！！た、確かに楽しんではいたけれど、ちゃんと覚えてたぞ。海衣奈だった、洋服店で一人ファッションショーなんてしゃれこんでたじゃないか」

『そ、それは皆がおだてるから流れで仕方無く……。それなら部長

の律ちゃんだって色々買い物してて、絶対忘れてたわよ』

「なんで急にアタシに振るんだよ!?!…そりゃあ確かに買い物はしてたけど、ちゃんと覚えてたぞ。誰かが思い出してつっこむかどうか試してたんだ」

「律ちゃん、それ授業で間違いを指摘された先生の言い訳っぽい…」

「ぐっ……、そういう唯は遊んでて完全に忘れてただろ?」

「うん、忘れてた」

「私も初めての試食が楽しくて、完全に忘れてたわ」

「唯もムギもあっさり認めてんじゃねえ!?!ち、ちひろはどうなんだ?」

最後は私に振ってきた……。キリが無さそうなので、この流れを総括する一言を言った。

「結局、私を含めて皆さん忘れてたという事ですよね……?」

一時の微妙な間の後、皆さんが口を揃えて言った一言は……、

「『……申し訳ございませんでした……』」

喫茶店を出て、本来の目的地である楽器を販売している【10GI
A】というお店に到着した私達は、エスカレーターで地下1階に降
りた。

「「……うわぁ……」」

そこに広がっていた光景に私と唯さんは息を飲んだ……。

色とりどりの形や大きさも違う、たくさんギターが壁に掛けられ
ていた。

テレビの画面を通してしか見た事の無いギターが今、目の前で店の
照明を浴びて光り輝いている。

それは、今まで楽器とはまったく縁の無い生活をしていた私にとっ
て、凄く新鮮な光景だった。

「ギターって選ぶのに基準とかって何かあるのかなぁ？」

唯さんの質問に秋山さんが詳しく、丁寧に答えた。

「ギターは音色は勿論、重さやネックの形、弦の太さとかも色々あ

るんだ。だから女の子の場合、ネックの細いギターの方が……」

「あつ、このギター可愛い」

「聞いちゃいねえ……」

秋山さんの親切な解説は、唯さんの可愛い萌えパワーに無残にも打ち消された。

唯さんがしゃがんでジーツと見つめているのは、赤を基調としたギター。

そのギターの上の方に付いていた値札を見ると【現品限り¥250?000】と表記されていた。

…に、にじゅうごまんえん!?

ギターって、そんなにするものなの!?

25万円あったら今時の地デジ対応テレビだって買えるし、何より食費にしたらかなりのものになる……。

海外旅行だつて行けるかもしれないし、一番いいのは貯金したほうが……。

……ハッ!?!いけないいけない、つい主婦的視点で考えちゃった……。

そんな風に考えてしまつくらい、その値段に驚いた。

『へえ、レスポール？スタンダードね。唯ちゃん、そのギター、25万円もする高価な物なのよ』

海衣奈さんの言葉に初めて値札に目をやる唯さん。

「本当だ……。さすがにこれは手が出ないや……」

淋しそうな表情を浮かべている唯さん……。

そうですね、私達女子高生が易々と手を出せる金額じゃないですよね……。

そこへ琴吹さんが歩み寄ってきて、唯さんのそばで一緒にしゃがみ込んだ。

「このギターが欲しいの？」

「……うん……」

「あっちに安いギターが置いてあるみたいだぜ。見に行こう」

「……でも、これがいい……」

「唯……」

田井中さんの呼び掛けに反応はするものの、その場から動こうとはしない……。

完全にこのギターが気に入ったみたいです……。

「そういえば、私も今のベースが欲しくて悩んで悩んで、何度も何度も通い詰めて……、やっと手に入れたんだっけ……。だから今の唯の気持ち、分からなくもないな……」

唯さんの今の心境に昔の自分を照らし合わせて、同感している秋山さん。

その表情は、何処か優しく見えた……。

「そういえばアタシも中古のドラムセット、値切って値切って……」

田井中さんも同じ様な思い出があるんですね……。

ただ、話の趣旨が代わってきてる気もするんですが……。

「店員さん、泣いてたぞ……」

「だって、あの中古のドラムセット欲しかったんだもん」

店員さんが泣くって、どれだけ値切ったんですか？

私も確かに買い物をする時、値切る事はあるから分からなくもないけど……。

「あの、“値切る”ってなんですか？」

「『はい？』」「『』」

琴吹さんの普通では予測し得ない質問に、皆さんが間の抜けた声を揃えた。

お嬢様育ちの琴吹さんですから、値切るなんて庶民的な行為を知らなかった……、ううん、知りたくても知る事が出来ない環境だったんでしょうね……。

そんな琴吹さんの心情を読み取ったのか、田井中さんは呆れる事なく説明を始めました。

「値切るっていうのはな、欲しい物を手に入れる為に努力と根性で負けさせる事だよ」

確かに、値切りは努力と根性が必要です。

言い得て妙な田井中さんの発言は、とてもハツラツとしています。

「凄いですね、なんだか懂れます」

琴吹さんの田井中さんを見つめる瞳は純粹そのもの。

いたって普通の事が、琴吹さんにとっては憧れる事だらけなんですね。

『唯ちゃん、よっぽど気に入ったのね。微動だにしないわ…』

唯さんは私達の会話も気にせず、ジーツと赤いギターを見つめたまま……。

もう誰も安いギターを見に行こうなんて言わなくなった…。

「よし、皆でバイトしようぜ」

「「「「バイト?」」」」

「…バイト?そんな、皆に悪いよ…」

「これも部活動の一環だって。早くギターを手に入れれば、それだけ早く皆で部活をスタートできるじゃん」

『確かにそうね。ギターが無いと何も始まらないし』

「私もバイトやってみたいです」

田井中さん、海衣奈さん、琴吹さんの三人ともバイトをする気満々です。

私はどうしよう……？

思えば、唯さんには入学当初から色々お世話になってる。

自己紹介の時に助け船を出してくれたし、軽音部の皆さんと出会ったきっかけを作ってくれたのも唯さんだった。

そんな唯さんに恩返しがしたいと思った私は、即決で挙手した。

「…わ、私もバイトに参加します!!」

「ちひろ……。よっしゃあ!!皆でバイト頑張るぞ、おお……
ーっ!!」

「『おお……っ!!』」

「…お、おお……」

なんだか秋山さんだけ不安な表情を浮かべているのが気になります……。

「よし、じゃあ決意表明もした事だし、そろそろ店出ようか?」

「「「『うん』」」」

皆さんが店を出ようと、エスカレーターで上り始めようとした時、最後尾にいた私にある物がふと、目に止まった……。

「皆さん、すみませんが先に入口の所で待っててもらえませんか？」

「どうしたの、ちいちゃん？」

私は取り敢えず無言でトイレを指差した。

「そっか。それじゃあ先、行ってるね」

「じゅっくり〜」

「律!!」「ゴチンッ」

『デリカシーが無いわね、律ちゃんは……』

立派なたんこぶを拵えた田井中さんを先頭に、皆さんはエスカレーターを上がっていった。

皆さんが見えなくなったのを確認して、私はさっき唯さんがしゃがんでいた場所に同じ様にしゃがみ込んだ。

「……………綺麗……………」

その言葉以外、表現方法が見つからなかった……。

皆さんに嘘をついてまで見たかった物……。

それは、さつき唯さんが凝視していた赤いギターのすぐ右隣りに鎮座していた。

澄んだ水色、私の大好きなスカイブルーの輝きを放っている、唯さんの見ていたギターとほぼ同じ形のギター。

吸い込まれそうな青空の様な色のギターに、文字通り吸い込まれる様に足を運んだ……。

しばらく見つめていると、ふと上にある値札に目がいった。

【現品限り¥150?000】

夢の世界から一気に現実に引き戻された……。

こんな高いの買える訳ないよ……。……うつん、それ以前に買ったお金も資格も無いんだから……。

そう思いながらも、私はこの場所をなかなか離れられずにいた……。

くピロリン

携帯から発せられた音で、ようやく我に帰った私は携帯を開いてみた。

『ちひろちゃん、トイレ長いけど、体調でも悪いの？』

海衣奈さんだ……。

気がつくと15分も経ってた……。心配もしますよね……。

『すみません、先に入っていた方がいましたので時間が掛かりました。今行きますね』

そうメールを打ち、私はようやく立ち上がった。

エスカレーターのステップに足を掛けようとした瞬間、スカイブルのギターがある方にまた目がいった……。

少しの間、ギターを見つめて、名残惜しいけれど待たせるのも申し訳無いので、ステップに足を置いた。

段々、ギターが遠ざかっていく……。

(何故、私はこんな淋しい気持ちになってるんだろう……?)

買えるはずもないギターが見えなくなる頃、そんな疑問を抱いて
いた……。

第8話「スカイブルー」（後書き）

エイジ「如何だったでしょうか？次回の更新は本当に早くする様に頑張ります。ただ、週末は仕事が忙しく、確実に週明け以降の更新になります」

ちひろ「無理はなさらないでくださいね……」

エイジ「ちひろちゃんは優しいなあ……（泣）次回からは段々ちひろちゃんの過去の断片が垣間見えてきます」

「次回をお楽しみに」

第9話「友達だからこそ」（前書き）

大変お待たせしました。ようやく更新が出来ました。

今回の話で初めて、ちひろ視点と海衣奈視点に分けています。

それぞれの感情が描きたかった為です。

それでは第9話、御覧下さい。

御感想もお待ちしています。

第9話「友達だからこそ」

【SIDE：海衣奈】

「なかなかいいバイトが見つからないなあ……………」

何冊も広げられたバイト情報誌を前に、頬杖を付いた律ちゃんがグチをこぼしてる。

今日は水曜日。今、部室はさながら就職活動の場と化していた…………。

この前の日曜日、唯ちゃんのギターを買う為にバイトをする事を決めたのはいいんだけど、これがなかなか決まらない…………。

「これ時給1000円…………って、これよく見たら男がやる力仕事じゃない」

律ちゃんが「アチャーツ」と言いながら、光るおでこを叩いてる。

時給が高いバイトは大体、力仕事みたいな体力的にキツイ仕事が多いから、女子には無理っばいわね…………。

「こっちは時給950円でレジでの接客。…あ、これ【高校生不可】って書いてある…………」

ムギちゃんもせっかく良さそうなバイトを見つけたのに、門前払い

とも取れる文言を見つけて、仕方無く次のページを捲ってる。

「力仕事も無理だけど、接客なんて……もっと無理……」

澪ちゃんに至っては人と接するバイト自体ダメらしく、現時点で見
てきた求人の9割は弾かれてる。

「澪は恥ずかしがり屋なうえに怖がりだから……」

『恥ずかしがり屋なのは分かるけど、怖がりバイト探しと何の関
係があるの？』

律ちゃんに尋ねてみると、「分かってないなあ」と言わんばかりに、
人差し指を立ててチツチツと左右に振ってる。

「ただでさえ人と接するのが苦手なのに、それが怖そうな人なら尚
更なんだよ。なあ、澪？」

澪ちゃんはただ黙ってコクンと頷いてる。

さすが幼馴染み。澪ちゃんの事よく分かってるじゃない。

すぐ側にいる私の幼馴染みの場合、何を考えてるか分からない事が
多くて、掴み所が無いわね。

なんて考えてたら……。

「……っ……」ポフンッ！！

また頭から煙を吹き出してる。

多分、怖い事を想像しちゃったのね……。

ただ澪ちゃん……、こんなんでバイトなんて出来るのかしら？

これは思ってた以上に骨の折れる作業になりそう……。

「ゴメンね、澪ちゃん。無理しなくていいから……」

「……唯……」

『……唯ちゃん……』

唯ちゃんが澪ちゃんを労って、そんな言葉を掛けていた。

最初は唯ちゃんもバイトを楽しみにしてた。

でも、その一方でバイトに皆を巻き込んでしまっている事を、申し訳無く思ってもいたみたい……。

だからこそ、こんな言葉が自然と出てきたんだと思う。

「……ううん、私、なんでもやるよ!!」

そんな唯ちゃんを見て「こんなじゃダメだ」と一念発起したのか、
澪ちゃんは勢いよく立ち上がった、やる気の漲った決意宣言をした。

律ちゃんはそんな澪ちゃんを見て最初はビックリもしてたけど、笑
顔で見つめてる。

少しでも成長したと思って喜んでるのかしら？

「おっ!!」

「な、なにっ!?!」

律ちゃんが急に声を張り上げたもんだから、澪ちゃんが肩をビクッ
と震わせてる。

「これなんてどうだ？」

律ちゃんが指差している所を、私達は身を乗り出して見つめた。

「『『交通量調査?』』」

「ほら、道路を通る車なんかの数をカウンターで数えるヤツ」

「ああ、日本野鳥の会!？」

唯ちゃん、大晦日は必ず紅白を見てるクチね……。

「うん……、これなら出来るかも……」

日給8千円かあ、2日間で1万6千円も稼げるじゃない。

それに湊ちゃんも接客じゃないから大丈夫だし、一石二鳥ね。

「よっしゃ、そうと決まれば早速電話してみるか」

律ちゃんは早速、携帯で申し込んでいた。

「よし、6人で応募しといたから。今度の土曜日に説明会するって
な」

「それじゃあ、ちいちゃんにメール入れとくね」

そう、ちひろちゃんは今日、ここにはいない。正確には、今日もいない。

ちひろちゃんは楽器を見に行った翌日から「用事があるので」「家事が忙しいので」と部屋に姿を見せていない。

今日も家の用事があると言って、凄く申し訳なさそうに詫びてた……。

体験入部をする時に部長の律ちゃんと交わした約束事だから、誰もちひろちゃんの事なんか責めないのに……。

どうも、ちひろちゃんは人に迷惑を掛けるのが嫌な性格みたいね。

「私でよければ」とか「ご迷惑じゃなければ」とかよく言ってたっけ……。

それほど、迷惑を掛けるのが嫌な理由でもあるのかしら？

これは私なりの持論だけど、迷惑を掛けるのが嫌な人って、大体悩みごとを押し隠す事が多いのよね……。

以前の私がそうだったから……。

私はもしかしたら、ちひろちゃんもその類じゃないかしら、なんて思ってる……。

たまに垣間見える暗い表情が何故か、いつもの明るい表情よりも鮮明に記憶に残ってる。

特にこの前、楽器を見に行った日に唯ちゃんのお母さんの話をした時の、あの思い詰めた表情……。

ちひろちゃんはすぐに笑って誤魔化してたけど、どうしても気になる……。

「……い、おーい、海衣奈？」

『えー！？何、律ちゃん？』

「どっしたんだ？さっきから話し掛けてるのにボーツとしちゃってさ」

『ごめんね、ちょっと考え事してたから……』

深く考えてたら、律ちゃんの言ってる事がまったく聞こえてなかった……。

「考え事？お菓子の食べ過ぎで体重が増えたとか？」

なんですつてえーっ！っ！

「『^{ちゃん}律！！』」

ゴソッ、ドゴソッ！

「……は……初めて……。海衣奈の……は……効……く……」
ガクッ

漣ちゃんと私の鉄拳が見事炸裂して、机に突っ伏している律ちゃんの頭には、雪ダルマの様なたんこぶが出来上がっていた。

まったくデリカシーがないんだから。自業自得よ！！

「……海衣奈って、そんなキャラだったっけ……？」

漣ちゃんが呆気に取られてる。

『私の母親ね、実は空手の有段者なの。少しかじった程度だけど、教わってたの。これでも一応、力は加減してるわ』

「……そ、そうなんだ……」

「そつだよ、ミーナちゃんは昔ね『ゆ？い？ちゃ？ん？』」

「ふおふえんにゃひゃい、ふおふえんにゃひゃい……」

私の昔をバラしかけた唯ちゃんの頬を、縦横無尽に容赦無く抓りまくった。

「ごめんなさい」と言ってるみたいだから、そろそろ許してあげてください。

「まあまあまあ、それくらいにして、そろそろお茶にしましょう」

ムギちゃんの合図で嵐も止んで、いつものティータイムの場に戻った。

今日は苺のミルフィーユね。

まだ気絶中の律ちゃんに対しては、紅茶とミルフィーユのお供えがされていた。

まあ、そのうち起き上がるからほっときましよう。

「あ、ちいちゃんからメールだ。『アルバイトの件、了解しました。今日も行けなくてごめんなさい』だって」

『そう、分かったわ』

「ちひろは気にしすぎかな。用事がある時は別にいいって言うてるのに……」

『澁ちゃんの言う通りね。ちひろちゃんは人に気を遣う性格みたいだから』

「でも、人への気遣いが出る人ですよ、ちひろちゃんて」

「ムギちゃんの言う通りだよ。ケーキを作ってくれたり、晩ご飯に招待したりしてくれるもん」

『唯ちゃんの褒める基準は食べ物バツカリじゃない』

「だって、凄く美味しいんだもん」

「へえ、そんなに美味いんだ？ちひろの料理って」

いつの間にか復活を遂げた律ちゃんが、ミルフィューを頬張ってる。

『そうよ。将来、店を持てるぐらいの腕を持ってるわね。お世辞抜き』

「うんうん」

「「「そんなにー!？」」」

漣ちゃん、律ちゃん、ムギちゃんが口を揃えて驚いてる。

「へえーっ、そんなに美味しいなら今度一回、食べてみたいな」

「うん……私も食べてみたい」

「ちひろちゃんの料理、是非とも食べてみたいわぁ」

皆、ちひろちゃんの料理の味に興味津津の様子。

ねえ、ちひろちゃん。皆はもうあなたを体験入部の部員と言っよりも、一人の大切な友達として見てくれてるわ。

私の杞憂ならそれでいい……。

もし、何か悩み事があるのなら相談に乗ってあげたい……。

友達だからこそ、頼って欲しい……。

）

）

【SIDE：ちひろ】

『アルバイトの件、了解しました。今日も行けなくてごめんなさい』
唯さんから送られてきたメールに返事を出して、すぐに携帯を制服
のポケットにしまった。

交通量調査かぁ……………。

アルバイトなんて、生まれて初めて。

用事をすませた私は今、家には帰宅せずに【10GIA】まで足を
伸ばしていた。

勿論、目当てはあのスカイブルーのギター。

この何日か、このギターを思い出してはずっとモヤモヤしてた。

このギターを見に来れば、モヤモヤは消えてくれるはず、そう思っ
てた……………。

でも、それは違ってた……………。

この吸い込まれそうなスカイブルーのギターを見れば見るほど、淋しい気持ちになってしまう……。

あの日、エスカレーターに乗って遠ざかるギターを見ながら感じた淋しさとまったく一緒……。

この淋しさの原因は何……？

このギターを買えないから……？

確かに、私にはそんなお金なんて無い。

15万円なんて大金、一介の女子高生が持ち合わせてるはず無いもの……。

アルバイトをすれば、なんとかなるかもしれない……。

でも家事や勉強をしながらバイトだなんて、いくらなんでも時間的にも体力的にも無理がある。

今回の唯さんみたいに、皆さんと一緒にアルバイトをして稼ぐなんて、それこそ無理……！

唯さんが欲しがってるギターの金額を稼ぐだけでも、結構時間が掛

かる。

そこへ私のギターを買う為にアルバイトをして貰ってたら、いつ本当に部活を始められるか分からないもの……。

「ギターが欲しい」って私が言ったら多分、無理してでもアルバイトをする可能性が高い。

唯さんの為に、損得感情抜きでアルバイトをしようとしてる、心優しい皆さんだから……。

私なんかの為に迷惑を掛けたくない……。

あとは、お父さんに頼むしか無い……。

でも、それはもっと無理……。

それは家計を握っている私だから分かる……。

別にお父さんが安月給って訳じゃあ無くて、その理由は私達が住んでる家……。

お父さんとお母さんの夢、それはいずれマイホームを持つ事だった。

でも、それはお母さんの突然の死で叶わなくなってしまった……。

でも今回の引越に際して、お父さんが思い切って今の家を買った。

なんでも、昔お父さんにお世話になった事がある人の伝で、頭金ぐらいの金額で購入出来たみたい。

でも、決して安い買い物じゃあなかったから、預金してあったお金が結構消えた。

それに引越に掛かった費用もあるから、正直ギターを買う余裕なんて無いに等しい……。

親バカで優し過ぎるお父さんの事だから多分、欲しいと言えば無理をしてでも買うと思う。

思う、と言うのはお母さんがいなくなって以来、私がお父さんに何かをねだった事が一度も無いから……。

私の為にお金の面で苦労させていたお父さんに、これ以上何かをねだるのは迷惑が掛かるから……。

私はお母さんを死なせてしまった罪だと受け止めて、甘んじてその罰を受けた。

……でもギターが無ければ、私はいつまで経っても仮入部員のまま……。
皆さんが楽器を演奏している中で、一人お茶をしてるなんて考えられない……。

体験入部だからって、いつまでもお茶を御馳走に来るだけなんて、そんなの絶対に嫌！！

このままギターが買えないければ、軽音部に私の居場所なんて何処にも無くなってしまう……。

置いてけぼりにされてしまう……。

「……あ……」

……そっか、この淋しさの本当の意味が、やっと分かった……。

私はギターが買えない事が淋しい、それだけじゃないんだ……。

皆さんから取り残されて、独りぼっちになる事……。

また一人になってしまう事が、怖くて仕方無かったんだ……。

嫌でも蘇る、お母さんの突然の死から始まった、悪夢というには生ぬるい、あまりにも長すぎた三年間……。

誰にも相談出来ずにいた、苦悩の日々……。

今、私は誰にも相談出来ない状態に再び置かれてる……。

お父さんには、お金の面で苦勞を掛けたくないから話せない……。

でも、それだとギターを買えないで、また独りぼっちになってしま
う……。

買えない理由を説明する為には、私の辛く重い過去を軽音部の皆さ
んに話さなければいけなくなってしまっ……。

そうすれば軽音部どころか、学校内で独りぼっちになる可能性もあ
る……。

以前の私と同じ様に……。

友達だからこそ、相談出来ない……。

大切なお友達だからこそ、友情が壊れるのが怖いから相談出来ない……。

今でも私、独りぼっちだ……。

「あ、あの…、お客様…、どうかされましたか？」

「……え……!？」

ふと気がつくと、店員さんから声を掛けられていた。

その声は、何処かうるたえているように聞こえた。

表情は分からない……。

霞んで見える……。店員さんもギターも何もかも……。

次々と溢れ出てる涙に、今頃ようやく気付いた……。

「あ、すみません…、…何でも……ないんです……失礼しました

「！！」

いたたまれなくなった私は涙を拭いしつつ、駆け足でその場を去った。エスカレーターを走って上り、店を出た私は無我夢中で走っていた。泣いている姿を、色んな人に見られてる事にも気付かないくらいに……。

）
）

何処をどうやって走ったかも、まったく覚えていない。

気がついたら、もう家のすぐ目の前まで来ていた。

家のドアを開けて階段を駆け登り、自分の部屋に入って、ベッドにダイブした。

俯せのまま、私は思い切り泣いた。

このままなら夢のお告げどおりにしかならないんだから……。

“オマエハ、フシアワセデイルノガ、オニアイダ”

……そうだ……、私は幸せになっちゃいけないんだ……。

……そうだよね、お母さん……。

制服のポケットの中で携帯が何回も震えているのにも気付かないまま、私はある決断を胸に秘めていた……。

）

【SIDE：海衣奈】

部活も終わって、といってもバイト探し以外はいつも通りのお茶をしながらのお喋りタイムだったけど……。

もう夕陽が沈みかけた頃、私はようやく家の近くまで帰ってきた。

家の目の前まで来た時、ふと誰かが走ってくる足音が近付いてきた。

その方向にふと視線を向けると、そこには馴染みの顔が見えていた。

『あ、ちひろちゃん』

送信した直後、私はちひろちゃん表情に驚いて動けなくなってしまう……。

……泣いてる……。

大粒の涙をこぼしながら、脇目もふらずに私の側を走り抜けて行くちひろちゃんをただ、黙って見送るしかなかった……。

ちひろちゃんが家に入って、ようやく私はメールを送信しまくっていた。

『ちひろちゃん、一体どうしたの？』

『泣いてたように見えたけど、何かあったの？』

『ちひろちゃん、お願いだからメールをちょうだい』

どんなにメールしても結局、返信は一切送られてはこなかった……。
一体どうしたっていうの……？

やっぱり、何か悩んでるのね。

こんな喋らない私と、ためらいも無く友達になってくれたちひろちゃん。
やん。

喋れない理由も聞かずに、友達でいてくれるちひろちゃん。

そんな心優しいちひろちゃんのアまりにも苦しい泣き顔が、頭の中から離れる事は無かった……。

第9話「友達だからこそ」（後書き）

次回からようやくバイト開始となります。

そして、このバイトでちひろにとっての転換期とも取れる出来事が起きてしまいます……。

ギャグよりもシリアス重視な展開が多くなりますが、どうか御容赦下さい。

それではまた、次話でお会いしましょう。

第10話「素直な気持ち」（前書き）

前回の後書きでバイトが始まると言いましたが、まだ始まりません……。

と言うのも、前回の話の翌日の出来事を挿入しないと話が繋がらなくなってしまうので、急遽変更しました……。

次回からは間違いなくバイトが始まりますので、どうか御容赦下さい……。

それでは第10話、どうぞ御覧下さい。

第10話「素直な気持ち」

昨日の夜から特製のタレに漬け込んでおいた鶏肉に、小麦粉と片栗粉を半々にミックスした粉をまぶして、熱した油の中に入れる。

鶏肉が揚がる心地の良い音が、キッチンに広がっていく。

「ちっひろおーっ、おはよおーっ」

「お、おはよう…、お父さん」

壁掛け時計に目を向けると、もう7時。

スーツ姿のお父さんが、とんでもなくハイテンションで起きて来た。

鶏肉の揚がる音よりも、お父さんの声の方がよく響いてる。

いつもだったら朝は凄く眠そうにしてるのに、今日は超が付くほど元気。

「どうしたの、お父さん？何か良い事でもあったの？」

「当たたり前だろ！！漂ってくる匂いから、今日の弁当は俺の大好きな鶏の唐揚げ入りと分かったからな」

「クスツ、正解」

お父さんは私の作る料理が本当に大好きで、いつも美味しいと絶賛してくれる。

お母さんが亡くなって以来、お父さんが料理をまったくしない人だから、私が料理を作ってる。

お父さんは美味しいと言ってくれるけど、お母さんの味にはまだまだ追いつけていないというのが、今の私の心境……。

いつかは、お母さんの味に追いつきたい。

そして、立派にお母さんの替わりを努めたい……。

「ん、なんだこれ？俺の弁当箱の隣りにある、見事な三段重は？」

お父さんが言っている三段重は、今日アルバイトをする皆さんに食べて貰いたくて作った物。

日頃、色々とお世話になっているお礼がしたかったから。

「……あ、そ、それはね、今日と明日、お友達と出掛けるから、お昼用に作ったの……。」

「友達？」

「う、うん。ほら、唯さんに海衣奈さん。この前、晩ご飯に呼んだでしょ？」

「ああ、あの子達か。明るくて優しく、良い子達だな。友達は大
事にするんだぞ」

「…う、うん……」

ちなみに、お父さんには今日と明日のアルバイトの事は内緒にして
いる……。

ギターの事も勿論、まだ言っていない……。

来るべき時が来たら、ちゃんと伝えたいから今はまだ言わない……。

ギターを買う決心をした事を……。

ギターを諦めていた私に心境の変化が現れたのは、泣いて帰ってき
た翌日の出来事があったからだった……。

）

）

いつもなら楽しい登校も、今日は足取りが重かった……。

結局、海衣奈さんから送られてきた何十件ものメールに返信する事が出来なかった……。
相談なんて出来ない……。

私の我が儘でアルバイトの期間を長くしてしまえば、部活動に支障をきたすのは目に見えているから……。

『ちひろちゃん』

「……………」

海衣奈さんが学校の校門で待ち受けていた……。

凄く気まずい……。

足が竦んで動けない私に海衣奈さんが歩み寄ってきた。

『話があるの、一緒に来てくれる』

「……はい……」

海衣奈さんが私の手を握って、何処かへと誘導してく。

一体、何処へ連れて行かれるんだろう……？

『みんな、連れて来たわよ』

私が連れてこられたのは、音楽準備室。

中では、何故か軽音部の皆さんが私を待ち受けていた。

どうして……？

『ちひろちゃん、ここに座って』

「……あ、はい……」

言われるがままに海衣奈さんが引いた椅子に腰掛ける。

そして私の周りを皆さんが囲むまで、あっという間だった……。

『ちひろちゃん、昨日どうして泣きながら帰ってたの?』

「……………」

言葉が上手く出てこない…………。

「アタシ達全員、海衣奈からメールを貰って、昨日の事を知ったんだ。よかったら理由を話してくれないか?」

田井中さんが部長として先陣を切ってきた。

…………そっか、海衣奈さんが皆さんに知らせたんだ…………。

そっだよね…………、私が逆の立場なら多分、同じ事してるもの…………。

「皆、ちひろの事が心配になって集まったんだ。ちひろが泣きながら走ってて、しかもメールに返事をよこさないから、何か余程の事情があるんじゃないかって…………」

秋山さんが心配そうに私を見つめながら話しかけてくる。

目を合わせるのが辛くて、俯き加減になる…………。

「私達、お節介かもしれないけれど、ちひろちゃんのお役に立てれば、って思ってるの。お友達を放ってなんておけないもの」

琴吹さん、お節介だなんて言わないで下さい…………。

その気持ちは、心に刺さるくらい嬉しいんです…………。

でも、言えば皆さんに余計な迷惑が掛かる……。

話せない……、話せないよぉ……。

「なあ、ちひろ。お願いだから話してくれないか？」

「そんなに言いにくい事なのか？」

田井中さんと秋山さんが黙ったままの私に詰め寄ってくる。

話さない私が責められてる感じがして、言葉を遮る為に両手で耳を塞いでしまう……。

お母さんを失った時と一緒だ……。

周りから罵られ、責め立てられたあの時と……。

ギュッ

「……………え……………？」

思い詰めていたら、誰かが私の手を握り締めてきた……。

その手の暖かさは入学式の日、私が教室で感じた物と一緒に、…うっ
ん、それ以上だった……。

「…ねえ、ちいちゃん。私達は決して、黙っているちいちゃんを責
めている訳じゃないんだよ」

「……………」

「誰にも話せない悩みを抱えて一人で苦しんでる、そんなちいちゃ
んをただ、救ってあげたいだけなんだよ」

唯さんの言葉は、押し黙っている私の心を確実に溶かしてきた……。

責めてるんじゃない……。

救ってあげたい……。

『唯ちゃんの言う通りよ。私達はただ、悩みを聞いてちひろちゃん
の力になりたいだけなの』

海衣奈さんが私の頭を撫でながら、これ以上ない優しい微笑みを投
げ掛けてきた……。

『ちひろちゃん、一人で悩まないで。友達なんだから、もっと私達
を頼っていいのよ』

……もう……、……限界……。

「……ご……ごめんなさい……、……心配かけて……っ……ごめん……な……」

大粒の涙がとめどなく溢れて、止まらない……。

迷惑掛けたくないと思ったら、結局それ以上の迷惑を掛けてしまっ
てた……。

昔と一緒に……、何にも進歩してない……。

海衣奈さんがしゃがみ込んで、ハンカチで涙を拭ってくれた。

でも涙は一向に止まらなかった……。

だって、私が悪いのに優しくしてくれるから辛くて、そして嬉しく
て……。

海衣奈さんが携帯で何か文章を打っているのが音で分かるんだけど、
泣いてる私には携帯を見る事が出来ない……。

「ちひろ、海衣奈が『私こそ、ごめんなさい。また泣かせてしまっ
て』って」

田井中さんが優しい口調で、替わりに読み上げてくれた。

「……ううん、私が悪いの……。海衣奈さんは……。何も……。悪く……」

私が悪いのに、海衣奈さんは自分の非を謝ってくれてる……。

それどころか、嗚咽が止まらない私を抱き締めて、背中を優しく擦
ってくれた……。

「……う……うわあああああん……」

私は声をあげて泣いた……。

迷惑を掛けたくないからこそ、私はいつも一人きりで泣く事が多か
った……。

だからこそ、誰かの前で思い切り泣いたのは、本当に久し振りだっ
た……。

皆さんの暖かい優しさに触れる事が出来たから……。

……もう黙っている事なんて出来ない……。
ただ過去の事は、今はまだ伏せていよう……。
今はギターに関する事で泣いてたんだから……。
いつか、私の口からちゃんと話そう……。
こんな私を受け入れてくれた皆さんを信じて……。

「実は私……」

そして、私は涙ながらに語った……。

実は欲しいギターを見つけていた事。

でも、ギターが高くて買えない事。

引っ越したんかの影響でお金に余裕が無い事。

私のギターの分までアルバイトをすれば、部活を始めるまでに必要な時間が掛かってしまうと思い、迷惑が掛かると言えずにいた事。

ギターが無ければ、私は軽音部の中で独りぼっちになってしまおうと思った事。

皆さんは私の話を遮る事なく、ただ黙って聞いてくれた……。

「そういう事だったんだ……」

田井中さんが話し出して、ようやく皆さんも想いを口にし始めた。

「15万するギターか……。唯のギターと合わせて40万……。確かにアルバイトをしてたら時間が掛かりそうだな……」

「はい……。だから、このままじゃ私の我が儘で迷惑が掛かるから、私……」

少し間を置いて、私は昨日決意していた事を口にした。

「私……、部活を辞めよう」と……」

「『……え……？』」「『……』」

皆さんの表情が一気に曇る……。

そして私は、その言葉の続きを話した……。

「……思ってたんです……。……だけど……」

『……………だけど?』

「辞めてしまえば、皆さんとは埋められない距離が出来てしまう……。そのまま友達でいられたとしても、私の心の中の疎外感はどう膨らんでいく。そんなの絶対に耐えられない……………」

「ちひろは、どうしたい?」

「え?」

秋山さんが核心を突く質問をしてきた。

「ちひろはこのまま軽音部にいたいのか、それとも辞めたいのか、ちひろの素直な気持ちを教えて欲しいんだ」

「素直な……………気持ち……………」

「それはちひろ自身が決める事だから。以前に律も言ったけど私達は、強要なんて一切しない。ちひろの意思を尊重する」

「…わ、私……………私は……………」

皆さんが一斉に私をジッと見つめてくる……………。

私も一人ずつ、皆さんを見回した。

少し天然でドジっ子だけれど、明るくて素直な唯さん。

皆さんのムードメーカーで、いつも私達を笑顔にしてくれる田井中さん。

たまに怖い時もあるけれど、優しくて筋の通っている秋山さん。

お嬢様なのに気さくに私に話しかけてくれて、いつも美味しいお菓子を持ってきてくれる琴吹さん。

そして私の一番最初のお友達。お姉さんの存在で、暖かく包み込んでくれる海衣奈さん。

我が儘かもしれないけれど、私の気持ちは固まった……。

私の本心を伝えよう……。

……。
例え、それが皆さんやお父さんに迷惑を掛ける事になったとしても……。

「知らない町に引っ越してきて、やっと知り合えた大切なお友達だから、その友情を失いたくない……。もつと皆さんと友情を深めたい！！もつともつと皆さんの事が知りたい！！」

席から立ち上がって言葉をまくし立てる私に、皆さんはビックリも

していたけど、しっかりと私を見ていてくれた。

「家の事や勉強に追われるから……、皆さんには結構迷惑を掛けるかもしれないけれど……」

……もう……、涙で皆さんが見えないよあ……。

「私は……皆さんと一緒に……、演奏がしたい……。皆さんと……もっと一緒にいたい……。一緒に……。いさせて……」

泣き崩れる私の身体を、誰かが支えてくれた……。

「それでいいんだな？」

耳元で優しく囁く声は秋山さんのものだった……。

私は溢れ出る涙を拭いながら、黙って一回頷いた……。

「よっしゃあーーーーっ……これでちひろも正式な軽音部のメンバーだあ」

「『やったあーーーーっ……！』」「『』」

田井中さんの声高らかな宣言と共に、皆さんの喜ぶ声が音楽準備室

に響いた。

そして私は皆さんに囲まれて、一斉に抱き付かれた。

「『『『』改めて、軽音部へようこそ！……！……！』』』」

「……皆さん、ありがとう……」

同時に鳴り響いた始業5分前のチャイムが、まるで祝福してくれているみたいに聞こえていた……。

こうして私は仮入部から一転、正式な入部を果たす事になった……。

私のギターに関しては「何とかするから諦めるな」って田井中さんが言っていたけど大丈夫かなあ……。

それに琴吹さんが言っていた「もしもの場合は私に考えがあるから心配しないで」って言ってたけど、どういう意味なんだろう……？

私はお父さんを会社へ見送ると同時に、弁当を持って海衣奈さんの家へと向かった……。

今日は海衣奈さん、唯さんと一緒にアルバイトの現場に行く約束をしていた。

家の前に着くと、チャイム替わりにメールを送った。

『おはようございます、海衣奈さん。迎えに来ました』

すぐさまメールが返ってきた。

『……今、行くわね……』

あれ？文章がなんだか変……。

どうしたんだろうと思っていたら、海衣奈さんが不気味な笑顔で出てきた……。

『……ちひろちゃん……』

『はっ、はひっ……！』

海衣奈さんはツカツカと歩み寄ってくると、おもむろに私の頬を摘んで引っ張り出した……。

「にゃ、にゃにひゅりゅんれふかあ~~~~っ（な、何するんですか

~~~~~」

海衣奈さんは頬を引つ張りながら、器用に携帯メールで私に注意してきた。

『律ちゃんから正式な部員になるにあたってひとつ、注意された事あったでしょ？忘れてないかしら？』

注意……………された事……………。

あつ！！そうだった！？

私はその事を思い出して、さっきの言葉の一部を訂正して言い直した。

「…み……………み……………海衣奈……………“ちゃん”……………」

『はい、よく出来ました。良い子ですねえ~~~~~っ！！』

恥ずかしがっている私頭を撫でまくり、子供扱いする海衣奈…ちやん……………。

おかげでセットした頭は、既にクシャクシャ……………。

「もっつ！…何するの、海衣奈ちゃんは！…」

『だってちひろちゃん、可愛いんだもん』

そう言って逃げ出す海衣奈ちゃんを追っかけながら、私は笑ってた。

これで、本当の友達になれたんだ……。

田井中…ううん、律ちゃんの一言が私を皆との距離を一気に縮めてくれたのを感謝してた。

)  
)

『いいか、ちひろ。正式な部員になったからには、苗字で呼ぶのは禁止！…あと“さん”づけも厳禁！…呼び捨てか、もしくは“ちゃん”づけで呼ぶ事。いいな！…』

『は、はい……律……ちゃん……』

『よろしい……』

第10話「素直な気持ち」（後書き）

こじつけ感もありますが、これでようやく軽音部のメンバーとなった  
たちひろ。

そして、このバイトの直後に起きた出来事から、いよいよちひろの  
過去が次第に明らかになっていきます。

それではまた次回、お会いしましょう。

御感想をお待ちしています。

第11話「アルバイト初日」感謝の気持ち」（前書き）

久しぶりの更新となりました。

今回からアルバイト編突入です。

そして、例によって長めの文章となっています……。

どうかゆっくり御覧下さい。

そして、今回からちひろの話し方を変えています。お友達になったのに、いつまでも敬語のままでも思ったからです。

それではどうぞ、御覧下さい。

## 第11話「アルバイト初日」感謝の気持ち」

……どうしよう……。

唯ちゃんと合流し、海衣奈ちゃんと三人でアルバイトの現場へ向かうなか、私は困惑していた……。

その原因は、唯ちゃんが持っている大きな荷物。

その荷物は、憂ちゃんがアルバイトをしてくれる皆さんの為に作ってくれたお弁当。しかも、かなりの量……。

私が作ったお弁当と足したら、いくら6人でも食べ切れない……。せつかく憂ちゃんが一生懸命作ってくれたお弁当を無駄にしたくないし……。

本当にどうしよう……。……。

集合場所で律ちゃん達と合流し、私達が交通量調査をする場所の担当責任者の女性から簡単な説明を受けた。

掻い摘まんで言えば二人一組で組んで、一時間毎に交代しながら力ウンターで車の数を数える。

時間は朝の9時から夕方の5時までで、正午から一時間の休憩が取れるとの事。

初めてのアルバイトだから、なんだか緊張してるけれど心の何処かで、ちよっぴりワクワクもしていた。

そんな私を尻目に、唯ちゃんと律ちゃんはカウンターを使って連打勝負を繰り広げてるし……。

「うおおおおおおっ!!」

「どりゃあああああっ!!」

現時点では律ちゃんの方に分があるみたい。

カウンターを持ったら何となく連打したくなるのは分かるけど、あまり無理をすると……。

「ぐっ!?!ゆ、指つったぁ……」

「何やってるんだか……」

案の定、律ちゃんの親指は見事につって、澪ちゃんから呆れられていた……。



まずトップバッターは唯ちゃんとムギちゃんの二人。

私を含めた残りの四人は、用意された車の中で待機していた。

このままボーツとしていればあからさまに暇なので、お喋りタイムに突入。

もちろん、その先陣はムードメーカーでもある軽音部の部長が切っていた。

「なあ、アタシこんな雑誌持ってきたんだ」

律ちゃんが一冊の雑誌を取り出して、私達に見せた。

「ん？どう見ても普通の情報雑誌みたいだけど、何か載ってるのか？」

確かに透ちゃんの言う通り、本屋に行けば売っている、地方版タウン誌みたいだけど……。

「確かに一見すれば、ただの雑誌でしかないよな。だが、この雑誌にはこんなページがあるのだあー！」

律ちゃんが「ジャーン！！」とわざわざ効果音を付けて見開いたペ

ージを、皆が一斉に見つめる。

『懸賞の……ページね……』

「そつっ！…この懸賞の目玉とも言えるのが！…」

律ちゃんがページの左下隅を指差した先には……。

「あ、ギターがある……」

「そつ、ちひろの言う通り。なんと、ギターが景品として載ってるんだ！…」

「『『へえ……』』」

そして、用意周到な律ちゃんはさらに一枚のハガキとボールペンを取り出した。

「これに応募する」

「確かにこの方が早そうだな」

「だろお……っ？」

漣ちゃんも賛同して早速ハガキに必要事項を明記し始める律ちゃん。

『けれど、当選者がたったの一人っていうのがネックね……。それ

以前に、当たるかどうか分からないじゃない……』

「高価なものだからしょうがないって。それに応募しないと、確率はゼロのまんまだからな。やれるべき事はやっとなきゃ!」

律ちゃんは思い付いたら即、行動に移す性格みたい。

後悔したくないからこそ、すぐに実行するんだと思う。

ただ、後先考えずに行動して澪ちゃんに突っ込まれる事も多々あるけど……。

普段はふざけたりしているけれど行動力があって、時には皆をまとめるような言動をする時がある。

そこは素直に凄いなと感心するし、尊敬もする。

ボソツ（律ちゃんて、こつ見えても意外と部長向きなのかもしれない……）

「ち？ひ？ろ？」

「ひゃいつ!?!」

「全部丸聞こえだぞ。誰がこつ見えても意外だつてえ？」

「え!?!えつと……、そのお……」

小声で呟いたのに、しっかりと聞こえてたみたい……。

不気味な笑みを浮かべながら、ジト目でこっちを睨みつけてるよお……。

「そういう事を言う奴は、お仕置決定だな」

「はわ！？はわわわ……」

震える私に向かって、律ちゃんはチョップを振り降ろす構えをしていた。

「食らえっ！！」

「はっつ！？」「フルフルフル……」

獲物を狙うような律ちゃんの鋭い目が怖くて、目を瞑りながら身体を震わせてしまう……。

怖いよお……、痛そうだよお……。

「……………」

……あれ？いつまで経っても痛みがこない……？

恐る恐る目を開けてみると、律ちゃんは未だチョップを振り降ろしてない……。

「ちえすとおおおっ！！」

「はっつ！？」フルフルフル……。

その手に再び力が込められて、振り降ろされそうになる……。

暫く待つてみても、また何も無い……。

で、再び目を開けてみると……。

「どおりやああああっ！！」

「ふえっ！？」フルフルフル……。

「ちひろ……、完全にかかわれてるぞ……。」

澪ちゃんの声がするまで、この状態がエンドレスで続いていた……。  
海衣奈ちゃんは、また携帯でこの状況を押さえてる……。

それよりも早く助けて欲しかったなあ……。

『ちひろちゃんの可愛い姿をバッチリ撮らせてもらったわ、動画でね』

「ど、動画！？」

動画だなんて、制止画よりも百倍恥ずかしいよあ……。

あの恥ずかしい姿を幾度となく再生されてしまうのを考えただけで、この場から逃げ出したくなる……。

顔が真っ赤になっていくのが私自身、よく分かった……。

「アハハハ、アタシがちひろを叩いたりする訳ないじゃん。ていうよりは、あんなに怖がってちゃあ、可哀相で叩けないんだよな」

『まあ、あのままチヨップを振り降ろしてたらどうなってたか、…分かってるわよね？』

「!!!!!!!!!!」

律ちゃんが頭のとっぺんを押さえながら、驚愕の表情を浮かべてる……。

「ゴメンなさい……、ごめんナサイ……、ごメンなさい……」ブルブル……

不自然に片言なごめんなさいを繰り返し、尋常じゃないくらいに身体を震わせてる……。

「私に殴られても平気な律が完全にトラウマになってる……」

「トラウマ？何の事ですか？」

『さあ、何の事かしらねえ？』

私は訳が分からず、ただ頭の上にたくさんの？マークを並べるだけだった……。

）  
）

「ふいっつ、終わったあ……」

「ただいま」

「『『』お疲れ様』」

長いような、あっという間の一時間が過ぎて、唯ちゃんとムギちゃんが車の中に戻ってきた。

「よっしゃ、それじゃ行こっか、漣」

「ああ、それじゃ皆、行ってくるから」

「『『』』いつてらっしやい『』」

入れ替わりに律ちゃんと漣ちゃんが出ていった。

そして、私はトートバックの中から一本の水筒を取り出した。

「唯ちゃんもムギちゃんもお疲れ様。」「はい、これどうぞ。」「

「これって何?」

「疲れを取る為にと思って、蜂蜜たっぷりのホットレモネードを作ってきたの」

「わあ! ! ありがとう、ちいちゃん」

「じゃあ、遠慮なく頂くわね」

『私もいいかしら?』

「はい、どうぞ」

水筒に付いているカップと、家から持ってきた紙コップに琥珀色のレモネードを注ぐと、甘い香りと湯気が辺りに立ち込める。

「うわあ、美味しい……」

『本当、甘くて美味しい』

「甘いのは勿論だけど、とても優しい味。疲れが一気に飛んでいくわ」



皆、一様にほんわかとした表情でホットレモネードを飲んでいる。

気に入ってもらえたみたいで良かった……。

「この優しい味はちひろちゃんの優しさ、そのものね」

「……………、ええええっ!？」

ムギちゃんが突然、恥ずかしい事を笑顔でためらいも無く言うから、何を言ったのか理解するまでに時間が掛かっちゃった……。

「おお、ちいちゃんの顔が今までで一番の真っ赤だあ」

『まるで茹でダコね』

「私……………、何か変な事言ったかしら？」

言った本人に、羞恥心も罪悪感もないから堪らない……………。

ムギちゃんは無垢な性格だから、素直に言葉が出てくるんだと思う。

ムギちゃんみみたいな綺麗な人から、優しいだなんて言われちゃった……………。

一人真っ赤になってる事自体が恥ずかしくなってきた、さっき以上に顔が真っ赤になって一気に熱を帯びていく……………。

シューーーーーーッ……

「は……はうあ……」「トサッ

』ち、ちひろちゃん!?!」

「た、大変!?!ちひろちゃんが真っ赤な顔して倒れたわ。救急車呼んだ方がいいのかしら?」

『あ、ううん……、その必要は無いと思うわよ……』

「……え、そうなの……?」

「ムギちゃん、これはちいちゃんの体質だから仕方が無いんだよ」

「……そ、そうなの?」

私は倒れ込んで、海衣奈ちゃんの胸の中で抱き締められていた。

頭から煙を吹き出しながら、私は不謹慎な事を考えてた……。

……海衣奈ちゃんて、胸が大きい……。

）

）

律ちゃんと澪ちゃんが戻ってきて、遂に私と海衣奈ちゃんの番。

ホットレモネードの入った水筒を律ちゃん達に渡して、日除けの帽子を被った私は車の外に出た。

車の中にずっといたせいか、外が眩しく見える。

折り畳み椅子の上に置かれているカウンターを持ち上げて椅子に座り、いよいよ交通量調査開始。

カチツ、カチカチツ、カチカチカチカチ……

今の時刻は11時を少し過ぎたところ。

土曜日のお昼前という事もあってか、交通量も次第に増えてきていた。

ひっきりなしに通る車に、カウンターを押す親指は一向に止まらな  
い……。

始めてからまだ10分しか経ってないのに、早くも指が疲れてきた  
……。

これだと海衣奈ちゃんも大変だろうなあ……。

カカカカカカカカカカ……

「……………うわぁ……………」

海衣奈ちゃん、カウンターを押す速度が凄く早い……………。

かなりの交通量にもかかわらず、確実に数字を刻んでる。

「……………あの……………、海衣奈ちゃん？」

『ん、何？』

……って、左手でカウンター押しながら、右手で携帯のボタンをブラインドタッチしてる……！

左手と右手で違う動きを一度にするのは、凄く難しいのに……………。

既に神の領域です……………。

「海衣奈ちゃんて、このアルバイトした事あるの？」

『うづん、このバイトは今日が初めてよ』

「……………それにしては手慣れたる気が……………」

『ああ、それはそうよ。いつもコレで鍛えてるから』

そう言っつて、海衣奈ちゃんは右手の携帯をちらつかせた。

…そっかあ、納得……。

『あ、それはそうとちひろちゃん、お父さんにギターの事は伝えたの？』

「…ううん、まだ…」

『…そう……。ちひろちゃんのお父さん、見た目凄く優しそうだから、頼み事を聞いてくれそうな感じがするんだけど……。でも、経済的にキツいって言ってたわよね』

「うん……。お父さん、優し過ぎる位に優しいから、多分言えば買ってくれると思う。かなり無理をしても……。」

『それがちひろちゃんにとっては辛いと……』

「……うん……。」

昔、私のたったひとつの我が儘の為に、お父さんとお母さんがどれだけ苦労したのか知ってる……。

お金を節約して切り詰めて、好きな物を我慢して……。

お父さんに再びそんな苦労をさせてまで買って、正直嬉しくはないから……。

『まあ、バイトで稼いで買えばお父さんも文句は無いでしょ？事後承認で形になっちゃうけど』

「うん、多分それなら……」

『さあ、それじゃバイトを頑張りましょ』

「うんっ」

多分、というのはお母さんに対しての罪があるから……。

一生掛かっても消えない、許されない罪が……。

いつも優しいお父さんだけど、心の中では許してくれてないのかも……、なんて想像してしまう……。

もし、“あの事”を言ったら、いくらお父さんでも許してはくれない……。

絶対に許されない事をしたんだから……。

…あ、いけない、カウンターを押す手が止まってた……。

お給料を貰うんだから、ちゃんとアルバイトをこなさなきゃ。

気持ちを切り替えて、カウンターで数を刻む事に集中した。

）  
）

私達の受け持ち時間も終了して、ようやくお昼の休憩時間になった。

近くにある公園の芝生の上にピクニックシートを広げると、唯ちゃんが憂ちゃんお手製のお弁当を披露した。

「『『『『うわぁー！』』』』」

一口サンドイッチにエビフライ等の洋食仕立てのお弁当。

見た目も鮮やかで、改めて憂ちゃんの腕の良さを認識した。

「うん、美味しい！これなら幾らでも入るな」

「サンドイッチも一口サイズで食べ易いし、味も言う事なし。……  
って律、食べ過ぎだろ！！私達に分、ちゃんと残せ！！」

「本当、美味しいわ。これって唯ちゃんが作ったの？」

『ムギちゃん、それは唯ちゃんの妹さんが作ってくれたの。姉の為

にバイトをしてくれる皆さんにっつて』

「ちよいとお待ちよ、ミーナちゃん!! 私だって、ちゃんと手伝わんだよ!! このエビフライ」

『え!?! そうなの?』

「.....を弁当箱に詰めました」

『.....そう.....、それは凄いわね.....』

「.....でしょでしょ!?!...」

.....唯ちゃん、褒められてない事に気付いてほしいな.....。

.....とっころでございよう.....、私のお弁当.....。

もう結構食べてるみたいだから無理だよね.....。ほとんど律ちゃんと唯ちゃんだけで食べてはいるけど.....。

「ちいちゃん、あのレモネード、まだ残ってる? 飲みたいんだけど」

「うん、まだ残ってる」



私はトートバックに手を伸ばした。

「ちいちゃんのバック、結構大きいよね。何が入ってるの？」

「え！？こ、これは……その……」

唯ちゃんの質問に、つい言葉の切れが悪くなってしまう。

それを見逃さなかった律ちゃんが、急に立ち上がった。

「なんか怪しい……」

「え？……う、ううん……、な、なんでもないの……」

「ほほう……、まだしらを切るつもりか……。とりやつ！！」

「キャッ！？」

背後に回り込んだ律ちゃんが、私に抱き付いて身動きを取れなくした。

「唯、今だ！！そのバックの中身を調べるんだ！！」

「了解しました、律ちゃん隊長！！」

「だ、だめえ……っ……」

私の願いも虚しく、ノリノリの唯ちゃんはバックからアレを取り出した。

「……これって……お弁当？」

「……あ……」

唯ちゃんが持っている三段重のお弁当に、皆の視線が嫌が応でも集まる……。

「へ、お弁当？ちひろ、なんでさっき、出さなかったんだ？」

「……だって、せっかく唯ちゃんのお弁当があるのに、私のも出したら食べ切れないと思って……」

なんだかバツが悪くて、皆から顔を逸らしてしまう……。

「バツカだなあ！！そんな事気にする事無いのに」

「……う、うめんなさい……」

律ちゃんが呆れた声で私を一喝する。

私はただ、謝るしか出来なかった……。

今となってはさすがにもう皆、お腹一杯だよ……。

「よーし、ちひろのお手製弁当ゲットしたぞ！ー今から皆で食おうぜ」

律ちゃんがお重を高々と掲げて、無謀とも思える完食宣言を告げた。

「え！？だつて今、食べたばかり……」

「大丈夫だよ。美味しい物は別腹って言うもん」

…唯ちゃん、お弁当の別腹がお弁当っていうのは聞いた事が無いよお……。

「まあ、律と唯が弁当のほとんどを食べちゃって、他の皆はあまり食べられなかったからな。私達は全然大丈夫だよ。…ただ、律と唯はまだ食う気満々みたいだな……」

二人の食い気に呆れるだけの漑ちゃんだけど、まだ食べれる余裕はあるみたい。

「わあ！！噂のちひろちゃんの手料理が食べられるなんて」

「……え？ムギちゃん、噂って……」

「海衣奈ちゃんが言ったの。ちひろちゃんの料理は店を出せる位の味だつて」

「え！？そ、そんな大それた味じゃないですう……」

海衣奈ちゃん、何一気にハードルを上げてるのぉ！？

最高の褒め言葉だけど、それは幾ら何でも褒め過ぎだよ……。

『ちひろちゃん、自信持って。味にうるさい憂ちゃんや和ちゃんが絶賛したんだから、御墨付きと言っても過言じゃないわよ』

私の心を見抜いたかの様なメールを送ってきた海衣奈ちゃん。

それはそうかもしれないけど、やっぱり食べて貰うまでは不安だよ……。

「……うわぁー……っ!!」

三段重には、炊き込み御飯のおにぎりや太巻き、お父さんにも作った唐揚げや卵焼きなんかを入れていた。

憂ちゃんのお弁当に比べたら、若干地味なのは否めない……。

「それじゃあ、いつたきまーす」

「……いただきます」

皆の手や箸が一斉に料理に伸びていき、私はその様子を固唾を飲んで見守るしか無かった……。

この感覚は、お父さんに初めて料理を作って以来かも……。

私の料理を初めて食べる、三人に視線を注ぐ。

律ちゃんは唐揚げを、澪ちゃんは炊き込み御飯のおにぎりを、ムギちゃんは出汁巻き卵をそれぞれ口にした。

「……………」

「……………」

「……………」

どうなんだろう……。

皆、口に入れた途端、何も喋らなくなっちゃった……。

……………怖い……………、この間が怖くて身が保たない……………。

「……………う……………、美味あ……………い……………い……………！」

「本当だ！！凄く美味しいな、これ」

「わあ！！海衣奈ちゃんの言う通りだね。美味しい……………！」

私の料理を初めて食べる律ちゃん、澪ちゃん、ムギちゃんが揃って絶賛してくれてる。

「この一見普通そうな唐揚げだけど外はカリッと、中は凄くジューシーで、肉汁が口の中いっぱい広がってく！！味付けも最高だ！！」

「この炊き込み御飯のおにぎりも、パサパサせずにシットリとして、味付けも薄過ぎず濃過ぎずで絶妙だ」

「卵焼きは出汁巻きになってて、フンワリとした卵焼きを口に含むと、上品なお出汁の味が後から広がっていくわ」

まるでグルメ漫画を思わせる様な、称賛のセリフの嵐。

取り敢えず、味は気に入ってもらえたみたいで良かったあ……。

「ちいちゃん、今日のも凄く美味しいよ。顎が外れそうだよ」

『…唯ちゃん…、それを言うなら「ホッペが落ちそう」なんじゃないの……』

「うんうん、そうとも言うね」

『…あのね、そうともじゃないから……』

お友達になったとはいえ、まだ唯ちゃんの事に関して分からない事が多い……。

幼馴染みの海衣奈ちゃんも、もしかしたら今でも、そうなのかもし

れない……。

「……御馳走様でした」「……」

「お粗末様でした」

私の心配は杞憂だったみたいで、憂ちゃんと私の弁当は見事に完食。皆はお腹が一杯に、私は胸が一杯になっていた。

お父さん以外の誰かに料理を作って美味しいと言われる事が、こんなに嬉しいものだと思わなかった。

これだけたくさん満足した表情を見るのは、初めて……。

「はあ~~~~っ、食った食ったあ~~~~っ」

満面の笑みを浮かべた律ちゃんが、シートの上で寝転んだ。

「律、食べてすぐ寝転がると牛になるって言っただろ」

「大丈夫だって。遷は本当に牛になった奴、見た事あるか？」

「……無いけど……」

「だろ。澪も寝転んでみなよ。空が綺麗だぞ〜」

「……うん、そうする……」

晴れた空を一旦見上げて、澪ちゃんも一緒に寝転がった。

私は唯ちゃんや海衣奈ちゃんと一緒に、ムギちゃんが持ってきてくれた高級なクッキーをいただいていた。

「それにしてもこんな毎日、高そうなお菓子貰ってばかりでいいのかなぁ？」

『いいだけ食べてから言わないの!』

「いいのよ。いつも色んな方から頂くんだけど、置いておいても余らせてしまうから……」

「『あ、余らせる……』」

これだけ美味しくて高級なお菓子が、余りものになるなんて……。

勿体ないからと持ってきてくれるムギちゃんは、いわばエコな女の子。

いつも美味しいお菓子、御馳走様です。



『…………ん？』

「どうしたの？海衣奈ちゃん」

『律ちゃんと澪ちゃん、もしかして流れる雲を数えてる？』

…あ、本当…。雲が流れる度に指をカチカチさせてる……。

『もう、立派な職業病ね』

「クスッ、そうですね」

そして休憩も終わり、私達は再びカウンターを押しまくっていた。

）  
）

あっという間に時は流れて、もう夕方の5時。

アルバイトの一日目が無事に終了した。

皆、帰り方が違うので、最後に近くにあるバス停に集合していた。

私と唯ちゃんと海衣奈ちゃんは歩いて、律ちゃんと澪ちゃんはバスで、ムギちゃんは駅から電車で帰宅する。

「それじゃあ明日も」

「美味しいお菓子よろしく」

「……頑張りましょって言おうとしたんだけど……」

ムギちゃんという言葉に水を刺してしまった唯ちゃんに、皆して苦笑い……。

「コラコラ」

律ちゃんが喝を入れてる。

「だって余ってるなら……」

「コラコラ、コラコラコラコラコラ……」

唯ちゃんも、しっかりとコラの回数を数えてる……。

つて、私もつい数えてた!!

『私もね……』

海衣奈ちゃんも……。

これで全員、職業病に認定されちゃった……。

「『それじゃあ、また明日』」

「『また明日』」

律ちゃん、澪ちゃん、ムギちゃんに別れを告げて、私達は家の方へと歩き始めた。

『ちひろちゃん、初めてのバイト、どうだった？』

「とっても、楽しかった……」

『そう。唯ちゃんはとうだった……って、あれ？』

「え？」

唯ちゃんがいない……。

後ろを振り返ると、唯ちゃんが律ちゃん達の方を向いて立っていた。

「みんなあー……っ!!」

その声に律ちゃん達が反応して、一斉に唯ちゃんの方を見る。

「本当にありがとねえ……っ!!私、ギター買ったなら、毎日練習するからねえ……っ!!」

皆に素直な気持ちで感謝の言葉を叫んだ唯ちゃん。

…私も伝えたい…、今まで言えなかった、感謝の言葉……。

乗っかるみたいで恥ずかしいけれど、思い切って叫んだ。

「…………私もおー……っ！！みんな、本当にありがとうおー……  
ーっ！！私、皆とお友達になれて、本当に良かったあー……っ  
！！ギターが買えたら、皆と一緒に演奏出来るように、いっぱい練  
習するからねえー……っ！！」

久し振りに大きい声を出したから、息が切れた……。

律ちゃん達を見ると、こそばゆいのか頬を掻いていた。

そして私達に手を振ってくれた。

私も唯ちゃんも、一生懸命振り返した。

『なんだか熱いところ申し訳ないんだけど、他の人達がジロジロみ  
てるから、その辺で……』

「…………あ…………」

「ちいちゃんの顔が赤いのは夕陽のせい？それとも……？」

「ゆ、夕陽のせいですう……」

『そついつ事にしておきましょつ』

「そつだね」

家に着くまで、なかなか顔のほてりが冷める事は無かった……。

第11話「アルバイト初日」感謝の気持ち」（後書き）

いよいよ次回から急展開……。

ある出来事から、ちひろちゃんの過去が明らかになります。

シリアス度が一層増して、重い内容になります。

まだ、アニメの第2話を終わらせるまで時間が掛かりますが、よろしくお願ひ致します。

それでは次回、またお会いしましょう。

第12話「アルバイト二日目」緊急事態！〜」（前書き）

ようやく更新できました。

今回は展開の関係で前半がちひろ視点、後半が海衣奈視点になっています。

今回から原作とは大きく展開が異なってくるので、苦手な方は御容赦ください。

それでは第12話をどうぞ、御覧ください。





「ちひろおおおおっ！！」バンツ！！

「お、お父さんっ！？」

勢いよく部屋のドアが開いたと思ったら、お父さんが血相を変えて入ってきた。

そっか…、お父さんが一階から階段を駆け上がって、廊下を走ってくる振動が凄まじくて響いたんだ……。

「どうした、ちひろ？泥棒でも入ってきたのか！？それとも、ちひろのあまりの可愛さに夜這いを仕掛けてきた不届き者でも現れたか！？」

真夜中に悲鳴をあげれば、誰でもそういう想像をしまっよね……。

でも、いくらなんでも夜這いなんてあるわけないよお……。

「ち、違うの、お父さん……」

「……え……違うっ？」

「……ちよつと……怖い夢……、見ただけだから……」

その言葉を聞いた途端に緊張の糸が緩んだのか、お父さんは床へ

たりこんでしまった。

「夢か……、良かったあ……」

「ごめんね、お父さん……、心配させて……」

「悪いのはちひろじゃないんだ。ちひろを怯えさせた夢が悪いんだ。クソッ、夢の中に行く事が出来れば、ちひろを怯えさせてる相手をぶちのめすのに」

お父さんが床を叩いて悔しがってる……。

まさかその相手がお母さんだなんて、予想だにしていなと思う……。

「よし、ちひろがきつちり寝付くまで、俺が側にいてやる」

「ふえっ！？そんな、かえって眠れないよお……」

「大丈夫だ。何なら本でも読んでやろうか？子守歌でもいいぞ」

「そんな、いいよお……」

今時、そんな事してもらおう高校生なんている訳ないよお……。

携帯で時間を見ると丑三つどきの午前2時。

このままだと埒が明かないので、お父さんを安心させないと……。

「もう大丈夫だから、お父さんも早く寝て。明日は休日出勤なんですよ？お父さんも私も早起きしなくちゃいけないし」

「……でも……」

「大丈夫。もし何かあったら、大好きなお父さんを携帯で真っ先に呼ぶから」

「よし、分かった。明日も早いし、寝るとするか」

“大好き”というフレーズは、お父さんには効果覲面みたい。

もちろん、お父さんの事が本当に好きだから使ってる訳で、ただ場を収めたいから言ってるんじゃないの。

お父さんも、それは分かってるみたい。

「何かあったらすぐ呼べよ。俺は24時間いつでも、ちひろの事を見ているからな」

第三者の人が聞いたらストーカーと勘違いしかねない言葉を残してお父さんは私の部屋を去っていった。

お父さんは本当に私の事を怒らない。

まして、叩いた事なんて一度も無い……。

「この可愛い顔を叩く!? 頭を殴る!? そんな悪魔も畏怖するような非人道的な事、俺に出来る訳ないだろおおおおおっ!」

前に私がいけない事をして「私を叩いて」って言ったら、この言葉と共に泣き崩れたのを今でも覚えてる……。

お父さんは悲しくなるぐらいに優し過ぎる……。

でも“あの事”を言えば、いくらお父さんでも許してはくれない……。

叩かれるどころか、下手をすれば親子の縁だって切られるかもしれない……。

お母さんが亡くなってから抱え込んできたこの罪は、それだけ非人道的なものだから……。

寝るとまた、あの悪夢をみるかもしれないと思ったら、なかなか寝付けずに朝を迎えてしまった……。

）

）

「皆さん、二日間お疲れ様」

「…………お世話になりました」「」

二日目の夕方。無事にアルバイトを終えた私達は担当の女性の方から、それぞれお給料の入った封筒を受け取った。

それを律ちゃんがひとつにまとめて、唯ちゃんに手渡した。

「一日8千円、二日間で1万6千円。6人で合計、9万6千円かあ…………」

「私が前借りした5万円と、唯ちゃんが前借りした5万円を足して19万6千円……。まだ唯ちゃんのギターを買うには足りない…………。」

ムギちゃんも前借りしてたんだ。

皆、友達の為に自分を犠牲にしてもバイトをして、ムギちゃんに至っては前借りまでして楽器を買おうと必死になっていた。

誰かの為にここまで出来るお友達なんて、そうはいないと思う…………。

ううん、いなかった…………。

「…………あ!？」

「どうしたんだ、ムギ？」

「澪ちゃん、あのね……………」

ムギちゃんが突然ひらめいた顔をして、声を掛けてきた澪ちゃんに何か耳打ちしてる……………。

「ああ、そうか！ー！確かにな」

「どうしたんだ？澪とムギだけ何か分かった様な顔してさ。アタシ達にも教えてくれよ」

「そうね、律ちゃんにも教えなきゃ。あと唯ちゃんと海衣奈ちゃんもね」

律ちゃんと唯ちゃん、海衣奈ちゃんもムギちゃんに近付いていく。

私も近付いてみる。

「ちひろちゃんは、そのまま待機でお願い」

「え！？……………う、うん……………」

ムギちゃんの制止を受けて私は一人、待ちぼうけ……………。

どうして私だけ……………。

「それはそうだな、気がつかなかったなあ！！でも、ムギはそれでいいのか？」

「うん、私は全然大丈夫よ。海衣奈ちゃんと唯ちゃんはどうかしら？」

「うん、私もそれでいいよ」

……コクン……。

「じゃあ、満場一致とで決定ね。ちひろちゃん、お待たせ。こっちに来て」

「うん……うん……」

ようやく輪の中に加われると思って、いそいそと歩み寄った、次の瞬間……。

「『はい、これ』」

「……え……」

何か起きたのか判断するまで、少し時間が掛かった……。

皆が私に向かって、お給料の入った封筒を差し出してた……。

受け取ったのはいいものの、訳が分からずにポカンとしている私に、ムギちゃんが事の次第を説明し始めた。

「ちひろちゃん、これまでの私達の全員のお給料、全部で9万6千円でしょ？」

「……………うん、うん……………」

まだ要領を得ない私の目の前で、ムギちゃんが更に封筒を一つ取り出した。

「これ、私が前借りした5万円なの。これを足せば14万8千円になるの」

「……………うん……………」

「かあ……………っ！！まだ分かんないかなあ、ちひろは？」

「えー！？えーと……………」

律ちゃんがけしかけてくるけど、まだ意味が分からない……………。

まだ唯ちゃんのギターを買うには10万円足りないのは分かってるけど……………。



くピロリン

そこへ海衣奈ちゃんから、メールが届いた。

『ちひろちゃん、ちひろちゃんが欲しがってるギターって幾らだったっけ？』

「…………え？…………確か、15万円…………。…………あっ!？」

私は想像もしてなかった答えに、ようやく辿り着いた。

「やっと分かったみたいね。そう、あと2千円足せば、ちひろちゃんが欲しがってたギターが手に入るの」

「そこは自己負担になるけど、全然大丈夫だろ？」

ムギちゃんと律ちゃんの説明も上の空…………。

私は唯ちゃんのギターを買うのが先だという思い込みから、私のギターの事なんてまったく考えてなかった…………。

「でも、これじゃあ唯ちゃんとムギちゃんが…………」

皆のお給料の犠牲だけじゃなくて、更に二つの自己犠牲が伴っている。

一つは、ムギちゃんの5万円の前借りの上乘せ。

そして、もう一つ。

「唯ちゃんはいいの？あんなにギターを欲しがってたのに…。私なんかが先に買っちゃってもいいの……？」

唯ちゃんが置いてけぼりになってしまふ事を危惧した私は、唯ちゃんに真意を尋ねてみた。

「私はいいよ。せつかく買える金額になってるんだから、まず唯ちゃんが買うべきだよ」

「で、でも…それじゃ唯ちゃんが……」

まだ躊躇している私に、唯ちゃんは屈託の無い笑顔でこう言った……。

「ちいちゃんがギターを買えて喜ぶ姿を想像したら、なんだか自分の事のように嬉しく感じるんだ」

「……唯ちゃん……」

私と誰かが欲しい物や目的が一緒の場合、大体は私は一歩下がって

相手に譲る。

傍から見れば、損をする性格と思われるかもしれない。

でも、それで誰かが幸せなら、それが私にとって細やかな幸せになる。

唯ちゃんも一緒なんだ……。

……うつん、唯ちゃんだけじゃない……。ここにいる皆、同じ考えなんだ……。

「私も後からギター買うから、気にしないでいいんだよ。私が買ったら一緒にたーくさん練習しようね」

「……唯……ちゃん……」

もうこれで何回目なのかも忘れた……。

また私の視界が滲んで、見えなくなってしまう……。

私の涙腺はどうしてこう、あまりにも脆いんだろう……。

ここ最近泣いてばかりだから、制御が効かなくなってるのかもしれない……。

「ちいちゃんて、結構泣き虫さんなんだね」

「……グスッ……だつてえ……」

押さえようとしても、一度溢れた涙を止めるのって無理……。

暖かい優しさに触れると、尚更その量が増えてしまっただけだもの……。  
……。  
今までは、ほとんど悲しみの涙しか流さなかった……。嬉し涙なんて、いつ以来だろう……。

「よし、それじゃあ明日早速、ちひろのギターを買いに行くぞ」

「『『『おーーーっ！』『』『』『』」

「……皆……、本当に……ありがとう……」

「『『『『』』』』どう致しまして『』『』『』『』」

とめどなく流れる涙を、皆が一斉に出したハンカチで拭ってくれた。

涙がようやく収まったところで、私は皆に精一杯の笑顔を見せた。

涙でクシャクシャな笑顔に、皆は最高の笑顔で応えてくれた……。

）  
）

私と唯ちゃん、海衣奈ちゃんは律ちゃん達と別れて、家への道を並んで歩いていただけ……。

なんだか頭がふらつく……。

足下もなんだかおぼつかない感じがする……。

『どうしたの、ちひろちゃん？なんだか顔色が優れないみたいだけど……』

「大丈夫？ちいちゃん」

「……うん……。ちょっと慣れないアルバイトで疲れたのかも……」

年中家事をしている私だから、これくらいの事で疲れるはず無いのに……。

一体、どうしたんだらう……？

「ミーナちゃん、この道沿いにベンチがあるから、そこでちいちゃんを休ませてあげようよ」

『その方がいいわね。ちひろちゃん、もう少しだから頑張って』

海衣奈ちゃんが肩を貸してくれて、どうにかベンチまで辿り着いた。

「ミーナちゃん、私何か冷たい飲み物買ってくるよ」

『そうね、お願いするわ』

「……ごめんなさい……、迷惑……かけちゃって……」

『気にしないで。膝、貸してあげるから横になって』

「……うん……、ありがとう……」

いつもなら迷惑が掛かると思って断るんだけど、今はそれも言わ  
られる状況じゃないみたい……。

かえって迷惑をかけてしまいそうなので、お言葉に甘えて膝枕をさ  
せてもらう事にした。

そして、そっと目を閉じた……。

人通りのほとんど無い道で、静かなのが気分の優れない私には助か  
った。

余計な音があると、ゆっくり休む事も出来ないから……。

横になると楽になるかと思っただけ、まだ頭のふらつきは収まらな  
い……。

たまに身体の平衡感覚がおかしくなり、地面が傾くような錯覚に陥  
ってしまっ……。

「ちいちゃん、飲み物買ってきたよ。飲む？」

「……………」

「無理……みただね……」

いよいよ、言葉を返す余裕も無くなってきたみたい……。

どうなっちゃうんだろう、私……？

(シアワセニ…ナルナ……)

……………え!?

(オマエガ…シアワセニ…ナルナ…ゼツタイニ…ユルサナイ…  
…)

頭の中での声がエコーをつけて響き渡る……。

今確かに横になってはいるけれど、寝てはいないし意識もハッキリ  
としてるのにどうして……？

(オマエガ…シタコトヲ…ワスレタトハ…イワセナイ…)

……いや……、やめて……。

(オマエガ…ヨケイナコトヲ…シタカラ…、ワタシハ…シンダンダ…)

……あれは……、お母さんやお父さんへのお礼のつもりだったの…  
…。

まさかあんな事になるなんて、思ってもみなかったから……。

(オマエハ…シヨセン…アノチチオヤノ…コドモナンド…)

……お願い……、やめて……。もうやめて……。

(ワタシハ…イツシヨウ…ウカバレルコトハ…ナイ…)

まだお母さんは私の事……怨んでるの……？

(ウランデル…イツシヨウ…ウラミツツケル…)

……ごめんなさい……。本当に……ごめんなさい……。

謝ったって許してもらえないのは分かってるけど……。

(ユルスモノカ…ゼツタイニ…ユルサナイ…。コノ…ヒトゴロシメ…)

……いや、もう言わないで……。



(「トトロシ…トトロシ…トトロシ…トトロシ…トトロシ…」)

「いやあああああつー!」

「ちいちゃん!?!」

「お願いだから許してええええええええつー!」

地面に転がり落ちるのが私自身分かった……。

頭が真っ白になって、その白い景色もやがて、深い闇に染まっていく……。

「……私、幸せになっちゃ……いけなかつたんだね……」

幸せになるうとしたから、お母さんが私を戒めてるんだ……。

そっだよな……、お母さんを不幸にした私が幸せになるなんて……、どうかしてたんだよね……。

「……じめんなさい……お母……さん……」

）  
）

【SIDE：海衣奈】

「ミーナちゃん、ちいちゃんの様子が変だよ……」

『ちひろちゃん、ちひろちゃん、どうしたの？』

間もなく、ちひろちゃんが頭を抱えて苦しみ始めた……。

息遣いもなんだか荒くなってきてるみたいだし……。

心配になって声を掛けてみても、まったく応えてくれる気配が無い……。

ブツブツと何か呟いているみたいだけど、よく聞き取れない。

「いやあああああつー!」

突然、ちひろちゃんの悲鳴が静寂を切り裂く。

ベンチから転がり落ちて、地面をのた打ち回り始めた……。

「ちいちゃん!？」

『どうしたの、ちひろちゃん!？しっかりして』

ちひろちゃんの暴れる身体を抱き締めて、なんとか落ち着かせるだけに精一杯……。

「お願いだから許してええええええええつ!!」

許して? 一体何を許してって言いたいのか?

そう言いたいけど、言葉に出来ない……。

こんな時にとっても自分自身が、とてももどかしく感じる……。

そして急にちひろちゃんの身体から力が抜けて、頭がうなだれるのが分かった。

頭を支えてあげながら顔を覗き込むと、その生気を失った瞳からは、一筋の涙が流れていた……。

そして、ギリギリ聞こえるかどうかの言葉を口にしていたから、その言葉を拾うのに集中して耳を傾ける。

「……私……、幸せになっちゃ……いけなかったんだね……」

あまりにも意味深な言葉で、その真意は分からない……。

「ちいちゃん、ちいちゃん、しっかりしてよ、ちいちゃん!」

唯ちゃんが涙目で手を握ると、ちひろちゃんがか弱い力でその手を握り返した。

そして、ちひろちゃんは唯ちゃんの方を見ながら、こう呟いた……。

「……ごめんなさい……お母……さん……」

その言葉を言い切ると同時に、身体がグッタリとなってしまった……。

「ちいちゃん、ちいちゃんてば、しっかりして、ちいちゃん!」

唯ちゃんが必死で呼び掛けながら身体を揺すってみても、ただちひろちゃんの身体が無作為に揺れるだけ……。

これは、気絶したあの時とは事情が違うみたい……。

……どうしたらいいの？

こんな時、一体どうしたらいいの、私……？

緊急を要する事態だから、こういつ時こそ冷静に対処しないと……。

「……じゅじゅ……どうしよう……ちいちゃんが……ちいちゃんがあ……」

半泣きになってる唯ちゃんの肩を掴んで、今するべき事を諭した。

「落ち着いて、唯ちゃん！泣きたい気持ちはよく分かるわ。けど、泣いてたってちひろちゃんは救えないの。唯ちゃんだってちひろちゃんを助けたいでしょ？」

「……う、うん……」

『それじゃあ、まずは救急車を呼んで。症状説明は私が携帯に文字』

を打って見せてあげるから、その通りに喋って。大丈夫、私がついてるから落ち着いて、ね？」

「……………わ、わがっだ……………」

ナーバスになってる唯ちゃんを追い詰めないよう、優しい言葉で伝えた。

ひとつ深呼吸をして、気持ちを落ち着かせた唯ちゃんは携帯で救急車を呼び出した。

「もしもし、救急車をお願いします……………」

症状と名前、年齢、現在位置などを伝えさせて、取り敢えず救急車は呼ぶ事が出来た。

『ありがとう、唯ちゃん。後で軽音部の皆にも連絡しましょう。もちろん、ちひろちゃんのお父さんにもね』

「……ミーナちゃん、ありがとう……。私だけだったらどうしていいか、まったく分からなかった……………」

唯ちゃんがボロボロ溢れる涙を拭いながら、必死に言葉を紡いでいる。

不安な気持ちを押し殺すなんて、それは無理な話よね……………。

私は唯ちゃんの頭を、そつと撫でてあげた……。

ありがとう、唯ちゃん。私こそ助かったよ……。

そこへ小さいながらも、救急車独特のサイレンの音が聞こえてきた。

赤いパトランプが見えると、こちらへ一直線に向かってきた。

『唯ちゃん、もうひとつお願いがあるの。聞いてくれる？』

「何？ミーナちゃん……」

『これからちひろちゃんと一緒に救急車に乗って、病院へ行っても  
らいたいの』

「え！？私が？」

『そう。私は喋れないから状況説明がし辛いし、何より病院だと携  
帯は使う事が出来ないから……』

「そんな……、私じゃ無理だよお、そんな大役……」

『大丈夫。私も皆に連絡して合流したら、すぐに病院へ向かうわ』

あくまでも冷静に、そして優しく言葉を伝える。

今は唯ちゃんしか頼れないから、唯ちゃんを安心させてあげないと……。

「…うん、分かったよ、ちいちゃん……」

『ちひろちゃんを……お願いね……』

私はちひろちゃんの携帯をバックから抜き出した。

ちひろちゃんのお父さんに連絡をとる為、携帯番号が知りたかったから。

後で皆と合流した時に、誰かにかけてもらおう……。

救急車が到着して、ちひろちゃんがストレッチャーに載せられて、車内に運び込まれる。

唯ちゃんも不安そうな顔をしながらも、一緒に乗り込んだ。

私は救急隊員から搬送先の病院名を聞き出しておいた。



後は、皆とそこで合流するだけね……。

「じゃあ、行ってくるね……」

私はその言葉にただ、コクンと頷いた……。

後ろの扉が絞まり、再びけたたましいサイレンの音と共に、赤いパトランプが光り始めた。

そして、いつの間にか出来た人だかりを後にして、救急車は出発した。

私は救急車が見えなくなるまで、その姿を見送った……。

そして、皆に一齐にメールを送信した。

『皆、大変よ。ちひろちゃんが倒れて、病院に運ばれたの。病院名は〇〇病院。今、唯ちゃんが一緒に救急車に乗ってる。私も向かうから、皆もすぐに来て』

メールを送信し終わると、いつの間にか人だかりは無くなっていった。

皆からのメールの返信を知らせる着信音が、静かになったせいかな、

いつもよりやけに大きく響いているように感じられた……。

第12話「アルバイト二日目」緊急事態！〜」（後書き）

次回から、いよいよちひろの過去に迫っていきます。

なるべく早く更新しますので、どうかお待ちください。

それではまた、次話でお会いしましょう。

第13話「ちひろの過去（1）お母さんという存在」（前書き）

お待たせしました。しばらく振りの更新となりました。

地震の影響もあり、なかなか執筆が出来ない状態になってしまいました。

この度の震災で被害に遭われた皆さんには、改めてお見舞いを申し上げます。

さて、今回からちひろの過去編に突入です。

前回倒れたちひろの安否は？そして、ちひろが抱えている過去とは一体……？

また長めの文章となりますが、どうぞ御覧下さい。

### 第13話「ちひろの過去（1）お母さんという存在」

ちひろちゃんが搬送された病院の救急治療室。

その片隅にあるベッドの上に、ちひろちゃんは横たわっていた。

「精神的に不安定な状態でしたので今、精神安定剤を点滴で投与しています」

担当の先生が私や軽音部の皆、そして駆け付けてくれたちひろちゃんのお父さん「おじ様に説明していた。

「グツスリと眠っている所を見ると、多分寝不足も原因だったんでしよう。そこに精神が揺らいでいたので、倒れてしまったものと思われます」

「そうですね……。そういえば昨夜、怖い夢を見て目が覚めたみたいで、もしかしたらその後、眠れなかったのかもしれない……。今朝はそんな雰囲気はまったくしなかつたんですが……」

そういえば今朝、私と会った時は顔色が少し悪かったように見えてたわ……。

また無理をして、元気そうに振る舞ってたのね……。

どうしてちひろちゃんは、そんなに人に気を使うの？

友達なんだから、普通に接して欲しいのに……。

「まあ、外傷も見られないですし、脳波等にも異常はありませんでしたので、大丈夫でしょう。じきに目も覚めると思っています」

「ありがとうございます」

「あ、そういえば……」

「ん？なんですか」

立ち去ろうとした先生が立ち止まって、おじ様の方へ向き直した。

「頭のところにある古傷……、あれはどういう経緯で出来たものですか？」

古傷？初耳だわ、そんな事……。

おじ様は頭を掻きながら、言い辛そうに言葉を濁すような感じで答えた。

「ああ、それは……、一昨年に階段から転げ落ちてしまって……」  
え！？階段から……。

頭に傷が出来るくらいだから、尋常な落ち方じゃあないはずよ。

「……………そうですか……………。分かりました、それではお大事に」

担当医の先生は治療室を後にして、おじ様は深くお辞儀をしていた。

「皆、ちひろを助けてくれて本当にありがとう」

さらにおじ様は私達にも深々とお礼のお辞儀をした。

「ううん、私達よりもミーナちゃんにお礼を言ってあげて。ミーナちゃんが冷静に対処してくれたおかげだから。私だけじゃ、とても無理だったかもしれないし……………」

「……………そうだったのか。本当にありがとう、海衣奈ちゃん」

私は『そんな、お礼なんてとんでもない』という意味を込めて、頭を左右に振った。

「海衣奈は本当に頼りになるよな。頭が良くて冷静で」

澪ちゃんの言葉に私はある種の戸惑いを感じながら、また頭を左右に振った。

その戸惑いが胸の奥で膨らんでいって、どうしようもなくなってきた。

私は唯ちゃんに伝えたい事があって、服を軽く引っ張った。

「何？ミーナちゃん」

私は口をゆっくり開いて、三文字の言葉を紡いだ。

「あ？い？え？」

「……………」

「……………」

この手の短い単語なら、唯ちゃんにはこの方法で通じる。

読唇術っていう方法だけど、付き合いの長い幼馴染みならではの  
法ね。

私は『ありがとう』の意味を込めて、軽く手を振ってトイレに向か  
った。

救急治療室を出て、10秒と掛からずにトイレに着いた。

洗面台の前に立って蛇口を捻ると、水を両手ですくって顔を何度も  
洗う。

こうすれば、アレをカモフラージュ出来るから……………。



「海衣奈」

急に入口付近から声がして、肩がビクツと震えた。

冷静を装って目だけで姿を追うと、ドアを開けてこちらを見ている律ちゃんが見えた。

「顔洗ってんのか？よかつたらこれ、使いなつて」

律ちゃんがハンカチを取り出して、私に差し出してきた。

『別にいらないわよ、私があるんだから』と言おうとしたけど、濡れた手で携帯を持つと壊れてしまう可能性があるから、その好意に素直に従う事にした。

顔を拭いてからハンカチを手渡そうとすると

「要らない」

何故か律ちゃんは手を前に突き出して、それを拒んだ。

言葉にしたいけど、ここは病院だから携帯は使いたくないし……。

「少しぐらいなら携帯使っても大丈夫だって。トイレの中なんだしさ、誰も見てないから」

誰も見てなければいいって言うの？

…まあ、この電波で狂う機器もここには無いし、問題は無いわね…。

『どうしてハンカチを受けとらないの？洗濯して返してって事？』

「そうじゃないって。海衣奈はまだ使うんだろ、そのハンカチ？」

『……どういう意味かしら？』

言いたい事はハッキリ言っしてほしい。

「拭くのは顔に付いてる水滴だけじゃないだろ？」

『……………！？』

もしかして、律ちゃんは私がここへ来た本当の理由を分かってる？

律ちゃんは私の前まで来ると、他の誰かに聞こえないように耳元でそっと呟いた。

「いいんだぞ、泣いたって」

『……な、何言ってるの……？な、泣くわけ……ないじゃない……』

携帯のボタンを打つ手が震えて、送信するまで時間が掛かる……。

「無理しなくていいんだよ。誰から見たって、海衣奈とちひろは仲が良いからな。そのちひろが倒れたんだ。冷静を装ってるつもりでも、その心中は穏やかじゃないはずだろ？」

強気の言葉で返そうとしても、いよいよ手が震えてボタン押せなくなった……。

「海衣奈、泣きたい時は泣きなよ。涙を隠す為に顔を洗ってたんだろ？」

いつもはふざけたりしてお調子者の律ちゃんだけど、こっぴつ時の洞察力は本当に鋭い。

ちゃんと周りの人の動向をキチンと見てるんだ……。

幼馴染みの澁ちゃんはそれが分かっているから、律ちゃんが部長になる事に反対しなかったんだと思う……。

「これで泣けるだろ」

そう言つと同時に、律ちゃんは私をそつと抱き締めた……。

……反則よ……。

こんな事されたら……。

「……………」ボロボロボロ……………」

泣くしか……………、ないじゃない……………。

声が出ない代わりに、大粒の涙が次から次と溢れ出て止まらない……。

そして、私は携帯のボタンを押して、戸惑いや不安を律ちゃんに打ち明けた。

『ちひろちゃんが急に倒れて、私だってどうしようもなく不安になつて……………』

「うん……………」

『……………だけど唯ちゃんが泣きそうになって、私まで不安げな顔をしてたらいけないと思つて……………』

「うん……」

『私がしっかりしなきゃ、ちひろちゃんを助ける事が出来ないと思  
つて、努めて冷静になつたわ……』

『私が喋れなくても友達になつてくれた……、そして友達で居続け  
てくれたちひろちゃんが倒れて……、冷静でいられるはず……、無  
いじゃない……』

「そうだよな……。よく頑張つたな、海衣奈」

『ちひろちゃんが無事で……、本当に……、良かった……』

私は律ちゃんの肩辺りで服をギュツと握つて、力を込めた。

それと同時に、身体を震わせながら声にならない嗚咽をあげて泣い  
た……。

律ちゃんは、私の頭を優しく撫でてくれた……。

この前、私がちひろちゃんが泣いた時と同じ様に……。

暫くして泣きやむまで、律ちゃんは何も言わずにずっと、側にいて  
くれた……。)

「おじさん、一体ちいちゃんの過去に何があったか教えてください」  
律ちゃんと救急治療室の扉の前まで来た時、中から唯ちゃんの声が聞こえてきた。

「ちいちゃんが倒れる前に言ってたんです。“お願いだから許して” “幸せになっちゃいけなかったんだ” “ごめんなさい、お母さん” て……………。一体、どういう意味なんですか？」

扉を開けると、唯ちゃんがおじ様に詰め寄って疑問をぶつけていた。

「教えたのは山々だが、ちひろが黙っていた事を俺が喋ってしまったと、ちひろが今以上に傷付いてしまう可能性があるんだよ？」

「……………そ、それは……………」

おじ様の言う事もっともで、今精神的に不安定なちひろちゃんがさらに追い込まれてしまえば、症状が悪化してしまうかもしれない……………。

唯ちゃんや他の皆も、何も言えなくなってしまった……………。

「ただ、ちひろが自分から話したいと言えば、話は別だけど……………」

「……………う……………」

「……………」

聞き覚えのある声がして、皆がその声がする方向を向く。

私達が目覚める事を望んだ子が、閉じていた目をゆっくりと開いた……。

)

【SIDE：ちひろ】

目の前には、白い天井が見える……。

薬の匂いもする……。

右腕に点滴が挿入されているのを見て、ここが病院だということが分かった。

どうして私は病院にいるんだろう……？

そんな事を考えている間に、私のよく知っている顔ぶれが私の周りに一斉に集まってきた。

「ちいちゃん」

一番真っ先に駆け付けた唯ちゃんは、有無を言わずに抱き付いて

きた。

「ぢいちゃん、ぢいちゃん……、よがっただよお……、ほんどうによがっただあ……」

泣きじゃくる唯ちゃんを抱き締めながら、私はまだ事の次第を理解出来ずにいた……。

「……えつと……、私は一体……？」

その疑問には、ムギちゃんが涙を流しながら答えてくれた。

「ちひろちゃんは、バイトの後に急に倒れて、救急車で運ばれて来たの……。気が付いて……本当に良かった……」

「……そうだぞ、海衣奈からメールを貰って皆、この病院に急いで駆け付けたんだ……。ビックリ……したんだぞ……っ……」

澪ちゃんも安堵の涙を零しながら、状況説明をしてくれた。

「海衣奈がすっかり対処してくれたから、大事に至らずに済んだんだ。……海衣奈に……感謝しなきゃ……」

あの気丈そうな律ちゃんも、涙目になりながら海衣奈ちゃんの肩に手を置いた。

そうなんだ……、海衣奈ちゃんが私を助けてくれたんだ……。

その海衣奈ちゃんは口に手を当てて、身体を震わせながら泣いていた……。



そして、唯ちゃんが抱き付いているにもかかわらず、海衣奈ちゃんも構わず私に抱き付いてきた。

「心配掛けてごめんね、みんな……」

皆、私の事をこんなにも心配してくれてたんだ……。

私の為に泣いてくれるなんて、申し訳ない気持ちもあったけど、心の何処かで嬉しい気持ちもあった。

そんな友達、今まで誰一人としていなかったから……。

「いい友達を持ったな、ちひろは……」

「お父さん……」

私も涙を流しながら、その言葉に同意して頷いた。

そして、秘めていた決意を実行しようと改めて思った。

もう、ためらわない……。

話そう……、私の過去を……。

）  
）

私は病院を出て、お父さんのワゴン車に皆を乗せて自宅に帰ってきた。

そして私達は今、リビングに集合していた。

軽音部の皆と共に、私を心配して家に駆け付けてくれた憂ちゃんと和ちゃんもテーブルを挟んで、私の前のソファーに座っている。

337

「ちひろさん、もう身体は大丈夫なんですか？」

「うん、心配かけてごめんね、憂ちゃん……。」

「ねえ、ちいちゃん……？」

「何、唯ちゃん？」

「ちいちゃん、過去に何があったの？」

さっき、倒れる前の経緯を唯ちゃんや海衣奈ちゃん、そしてお父さ

んから聞いていた。

唯ちゃんや海衣奈ちゃんは、私が倒れる前に叫んだ言葉を聞いていたから、至極当然の質問だった。

『私も知りたい……。興味本意じゃなくて、ちひろちゃんを苦しめている物が何なのか知りたいの……』

他の皆も頷いていた。

ただ一人、和ちゃんを除いては……。

「でも大丈夫なの？ちひろをそれだけ苦しめた過去を話して、また体調を崩したりしないのかしら？」

「……」 「……」 「……」 「……」 「……」 「……」 「……」 「……」 「……」 「……」

和ちゃんが心配するのももともとで、皆も押し黙ってしまっ。

「……それは私も、正直分らない……。でも話したい……。皆なら話してもいいと思えたから……。これ以上黙っているのが心苦しいと思つたから……。皆を信じてるから話したいの。……お父さん、話しても……。いい？」

反対されるかもしれない……。そんな事を思いつつ、怖々と聞いてみた……。

「ちひろが話したいと言うのなら、俺は構わない。ちひろのしたいようにすればいい」

相変わらずの優しい微笑みで答えてくれた。

「俺がない方が話し易いか？」

「……ううん、大丈夫。むしろ、お父さんにもいてほしい……。聞いてもらいたい事があるから……」

「……分かった」

お父さんは不思議そうな表情を浮かべながらも、了承してくれた。

それもそうだよね……。

お父さんはすべてを知っていると思ってるから、本当ならここにいない必要なんて無い……。

だけど、それは違うの……。

私はお父さんにすら黙っている事がある……。

許されないかもしれない“あの事”を……。

「皆、ちょっと待ってて」

私はリビングを出て、漆黒の仏壇がある部屋に行き、あの淡い緑色の写真立てを手に取った。

過去を話すのに、これが必要不可欠だから……。

急ぎ足でリビングに戻ると、皆に写真が見えるようにテーブルの上に置いた。

『ちひろちゃん、この綺麗な人がもしかして……』

「……うん……、私のお母さん……」

「綺麗だなあ……」

「……うん、綺麗……」

「うわあ、綺麗……」

「本当、綺麗ね……」

「綺麗な人だね……」

海衣奈ちゃん、律ちゃん、漣ちゃん、ムギちゃん、唯ちゃんと皆が口を揃えて、お母さんを綺麗と言ってくれる。

多分、誰が見ても綺麗と言われるくらい、お母さんは美人だった。

一呼吸置いて、私は話し始めた。

「……私ね、お母さんに憧れてたの……」

普通、小学4年生ぐらいの子供と言えば、家に帰ってくればランドセルを放り投げて、友達と一緒に遊ぶ割合が高いと思う。

外で野球やサッカーをする子、家の中でテレビゲームをしたりする子。

私はそのどれにも属さない、ある意味つまらない子供……。

「さて、学校の宿題も終わってたけえね……」

学校の宿題を早々と終えた私は教科書をしまわずに、さらに次の日の予習を始めた。

学校でも、休憩時間はグラウンドには出ずに、教科書を開いて勉強

をしているくらいのガリ勉の子供。

少しでも時間があれば、知識を頭に詰め込んでおきたい。

ドッジボールなんかしている暇なんて無い……。

「ねえ、綾瀬さん。一緒に遊ばん？」

「やめときい。どうせガリ勉なんか誘ったって『ごめんなさい、今勉強してるけえ』って突き放されるだけじゃけえ」

珍しく誘われたと思ったら、私がまさしく言おうとしていた言葉を先読みされてしまった。

私を誘ってくれた子は、先読みしてくれた子に手を引かれて教室を出ていった。

私はクラスや学校の間でも公認のガリ勉。

私のあだ名もズバリそのまま、“ガリ勉”。

おかげで友達は無と言っているほど、誰もいなかった……。

私がそこまでして机に齧<sup>かじ</sup>り付くには理由があった。

「ただいま、ちひろ」

「お母さん、お帰りなさい」

もう外が暗くなりはじめた頃、お母さんが仕事から帰ってきた。

玄関を開ける前から車のエンジンが停止する音で、お母さんが帰ってきたのは分かった。

お母さん大好きっ子の私は勉強を中断して、玄関まで全力で走っていき、すぐさまお母さんに抱き付いた。

「あらあら、ちひろは大きくなって甘えん坊さんよねえ」

なんて言いながらも、お母さんは私の頭を撫でてくる。

学校では絶対に見せない、秘密の一面だった。

「……だって、久し振りに早く帰って来たから嬉しくて……」

お母さんはいつもなら、夜遅くに帰ってくる事が多い。



下手をすれば、何日も帰ってこない事もある。

「ごめんね、ちひろ。お母さん、家にいる時間が少ないから、寂しい想いをさせちゃってるわね……」

「……ううん、いいんよ。仕事を頑張ってるお母さんが大好きだから、私は寂しくなんかないけえ……」

「寂しくないと言い張るわりには、抱き付いて離れない甘えん坊さんよね」

「……う……、そ、それは……」

痛い所をつかれて顔が真っ赤に染まり、しどろもどろになる。

恥ずかしがってる顔を見られたくないから、顔をうずめて抱き締める腕に自然と力が籠る……。

「あらあら……、クスッ」

「……はっはっ……」

「それじゃあ、夕飯作りましようか。お腹空いたでしょ？」

「はっはっ」



じゃけえな。大袈裟なんかじゃないんよ」

「…やだ、あなただったら……。ちひろの前で恥ずかしい……」

ビールでほろ酔い気味のお父さんが、お酒の力を借りてのろけ始めた。

お母さんも恥ずかしいと言いながらも、まんざらじゃないみたい。

「俺は世界一母さんの事を愛してるけんな。母さんもそうだろ、な？」

「えー!? ……はい、私もあなたの事……、世界一愛してるわよ」

「……母さん……」

「……あなた……」

すっかり二人の世界が出来上がってるみたい……。

御馳走様です……。ついでにご飯も御馳走様でした。

誰の目からみてもお父さんとお母さんは大の仲良し。

まさしくおしどり夫婦。

私はそんな仕事や家事を頑張るお母さんに、幼稚園の頃から憧れを

抱いていた。

あの頃に見た、お母さんの眩しくて輝いていた、あの姿に……。

）  
）

「へえ、ちいちゃんの料理ってお母さん譲りの味なんだ」

「ううん、お母さんの味にはまだまだ届かない。お母さんの料理はもっと美味しかったから」

「……」  
「……」  
「……」

「それに、あの頃の私はまだ料理なんてした事なかったんだ」

『え！？そうなの？』

「私が料理をし始めたのは、もう少し後の事だから……」

「なあ、ちひろ？」

「何、律ちゃん？」

「そういえば、お母さんが憧れって言ってたけど、お母さんの職業って何だったんだ？」

「お母さんはね、婦警さんだったの」

「『『『『へえーっ』』』』」

「婦警さんの制服を身に纏ったお母さんは、本当に輝いてた……。あれはまだ、私が小学校に入学したばかりの頃だったな……」

）  
）

日曜日の昼間。

広島市内の有名なアーケード通りに私はいた。

「ねえ、お父さん……」

「ん？なんだ、ちひろ」

「お母さんも来られたら、もっと楽しかったのに……」

「お母さんは今日もお仕事なんじゃけえ、仕方無いんよ」

「……………うん……………」

お父さんが私の手を引きながら、私の我が儘に優しく答えてくれた。

今日は一緒にお出かけしようねって約束してたのに、急なお仕事が入ったって、キャンセルになっちゃった……。

落ち込んでる私を見兼ねて、お父さんが私を連れ出してくれたけど、やっぱり寂しいな……。

今日だけじゃない、この前の休みもその前もお母さんはいなかった……。

お母さんは私なんかより、仕事の方が大事なのかな……。

私は大切じゃないのかな……。

楽しい日曜日のはずなのに、なんだか悲しい気持ちになってきた……。

「どうしたの、僕？」

「グスツ……、うええええん……」

「あれ？お母さん……」

「お、本当だ。母さんだな」

警察官の制服を着たお母さんの目の前で、私と同年か少し年下ぐらいの男の子が、ひたすら泣き続けてた。

どう見ても迷子……、だよな？

「お母さんかお父さんとはぐれちゃったの？」

「お母さんと……、びええええええええええん……」

かわいそう……、お母さんとはぐれちゃったんだ……。

あの男の子の泣き顔を見てたら、私まで悲しい気持ちになってきた……。

「大丈夫よ、お姉さんが一緒にお母さん捜してあげるけえね、泣かんでもええんよ」

お母さんは男の子の頭を撫でながら、男の子と視線を合わせた。

その表情はいつもの優しいお母さん、そのものだった。

私はある好奇心から、お父さんにある提案を試してみる。

「ねえ、お父さん……」

「ん？」

「お母さんを尾行したいんだけど、……いい？」

「ちひろ、何処でそんな難しい言葉を覚えたんだ？……まあ、いいか。よし、尾行開始だ！！」

「うんっー！！」

ノリノリのお父さんと一緒に尾行開始！！

男の子の手を引くお母さんに気付かれないよう、そして見失わないように後をつけた。

「この人だけじゃあ、捜すのは少しいぎいいね……。あ、そうじゃー！！」

お母さんはそう言つと、男の子を肩車し始めた。

泣いていた男の子も最初は戸惑つてたけど、なんだか楽しそう……。

いいなあ……。私もしてもらいたい……。

「これなら、お母さんが捜しても見つけ易いはずよ」

……そっかあ、お母さん、頭いいなあ！！

「この子のお母さん、いませんかあ？」



「お母さあーん」

男の子のお母さんを見つける為に、男の子もお母さんも必死で叫んでる。

早く見つかるといいんだけど……。

しばらくすると……。

「…あ、翔一、翔一い~~~~~」

「…え？あ！？お母さんだあ」

男の子のお母さんがいたみたい。

男の子がお母さんの姿を見つけると、私のお母さんは男の子を降ろした。

男の子は全速力でお母さんの所へ走っていく。

「お母さん、お母さあーん、うわあああああん……」

「ああ、翔一。良かった、無事で本当に良かった……」

男の子はお母さんにしがみついて、嬉しくて泣いてる。

男の子のお母さんは男の子を抱き締めて、本当に嬉しそうだった。  
良かったね、見つかって……。

「良かったね、ボク。もう、はぐれたりしちゃあダメじゃけんね」

「うん、ありがとう。お姉さん」

「どうぞ致しまして」

「本当にありがとうございました」

「いいえ。人が多い所では子供さんから目を離さんように、気いつけてくださいね」

「はい……。本当にありがとうございました」

「お姉さん、バイバーイ」

男の子が手を振ると、お母さんも手を振ってその場を立ち去った。

「お母さん、カッコいい……」

「そつだな、あれがお母さんの仕事なんだ」

カッコいいと思うのと同時に、申し訳無い気持ちも膨らんできた…。

その気持ちを伝えたくて、私はたまたらずにお母さんの所へ走っていった。

「…お、お母さあぁあぁん」

「え？あら、ちひろじゃない。お父さんと出て来たんだ」

「……お母さん……、……ごめんなさい……、……ごめん……なや……」

私はたまたらず泣き出した……。

まるで、さっきの男の子と同じ様に……。

「どうしたん、ちひろ？何かあったん？」

お母さんは私が泣いている理由が分からずに、オロオロしながらも私の頭を撫でてくれた。

「私ね……、お母さんが……仕事ばかりで……、お母さんが……私の事……好きじゃ無いのかもって……、思ってた……」

「じゃけど……、違うたんよ……。お母さんは……一生懸命……仕事を頑張ってる……本当に……カッコよくて……輝いてて……。だから……ごめんなさい……っ……」

お母さんはお仕事も私の事も同じくらいに好きなのに、我が儘を言っただ……。

そんな自分が情けなくて、お母さんに申し訳無くて……。

「……ちひろ……」

お母さんはそんな私を優しく抱き締めてくれた。

「ちひろに寂しい想いさせて、本当にごめんね……。お母さんはちひろの事、大好きだからね。カッコいいなんて言うてくれて、ありがとうね……」

「ごめんなさい……っ……、お母さん。ごめん……なや……」

お母さんと私は「ありがとう」「と」「ごめんなさい」を繰り返す言い続けてた。

「お母さん、今日は早くお仕事終わるから晚ご飯、何処かに食べに行こっ」

「……………え？それはいいよ……………」

「どうして？お子様ランチでもお好み焼きでもちひろの好きな物、食べさせてあげるのに……………」

私が外での食事を断ったのは、ごく当たり前の理由があったから。

「だって……………、お母さんの作る料理が一番美味しいけん！！」

「……………クスッ、ありがとう。それじゃあお母さん、腕によりをかけてご飯を作っであげるけん」

「うんっ」

この時から私は、お母さんの事を母親として、一人の女性として、そして婦警さんとして、憧れの目標という存在として見るようになっていた……………。

)  
)

「本当にいいお母さんだな…。ちひろが憧れるの、よく分かったよ」

「そうね、私も女性として憧れるわ」

澁ちゃんとムギちゃんが感心した表情をしている。

「ありがとう……。私はお母さんのような婦警さんになりたいと、子供心にそう思ったの。だから、机に齧り付いて勉強するようになってた……」

『お友達と遊びたいとは思わなかったの？』

「……うん、本当は皆と遊びたかった……。けれど、お母さんのような婦警さんになるには、いっぱい勉強しなくちゃいけなかったから……。我慢してた……」

そして、私は話を進めるべく、口を開いた……。

「それでも勉強する量が足りない、もっと勉強したいと思うようになった私は、ある決意をお父さんとお母さんに告げたの……」

それが悪夢への序章になるなんて、この頃の私は知るよしも無かった……。

第13話「ちひろの過去（1）お母さんという存在」（後書き）

今回はちひろが秘めた決意が明らかになります。

そして、その決意に向かって、ちひろの努力の日々が始まります。

それと同時に、ちひろがある事を始めます。

それが意外な結末を呼び起こすとも知らずに……。

それではまた、次話でお会いしましょう。

## 第14話「ちひろの過去(2) 目標に向かって」(前書き)

お待たせしました。ちひろの過去編、第2話です。

今回はちひろが前回掲げた目標へと向かっていくお話です。

それと前回からですが、会話が広島弁になっています。

分かり辛そうな所は、解釈を付けているので、そちらを参照してください。

そういえば、一週間に2回更新するの、今回が始めてです。

他の先生方はみんな、当たり前のようにしてますけど、結構大変な  
んですね……。

それでは第14話、どうぞ御覧ください。



## 第14話「ちひろの過去(2) 目標に向かって」

小学5年生になったばかりの、ある日の事。

私はある決意を胸に夕食後、お父さんとお母さんを私の部屋に呼び寄せた。

「どうしたんな、ちひろ？話がある言うてたけど……」

お父さんはテーブルを挟んで、愛用のタバコにライターで火をつけた。

「さっきの食事の時では話せない事なん？」

お母さんはホットレモンティーを淹れたカップをテーブルの上に三人分置いた。

「……うん……、大事な話なんよ……」

私は話を進める為に、ある一枚のパンフレットを両親の前に差し出した。

「これを見て欲しいんよ……」

「なにになに？」「<sup>そつめい</sup>聡明塾、入塾説明会の御案内」……なんじゃ、これ？」

お父さんは何がなんだか分からないといった表情をしていたけど、お母さんはすぐに分かったみたいで、驚いた表情を浮かべてた。

「あなた、聡明塾って言ったら全国規模で有名な進学塾なんよ！？ちひろ、これを出すって事はまさか……」

「うん、ここに通いたいんよ……」

「……ちひろ、学校や家でも充分過ぎるぐらいに勉強してるのに、まだこれ以上勉強をしたいって言うん？」

「うん……、まだまだ全然足りないんよ……」

お母さんは深いため息をひとつ吐いて、私に話し始めた。

「ちひろ、そがあ（そんな）に勉強して何がしたいん？何か理由があるん？」

「……うん……」

私は自分の夢へのステップを順序だてて話し始めた。

「私ね、この塾でしつかり勉強して、小学校を卒業したら私立中学に行きたいと思うとるんよ」

「「し、私立中学!?!」」

「うん……。私立中学に行けば、難関といわれる高校や大学にも合格しやすくなると思って……」

「「……………」」

お父さんとお母さんは開いた口が塞がらないみたいで、お父さんはタバコの灰が落ちてても微動だにしないし、お母さんはティーカップを持ったまま、時間が止まってる……。

「お父さん、お母さん?」

私の問い掛けにハッと我に返ったお父さん達は、私の目をジッと見つめながら、怖々と聞いてくる。

「……………なあ、ちひろ。お前今、小学5年生……………だよな?」

「……………う、うん……。あ、もしかして、今からじゃ私立中学に向けて塾で勉強するの遅かったん?」

お父さんが軽くズッコケる。その意味が分からずにキョトンとして

いると、お母さんが眉を八の字にしながら、助け船を出してくれた。

「そうじゃのうて（そうじゃなくて）、ちひろが小学5年生にしてはしっかりとした事を言うもんじゃけえ、驚いとつたんよ……」

「しつかりだなんて……、これでも結構悩んで決めた事なんよ……。じゃけど（だけど）、私一人じゃ決められる事じゃ無いけえ、こうして相談しとるんじゃない……」

「どうしてじゃ？ 行きたいんなら、行きやあええじゃないか」

「ほうよ。私もお父さんもちひろがそこまで悩んで決めた事なら、何も言わんと応援するけえ」

お父さんとお母さんは私が想像していたよりも、呆気なく塾に通う事と私立中学を受験することを了解してくれた。

ただ、避ける事の出来ない現実が立ち塞がっているから、悩んでいたのに……。

「……だって……、塾も私立中学も……、結構お金がいるけえ……、お父さんやお母さんに負担が掛かるんじゃないかと思うて……」

それに今、小学校に通ってる以上は、そのお金だって発生してる。

負担が増えれば、大変なんじゃないかって、子供ながらに心配だった……。

「ちひろっ!!」

普段は優しいお父さんが太く大きい声を出したから、ビックリして身体がビクツと震え上がった……。

声が出ない私の方へお父さんが歩み寄ってくる……。

目の前まで来ると、お父さんが右手を高々と挙げている。

もしかして……、叩かれる!?

怖くて目を瞑った私に待っていたのは……。

ナデナデナデ……

「……へ……!?!」

「子供がそんなお金の心配なんか、せんでもええんじゃ」

頭を撫でながらニッコリと笑ってるお父さんの笑顔だった。

「俺も母さんも働いてるんだ。お金の心配する必要なんていらんけえの」

「ほうよ。ちひろはしたい事を全力で頑張りやええんよ」

お母さんも私の肩にそっと手を置いて、優しく微笑んでくれる。

「ねえ、ちひろ。ひとつだけ聞きたいことがあるんよ、いい？」

「うん、うん……」

「いっぱい勉強して、何か叶えたい夢でもあるん？」

「うん、ある……」

「聞かせてくれる？」

お母さんにしたら、当たり前前の疑問だった……。

塾や私立中学に行くとなれば、その目的を知りたいのは当たり前だから。

私はお母さんの顔をジッと見据えて、一呼吸置いてその夢を語った……。

「……私ね……、将来、警察官になりたいと思う……」

「…………え…………？」

「それもただの警察官じゃないんよ。…………お母さんみたいな立派で格好よくて…………、光り輝いてる警察官になりたいんよ！！」

恥ずかしくて顔が真っ赤に染まっていく…………。

お母さんを目標にしてるなんて、口にしたのは初めてだから…………。

お母さんは一体、なんて言うんだろう…………？

警察官は危険を伴う仕事だから、もしかしたら反対されるかもしれない…………。

お母さんの顔を改めて見てみると、とんでもない事になっていた…………。

「……………////////」

お母さんの顔が、私がそうなる時以上に…………、まるで茹でダコみたい真っ赤になっていた…………。

「……………はっ……………」

口をパクパクさせてはいるものの、言葉になっていない…………。

身体をふらつかせながら私から離れて、お父さんに抱き付いたとい  
うよりも、しがみついた感じかな……。

「……あ、あなた……、……ちひろが……ちひろがあ……」

「おお、よしよし……」

お母さんを抱き締めて、頭を撫でてるお父さん。

それはまるで、泣き虫の子供をあやすかのように見えた……。

「……ねえ、お父さん……。なんか私……まずい事……言ったのか  
なあ……?」

「……大丈夫だ……。母さんはちひろからの嬉しい不意打ち食らっ  
て、KO負けしたただけだ……」

「……そ、そうなんだ……」

この時、私は思った……。

私の恥ずかしがり屋は遺伝で間違いない……、お母さんの子供なん  
だって……。

）  
）

「へえーっ、ちひろの恥ずかしがりはお母さん譲りなんだ」



律ちゃんが両手を頭の後ろで組みながら、面白そうに言った。

「……うん……。お母さんのあんな表情初めて見たから、私も驚いちちゃったな……」

「嬉しかったんだね。ちいちゃんがお母さんを目指してたって事に」

「うん。で、それから私は私立中学目指して、猛勉強の日々が始まったの……」

「ねえ、ちひろちゃん？」

「何？ムギちゃん」

「ちなみに、何処の私立中学目指してたの？広島という事は、まさか……」

「え！？まさかあの……」

「……もしかして、あの……？」

ムギちゃんも澪ちゃんも和ちゃんも、その私立中学を知っているみたい。

私はその私立中学の名前……、私にとっては思い出したくもない、負の遺産でしかない学校名を口にした……。

「……うん……、私立皇中学（私立）って学校……」

「……やっぱり！？」

ムギちゃんも漣ちゃんも和ちゃんも、驚いて開きつ放しの口を手で隠していた。

『ねえ、その皇中学って有名な学校なの？』

「海衣奈ちゃん、有名ななんてものじゃないわ……。皇中学といったら全国の私立中学の頂点に立つとも言われる、合格率の低い難関中の難関の学校よ」

「そうだと、皇中学に入った生徒はほとんどがその後、有名な高校や難関の大学へ進学している、実績のある中学なんだ」

「皇中学に入学する事自体、将来を約束されたと言っても過言じゃないわね」

「……『へえー！』……？」「」「」

ムギちゃん、漣ちゃん、和ちゃんの的確な説明に皇中学がどんな学校かが分かって皆、一様に驚いてる。

私にしたら、その説明は表向きのものでしかないけれど……。

「ゴールデンウィークや夏休みに遊んでいる暇なんて無いぞ!! ころういう時こそ勉強して差を広げて、夢の私立中学合格へのステップを踏んでいくんだ!! 俺達先生陣も全力を尽くす!! 君達も全力を尽くしてくれ!!」

「「「「「おおーっ!!」「」「」」」」

熱い先生の檄に“合格!!”と太い文字で書かれた鉢巻きを巻いた生徒達が、握り拳を高々と振り上げる。

テレビで見た事はあるけど、実際やると恥ずかしい……。

でも、不思議とモチベーションも上がってくる。

皇中学に入る為に、いつか警察官になる為に、そして自分で決めた道を進む為に、何がなんでも頑張らなくちゃ!!

塾での猛勉強の成果は、学校の成績にすぐ繁栄した。

ほとんどの教科のテストで満点が取れるようになっていた。

ケアレスミスなんかで満点を取れなかった時は、凄く悔しくて陰で泣いた時もあった……。

今思えば、勉強にとり憑かれたとしか言い様がないくらい、勉強の

鬼と化していた気がする……。

だからこそ、周りの友達は皆、今まで以上に私を避けていくようになっていた。

もはや声すら掛けてくれる事も無くなり、完全に孤立し始めてた……。

「おう、ちひろ。お疲れさん」

塾は夕方5時に始まって、終わるのは大体夜の9時過ぎ。

塾を出ると遅い時間だからと、お父さんがいつも車で迎えに来てくれた。

「どうだ、塾は楽しいんか？」

「楽しいかどうかは知らんけど、充実しとるよ」

「勉強嫌いじゃった俺からしたら、想像も出来ない世界だな」

「え！？お父さん、勉強嫌いだったん？いい会社に勤めてるお父さんからは、それこそ想像出来んよ……」

「勉強だけがすべてじゃないんよ。警察官になるなら尚更な……  
って、今のちひろには失言だったな、すまん……」

「うっん、ええんよ（いいよ）別に……」

お父さんがハンドルを切りながら言った今の言葉の意味を私は後々、嫌と言うほど思い知る事になる……。

「ただいま、お母さん」

「お帰りなさい、ちひろ」

家に帰ってくると、良い匂いが漂ってくる。

お腹がペコペコの私にとって、お母さんが作ってくれる料理の匂いは抗う事が出来ない、誘導的な媚薬そのもの。

一直線に台所に行くと、仕事帰りで疲れているはずのお母さんが料理の腕を披露していた。

「わあ！！今日はお母さん特製の餃子だあ！！」

「スタミナつけんといけんけえね。たくさん作ったから、たくさん食べんさい」

「うっん……」

手をキッチンと洗って椅子に座り、両手を合わせていただきますをす  
ると、熱々の餃子を頬張る。

口の中いっぱい、それはそれはジューシーで熱い肉汁が広がって  
……………。

「……………！？熱っつい！！」

「だ、大丈夫ね！？ちひろ？」

お母さんが慌てて、氷入りの水を差し出して来る。

熱々なのを頬張れば大惨事を招くのは百も承知なのに、食欲に負け  
て結局大火傷……………。

コップに入った氷水を一気に飲み干した。

「……………熱かったあ……………」

「ちひろは食いしん坊で慌てん坊だなあ。そんなに慌てなくなつて、  
ギョーザは逃げやせんけえの」

お父さんが辣油をたっぷり入れたタレに餃子を漬けて食べながら、  
こっちを見てニヤニヤと笑ってる。

「だって、出来たが一番美味しいんじゃないか……。冷めたらお母さんに申し訳ないからね」

「クスツ、ありがと。そう言ってもらえると作り甲斐があるよねえ」

「だってお母さんの料理は世界一じゃけん!!」

「おいおい、ちひろ。その台詞、ご飯の度に言ってる気がするんじゃないか……」

「じゃあ、お父さんはお母さんの料理は世界一美味しいって思わないの？」

そう聞くと、お父さんは注いであった冷え冷えのビールを喉に流し込んで、立派な泡の白髭を携えながら豪快に言い放った。

「母さんの料理が世界一……？ハッ、笑わせるな!!この料理が世界一なわけなかるうが!!」

両手の握り拳をガッツポーズのように決めて、家に響けとばかりに雄叫びを挙げた。

「こんな……宇宙一美味しいに決まっとううがあ!!」

世界一では規模が狭かったらしく、宇宙一ときましたか……。

お母さんは嬉し恥ずかしくて、頬に両手を当てたまま、沸騰した蒸気を頭から発していた……。

お父さんとお母さんは、餃子以上に熱々で手がつけられないみたい……。

）  
）

その日の深夜。

時計が0時を少し回った頃、自分の部屋で勉強していた私は急にトイレを催していた……。

「ふうーっ……、スッキリした……」

トイレから自分の部屋に戻ろうとした時……、

「……あれ？台所の電気がまだ点いてる……？」

お父さん達、まだ起きてるんだ……。

次の日の朝が早いから、いつもなら早く寝てるのに……。

それに何か話し声がする……。



盗み聞きするのは気が引けるけれど、小学校高学年にもなると大人の会話が気になるお年頃。

台所の入口近くにヒッソリと隠れて、聞き耳を立ててみた。

「いやあ、最後のビール、美味しかったのお……。しばしの別れか、辛いわあ……………」

え！？最後のビール？どういう事…………？

愛用のタバコを吸いながら、お父さんはしみじみとした語り口で喋ってた。

「あなた、別に無理せんでもええんよ。ビール代くらいなら、私が何とかやりくりするけえ」

やりくり…………？それってお金の事…………？

だってお金は大丈夫だって言ってたはずなのに…………。

「塾の月賦って、思うとった以上に金が掛かるんよのお……。それに生活費も発生する訳じゃし……………」

「それにちひろが合格したら、皇中学の入学金やら授業料やらいるんよね……」

お母さんも、ため息混じりに家計簿とにらめっこしてる。

どうしてあの時、言ってくれなかったんだろう……？

「貯金、崩すしかないんかの……」

「ほうね、夢のマイホーム資金はまたいつか貯めていきましょ」

私の夢をかなえる為に今まで貯めた大切な貯金、ましてやマイホームを購入する資金を崩すなんて、そんなの私は嫌！！

そこまでするくらいなら、私は夢を諦めよう……。

姿を見せて、その意思を伝えようとした、その時だった……。

「ちひろが私を目標にしてくれてるのが分かった時は、本当に嬉しかった……」

何とも透き通った、そして嬉しさに満ちた声で、お母さんは語り出した。

「私ね、警察官の仕事をしてて家にいる時間が少ないでしょ……」

「ちひろは寂しくないとは言ってくれてるけど、心の何処かでこの

仕事を嫌ってるんじゃないかって、ずっと思ってた……」

そんな……、私はそんな事を思った事は一度も無いのに……。

お母さんからしてみたら、不安で仕方無かったんだ……。

「じゃけど(だけど)、ちひろは私みたいな警察官に……なりたいて……言ってくれたんよ……」

嬉しそうな声は、いつしか涙声へと変わっていく……。

「嬉しかった……。…だから、私はちひろの夢を叶えてあげたいんだよ……。その為なら、このくらいの出費なんて……」

お父さんは涙ぐむお母さんをそっと抱き締めた……。

お母さんもそっとお父さんの背中に、両腕を回した……。

「俺だってビールやタバコを止めるけど、ちひろが一生懸命頑張ってるのに比べたら、些細な事に過ぎんけえの!」

「……うん……」

「頑張ろうな」

「……うん……」

私は足音に気をつけながら、ゆっくりと自分の部屋に戻った。

せっかく決意を固めたところで、私が盗み聞きしていたのが分かったら、余計な気を使わせてしまうから……。

部屋に辿り着きドアを静かに閉めると、私は勉強机に座り、勉強を再開した……。

けれど、教科書の文字がよく見えない……。

ノートが水滴で濡れて、使い物にならない……。

私は声を出さないように口元を両手で押さえて、静かに泣いた……。

お父さんやお母さんが応援してくれる事が嬉しかった……。

それ以上に犠牲を払ってまで、私の夢に投資してくれる事が本当に申し訳なかった……。

私はヒツソリと泣き続けた……。

そして涙を拭って、勉強を始めた……。

頑張って、お父さんやお母さんの気持ちに報いたい……。

必ず皇中学に合格して、お母さん達を喜ばせなきゃ……。

泣いてなんかいられない……。

泣いてる暇があったら、勉強しなきゃ……。

私の勉強熱はいつそう燃え上がっていった……。

) )

小学6年生になり、いよいよ受験まで一年を切った頃。

「綾瀬、この成績を維持出来れば皇中学合格も夢じゃないぞ」

「え！？本当ですか？」

塾の講師から言われた一言は、私の学力が確実に上がっている事への太鼓判だった。

「ああ、本当だ。けど、浮かれているとあつと言つ間にライバルに抜かされてしまうからな。さらに勉強に励むんだ」

「は、はいつ！……」

その日の深夜。

私は勉強している手を休めて、机の中に隠してある、ある物に手を伸ばした。

それを手に取り、少し振ってみるとジャラジャラと良い音がする。

「クスツ、結構貯まってるみたい……」

ピンクのブタを象った、少し大きめの貯金箱。

この中にはたくさんのお金が入っている。

塾の帰りにジュースを飲んだつもり、お菓子を買ったつもりのつもり貯金が結構貯まってきた。

あの盗み聞きの日以来、ずっと継続中。

私が皇中学に合格したら、この貯金箱を壊そう……。

そして、心の中で温めている計画を実行するんだ……。

私の、もうひとつの目標まであといくらだろっ……？

）  
）

時は流れて、遂に私の努力の総決算をする日がやってきた。

「ちひろ、受験票は持った？筆記用具とか忘れ物無い？」

「大丈夫……、だと思う……。言われると急に不安になってきた……」

今日、これで3回目の持ち物チェック。

私の心中は穏やかじゃないどころの騒ぎじゃない……。

いよいよ今日は皇中学の受験当日。

今日で全てが決まってしまう……。

そう考えると、落ち着くなんて無理……。

緊張のしっ放しで、昨日はあまり眠れなかった……。

「大丈夫ね、ちひろ？」

「うっ……、緊張するよお……」

「あ、そうじゃ。ちひろ、これあげる」

お母さんが私に何かを差し出してきた。

私の手にそつと置かれた物、それは《合格祈願》と黒い糸で縫われてる、形の少し不細工な御守りだった。

「これ、もしかして手作り？」

「ほうよ。お母さんが一生懸命作ったけえね。効果抜群よ」

それはどんな有名な神社で売っている御守りよりも、効き目がありそうだった。

「ありがとう、お母さん」

「あ、ちひろ。受験開始5分前になったら、御守りの中を覗いてみるわよ」



「え？なんかあるん？」

「5分前以前に見たら、効果が無いけえね。氣いつけんさいよ」

「う、うん……、分かった」

御守りを服の胸ポケットに仕舞い込んで、いざ、出陣！！

「いってらっしやーい」

お母さんの明るい声を背に、私は家を出た……。

）  
）

試験会場ではライバルとも言える他の受験生が、知識の最終チェックに余念がなかった。

ある人は参考書を、ある人は単語帳を捲りながらブツブツと呟いている。

私も最後の悪足掻きとばかりに、最終チェックをしていた。

私、本当に大丈夫なのかなあ？

塾の先生は大丈夫って言うてくれたけど、段々不安になってきた…。

今日の結果で将来が決まってしまう…。

お父さんやお母さんの応援がムダになってしまうかもしれない…。

そう考えるだけで、鼓動が一段と早くなる…。

「もう、5分前……。こんな緊張してたんじゃ、試験なんて上手くいかないよお……」

5分前……。そうだ！！

私は胸ポケットから、あの御守りを取り出した。

そして言われた通りに中を覗いて見ると、そこには折り畳まれた紙が入っていた。

「これは……？」

開いてみると、そこにはお母さんの文字で、こう書かれていた。

《ちひろは今まで、一生懸命頑張ってきましたね。

普段なら他の子が日焼けしてる夏休みも、家族で遊びにいたりするゴールデンウィークも、勉強、また勉強の毎日。

それも、今日という日の為だけにやってきた事なんよね》

うわぁ……、余計に緊張するよぉ……。

なんでお母さんはこんな事書くの？って思いながら、その続きを読んだ。

《多分、ちひろの事だから今、結果を気にして緊張してる事だと思  
うんよ。

だから、言うておくけえね。

一生懸命やってきた自分を信じんさい。

自信を持って、全力を尽くしなさい。

全力を尽くして、それでもダメだったとしても、お母さん達はちひ

ろを責めたりはせんけえね。

いい、結果を恐れずに全力を尽くすんよ。

ちひろの最愛のお母さんより《

……お母さん……。

結果を恐れずに、全力を尽くせ……か……。

『それでは間もなく試験を開始します。教科書や参考書の類いは閉まってください。問題用紙はまだ裏返さないように』

場内アナウンスと共に、私は手紙を御守りの中に閉まった。

御守りも元通り、ポケットの中に仕舞い込んだ。

お母さん、ありがとう……。

凄く気持ちが悪くなったよ……。

私の肩の力は、とっくに抜けていた。

『それでは……、始めてください』

一斉に問題用紙を裏返す音と共に、私の受験が始まった……。

第14話「ちひろの過去(2) 目標に向かって」(後書き)

如何だったでしょうか？

今回はちひろの合否の結果と、ちひろのもうひとつの目標が明らかになります。

そして、次回後半からいよいよ重いシリアスな展開が待ち受けています。

それではまた、次話でお会いしましょう。

第15話「ちひろの過去」(3) 運命の切符」(前書き)

ようやく書き上げる事が出来ました。

この話から、いよいよちひろが抱えてる過去の核心に迫っていきま  
す。

相変わらず長めの文章になりましたが、ゆっくりとお読み下さい。

それでは第15話、どうぞ御覧下さい。

## 第15話「ちひろの過去」(3)「運命の切符」

「うおおおっ、あつたあつたああああつー!」

「やった、やったあ!」

合格発表の番号が張り出された掲示板の前で、合格して一喜一憂している受験生。

でも、落ちて泣きながらそっと帰る受験生の方が多い気がするなあ……。

そんな悲喜交々（ひきこもこも）な光景を、私は皆の後ろからそっと見守っていた。

「いつまで、そうしてるつもりなんかいね、ちひろは……?」

「……うっ、だつてえ……」

「ごめんなさい、嘘です……」。

見守っていたというよりも、ただ発表を見に行くのが怖いだけなの……。

足が竦んで動けない私に、仕事を休んでまで一緒に来てくれていたお母さんも、さすがに呆れてた……。



もうかれこれ30分、こんなやりとりが続いてる訳で……。

「ちひろ、早う見に行きんさい。そんな所で怯えてたって、出てる結果は同じなんよ」

「それは分かってるんじゃけど……」

結果を気にするなと言われて臨んだ受験だったけど、やっぱり結果が気になる……。

……もしも落ちてるような事があつたら……、応援してくれたお父さん、お母さんに申し訳なくて……。

今までの努力がすべて、水の泡になってしまふ……。

「ねえ、ちひろ。あと5秒で動かんと、今日予定しとつた御馳走、一切無しにするけえね」

「ええっ!?!」

お母さんが笑顔で、とんでもない事を宣言し始めた……。

「はい5秒前……」

無情にも御馳走おあずけのカウントダウンが始まった……。

「よーーーーん、……さーーーーん……」

お母さんの御馳走が食べられないなんて、それは私にとって死刑宣告に等しいぐらい、残酷な事だった……。

「こーーーーっ……、いーーーーち……」

「……い、行きまーすー!!」

「はい、いつてらっしゃい」

私の食欲が恐怖心に打ち勝った瞬間、棒になってた足が動きだした。

どれだけ卑しいんだろ、私って……。

人込みをなんとか掻き分けて、遂に掲示板の前に辿り着いた。

もう一度、受験票の番号を確認してみる。

「……1068番……」

ふと顔をあげると、700番台から目に付いた。

番号順なので、少しずつ目で追っていく。

番号と番号の間が20や30開くことも、ざらではなかった。

さすが私立皇中学……、全国からたくさん受験生が集まるだけあるなあ……。

合格する事がどれだけ難しいのか、改めて分かった……。

「うわ……もう1000番台に突入しちゃったよお……」

いやがおうにも高鳴る鼓動……。

カラカラに乾ききった喉……。

緊張度はまさに最高潮！！

でも現実から逃げちゃダメなんよ……。

頑張れ……、私……。

そして思い切って目を見開いて、番号を確認した。

1001

1012

1  
0  
2  
8

1  
0  
4  
1

1  
0  
5  
6

1  
0  
6  
8

1  
0  
8  
2

1  
1  
0  
5

「.....」

.....あれ.....？

私は今一度、私の番号と今見つけた番号を、ゆっくりと確認していき。

1.....0.....6.....8.....

受験票は.....1.....0.....6.....8.....

「.....合ってる.....」

合ってる、という事は.....、えっと.....？

私は受験に出た難解な問題よりも簡単な事を理解するのに、かなりの時間を要するほど頭が混乱していた.....。

「.....合.....格.....?.....」

ようやく私の思考は、その言葉に辿り着く事が出来た。

合格.....したんだ.....。

私.....、合格したんだあ！！

受験票をグシャグシャに握り締め、猛ダッシュでお母さんの所へ駆け出した。

「ちひろ、どうじゃったん？」

「番号があつた！あつた！あつた！あつたんよお！！」

「……………本当ね！？」

「あつた……………あつたんよ……………、受かつとつたんよお……………」

涙がボロボロ、鼻はグジュグジュ……………。

今、酷い顔になつてるのは間違いない……………。

そんな事はお構いなしに、私はお母さんの胸に飛び込んだ。

一張羅の服が涙で汚れる事も厭いとわずに、お母さんは私をしっかりと抱き締めてくれた。

「よつ頑張ったね、ちひろ。おめでといと……………」

「うわあああああ……………」

人目もはばからず、私は声を大にして泣いた。

受かった事はもちろん、嬉しかった……。

でもそれ以上に、お母さん達の陰での支えに報いる事が出来たのが、一番嬉しかった……。

お母さんは涙を滲ませながらも、笑顔で私をいつまでも抱き締めてくれた。

あのお母さんの身体の温もりは、今でも忘れられない……。

）  
）

「凄い……、あの皇中学に合格するなんて……」

澪ちゃんがため息混じりに呟く。

他の皆も、その言葉に一樣に頷いてる。

「澪だつて頭いいから、もし受験してたら受かりそうな感じだけどなあ……」

「いやいやいやー！ー！律、昔の私のレベルじゃあ、とても無理だ……」。

分かりやすく言えば、今の私が東大を受けるくらい、難関なんだぞ」

「そんなに!?!」

律ちゃんは澁ちゃんの発言から、皇中学に合格する事への難しさを再認識したみたい。

律ちゃんの開いた口が塞がらない中、ムギちゃんが意外な告白をしてきた。

「ちひろちゃん。実は私、当初皇中学を受験する予定だったの……」

「え!?!ムギちゃんも!?!……でも予定、だったの……?」

「うん……。合格できるレベルだったんだけど、色々事情があつて……、結局受験しなかったの……」

「……そうだったんだ……」

確かに英才教育を受けていたかもしれないムギちゃんなら、皇中学に合格してもおかしくない……。

それなのに受験しなかったのは余程の事情があるみたい……。

その事情は敢えて聞かずに、私は話を続けた。



「そして合格が決まった後、私はもうひとつ掲げてた目標を実行したの……」

塾の先生に合格を報告しに行くと、握手攻めやら胴上げやら記念撮影やらで、それはもう尋常じゃないくらいのお祭騒ぎになってしまった……。

それもそうだよね。

皇中学に合格した事自体、これから入塾する人に実績を示せる訳だし、生徒獲得に拍車を掛けられるのは間違いないから。

そしてお父さんにも電話で喜びの報告をした。

仕事先との商談中にも関わらず、泣きながら合格を喜んでくれた。

私も、また思わず泣いちゃった……。

一通りの報告を終えて、入学手続きの書類を手にした私は喜びの帰宅をした。

自分の部屋に入ると、学習機の引き出しを開けて、ある物を取り出した。

何処にでも売っている茶色の封筒には、お年玉を貰った時にしか手にしない一万円札が3枚と、千円札が数枚入ってた。

これはあのピンクのブタの貯金箱にコツコツ貯めた1000円玉を、予め両替しておいたもの。

こんなに貯まるなんて、正直嬉しい誤算だった。

これでようやく欲しかった物が手に入る……。

封筒をポシエットに閉まうと、台所で御馳走の準備に追われているお母さんに一声掛けた。

「お母さん、ちょっと出かけるけえね」

「何処行くん？」

「……う、うん……、ちょっとね……」

私が軽く言葉を濁すと、怪しげに私を見つめてくる。

さすが婦警さんから所轄の刑事さんに昇格しただけあって、少しの怪しい所も見逃さない……。

「まあ、ようやく受験のプレッシャーから解放されたんじゃないか。いいってらっしゃい、夕飯までには帰ってくるんよ」

「うんっ、いつてきまーす」

なんとかやり過ごす事が出来、ホッと胸をなで下ろす。

玄関を出ると、足取りも軽やかに目的地へと駆けて行く。

そういえば、学校や塾以外の場所に行くのはいつ以来だろう……？

勉強に明け暮れていた私は、久し振りの解放感に満たされていた。

午前中は合格発表の前で緊張していたから分からなかったけれど、陽の日差しが暖かくて少し眩しい。

暖かいのは、春が近い事を知らせてくれる証拠。

眩しいのは、室内で勉強三昧の日々を送っていたから、そう感じるんだと思う。

やっと今、季節の移り変わりを肌で実感する事が出来た。

）  
）

「それじゃあ、ちひろの皇中学合格を祝って、乾杯！」

「くくくかんぱーいーいーいー」

お母さんの音頭を合図に、グラスを軽くぶつけ合う。

お父さんもお母さんも、久し振りの冷たいビールを一気に飲み干した。

私も習って、冷たいカルピスを一気に飲み。

口の中や喉が一気に冷たくなって、心地の良い瞬間だった。

テーブルの上には霜降り肉のステーキに特大のエビフライ、グラタんにシーザーサラダ。

そしてデザートには豪華な、1ホールの苺のショートケーキがテーブルの中央に鎮座していた。

「うわあ~~~~っ!!美味し~~~~いつ!!」

ステーキは肉汁が溢れて、口の中で儂く消えた……。

エビフライはサクプリで、特製タルタルソースが相性抜群!!

どれも美味しくて、本当に至福の一時……。

「美味しかったあ……、御馳走様でした」

テーブルに置かれている皿の上には既に何も無く、私もお父さんもお母さんも、久し振りの贅沢に恍惚とした表情を浮かべていた。

404

「そうそう、ちひろ。これ、俺達からの合格祝いだ」

「……え?私に……」

お父さんが私の目の前に、ラッピングされた少し大きめの箱を差し出してきた。

「開けてもいい?」

「ええよ」

お母さんの言葉を合図に、私は丁寧に包装を解いていく。

箱を開けてみると、

「……………あ、これって……………」

箱の中には私の大好きな色、スカイブルーの携帯電話が入っていた。勉強ばかりしてて流行には疎いから、これが最新式かどうかは分からない。

でも生まれて初めての携帯に、少し興奮してしまってた。

「ありがとう、大切にするけえね」

「喜んでもらえたみたいね」

私の笑顔に、お母さん達もつられて笑ってる。

「あの……………ね……………、お父さん、お母さん……………」

「……………どうしたん？」

「私もね……………、お父さんとお母さんにプレゼントがあるんよ……………」

突然のプレゼントに忘れそうになっていたけど、私も合格発表の後に手にいれたプレゼントを用意していた。

「え？ちひろが？」

「私達に？」

「……うん……、これ……なんじゃけど……」

両親の前に、図書券を入れるような紙のケースをそつと置いた。

「まさかちひろからプレゼントされるなんて、想像もしてなかったのぉ」

「ホンマよね。どうしたん、ちひろ？」

「と、取り敢えず開けてみて」

「はいはい」

理由を後回しにしたいのを読み取ってくれたみたいで、お父さんがケースを手にした。

「もしかしてビール券かいのぉ？」

「ギフト券かもしれんよ」

入っているのは何かの券だという感じは読めていたみたいで、二人ともそんな憶測を立てていた。

でも、入っているのはそんな安っぽい憶測を越える、想像を越えた物……。

果たして二人がどんな反応をするのか、ドキドキものでもあり内心、ビクビクもしていた。

「……ん？これって……、特急列車の指定券！？」

「それにこれ、有名な温泉旅館の宿泊券じゃない！？」

二人ともただただ、ビククリしている……。

沈黙が続き、なんだか重い空気が漂った後、お母さんは重い口を開いた……。

「ちひろ……、こんな高い物、一体どうしたの……？」

それもそつだよね……。小学生が簡単に購入出来る金額じゃないもんね……。

この後、私はリアルに事情徴収を受ける事になってしまった……。

「これを買ったお金はどうしたん？」



「あのね……、それはジュースやお菓子を買ったつもりで貯めた、つもり貯金で購入したの……」

「いつ頃から貯めとったん？」

「塾に通い始めた頃から……」

「という事は、その頃からこれを計画しとったん？」

「……計画はしてたけど、まだその頃は何をプレゼントするかは決めてなかったんよ……」

「それじゃあ、この旅行を計画したのはいつからなん？」

「それは……」

その答えで少し間が開いた。

だって、ある意味盗み聞きをしてた事を告白しなきゃいけないから……。

「……実は、お父さんとお母さんが深夜、ここで話しているのを立ち聞きしちゃったの……」

「」「話つて？」

「……塾の月賦や中学の入学金で、お金が掛かるって件なんだけど……」

「……あれ、聞かれてたんね……」

お母さんはバツ悪そうに俯き、お父さんは頭を掻いていた。

そして、私は二人にこの旅行を計画した真意を打ち明けた。

「お父さんがビールやタバコを我慢したり、お母さんも仕事する時間を増やしたり、家計を節約したりしてくれてた……。それも全部……、私の為に……してくれた事……」

感情が湧いてきて、段々声が詰まり気味になってくる……。

「私の為に……好きな事……、我慢……してくれて……。私が……塾に……通えたのも……、勉強に……専念……出来たのも……」

涙がとめどなく溢れ出る……。

溢れる感謝の気持ちと、申し訳無い気持ちが入り交じった、複雑な感情の籠った、大粒の涙が次々と……。

「……みんな……、みんな、お父さんやお母さんの陰での支えが……あつたからなんよ……」

「……ちひろ……」

顔を手で覆いながら、私は話を続けた。

「じゃけえね……、感謝の気持ちを込めて……これを……選んだんよ……。もう我慢……しないで……少しでも贅沢……して……もら……たくて……」

私はそのまま机に突っ伏して泣きじゃくった……。

二つの椅子が引かれて、歩み寄ってくる二つの足音が聞こえる……。その足音が私の両脇で止まると、私の頭と背中に手がそっと置かれるのが感触で分かった。

「……ちひろ……、ありがとな……」

お父さんの優しい声がする……。

「……ちひろ、ごめんね……。せっかくのちひろの好意なのに、問い詰めて嫌な気持ちにさせてしもつて……」

お母さんは少し、涙声になっていた……。

私がお母さんの方を見上げて首を軽く横に振ると、そのまま胸の方に抱き寄せてきた。

「ありがとう、ちひろ……。そんなに私やお父さんの事、思ってく

れて……。……嬉しい……」

お母さんの身体が心なしか、少し震えてる……。

顔に僅かに感じる水滴……。もしかして……。泣いてる!?

「泣かないで、お母さん……」

「これは、嬉し涙じゃけえね……。お母さん、ちひろみたいな優しい子供がいて……。本当に良かった……」

「……。私も、お父さんとお母さんの所に生まれて……。本当に良かった……」

「ありがとうな、ちひろ」

お父さんも私を抱いてきた。

二人の暖かい温もりを感じる事が出来た、最高の一日だった……。

）  
）

「ちいちゃんの恥ずかしがり屋もだったけど、優しさも遺伝なんだね」

唯ちゃんの言葉に皆も頷く。

「凄く暖かい家庭ね。なんだか羨ましいわ」

笑顔で羨ましがるムギちゃんだけど、その言葉には何か含みを感じる。

でも、別に今はそれに触れる必要はないよね。

「そして、旅行に出発する日があったの……」

）  
）

切符を渡した日からすぐの週末。

お父さんとお母さんは旅行の身仕度を終え、玄関の前で呼び出したタクシーを待っていた。

「本当にいいのか、俺達だけで旅行に行つて？」

「ほうよ、ちひろの分もお金出してあげるのに……」

そう、私は家でお留守番。

「私はええんよ。前にも言ったでしょ？一人で好きな事して過ごし

たいてって」

お母さん達からは一緒に行こうと誘われてた。

でも、私は断った。

出来れば、一人の時間を好きに過ごしたいと我が儘を言って、お母さん達は渋々了承してくれた。

でも、それは建前でしかない。

実際は子育てや仕事で二人の時間が持てなかった分、この旅行で二人の大切な時間を過ごして欲しいというのが本音。

って普通、小学生がこんな発想、思い付かないよね……。

「それよりも、本当にごめんなさい……」

「何が？」

「……だって、本当は二人とも休日出勤の予定だったのに、急に休みを取ってもらうハメになっちゃって……」

私が旅行会社に頼んだ旅行プランの日、つまり今日がああ切符を渡した日から、僅か3日後。

お父さんもお母さんも仕事を急に休む事になったし、それに旅行の

準備にも追われて目まぐるしい状態で今日を迎えた……。

勉強は計画通りに進めても、こういう事は無計画というか無謀というか……。

「気にするな、ちひろ。俺は仕事を頑張ってるから、上司から一発OK貰ったんじゃない」

「ほうよ。私は……、彼氏とデートの予定だった後輩に出勤してもらったけん。……泣いとしたねえ……」

御愁傷様です……。そしてごめんなさい……。

「あ、タクシー来たよ」

家の前にタクシーが横付けされて、後部座席のドアが開く。

「じゃあ、行ってくるけん」

「行ってくるわね」

二人がタクシーに乗り込み、ドアが閉まる。

私に向かって笑顔で手を振るのが見えて、私も笑顔で手を振り返す。

タクシーは二人を乗せて、特急列車が発車する駅へと出発した。

楽しい一泊二日を過ごして欲しいと心から願い、私は家の中に入  
た。

……これから起きる、とんでもない事態を知る由もなく……。

）  
）

「ふわあ~~~~あつ……、わふう……」

昨日はゲームセンターに遊びに行ったり、ショーウインドウショッ  
ピングを楽しんだり、美味しい物を食べたり……。

久しぶりに充実した一人の時間を過ごしたなあ……。

普段は机に座りっ放しの私が一日歩き通したから、ベッドにダイブ  
した途端に眠っちゃったみたい。

携帯の時間をみると、もう朝の8時。

そろそろ起きて朝ご飯食べなくちゃ。



トースターに予めマーガリンを塗ったトーストを入れて、タイマーをセットする。

トーストが焼けるまでの間、牛乳をコップに並々と注いで、プレーンヨーグルトをガラスの器に入れてブルーベリージャムをたっぷりトッピング。

トーストが焼けて、テレビのある部屋へと持っていく。

今頃お母さん達も朝ご飯、食べてるのかなあ？

その前に朝風呂も入ってるんだろうなあ……。

今日は帰ってきたら旅行の思い出話に花が咲いて、賑やかになるのは間違いないなあ……。

そんな想いを頭の中で巡らせながらトーストをパクつき、リモコンでテレビを点ける。

平日の朝のテレビはどこもワイドショーだらけだから、チャンネルはそのまま。

『それでは現場に当局のアナウンサーが行っていますので、呼んでみたいと思います』

現場という事は、何か事件が事故でもあったみたい……。

朝からこういふ悲しい話は好ましくはないけれど、それでも見てしまうのは情報社会の中で生きている日本人の性なんだと思う。

『はい。こちら現場です』

男性アナウンサーと共に、その現場が写し出される。

「……………!？」

その写し出された景色に食べている手が止まった。

……………ううん、私のあらゆる思考が完全に停止した……………。

持っていたコップが床で派手に割れ、床に牛乳のシミが広がっている事も気付かないくらいに……………。

『こちらの老舗旅館で今日の未明に火災が発生し、火は火災発生から2時間半後に消し止められました。まだ焦げ臭い匂いが、この辺

り一帯に漂っています』

老舗旅館……、それは私が旅行会社のパンフレットで見て決めたのと、まったく同じ所だった……。

『近隣の方からの情報では、何回かの爆発音が聞こえたとの事です』

『この火災で建物が全焼し、多数の怪我人や死亡した方々がいる模様です。宿泊していた方々の人数やお名前などの詳しい事は、まだ分かっておりません』

……多数の怪我人……、……死亡した人……。

お父さんやお母さんは一体どうなったの……？

……た、確かめなくちゃ……。

私は混乱した思考の中で、プレゼントされたばかりの携帯でお父さんの携帯に電話しようとした。

けれど震えた指と混乱した思考が、ボタンを押すという簡単な操作をも阻んでいた。

落ち着いて、私……。

お願いだから落ち着いて……。

ようやくお父さんの携帯番号を呼び出し、掛ける事が出来た。

……でも、呼び出し音だけが何時までも続いて、お父さんが出る様子は無い……。

お願いだから出て……。無事な声を聞かせて……。

「……」

突然、呼び出し音が消えた。

電話が繋がった！！

生きてたんだあ！！

「もしもし、もしもし、もしもし、お父さん！！」

捲し立てるように必死で呼び掛けて、その待望の声を待つ。

『……あ……、この携帯の持ち主の家族の方、ですか……？』

……お父さんの声じゃない……？

お父さんじゃない、誰か男の人の声が聞こえてきた……。

「……あ、あの……、どちら様ですか……?」

恐る恐る尋ねると相手の人は丁寧に、ゆっくりと話し始めた。

『私は地元の警察の者です。お父さんという事は、この携帯の持ち主の娘さんですか?』

「……は、はい……、そうですけど……?」

……どうして警察の人が、お父さんの携帯を持つてるの……?

『……分かりました……。……今から言う事を落ち着いてよく聞いてください……。いいですね?』

「……は、はい……」

固唾を飲んで、運命の言葉を待った……。

『まずはお父様ですが、多分爆風に吹き飛ばされたんだと思われます。窓ガラスを突き破って屋外に転落していました』

「ええっ!?!?」

屋外に転落……爆風……、これだけでも尋常じゃない状態だという事が分かった……。

「お父さんは……、お父さんは無事なんですか!？」

『……今、救急車で病院に搬送されて手術を受けています。まだ安否の程は分かっていません……』

「……………!？」

無事とは程遠い報告に、涙が溢れて止まらなくなってしまっ……。

それでも、まだ聞かなければいけない……。

そう、お母さんの安否を……。

『……お母さんは……お母さんは……、どう……なんですか……?』

涙声を振り絞って、お母さんの状態を聞いてみる……。

『……………』

……その無言からは嫌な予感しかしない……。

そして、ようやく告げられた真実は……。

『……お母様と思われる遺体が……、発見されました……』

「……………」

あまりにも、残酷すぎるものだった……。

……遺体……？

……それって……、お母さんが……死んじゃったって……事？

私の身体は急に力が抜けて、膝から床に崩れ落ちる……。

『ただ、損傷が激しくて身元の確認が必要です……』

警察官の人の声も上の空で聞いていた……。

……これは夢……。

……そう……、まだ私はベッドで寝てるの……。

目が覚めたら、お母さんが「おはよう」ってモーニングコールを掛けてきてくれるんだ……。

旅行の思い出話に花が咲いて……。

.....そつだよね.....、.....お母さん.....。



第15話「ちひろの過去」(3)「運命の切符」(後書き)

今回は、あの夢の内容が関わってくる回となります。

そして、お母さんの死が影響する出来事が……。

完全のシリアス回になります。

それではまた、次話でお会いしましょう。

## 第16話「ちひろの過去（4）親孝行の代償」（前書き）

今回のお話を読むにあたって、幾つかの注意点があります。

？表現は出来るだけソフトにしているつもりですが、想像すると酷な文章が幾つかあります。

？今回はかなり暗めのお話になります。

？一部、ちひろちゃんの崩壊シーンがあります。

以上の事に嫌悪感を抱く方は、ご注意ください。

ストーリー上、どうしてもこれらの事を避ける事が出来ませんでしたが……。

それでも構わないという方は、そのまま本文へとお進みください。

## 第16話「ちひろの過去（4）親孝行の代償」

テレビの刑事ドラマで見た事はあるけれど、実際に来る事になるなんて、思いもしなかった……。

警察に来る事自体初めてなのに、こんな部屋なんて尚更だった……。

“ 霊安室 ”

薄暗く、冷たい空気が張り詰めるこの部屋に私はいる……。

あの電話の後、ニュースを見た旅行会社の女性社員の人が、私を現地に連れてきてくれた。

お父さんのいる病院とお母さんと見られる遺体がある警察署、どちらに先に行くか悩んでいたら、病院側から手術が成功したという一報が入ってきた。

喜びという気持ちよりも先に、気力や体力が一気に抜けてしまい、女性社員の身体に寄り掛かる。

乗客もまばらな電車の中、ひたすら泣いた……。

……良かった……、本当に良かった……。

それで私は警察署へ、お母さんの身元を確認しにきた……。

「辛い事だから最初に言っておくけど、遺体は火事で焼けているんだ。だから、お嬢ちゃんがそのまま遺体を見るのはあまりにも残酷な事だから……。」

男性の刑事さんが白い手袋を手にはめて、物が入ってるビニール袋を手に取った。

ちなみにこの人が、私と携帯で会話を交わした刑事さん。

「これがこの遺体の遺留品なんだけど、お嬢ちゃんにこれがお母さんの物かどうか、確かめてもらいたいんだ……。」

「……分かりました……。……ただ、その前にひとつ、聞きたい事が……。」

「ん？」

「火事で損傷の激しいその遺体が、どうしてお母さんかもしれないって言うんですか……？」

この遺体はもしかしたら、まったく別人かもしれない……。

そんな不謹慎な淡い期待を含んだ疑問を、刑事さんにぶつけてみる

……。

「遺体の側に、焼け焦げた警察手帳が落ちててね……、中のデータを確認したら、お母さんの物だと分かったんだ……」

……警察手帳……。

確かにこれ以上の身分証明は見当たらない……。

抱いていた微かな希望が、段々どうしようもない絶望感へと変わっていく……。

「だけど、もしかしたらお母さんがそこでたまたま落としただけで、この遺体は別人かもしれない。だからこの遺体の人が持っていたり、身に付けてたりしてた遺留品を確認してもらいたかったんだ」

刑事さんも万が一の可能性を信じて、気を使ってくれている。

私だって台の上に白い布を被せられてる遺体が、お母さんでない事を切に願ってる……。

そんな気持ちを胸に、目の前に出された遺留品を恐る恐る確かめる……。

「……………!？」

ビニール袋に入れられた遺留品が目に入ると、張り詰めていた気が  
急激に緩み、その場にへたりこむ……………。

焦げてはいるけれど、お母さんが持っていたのと同じワインレッド  
の携帯……………。

お母さんが今回の旅に持っていったのと同型の、ピンク色の小型デ  
ジタルカメラ……………。

……………そして、悲しい現実を一番突き付けられた決定的な物証……………。

それは、あれだけの火災に遭ったにもかかわらず、原形をとどめて  
いた、眩い輝きを放つ、シルバーの指輪……………。

お父さんが一大決心をして、お母さんにプロポーズする時に贈った  
という、決して高い物ではないけれど、お母さんが大切にしていた  
結婚指輪……………。

指輪に刻まれた筆記体はお父さんらしく、ストレートな感情を綴つ  
たもの……………。

“ I LOVE MAHIRO ”

……まひろ……。

お父さんが脇目も振らず、一途に愛したお母さんの名前……。

仕事以外の時には必ずお母さんがはめていたのを見ていたから、見間違えようがなかった……。

「……お母さん……」

私はおぼつかない足取りで、お母さんのもとに歩み寄る。

昨日の朝、笑顔で旅に出掛けたお母さん……。

本当なら今頃は宿を出て、御土産を手に帰りの電車に乗っている時間だったはずなのに……。

……どうして……、どうしてこんな事になっちゃったの……？

お母さんの綺麗で優しい声が、頭の中で幾重にもリフレインしていく……。

“おはよう、ちひろ。朝御飯出来てるわよ”

“ちひろ、おかえりなさい”

“ちひろ、合格おめでとう”

“ちひろ、旅行楽しんでくるけえね”

あの優しい声も……、

あの暖かい温もりも……、

あの仕事を一生懸命頑張る、輝いた姿も……。

……もう……、二度と戻ってはこないんだ……。

「おか……、お母さん……。いや……、嫌ああああっ!!」

お母さんを失った悲しみ……。

お母さんを……させてしまった自分自身への、やり場の無い怒り……。



悔やんでも悔やみ切れない、後悔の念……。

あらゆる感情が爆発するのと同時に、荒れ狂うような声で泣き叫んだ……。

「お母さんの旅の話、まだ聞かせてもらってないんよ!」

「お母さんがいなくなったら、誰が御飯を作るんね!」

「お母さんがいなくなったら、私とお父さんの二人で……、どうやって生きていけばええんよおおおおおおおおおおっ!」

私はお母さんだった、恐らくは真っ黒であろう遺体の上に被さって、大粒の涙と出した事も無い声量で泣きわめいた……。

とても受け入れ難い、残酷な現実を突き付けられて、頭の中は何も考えられなくなるほどに、真っ白になっていた……。

「お母さあああああああ………」

皆、誰もが言葉を失い、重苦しい雰囲気が辺りに立ち込める……。

私は零れる涙を拭う事無く、ただ俯いていた……。

「……その後、DNA鑑定の結果が出てね……、その遺体は間違いなく、……お母さんだって……、知らされたの……」

昔、お母さんから今のDNA鑑定の解析度は、ほぼ100%と聞いていた……。

その頃は何気に聞いていた事が、皮肉にもお母さん自身の死で役に立つなんて、考えもしなかった……。

「そして、私は悲しみに暮れる間も無く、お父さんのいる病院に向かったの……」

泣き腫らした顔と失意の中で警察署を出て、行き着いた先は大型の総合病院。

入口近くではマスコミの記者やカメラマンが殺到していて、その間を私と旅行会社の社員の人が乗ったタクシーがクラクションを鳴ら

しながら通っていく……。

改めて事の大きさを知る……。

病室に通されると、執刀してくれた先生からお父さんの症状に関する説明を受けた。

「転落した事によって頭部を損傷していて、20針ほど縫いました。そして爆風の煽りを受けて、背中に火傷を負っています……。」

命が助かったとはいえ、耳を塞ぎなくなるような説明に愕然とする……。

お父さんは心拍数を表示する機械の近くで、口元に管の通ったマスクをあてがわれ、静かに横たわっていた……。

「ただ、それ以外に目立った大きな怪我はしていませんね。入院していただくようにはなりませんけど、もう大丈夫ですよ。」

もう大丈夫……。

それは事前に分かっていた事なのに、その一言で枯れていたはずの涙が再び溢れ出す……。

お母さんを失ったうえに、お父さんにまで何かあったら、私は……。

「……ありがとうございました。本当にありがとうございました……。」

…」

先生に感謝を込めて深々とお辞儀をすると、先生は看護師さんと共に病室を後にした。

お父さんの頭には幾重にも包帯が巻かれ、見た目にも痛々しい感じがする……。

静かな部屋に、心拍数を知らせる機械音だけが響き渡る……。

命に別状がなかった事に取り敢えずはホッと胸をなで下ろしたけれど、ふと思つた事に背筋が凍り付く……。

「……お母さんの事……、どう説明すればいいの……？」

目が覚めて、お母さんが亡くなった事を知ったら、お父さんは一体どうなるんだろう……？

悲しみから半狂乱になって泣き叫ぶか、あるいは自暴自棄になって周りにある物に八つ当たりして、暴れ回るかもしれない……。

……私のせいだ……。

……私が余計な事をしたせいで、お父さんやお母さんがこんな目に……。

多分、お父さんは私を激しく叱りつけて、罵倒を浴びせつけるに違いない……。

私は、それでも構わない……。

その覚悟を決めて、お父さんの左手を両手で、そつと握り締めた……。

いつまでも、いつまでも……。

）  
）

「……うん……」

夜中までずっとお父さんの手を握り締めてて、そのまま眠ってしまったみたい……。

気がつくと、閉められていた白いカーテンの向こうから、朝日が零れていた。

起き上がるうとした時、頭の上に何かがあるのを感じ取る。

それは、私の頭を撫でていているように感じられた……。

……もしかして……。

ふと、横たわっている人の顔に目を向けると……、

「……おはよう……、ちひろ……」

待ち人が目を覚まして、まだ弱々しい声で私に話しかけて来た……。

「……お、お父……さん……」

「……ずっと側に……、いてくれたんだな……。ありがとう……。ちひろ……」

痛いのか、一瞬苦痛の表情を浮かべながらも、必死で笑顔を作るお父さん……。

そんな笑顔が、逆に私には痛く突き刺さる……。

私はこの後、どう責められても構わない……。

今は、お父さんが目覚めた事だけをただ喜んで、寝たままのお父さんの胸板に顔を埋めた……。

「…………お父さあん、お父さん、お父さん、お父さああん…………。良かった、良かったよおおおおっ…………、うわああああん……………」  
ホツとした途端に私の涙腺が崩壊して、ひたすらにお父さんの名前を泣き叫び続けた…………。

お父さんは何も言わずに、泣きじゃくる私の頭を撫で続けてくれた…………。

その優しさに、逆に一抹の不安を覚えながらも、ただただ泣き続けた…………。

）  
）

泣きやんで落ち着くと、私は火事の事と、お父さんの怪我の具合を説明した。

無駄だとは分かっているても、お母さんの事はやっぱり怖くて言えずにいた…………。

「……なあ、ちひろ……?」

「……な、何……!?!?」

身体にビクツと電流が走り、震えが止まらなくなる……。

「……お母さんは……何処にいるんだ……?」

「……」

どう説明したらいいのか分からず、気まずい無言の時間が出来てしまっ……。

「……ちひろ……?」

どうしたらいいの……。

説明しなきゃいけないのに……、言葉が見つからない……。

「……どうしたんだ、ちひろ……?」

言葉は出ないけれど、その代わりに涙が溢れ出した……。

泣いたら分かっ……てしまっ……うからと堪えていても、身体は嘘をつけない……。

それはお父さんに答えをさらけ出しているのと、何ら変わらなかつ……



た……。

「……そうか……、お母さんは……逝ったんだな……」

私の子供染みたダンマリなんて、お父さんに効くはずも無かった……。

私のせいだ……。

私がお父さんやお母さんを……、不幸にしたんだ……。

私は……、親孝行と名ばかりのとんでもない親不孝をしてしまったんだ……。

私なんて……、私なんて……。

追い詰められた私の中で、何かが音を立てて弾けた……。

目の前が真っ白な世界に変わり果て、何も見えない恐怖に罪の意識を叫ばずにはいられなくなった……。

「ごめんなさい！……ごめんなさい！私がこんな旅をプレゼントしたばかりに……、お母さんやお父さんはあああああつ！！いやあああああつ！！」

悲しみと受け入れ難い現実、怒られる怖さというよりも恐怖心が私の心を蝕み、半狂乱に陥れてしまった……。

「ちひろっ、どうした！？しっかりするんだ、ちひろ！！」

「いやあああああつ、お母さあああああん！！いやあああああああつ！！」

泣きわめき、喚き散らし、頭を自ら壁に打ち付けて自虐状態になる……。

自分を傷付けるしか罪を許してもらえないなんて、そんな馬鹿な考えが私の意識を支配する……。

私はいけない子……。

お母さんを死なせ、お父さんを傷つけてしまった、親不孝な子供なんだ……。

私なんて、いなくなってしまうばいいんだ……。

「ちひろおおおっ!!」

急に身体が自由が効かなくなる……。

まるで金縛りにでもあったかのように、がんじからめに私を押さえ付ける……。

真っ白でひとりきりだった世界にお父さんが入り込んで、私を強く抱き締めてきた……。

「早まった事をするな!!ちひろが傷付く必要なんて無い!!お前は何も悪くないんだ!!」

「放して!!放してえ!!放してええええええええええっ!!」

私は自分でも驚くぐらいの力を放ち、お父さんから抜け出そうと必死に抵抗を試みる。

「お前は何も悪くないんだ!!頼むから落ち着いてくれ!!」

尋常じゃない声のやり取りが聞こえたのか、先生達が病室に入ってきた。

「一体どうしたんですか、綾瀬さん!？」

「娘が、ちひろが自分を責めて暴れ出したんです!!」

「いやあああああつ!!」

無我夢中で抵抗をしているうちに、右腕にチクツとした痛みが走った……。

すると次第に興奮した気持ちは和らぎ、それと共に意識も薄らいでいく……。

再び真っ白になった頭の中は、次第に漆黒の闇に染まっていった……。

）

「……ちひろ……、気が付いたか……?」

目を覚ますと、お父さんのベッドの横にストレッチャーが置かれていて、その上に私は横たわっていた。

お父さんは私の側に立って、ヒリヒリと痛むおでこを擦ってくれた。

その痛みで、さっきまでの出来事を鮮明に思い出した。

「……わ、私……」

「先生が落ち着かせる為に、ちひろに精神安定剤を注射してくれたんだ。頭は肌が赤くなる程度で済んだそうだ」

優しく擦る手から腕に目線を送ると、さっきまでは腕に巻かれていなかった包帯が目につく。

その近くに挿入されている点滴を見て、その理由がすぐに分かった。

私を制する為に、挿入されていた点滴を無理矢理外してきたからだ……。

今はキャスターの付いた点滴と共に移動が可能になっている。

私の馬鹿げた行為から一度ならず、二度までもお父さんを傷つけてしまった……。

自分のした事の愚かさを思い知り、申し訳無い気持ちでいっぱいになって、涙が止まらなくなる……。

「…………お父さん…………、ごめんなさい…………、ごめ…………っ…………」

もう昨日からどれだけの水分を失ってるのかと思えるぐらい、私は泣き続けている……。

どれだけ泣けば、この悲しみは収まってくれるんだろう……？

こんな泣き虫で情けない私を、お父さんは私を抱き締めてくれた…。  
優しく、それでいて力強く……。

「もう自分を責めるな……。お母さんがいなくなって、ちひろにまで何かあったら、俺は……、どうしたらいいんだ……」

「……、ごめ……なさ……っ……、うわああああん……」

「ちひろ……っ……」

お父さんの暖かい胸の中で泣きながら、お父さんは静かに語り始めた……。

「……旅館が火事になった時、お母さんは危険もかえりみず、他の宿泊者や旅館の従業員を避難させようと、必死で動き回っていた……」

……え……？

お母さんは逃げ出す間もなく、火事に巻き込まれたと思い込んでいた……。

「……じゃあ、避難しようと思えばお母さんは……？」

「……ああ、十分に避難する事は出来た……。でもな、お母さんは『私は警察官よ。ここで逃げ出すわけにはいかんのよ。他の人達を

助けに行かなきゃ』って言って、他の人達を救助しに行ったんだ…。  
俺も微力ながらお母さんの手助けをしていたんだ……」

その尊い精神は、昔からまったく変わっていなかった……。

私が尊敬してやまないお母さん、そのままだった……。

「……そして……、お母さんがまだ取り残されている人がいる部屋に入った時……」

言葉に詰まったのか、しばらく間が開いてしまう……。

「部屋が……爆発して……、俺はその瞬間、爆風に吹っ飛ばされて……」

想像するのも辛い状況に、私はつい顔を背けてしまう……。

「……お母さんは最期まで……私の尊敬する警察官……、じゃったんじゃねえ……」

「……ああ、お母さんは……、まひろは……職務を遂行して……、逝ったんだ……っ……」

生まれて初めて見る、お父さんの涙……。

殉職したとは言え、最愛の人を失った悲しみは、とても計り知れない……。

「……ちひろ……、情けないかもしれないが、今だけでいい……。  
泣かせて……くれないか……？」

「……うん……、うんっ!!」

お父さんは私をさらに強く抱き締めて、その胸に秘めた悲しみの丈を爆発させた……。

「まひろおおおおおおおおおおっ!! うわあああああ……  
……」

「うわああああああん……」

私も泣いた……。

お父さんと私の泣き声は、廊下にいた人がもらい泣きするくらいに大きく、悲しく、響き渡った……。

）  
）



「……………っ……………、……………ひっ……………ん……………」

啜り泣く声がある……………。

誰か一人という訳ではなくて、皆が堪え切れずに涙を流していた……………。

「お母さんは警察官としての職務を果たしたんだと思ったら、その時はなんだか少し、救われた気がしたの……………」

あの頃は、そう思って罪を背負った自分に言い聞かせる事が出来ていた……………。

……………まだ、あの頃は……………。

『……………でも、ちひろちゃんは今でも、罪の意識を背負っているのよね……………』

海衣奈ちゃんは私が倒れる前の言葉を聞いているから、その疑問点にいち早く気が付く事が出来た……………。

「……………うん……………。今はあの時以上に、お母さんをしなせてしまった罪の意識に苛まれてるの……………」

『……………どうして……………？おじ様はちひろちゃんは悪くないって、言ってくれてるじゃない……………』

「確かに不慮の事故でお母さんを亡くしてしまったのは事実かもしれないけど、それを引き摺ったらお母さんはいつまで経っても、浮かばれないと思うわ……………」

「海衣奈ちゃんや和ちゃんの言っている事は分かっている。でも私が罪を背負っているのは、ある出来事があったからなの……………」

「……………ある出来事？……………」

私はその出来事を話す為に、本来ならここにいらなくてもいい人を残していたの……………。

私はその人にそっと顔を向けて、恐る恐る話し掛けた……………。

「……………ねえ、お父さん……………」

「……………どうした、ちひろ……………？」

「これから話す事は、お父さんが知らない出来事なの……………。というよりも、黙っていた事なの……………」

「……………黙っていた事……………？」

お父さんが眉をひそめ、訝しげな表情をする……………。

これが知れたら、さすがに怒られる事は間違いない……。

「私がお母さんに贖罪の気持ちを持ったのは、お母さんを死なせてしまった事だけじゃないの……。もうひとつ、理由があるの……。」

相変わらず流れる涙も気にも止めず、涙声のまま私の罪を話し出した……。

まだ入院中のお父さんを残して、私は広島に戻ってきた。

亡くなったお母さんの葬儀をする為に……。

ただ、私一人では葬儀の手筈を整えたりなんて出来ないし、「冠婚葬祭のルールも何も知らない……」。

そこで私は、お母さん方の両親に手伝ってもらおう事を決めた……。

お父さんは両親を早いうちに亡くしていたから、これしか方法が無かった……。

お父さんは何故か、お母さん方の両親の話はしたがらなくて、私が

物心ついた頃から会った記憶が無い……。

多分、私は初めて会う気がする……。

そういえば何処に住んでるのかも勿論だけど、電話番号も知らない……。

どうすればいいのか途方に暮れていた、その時だった……。

く ピンポーン……

インターホンが鳴り、私はいそいそと玄関に向かった。

「はい、どちら様ですか？」

呼び掛けてみるけれど、返答は一切無し……。

もしかしたら、ニュースでお母さんが亡くなった事を知って、弔問に来てくれたのかもしれない……。

取り敢えず、玄関の鍵を開けてみる事にした……。

…ガチャツ…。

鍵を開けた瞬間、ドアを開けようとする前に、向こう側からドアが開けられた……。

そこに立っていたのは喪服に身を包んだ、一人の女性だった……。

「あなた、もしかしてちひろちゃん？」

その女性は何とも綺麗な顔立ちで、微笑みながら質問を切り出してきた。

「は、はい……、そうですけれども……？」

私がそう答えた途端、

「……そう……、あなたがね……」

女性の表情は一変して、凄まじい形相で睨みつけてくる……。

周りの空気が凍り付き、身体中に悪寒が走る……。

躊躇する間も無く、女性は玄関に入るなりドアを勢いよく閉めた。

鍵が閉まった次の瞬間……、

パァ…………ン…………

何が起きたのか、一瞬理解出来なかった……。

乾いた音が響き渡り、左の頬に鈍い痛みが走る……。

壁に右肩からぶつかり、廊下の上に倒れ込む……。

左の頬を手で押さえながら女性を見上げると、振り抜いた右手が震えていた……。

荒い息遣いが聞こえ、その形相は怒りに満ちている……。

ワナワナと震える口から予測だにできなかった、とんでもない言葉が発せられた……。

「…………この…………、人殺し!!」

何を言われたか理解する間も無く、女性は私の三つ編みを引っ張りあげ、さらに往復で張り手を私に打ち込む。

眼鏡が吹っ飛び視界が悪い中、女性はこう叫んだ。

「……私の……、私の可愛い一人娘を……、アンタが殺したのよ……」

……一人娘……？

……ま、まさか、この人……！？

「……もしかして、貴女は……？」

恐怖で震える唇をなんとか動かして発した質問に、女性は静かな怒りを込めた口調で、こう答えた……。

「……そうよ……、私はね……、アナタに殺されたまひろの……」

「母親よー!!」

これがお母さん方のお祖母様との衝撃的な初対面だった……。

これから私の身に起きる出来事は、忘れたくても一生忘れられない……。

恐怖と悲しみに満ちた、有り得ない出来事を……。

## 第16話「ちひろの過去（4）親孝行の代償」（後書き）

如何でしたでしょうか？

ダークなお話で、辛かったかと思われませう。

過去編はあと2話で終了する予定ではありますが、ここでちょっとお知らせです。

明日からゴールデンウィークに突入するにあたって仕事が忙しくなり、地獄という言葉がまだマシと思うぐらいの超繁忙期へと突入します……。

よって、ゴールデンウィーク中の更新は、事実上不可能となってしまいました……。

つまり、次の更新は早くても5月9日以降です……。

楽しみにしてくださっている読者の方には、本当に申し訳ございません……。

どうぞ、楽しいゴールデンウィークをお過ごしください……。

それではまた、次話でお会いしましょう。



第17話「ちひろの過去」(5) お祖母ちゃん (前書き)

ようやくゴールデンウィークの超繁忙期も抜け出して、なんとか書き上げる事が出来ました。

今回は過去の回想のみの展開になります。

前回、衝撃的な出会いをしたちひろとまひろのお母さん。

果たして、どんな結末が待ち受けているのでしょうか？

それでは第17話をどうぞ、御覧下さい。

第17話「ちひろの過去」(5) お祖母ちゃん

「ごめんなさい!! 本当にごめんなさい!!」

「よくもうちのまひろを……、この人殺し!!」

執拗に張り手を繰り返してくるお祖母さんに、ボクサーの様に腕を前に出して防御するのが精一杯の私……。

三つ編みを乱暴に引っ張り上げられ、逃げようにも逃げられない……。

力のある大人と一介の子供とでは、力量の差は歴然としていた……。

「この家を探すのに近所で聞いたら、アンタがプレゼントした旅行のせいで娘が亡くなったって言うじゃない!!」

鋭い眼光で睨み付けてきて、私の目は恐怖で見開かれ、血の気が一気に引いていく……。

「娘を返して!! 私の大切な一人娘を返してって言ってるんよ!!」

「ごめんなさい!! お願いだから許してください!!」

「いくら謝ったって、まひろは帰ってこないんだよ!!」

どんなに必死で謝ってみても、激情して聞く耳を持たないお祖母さん。

お祖母さんの顔を直視出来ないくらいの張り手の応酬で、頬の痛みばかりか耳鳴りまでしてきた……。

「よいよ（しかし）ほんま、カエルの子はカエルじゃねー！」

私は果たして何の事を言われているのか、まったく要領を得ていなかった……。

ただ、これだけは分かる……。

この人は、お父さんを嫌っている……。

お祖母さんはその理由を、憎しみを込めて吐き捨てるかのように言い放った。

「アンタの父親はね、アタシの娘をかつさらっていきよったんよ。アンタにも分かるように言えばね、駆け落ちしよったんよー！」

……駆け落ち……！？

いくら勉強ばかりしていた私でも、まだまだ子供の私でも、そのく

らしい事は知っていた。

「あの男だけでは飽き足らず、アンタも私からまひろを奪っていくんかいね!!」

この人が私を、そしてお父さんを憎む一番の要因って、それだったんだ……。

だからお父さんは私をお祖母さんに会わせなかったんだ……。

そんな事を考えていると、乱暴に引つ張り上げられていた三つ編みから、急にお祖母さんが手を離れた。

「私は旦那に早い時期に先立たれてね、あの子を育てる為に一生懸命働いたんよ。身内のいない私にとって、あの子は掛け替えの無い大切な一人娘だったんよ……」

さっきまでの憎悪に満ちた顔は、いつの間にか消えていた……。

「どんなに寂しゅうても辛かろうとね、あの子の笑顔がありゃあね(あればね)……」

その顔は間違いなく……、

「一生懸命頑張る事が出来たんよ……」

子を想う優しい母親の顔、そのものだった……。

「私にとってまひろはね……、私の生きる糧そのものだったんよ……」

膝から崩れ落ちて廊下に両手を付けて、廊下にはポタポタと滴が数滴落ちて、乾いた板に染み込んでいく……。

「まさかこんな形でお別れなんて……、思いもよらんかったわいね……」

私にとっては大切なお母さんだけど、お祖母さんにとっては大切な一人娘を亡くした……。

私がお母さんと接してきた以上に、お祖母さんはお母さんとの親子の触れ合いの期間と思い出があったに違いない。

その計り知れない悲しみは、私の悲しみ以上かもしれない……。

お祖母さんのとめどなく溢れ出る涙と嗚咽が、それを証明していると私は実感した……。

「……まひろ……、まひろお……」

泣き崩れるお祖母さんに、私は意を決して歩み寄った。

また叩かれるかもしれないけれど、そんな事はお構いなしにハンカチでそっと、お祖母さんの涙を拭う……。

「……な、何するん！？余計な事しんさんなや（するんじゃない）！」

お祖母さんは私を叩こうと手を再び振り上げたけれど、その時点で動作は完全に止まった……。

「……私のしでかした事が、大好きなお母さんを大変な目に遭わせてしまいました……」

あれだけ叩かれても出なかった涙が、今になって溢れ始めた……。正座をして、両手を床に付ける。

「お母さんに日頃の感謝を込めて贈った、旅行のプレゼントだったんです……」

日頃の感謝。その気持ちを、在りし日のお母さんとの日々を思い出しながら、切々と語った……。

「お母さんは私にとって、憧れの存在でした……。警察官の仕事をしているお母さんは、本当に格好良かった……。私もあんな立派な警察官になりたいくて、一生懸命勉強しました……。私立皇中学に合格出来たのも、お母さんの心からの支えがあったからです……」

溢れ出る涙も気に止めず、私はお母さんへの感謝の言葉を綴り続けた……。

「仕事でどんなに疲れてても、お母さんは私に暖かい手料理を作ってくれました……。お母さんの作る御飯は食べる人を幸せにする、気持ちのこもった物でした……」

そして感謝の気持ちは、全ての原点へと集約されていく……。

「私はお母さんの子供に生まれて、本当に良かったと心から思っています……。そして、私を産んでくれた事を心から感謝しています……」

そして私は、目の前にいるお祖母さんの目をしっかりと見据えて、涙で言葉に詰まりながらも、更に感謝の気持ちを伝えた……。

「……そして……。……。そして……。っ……。お母さんを……。産んでくれた……。そして育ててくださった……。お祖母ちゃんにも……。心から感謝しています……。っ……。」

お祖母ちゃんがいたからこそ、お母さんがいて、そして今、私がいる……。

感謝の気持ちがあるからこそ、謝罪の気持ちも溢れ出てくる……。

「……そんなお祖母ちゃんの意に背いて……、親不孝を……してしまつて……」

今すぐにも泣き崩れそうだったが、しっかりとお祖母ちゃんの間を見て話す事に意識を集中した。

目を一時でも逸らせば、伝えたい事が完全に伝わらない気がしたから……。

「私を叩く事で少しでも気が紛れるのであれば……、幾らでも叩いてもらつて結構です!!」

そして、胸に秘めた確固たる決意を打ち明けた。

「お母さんの代わりは私が務めます。そして私は、お母さんが生きていた証を残す為に、立派な警察官になつて跡を継ぎます!!」

言いたい事を全部伝えた途端に、一気に気力が抜ける……。

床に突つ伏して私の罪の深さを嘆き、声を爆発させて泣き叫んだ……。

「……お母さん……、お祖母ちゃん、ごめんなさい……、ごめん……」



…なさい……。うわああああああん……。わあああああ  
……」

泣き始めてから長い時間が経ったのか、それともまだ僅かばかりの  
時が過ぎたのか、まったく分からない……。

私の視界は急に床から離れ、私の肩を掴んで身体を起こし上げたお  
祖母ちゃんの顔をまつすぐ見つめる状態になっていた。

また叩かれる……。そう覚悟して歯をくいしばり、目を固く瞑る…  
…。

「……………!!……………えっ……………!？」

そんな悲痛な覚悟は一瞬にして、身体や思考が固まるほどの戸惑い  
へと変わっていく……。

私の顔のすぐ横には、お祖母ちゃんの顔がある……。

私の背中は、お祖母ちゃんの右手に引き寄せられている……。

残った左手は、私の頭をそっと撫でてくれている……。

抱き締められているという事に気がつくまで、一体どれだけの時間  
を費やしたんだろう……。

溢れ出ていた涙が止まってしまっぐらい、私は混乱していた……。

「アンタは……ちひろは、まひろの事をそんなにも愛してくれてたんじゃない……。アタシと同じか、それ以上に……」

さっきまでの憎悪に満ちた、荒々しく低い声とはまったくトーンが違い、優しさに満ち溢れた、ゆったりとした口調で私に話しかけてくる……。

「まひろがちひろを大切にしていたのも分かったし、ちひろはまひろを尊敬してくれてたんじゃないね……」

「それに、あんなに酷い仕打ちをってしまったアタシを非難するどころか、感謝までしてくれるなんて……。優しすぎるくらいに優しいんじゃないねえ、ちひろは……。昔のまひろと一緒に……」

お母さんと私を重ね合わせて、愛しそうに強く抱き締めてくる。

「まひろを失った悲しみを事もあろうに、怒りに変えてこんな形でぶつけてしまうなんて……。ごめんね、ちひろ。痛かったじゃろ？」

普通の子供でも、この言葉だけでも泣くシチュエーションなのに、お祖母ちゃんには追い討ちとも言える、氷解の一言を放った……。

「ちひろ、私の可愛い孫のちひろ……」

……孫……、確かに今、そう言ってくれた……。

このまま一生嫌われると思っていた人から、そんな心温まる愛称で呼ばれるなんて、思いもしなかった……。

それだけで、私の涙腺は脆くも崩壊していった……。

「……お……、お祖母ちゃん!!お祖母ちゃ、お祖母ちゃん。うわああああああああん……」

「ちひろ、ごめんね……。本当にごめんね……」

わだかま 蟠りが消えて泣いたのもある……。

けれど一番泣いたのは、お母さんに先立たれ、お父さんも入院して家にいない、途方もない寂しさからだった……。

お祖母ちゃんの暖かい胸の中、私は安心感に包まれて、しばらく甘えん坊の様に泣いていた……。

）  
）

それからお祖母ちゃんは葬式の手配の一切を、手慣れた感じで仕切

ってくれた。

こういう時、熟知した大人の人の存在は極めて大きい。

ちなみにお祖母ちゃんとは呼んでるけど、まだ50才前の女性だから……。

「ちひろ、御飯できたわよ」

まだ料理のできない私はここ最近、コンビニ弁当や外食で済ませていた。

それを知ったお祖母ちゃんは、わざわざ買い物までしてくれて、私に手料理を振る舞ってくれた。

初めて食べたお祖母ちゃんの料理。

肉じゃがやきんぴらのいわゆるお袋の味は、お母さんのお母さんだけあって、本当に美味しかった。

お母さんの料理は、お祖母ちゃんの味をしっかりと受け継いでいた。

食事中、お祖母ちゃんは昔のお母さんの生い立ちを話してくれた。

近所でも評判だったという、可愛い子供の頃の話。

お母さんが私の年齢ぐらいの時は、眼鏡を除けば瓜二つな容姿だった事。

高校生の時は男子からの告白責めだったという話。

私の知らないお母さんが、そこには確かに存在していた。

お祖母ちゃんは話が進むにつれて、在りし日のお母さんを偲んで声を詰まらせる事が多くなった……。

思い出を語るには辛いはずなのに、それでも語るのを止めようとはしなかった……。

多分、お祖母ちゃんは私とお母さんの生きて来た証を共有したかったのかもしれない……。

私達だけでなく、皆にお母さんをいつまでも覚えていてもらいたくて……。

ただ、お父さんとの馴れ初めだけは、断じて話そうとはしなかった……。

やっぱりお父さんの事は、どんな事があっても許す事は出来ないみたい……。

変な言い方だけど、愛の結晶の私にとってはお父さんを否定されると、私まで否定されてる感じがして、凄く寂しかった……。

お祖母ちゃんの話が終わると、私はお母さんとの思い出話を始めた……。

お祖母ちゃんの耳にタコが出来そうなくらい、私が知り得る限りのお母さんの家での様子や、仕事でのエピソードなんかを延々と語った……。

やっぱり悲しみの涙は流れるけれど、私もお祖母ちゃんの知らないお母さんを知って欲しかったから、気にも止めず語り続けた……。

お祖母ちゃんは涙を流しながらも、話を聞き入る表情はなんとも穏やかだった……。

）

）

そして夜も更けた夜の10時頃……。

お祖母ちゃんは帰ると言い始めた……。

遅いから泊まっていってと言っただけ、お祖母ちゃんはおかたくなに拒んだ……。

「本当に泊まっていけないの、お祖母ちゃん……」

寂しそうに呟く私に近付いて、しょうがないねと言わんばかりに頭を撫でてくる。

「まひろの思い出がいっぱい詰まったここにいるとね、正直辛いんだよ……」

「……そうだよ、ごめんなさい……」

私は軽率な発言を後悔して、お祖母ちゃんに素直に謝った……。

お祖母ちゃんにとっての大切な一人娘を亡くしたばかりなのに……。

その悲しみを癒す場所は、この家には何処にも無いのに……。

「気にせんでもええんよ」

お祖母ちゃんはまた私を強く抱き締める。

私も背中に手を回して、それに静かに応える……。

お祖母ちゃんはしばらく、多分時間にしたら2〜3分くらいなんだろうけれど、私を離そうとはしなかった……。

私もやっと巡り逢えたお祖母ちゃんとの別れが辛くて、腕の力を抜く事はしなかった……。

今までに甘えられなかった分、しっかりと抱き締める……。

その間、私達は一言も言葉を発する事は無かった……。

「……それじゃあ、そろそろ行くけんね……」

後ろ姿が遠ざかる時、私は叫んだ。

「お祖母ちゃん、葬式の日にまた会えるんじゃない？」

お祖母ちゃんは私の問い掛けに歩みを止めて、顔だけをこっちに向けた……。

「……ああ、会えるよ。あ、あと今日の事はあの男……、……お父さんには言っんじゃないよ……」



「うん、分かった」

お祖母ちゃんがあの男とは言わず、お父さんっていつてくれた。

些細な事だけれど、少しお祖母ちゃんが歩み寄ってくれた気がした。

「じゃあね、おやすみ」

「うん、おやすみなさい。お祖母ちゃん」

そしてお祖母ちゃんは暗闇の中へと、静かに消えていった……。

私は姿が見えなくなっても、しばらく手を降り続けた……。

）  
）

そして、お通夜当日。

今日は朝から悲しみの涙雨がシトシトと降り続いていた……。

私は喪服替わりに、今度入学する皇中学の制服に身を包んでいた……。

制服はお嬢様を意識した、紺を基調とした膝下まである丈の長いス

カートに、白いスカーフののせーラー服。

有名な学校だから、制服はてっきりブレザーだと思ってた……。

入学前に制服姿をこんな形でお披露目する事になるなんて、思いも  
しなかった……。

「この度は誠に、御愁傷様でした……」

家では弔問に来る人数が捌けないという事で、お祖母ちゃんが葬儀  
場を手配してくれていた。

夕方前という事もあり、弔問に訪れる人が多くて、終始対応に追わ  
れた……。

お祖母ちゃんがあの日、冠婚葬祭に関する本を置いてってくれて、  
その内容を覚えたから対応に困る事は無かった。

それに、お母さんの仕事仲間でもあった警察の方達が手伝ってくれ  
ている事もあって、準備はスムーズに進んでいった……。

……そういえば、お祖母ちゃんがまだ来てない……。

実はあの日、結局連絡先を知らないまま別れてしまった……。

だから今日、会った時に聞いておこうと思ったんだけど……。

会えるって約束したんだし、それに遅れてるだけかもしれないから、信じて待つ事にした……。

）  
）

お通夜も無事終了して、甲問に来て下さった皆さんにビールとお寿司を振る舞い、皆さんがお母さんとの思い出話に花を咲かせている最中。

皆さんにビールを注いで周っている最中、背後から私の肩に手がそっと置かれた……。

「……あ、署長さん……」

お母さんが勤めていた警察署の署長さんだった。

歳は50代位で、歳とは思えないほどガッチリとした肉体の持ち主。

その肉体美とは裏腹に凄く笑顔が眩しくて、満面の優しさを醸し出していた。

「ちひろちゃん、ちょっと今いいかな？」

「……は、はい……。すみません、少しの間、中座させていただきま  
す」

周りの人に断りを入れて、少し痺れがちな足をどうにか前へ進めて、  
署長さんの後を追った。

「どうかされたんですか？いきなりこんな誰もいない部屋に呼び出  
しだなんて……」

私は斎場の別の部屋に通された……。

「……うん、ちょっとちひろちゃんの耳に入れたい話があつてね……」

「……話……ですか……？」

「……うん……」

署長さんのあまりにも神妙な面持ちに、なんだか身体中に妙な悪寒  
が走る……。

少なくともいい話ではない……。

お母さんに関わる事だとは思っただけ……。

「……ちひろちゃん、お母さん方のお祖母さんは知ってるかな？」

「……は、はい……」

ここでまさかの、お祖母ちゃんの話が出てきた……。

結局お祖母ちゃんが姿を見せる事が無かっただけに、なんだか嫌な予感に苛まれるのは禁じ得ない……。

「……実は今日の朝……」

その言葉からどれだけ歯痒い間が開いたのか……。

耐え切れなくなりそうになったその時、署長さんの口がゆっくりと開いた……。

「……自で……亡くなっていたんだ……」

「……………え……………?」

構えていたはずなのに、あまりにも急な話に流れる時が止まった…。

「自ら命を絶つたんだ……………。遺書らしき物も見つかってね」

……………自ら……………命を……………!?

どうして……………?

初めて出会ったあの日、お祖母ちゃんと葬式の日に出会う約束してたのに……………。

「それでね、その遺書なんだけど、ちひろちゃん宛てに書かれていたんだ」

「……………私に……………、ですか!??」

「これなんだけどね……………」

署長さんが喪服の胸ポケットから白い封筒を取り出して、私に差し出した。

「……………読んでも……………、いいですか……………?」

「ちひろちゃん宛てだからね、構わないよ」

私は封筒を受け取った。

確かに“ちひろへ”と封筒の中央に筆ペンらしき物で書かれてる……。

封はまだ開けられてなく、私が初見みたい……。

震える手をどうにか抑えて、封を切る……。

中には数枚の便箋が綺麗に折り畳まれていて、私は恐る恐る、その内容を確認した……。

『ちひろへ』

この手紙があなたに渡った時、

アタシはもういないだろうね。

前にも言ったと思うけど、

まひろがいない“ここ”に

いるのは、あまりにも

辛いのよ……』

冒頭部分を読んだ途端、身体の震えが止まらなくなる……。

私はとんでもない勘違いをしていたんだ……。

お祖母ちゃんの言う“ここ”は家の事じゃなかったんだ……。

……お母さんがいない、この世界だったなんて……。

『まひろは私のすべて。』

親より先に娘に先立たれて、

これ以上のショックは無いわ。

だから私は、まひろがいる

あつちに旅立ちます』

どうして!？

私やお父さんじゃ、お祖母ちゃんの悲しみを癒す事が出来ないって事!？

お母さんの替わりにはなれなかったの……? ?



『でもね、実は一時迷ったの。

それはね???、

ちひろ、あなたに会えたから。

ちひろには言っていなかったけど

まひろがちひろのお父さんと

駆け落ちした時ね、アタシは

あの二人を勘当したの。

私からまひろを奪った男と

私を捨てて出ていったまひろに

怒りが収まらなかったの。

二度とアタシの家の敷居を

またぐなって言ったのを

今でも覚えてるわ』

だからお父さんやお母さんは、私をお祖母ちゃんに会わせなかったんだ……。

うっん、会わせる事が出来なかったんだ……。

『まひろはね、度々アタシの

所に手紙を出していたの。

近況報告だったり、

アタシの健康を気遣ったり、

そんな内容だった。

最初のうちは読み終わる前に

怒りまかせに破り捨ててた。

でもある時を境に、

破れなくなつたの。

それはちひろ、

貴女が生まれた時よ』

私が生まれた時……。

そこで便箋は埋まってる、一枚目に差し替える。

『手紙と一緒に添えられた

一枚の写真があったの。

まひろの胸に抱かれた

小さくて可愛い赤ちゃん。

見た瞬間、今までの怒りが

みるみるうちに溶けていった。

アタシに孫が出来たんだって

思ったら、凄く嬉しかった』

『私の娘、そして

お母さんの初孫です。

ちひろと命名しました”

写真の裏に書かれてた

まひろの綺麗な直筆。

アタシの宝物になったわ』

お祖母ちゃんの私に対する愛しさが伝わってくる。

同時にそれがあまりにも辛くて、涙が止まらなくなる……。

……お祖母ちゃんはもう……、いないんだもん……。

『今すぐにでも会いに行きたい

と何度思った事か???。

でも勘当した手前もあるし、

私の都合で黙って引っ越して

しまって、まひろ達も引っ越し

してしまって、しばらくの間

音信不通になってしまったの。

今思えば、それがまひろ達との

最後の別れになってしまった。

会えない寂しさに、どれだけ涙

を流したか分からない????。

成長したまひろやちひろを

一目確かめたかった????。

そして、この手で思い切り

抱き締めたかった????』

この辺りから、不自然にインクが滲んでいる。

今の私なら分かる……。

お祖母ちゃんは溢れる涙を拭う事なく、この遺書を書き上げたんだ

……。

私の涙もインクを滲ませるには充分だった……。

お祖母ちゃんの胸が張り裂けそうな辛さが、この文面からヒシヒシと伝わってくる……。

『最後にちひろに会えた事は、

本当に嬉しかった。

あんな出会いになつたけれど、

あの日の出来事は忘れないわ。

???でもね、まひろを失つた

悲しみは、やっぱり癒す事が

出来なかつた???。

こんなお祖母ちゃんで、本当に

ごめんね、ごめんね???。

最後の一枚に、私からの

最後のメッセージを綴ります』

嗚咽が止まらない中、私は震える手を必死に動かして、最後の一枚を手にした……。

『死んでもなお、

アタシを忘れないで。

私もちひろを忘れない。

せめて、あと一言だけ。

二度と会えないけれど、

涙に埋もれることなく、

立派に生きていきなさい。

長い手紙になっただけど、

さようなら、ちひろ。

いつまでも元気でね。

（前だけを見て、私の最後の

メッセージを受け取ってね）』

「…………お祖母…………ちゃん…………、お祖母ちゃんああああん！！わああああああん…………」

私のせいで、お母さんばかりかお祖母ちゃんまで失ってしまった…………。

張り裂けんばかりの悲しみを、声の大きさに比例させて泣き叫んだ…………。

私では、お母さんの代わりにはなれなかったんだ……。

その後悔の念が、私をある想いへと駆り立てた……。

お母さん、お祖母ちゃん。

私はお母さんの代わりに生きていきます。

二人の“おかあさん”を失った罪を背負って、しっかりとお父さんを支えていくからね……。

）

「……これが私の抱えていた、消える事の無い罪……」



第17話「ちひろの過去（5）お祖母ちゃん」（後書き）

次回、いよいよ過去編が完結します。

過去を知った皆は、傷心のちひろを救えるのか？

そして、ちひろの未来はどうなるのか？

長い文章になりそうなので時間が掛かると思いますが、早めに更新しますのでお待ち下さい。

それでは次話でお会いしましょう。

追伸ですが、今回の文章にある謎を仕掛けておきました。

勘のいい読者の皆さんなら、分かった方もいらっしゃるかもしれませんが。

ただ、感想などでその謎と答えは書かないで下さい。

ネタバレとなってしまうので……。

## 第18話「ちひろの過去（6）未来へのメッセージ」（前書き）

大変お待たせしました。

ようやくちひろの過去編が、取り敢えず終わります。

取り敢えず、の意味は後書きで説明します。

あと、今までにも何回か注意書きとして書いてますが、今回も長いです。

というよりも今までで一番長くなって、13ページに及んでいます。

どうか、ゆっくりとお読みください。

過去を聞いた皆は、ちひろを救えるのか？

そして、ちひろと皆の運命は如何に？

あと前回の後書きで言った謎も、今回説明します。

それではどうぞ、御覧下さい。

第18話「ちひろの過去（6）未来へのメッセージ」

「……せっかく仲直りできたのに……、そんなのってないよお……」

「……お姉ちゃん……」

唯ちゃんはその大きな瞳から、ボロボロと大粒の涙を零してた……。

憂ちゃんは自身の涙を拭う事もせずに、唯ちゃんの涙をハンカチで拭った……。

「……どうして……、そんな事に……」

「……漣……」

漣ちゃんは律ちゃんに抱き付いて啾り泣き、律ちゃんは涙を浮かべながら漣ちゃんの背中を優しく擦っていた……。

「……ちひろちゃんに、そんな過去があったなんて……」

『……辛すぎる……、そんな過去なんて……』

「……ごめんなさい、私、上手く言葉に出来ない……」

ムギちゃんも海衣奈ちゃんも和ちゃんも、皆身体を震わせ、涙を浮かべながら睨り泣いていた……。

「でもまだ、私の罪はこれですべてじゃないの……」

私はソファから立ち上がり、壁際にもたれ掛かって話を聞いていたお父さんに深々とお辞儀をする……。

「お父さん、ごめんなさい……。ごめん……。なさい……。ごめんなさい……」

溢れる涙が眼鏡を濡らし、フローリングの床に落ちて染み込んでいく……。

足音が聞こえてきて、私に徐々に近付いてくるのが分かった。

私はずっと今まで、お父さんを騙してたんだもの……。

怒られても仕方が無い……。私は嘘を吐いていたんだから……。

私は身体をこわ張らせて、身構えた……。

「……ちひろ……」

「ごめんなさい、お父さん……。私、お祖母ちゃんが亡くなった事……。今まで黙ってました……」

「……………え!?」「……………」

皆が一様に驚きを隠せないでいた……。

お父さんが知らなかった事、それはお祖母ちゃんの死、そのもの……。

「お母さんを失ってショックの大きいお父さんに……。お祖母ちゃんが亡くなった事が分かったら……。立ち直る事が出来ないと思つて……」

でも、それはしてはいけない過ちだった……。

「……………でも例え、勘当されていたとしても……。お父さんにとって大切な人の死を……。黙っていた事は……。許されない罪なの……っ……………」

私は膝から崩れ落ちて、口を手で押さえながら嗚咽に身体を震わせた……。

犯した罪に苛まれながら、ただひたすらに泣いた……。

「ちひろ……っ……」

「!？」

「……どうして……、どうしてお父さんは……、こんな時にも怒らないの……？」

不意に抱き締められた予期せぬ温もりの中、そんな考えが頭を過ぎった……。

「……どうして……、どうして怒らないの……っ……？怒って……、怒ってよお……、お願いだから叱ってよお……っ……」

その優しさが、怒られるより遥かに辛い時だってある……。

涙ながらに嘆願しても、お父さんが私を抱き締める力が緩む事はなかった……。

「……俺が退院して、ちひろが中学に入学して間もない頃、俺はまひろが眠るお墓に一人で行ったんだ……」

「……え……？」

「お墓に花を手向けた時、ひとつしかないはずの卒塔婆そとばが二枚ある事に疑問を抱いたんだ」

卒塔婆が二枚……。

……そっか、そういう事だったんだ!?

「ねえ、和ちゃん。卒塔婆って何?」

「卒塔婆っていうのは、お墓に立てられてる細長い木の板の事よ。見た事無いかしら?」

「あ、そう言われれば見た事ある気がしてきた」

「あれには亡くなった人の戒名や没年月日が記されてるの。基本、亡くなった人一人に対して一枚立てる物なのよ」

「へえーっ」

そう、和ちゃんの説明そのものに、お父さんが察した疑問の答えがあった。

「二枚あるという事は、このお墓には二人の人が埋葬されている訳だ。それで調べたら、お祖母ちゃんの名前が記されてたんだ」

どんなに隠し事しても、いつかはバレてしまうもの……。

子供染みた隠し事は、大人の前では何の意味も持たなかったみたい……。

「お墓を管理するお寺の住職さんに話を聞いたんだ。ちひろ、お前  
お祖母ちゃんの葬式をしてくれたんだろ？」

「……うん……。聞けば、お祖母ちゃんは近所付き合いもなくて、  
身寄りも無かったと知ったの……」

そんな孤独な死は、あまりにも悲しすぎる……。

「……だから、お母さんの香典を集めて、細やかだけどお葬式を執  
り行つて、お母さんと同じお墓に埋葬してあげたの……。これで……  
……、お母さんと……。っ……。一緒に……。なれるって……」

私はお父さんの胸の中で泣いた。

「お母さんと……。お祖母ちゃんに……。せめてもの……。罪滅ぼしと  
……。思つて……」

「そんな親孝行なちひろを叱るなんて、出来る訳ないだろ？まひろ  
やお祖母ちゃんも、天国で喜んでるよ」

その言葉を聞いて私はそつと、お父さんから離れる……。

「……ちひろ？」

お父さんにしたら、私を救つた為の言葉だったのかもしれない……。

でも私にとって、その言葉を受け入れる訳にはいかなかった……。



「……うつん、お母さんもお祖母ちゃんも私の事、ずっと怨んでるの……」

「まひろが？お祖母ちゃんが？そんな訳ないだろう？」

「そつだよ、なんでお母さんやお祖母ちゃんがちひろを怨まなきやいけないんだよ？なあ、みんな？」

お父さんや律ちゃん言葉に、皆も頷いている。

確かに説明不足で、皆は話の要領を得ていない……。

私は悲痛な胸の内を打ち明ける事にした……。

「……私ね、時々悪夢を見るの……」

「『悪夢？』」「『悪夢？』」「『悪夢？』」

「夢の中にお母さんが出てくるの……。そしてお母さんは、怒りから毛むくじやらの化け物に姿を変えて、私に迫ってくるの……」

「ひびっ……」

怖がりの澁ちゃんは耳を塞いで身体を震わせてる。

「そして、決まってこう言うの……。『ヒトゴロシ』『ユルサナイ』  
って……」

思い出しただけでも、身体の震えが止まらなくなる……。

「そして……、許しを乞う私を……、悪夢の中で……殺すの  
……」

「……なっ!？」

驚きの色を隠せないでいるお父さん……。

「……お父さん、昨日の見た悪夢の内容、これで分かったでしょ？  
海衣奈ちゃんと唯ちゃんも……」

海衣奈ちゃんも唯ちゃんも、言葉を失って呆然としていた……。

「お母さんは自分を死に追いやった事もだけど、お祖母ちゃんをも  
死なせてしまった事を許さないって言ってるの……」

「……そんな……、まひろがそんな事言う訳が……」

「『シアワセニナルナ』とも言われた……。だから幸せになったらいけないの……。私……」

「ちひろ、でも結局それは夢でしょ？それがお母さん達の本心とは限らないと思うわ」

和ちゃんの言う事はもっともではある。けれど……。

「皆にとつてはたかが夢でも、恐ろしくて寝るのが怖いと思った時が何度あったか分からない……。特に良い事があった日の夜は必ずと言っていいほど見るの……。お母さんが私を戒める為に……」

そして、私はもうひとつの凄惨な過去を打ち明ける決意をした……。

「……中学の時は、悪夢をあまり見る事が無かったけど……」

『……それ、どういう意味なの、ちひろちゃん……？』

「……ちひろ、それは……」

お父さんはさすがに止めようとして、口を挟んできた。

それでも私は止めようとはしなかった……。

「……私ね、中学時代……」

もうどれだけ、私の身体の水分は失われたんだろう……。

それでも、「まだあるの?」と思えるぐらい、大粒の涙が溢れてくる……。

「……いじめを……、受けてたの……」

「「「「「「「なっ!?!?」」」」」」」」

「悪夢を見る以上に、地獄の日々だった……」

思い出したくもない中学時代が、いやがおうでも頭を過ぎる……。

“お前、人殺しなんだってな”

“お前は学校設立以来の問題児だ”

“どうして、先生辞めちゃったの……? 私のせいだ……”

“……私、このまま死んじゃうの……?”

“……お父さん、ごめんね……。……こんな弱い娘で……。……ごめん”

ね……”

その回想は突然、強制終了を余儀なくされた……。

「……………っ……………!?!……………かは……………っ……………」

「…ちいちゃん?」

息が出来ない……………。

苦しくて立って立っていらねず、そのまま床に倒れてしまっ……………。

「ちひろ、どうした!?!」

お父さんが真っ先に駆け寄り、私の背中に右腕を回して支えてくれている。

「ちいちゃん!?!」

「……………ちひろ!?!……………」

「『ちひろちゃん!?!』……………」

「ちひろさん!?!……………」

喉に両手をあてがい、苦しむ私に皆が駆け寄ってくる。

身体がこわ張ってきて、手の自由すらも奪われてしまう……。

「ちひろの手が異常なまでに反り返ってる……。どうしたらいいんだよ？ 律う……」

「そう言われても私にも分かんないよ……。しっかりしろ、ちひろ！」

澪ちゃんも律ちゃんもどうしていいか分からずに、ただ困惑してる……。

「おじさん、もう一度病院へ連れてったほうがいいんじゃないですか？」

「……その方が、いいかもしれない……」

ムギちゃんの提案に、お父さんも頷いてる……。

苦しいよ……、助けて……。

皆の携帯のメール着信音が一斉に鳴り響く。

「……なんだよ、海衣奈。『誰かビニール袋か 紙袋持ってない？』  
って?」

律ちゃんが海衣奈ちゃんからのメールを読み上げてる。

「私、持つてる」

漣ちゃんの声と共に、ビニール袋のガサガサした音が聞こえてくる。  
それから間もなく、私の口にビニール袋があてがわれて、お父さん  
の優しい声が聞こえてくる……。

「ちひろ、大丈夫だ。ゆっくりと呼吸をするんだ……。大丈夫だから……」

ビニール袋の中で呼吸をすると、荒かった呼吸が次第に和らいで楽  
になってくる……。

そして、私の身体から力が抜けていった……。

）

）

「……………ん……………」

目を覚ますと、私はソファーに横たわっていて、皆が私を見つめていた。

「ちいちゃん」

唯ちゃんが起き上がった私を、そっと抱き締める……………。

また私は、皆に迷惑を掛けてしまったんだ……………。

「……………皆、ごめんね……………、……………ごめんね……………っ……………」

「大丈夫だよ。もうこれ以上、無理していじめの過去の過去を語る必要は無いんだよ」

「……………でも……………」

『ちひろちゃん、さっき過呼吸になったのよ』

「過呼吸？」

『過呼吸はね、精神的に追い詰められると起こる事のある症状なの。無理をすると、また再発する可能性があるから無理は禁物よ』

「……………そうだったんだ……………」



孤独や組織との戦いだっただ、あの地獄の三年間を思い出せば、嫌でも精神バランスを崩しかねない……。

『おじ様から聞いたわ……。友達がいなかった事も、頭の高傷はいじめの影響で出来たって事も……』

「頭の高傷……。どうしてその事を知ってるの……？」

「すまない、ちひろ……。病院で診てもらってる以上、隠す事が出来なかつたんだ……」

お父さんがいかにも申し訳なさそうにしてる……。

病院に運ばれた時に先生が診てるから、当たり前と言えば当たり前だよ……。

「中学時代、いじめられてた私は誰も友達がいなかった……。だから私ね、皆と友達になれた事が本当に嬉しかった……。私には勿体ないくらい……。優しくて……。温かくて……。皆のおかげで楽しい高校生活をスタートさせる事が出来たの……」

どれだけ感謝しても足りないくらいに、私の心は満たされた……。

……だけど、それももう終わり……。

「……でも私ね、幸せになっちゃいけないの……。私、軽音部にはやっぱり入れない……」

「どうして？」

ムギちゃんが私に問い掛ける。

さっきまで私の話を聞いていたはずなのに……。

「どうしてって……、だからさっきも言ったと思うけど、私はお母さんやお祖母ちゃんを……」

「確かに、ちひろちゃんのお母さんやお祖母ちゃんは不慮の事故で亡くなったわ……。それは動かし難い事実……」

「だから」でも、それはちひろちゃんのせいじゃないわ」

ムギちゃんは、私の発言にすかさず被せてきた。

「ちひろちゃんはおくまでも旅行をプレゼントしただけ。旅行に出かける前、お母さんは喜んでくれてたじゃない。お母さんは感謝こそしても、ちひろちゃんを怨む事なんてしないわ」

「どうして？そんな事分らないじゃない……」

「お母さんはちひろちゃんの幸せを切に願う人だからよ」

「私もそう思う」

どんなに切り返しても、ムギちゃんは自信を持って発言してくる。

お嬢様としての凜とした芯の強さが、会話や表情から垣間見える……。

そこに湊ちゃんもムギちゃんの見解に同意してくる。

「お母さんはちひろを塾や中学に行かせる為に影から支えてくれたよな」

「……うん……」

「ちひろもプレッシャーの中、その想いに立派に応えて合格して、旅行までプレゼントしたんだ。そんな想いあってる二人に怨恨なんて発生するはずがないんだよ」

いつもは恥ずかしがって控え目な発言の多い湊ちゃんが、なんとも遅しく感じる。

「私、ちひろさんの作る御飯が大好きです。とても美味しくて心が籠ってて、食べる人を感動させるんです。それは間違いなく、お母さん譲りの優しさからきてるんですよ」

「憂の言う通りよ。ちひろは人を幸せにする事が出来る優しさを持ち合わせてるの。周りの人を幸せに出来るちひろが幸せになっちゃいけないなんて、それはどう考えても矛盾してるわ」

憂ちゃんも和ちゃんも、心から私の幸せを願ってくれてる。

皆の心遣いが、私の傷ついた心に少しずつ染みってくる……。

私は心の中で燻っている不安を、皆にぶつけていく。

別に反発したいという天の邪鬼的な気持ちじゃない。

心の何処かで、私を救って欲しいと願い始めた自分がいたから……。

「……………お母さんは旅行をプレゼントした事を怨んでるんじゃないの……………。お祖母ちゃんを救えなかった事を怨んでるの……………」

「それは言葉のあやで、仕方なかったんだ。誰が聞いても“ここ”の真の意味は捕らえられないって」

律ちゃんも私を救おうと躍起になってくれる。

皆の暖かい言葉が段々心に染みて、涙がとめどなく溢れてくる……。

「私はどうであれ……、お祖母ちゃんを救ってあげられなかったの……。それが悔やんでも……っ……、悔やみ切れないの……。」

律ちゃんは、私の肩にそつと手を置いた。

「お祖母ちゃんもお母さんも、ちひろが悲しんでばかりだと、いつまでも浮かばれないんだぞ？」

「……そ、それは……。」

「ちいちゃん、もしちいちゃんとお母さん達の立場が逆だったら、ちいちゃんは悲しくない？」

「……逆の……立場？」

唯ちゃんの発言の内容は、深い悲しみに暮れてた私にとって、考えもしない事だった……。

もし、死んだのが私としたら……。そんな事を想像してみる……。

）  
）

「私のせいで、ちひろは死んだのよ……」

「そんな……、まひろのせいじゃないだろ？」

「ううん、私がちひろに旅行なんてプレゼントしなければちひろは死なずに済んだの……。ごめんなさい、ちひろ……」

お母さんが、涙を流して後悔する日々を送ってる……。

それはどんなに時が流れても、終わる事はない……。

そんなお母さんを見てて、私が思う事といたら……。

「私は幸せになっちゃいけないの……」

「ちひろを死なせた私に、幸せになる資格なんてないの……」

……私、そんなの耐えられない……。

お母さんのせいじゃないのに……。

私の為に淋しい人生を送らないで……。

お母さんは笑顔が似合ってるのに……。

「ごめんね、ちひろ……、ごめんね……」

……止めて……、お願いだからいつまでも悲しまないで……。

そんなお母さんは見たくない……。

私、いつまで経ってもお母さんから旅立てない……。

「ごめんね、ちひろ……」

もうお願いだから、私の為に悲しまないで……。

お願い、幸せになって……。

「……っ……、そんなの……、そんなの……嫌だよ……」

逆の立場になって考えたら、私のしている事がこんなに悲しいものなんて思いもしなかった……。

お母さん達も今まで、こんな悲痛な想いで私を見つめてきたのかな

……。

「お母さんやお祖母ちゃんはね、ちいちゃんが幸せになる事を願ってるんだよ。だって思いやりがあつて優しく、とても笑顔が似合う……、そんなちいちゃんの親だもん」

唯ちゃんは小さい子供を宥めるお母さんのように、優しく静かな口調で語りかけ、泣きじゃくる私の頭を撫でている……。

昔、お母さんやお祖母ちゃんが私にそうしてくれたように……。

『私ね、ちひろちゃんの話聞いていた時、「あれっ？」て思う所があつたの』

「あれって？」

私の話を最初から思い浮かべても、そんな箇所あつたかどうか分からなかった。

そんな疑問符だらけの私に、海衣奈ちゃんは携帯へある文章を送信してきた。



『死んでもなお、

アタシを忘れないで。

私もちひろを忘れない。

せめて、あと一言だけ。

二度と会えないけれど、

涙に埋もれることなく、

立派に生きていきなさい。

長い手紙になったけど、

さようなら、ちひろ。

いつまでも元気でね。

（前だけを見て、私の最後の

メッセージを受け取ってね）  
』

海衣奈ちゃんが送信してきたのは、お祖母ちゃんが書いた私宛ての遺書の、最後の一枚の文章だった。

「……凄い……。一言一句間違わずに記されてる……」

『私、喋れないから聞き直すと面倒でしょ？会話をする時は相手の会話を聞き逃さないように努めてるの』

さらりと言っではいるけれど、これだけ鮮明に記憶出来るのは凄い事だと思う。

昨日のアルバイトの時に、車両数のカウントと携帯メールを同時にこなす離れ業をこなしているだけに、やっぱり海衣奈ちゃんは頭が良いんだと推測出来る。

「……で、この文章がどうかしたの？海衣奈ちゃん……」

『どつしたも何も、この遺書の最後に書いてある通りよ。この文章の中に、お祖母ちゃんからの最後のメッセージが記されてるの』

「最後の……メッセージ？」

『そうよ。その前にひとつ確認したいんだけど、文の改行はこれで合ってるかしら？』

何故、文の改行にこだわるのかは分からないけれど、取り敢えず確認してみる。

「私の記憶通りなら、これで間違いないと思うんだけど……」

『分かったわ。それじゃあ解説するわね』

海衣奈ちゃんは私を優しいまなざしで見つめながら、私にあの文章をもう一度送信してきた。

そのうえで、海衣奈ちゃんは自分の携帯に文章を打ち込んで、送信はせずに私に直接見せてきた。

『まず、この最後の文面に、前だけを見て、私からのメッセージを受け取ってね』と書いてあるわよね？』

「……………う、うん……………」

『そこでこの文章の前だけ、文字通り、文章の頭の部分だけを見てもらえるかしら？』

「文章の頭、だけ……………」

私は文章の頭を見つめてみた。

「死、ア、私……………???ねえ、海衣奈ちゃん、これじゃ、何がなんだか分からないんだけど……………」

『そうね、そのままじゃ分からないわね』

いよいよ頭が混乱している私に、海衣奈ちゃんは続け様に文章を見せてくる。

『そこで、漢字の部分を平仮名に変換するの』

「平……仮名……？」

『そう。そして平仮名に直した前の部分を、さっきと同じように頭文字だけを見るの』

「……………うん……………」

これでいくと、死はそのままで「し」、他も私は「わ」、二は「に」、涙は「な」、立派は「り」、長いは「な」……。

『じゃあ、それを踏まえて文章の頭文字を繋げて、縦に続けて読んでみて』

「縦に……、し、あ……、……あ！あ……っ……………」

その最後のメッセージが分かった瞬間、今までで一番の大粒の涙が零れていた。

そのメッセージが分かった事への驚き、そしてお祖母ちゃんの私へ

の愛情を感じて、携帯を握り締めたまま床に崩れ落ち、頭を床に擦りつけて嗚咽を漏らした。

携帯の画面は見れないけれど、海衣奈ちゃんが私に送信してきた文章は、お祖母ちゃんの最後のメッセージを、漢字混じりに変換したものだっただ。

“ 幸せになりなさい ”

「うわああああああん……。お、お祖母ちゃ……。わあああああ  
あ……………」

「実はね、ちひろがさつき横になっている時、海衣奈がこの答えを導き出して、皆に見せてくれてたのよ」

和ちゃんが私の背中を優しく擦りながら言った言葉で、皆の発言が自信に満ちていた訳が分かった……。

お祖母ちゃんが発した最後のメッセージは私だけじゃなく、皆をも後押ししてくれていたんだ……。

「だけど、なんでお祖母ちゃんはこんな回りくどい事をしたんだろ？直接書けばいいのに……」

律ちゃんの言う事ももつともではあった……。

「これはあくまでも、私の推測なんだけど……」

唯ちゃんが自身の中で組み立てた論理を言葉にしていく……。

「まず、自ら命を絶とうと考えていたお祖母ちゃんからしたら、その立場上、幸せになりなさいなんて、直接的には書けなかったんだと思うんだ……」

「確かにそうね。かえって自分を責めてしまって、幸せになんてなれないと思ってしまうもの……」

和ちゃんも唯ちゃんの意見を肯定する。

「それに、ちいちゃんが後々、お祖母ちゃんの死を自分のせいだと責めてしまう事を予測して、この隠れたメッセージを盛り込んだんだと思う……」

あの一日で、お祖母ちゃんは私の性格を見抜いてたんだ……。

「そして、最後の推測なんだけど……」

唯ちゃんはしゃがみ込んで、私に視線を合わせた。

「お祖母ちゃんはちいちゃんといつか一緒に遊びたいと思って、その気持ちがこんな遺書の中ではあるけど、最後の遊び心になって表れたんじゃないかな？」

お祖母ちゃんは確かに、私にいつか会いたいと綴ってた……。

それは孫と一緒に遊びたいという願望の表れでもあったはず……。

だから、こんななぞなぞのような文章を書いたのかな……。

「……お祖母ちゃん……、最後のメッセージ、ちゃんと受け取ったよ……」

「ちひろ」

お父さんもしゃがみ込んで、私の肩に手を置きながら語り出した。

「お祖母ちゃんは、ちひろに幸せになれと言ってくれてるんだ。それはな、母さんだって一緒なんだ」

「…………お母さんも…………？」

「そうだ」

「…………でも…………」

「でも？」

「お祖母ちゃんは私を許してくれた…………。でも、お母さんは私を許してくれてるかな…………」

何処までも不安を拭い切れない私をお父さんは引き寄せ、優しく抱き締める。

「許すも何も、母さんはちひろを責めてはいないんだ」

暖かくて大きな胸板から、私はお父さんの顔を見上げる。

「…………本当にいいの？…………私、幸せになっても…………いいの？」

お父さんは満面の笑みを浮かべながら、私の髪をクシャクシャにしてくる。

「ああ、もちろんだ。俺が幸せになっていいって言ってるんだ。母さんを世界一愛した俺が言う言葉は即ち、母さんの言葉でもあるんだ」



親バカでもあり、愛妻家でもあったお父さんらしい言葉で、私を勇気づけてきた。

「それとな、ちひろ。お前は母さんの代わりに務めると言ってたな？」

「……………う、うん……………」

「それなら母さんがこれから幸せになるはずだった分、ちひろが幸せにならなきゃいけないんだ」

「……………お母さんの分まで……………」

「母さんやお祖母ちゃんの死を悲しみ、慈しむちひろの気持ちももちろん大切だ。でも、それだけでは後ろしか見ずに生きていく事になる。それじゃあ、目の前にある幸せはいつまで経っても見えないんだ」

抱き締めていた力が、気持ち強くなった気がした……………。

「ちひろ、誰かの代わりに生きるという事は、そういう事なんだ。母さんやお祖母ちゃんの想いを胸に、前を向いて幸せになるんだ」

胸に響く言葉のメを、お父さんは最後にこう綴った……………。

「それが母さんとお祖母ちゃんの、一番の願いだ!!」

「……………う……………っ……………、うわあああああああ……………」

かたくなに閉ざされた心の扉が今、ゆっくりと開いた……………。

悲しみに暮れていた心が今、氷解していった……………。

軽音部の皆、憂ちゃんや和ちゃん、お父さん、そしてお母さんやお祖母ちゃんの温かい気持ちに触れて、私は今、久し振りに心から幸せな気持ちになれた……………。

私はお父さんの胸から離れると、皆のもとへと歩み寄る。

「皆、ありがとう……………、そしてごめんね……………。それと……………」

私は恥ずかしがり屋という事も忘れて、私の心からの感謝の言葉を放った。

「みんな、大好き……………っ……………」

飛び付いてきた私を、目の前にいた海衣奈ちゃんが優しく抱き締め  
た。

「ちいちゃん  
「

「『ちひろちゃん』  
「

「「ちひろ  
「

「ちひろさん  
「

「……これからも……、よろしくね……っ……」

「「「「「『よろしく』  
「「「「「

涙を擦って心からの笑顔を浮かべると、皆も一緒に最高の笑顔を見  
せてくれた。

私は本当に幸せ者……。

あまりにも贅沢で、罰当たりな幸せ者……。

）  
）

私の搬送騒ぎから二日経った、火曜日の放課後。

「ほらちいちゃん、はやくはやくっ!!」

「……ゆ、唯ちゃん……、お、お願いだから……す、少し……休ませ……」

「ほらあ、早くしないとギターが無くなっちゃうかもしれないんだよ……」

「……は……、はひいつ……」

私は唯ちゃんに急かされ、手をひかれながら相当息も絶え絶えに、目的地“10GIA”近くまで来ていた。

今日は遂に、私と唯ちゃんがギターを購入する記念の日。

ちなみに、昨日は体調の様子を見るといいう事で、大事を取って一日だけ学校を休んだ。

昨日の今日だけに、万が一学校で体調に変化が起きたら大変という、皆の心遣いもあったから……。

それにあの泣き腫らした酷過ぎる顔じゃあ、学校に行けるはずもなかったんだけどね……。

それで、予定より一日遅れのギター購入という運びとなっちゃった訳で……。

「もしかしたらもう、ギターが無いかも!？」

なんていう不安を唯ちゃんが口にしたもんだから、私まで不安になり、他の皆も巻き添えにして学校から全力疾走で走ってる。

今すぐ欲しい優先順位は、ギターよりも休息と一杯の水かもしれない……。

そういえば一昨日のその後だけど、私は皆から貰ったバイト代をそれぞれに返した。

それはお父さんが私に内緒で、毎月積み立ててくれていたお金をくれたから。

お父さん曰く「ちひろの、日頃の家事手伝いへの感謝の気持ち」だそうで、私は感きわまって泣きながらお父さんに抱き付いたのを覚えてる。

お父さんはそれが嬉しかったみたいで、昨日も今日も思い出しながら、御満悦な笑顔を浮かべてた。

「……ああ……、可愛いちひろが俺の胸に飛び込んできてくれた……。俺の生涯に一片の悔い無し……」

……改めて思っただけで、お父さんはやっぱり親バカでした……。

で、皆に返したお金はそのまま唯ちゃんに渡った。

ただ、唯ちゃんはあのギターじゃなくて、安いギターを買う事を決意していた。

皆と一日も早く演奏したいからみたい。

分かります、その気持ち。

そんなこんなで“10GIA”に到着した私達はエスカレーターを降りて、あのスカイブルーのギターが置いてある場所に脇目も振らずに向かった。

「…………あ、あつたぁ…………」

以前と同じように、あのスカイブルーのギターは何事も無く鎮座していた。

このギターを見た途端、この桜ヶ丘に引っ越してきてから今までの出来事が走馬灯のように頭を過ぎる…………。

海衣奈ちゃんや唯ちゃん達との出会い。

成り行きからの、軽音部への体験入部。

ギターを買う為に、皆と一緒にアルバイトをしてくれた。

過去を抱えていた私を、皆が一丸となって救ってくれた…………。

皆のおかげで今、私はこうしてギターを買う事が出来る…………。

感謝の気持ちで胸がいっぱいになった私の頬に、一筋の涙が伝う…………。

『……あらあら、本当にちひろちゃんは泣き虫さんね』

なんて茶化しながらも、海衣奈ちゃんは私の涙をハンカチで拭ってくれた。

「だって嬉しくて……。皆、本当にありがとう……」

「『『』』どう致しまして『『『』』」

「よし、あとは唯のギターを決めるだけだな」

律ちゃんがそう言うと、私達は安いギターが陳列されている方へ向かおうと歩き出したんだけど……。

「……あ、えへへ……」

あの赤いギターに未練があるみたいで、そこから動こうとはしなかった。

バツが悪いのか、頭を掻きながら笑ってた。

やっぱり一度欲しいと思った物を、簡単に諦めるなんて出来ないよね……。



「よっしゃー！それじゃ、もう一度バイトを」

律ちゃんのアルバイト宣言に皆が頷いた時、ムギちゃんは何やら思案顔をしていた。

「皆、ちょっと待ってて」

そう言うと、ムギちゃんは店員さんがいるレジの方へと歩いて行った。

「どうしたんだろ、ムギ？」

「さあ？分からないです……」

私も澁ちゃんも、ムギちゃんが何をしに行ったのか、まったく分からずに首を傾げるだけだった……。

この位置からレジは少し離れていて、ムギちゃんと店員さんが交わしている話がよく聞こえない……。

少しすると、何やら店員さんがビックリした表情でムギちゃんを見ていた。

しばらくすると、ムギちゃんの嬉しそうな一言が聞こえてきた。

「もう一声~~~~っ」

ま、まさか!?

憧れますと言っていた、アレを実行したの……?

あの台詞があと三回繰り返されると、ムギちゃんは踵を返して私達の方へ戻ってきた。

そして次の瞬間、衝撃的な一言を私達に放った。

「唯ちゃんとちひろちゃんの欲しがつてるギター、5万円に負けてくれるって」

「~~~~ええっ!?!?」

あまりの出来事に、しばらく誰も何も言えなかった……。

「な、何?何やったの?」

唯ちゃんは訳が分からずに、ムギちゃんに事の真相を問い質そうとしました。

「実はこのお店、父の会社の系列のお店で……」

「『『『『えっ！？』』』』」

……やっぱり、ムギちゃんはお嬢様です……。

レジにふと目を向けると、店員さんが電卓片手に身体を震わせながら涙目になってた……。

“店員さん、泣いてたぞ”

楽器を見に行った時の淺ちゃん言葉の意味が今、よく分かりました……。

530

私は店員さんのもとへ向かい、念の為に伺ってみました。

「あのお……、本当によろしいんですか、5万円で……?」

店員さんは涙目のまま、レジ台に手を付いて腰から折れて懇願した。

「どっか負けさせてください。でないと、私が社長に叱られてしまいます……!」

「……は、はいっ……」

あまりの気迫に根負けした私は、その気持ちに甘える事にした。

……店員さん、御愁傷様でした……。

) )

店を出た私と唯ちゃんは、背中に黒いケースに入ったギターを背負っていた。

「ねえ、ちいちゃん。私達お揃いだね」

「うんっ、お揃いだね」

屈託の無い笑顔に、私も釣られて微笑み返した。

『さあ、いよいよ明日から本格的に練習開始ね。頑張るわよ、二人とも』

「はいっ」「うんっ」

「なあ、漣。遂にアタシ達の軽音部、本格的に始動だな」

「うん……、やっとスタートラインって感じがする……」

「そうね、これから唯ちゃんやちひろちゃんにギターを教えていかなきゃいけないから、私達も頑張りましょう」

『唯ちゃん、ちひろちゃん。これからビシビシ鍛えていくから覚悟してね』

「はいっ、頑張ります」

「よし！！頑張つてムギちゃんのケーキ食べるからね」

『な？ん？で？そうなるのかしら？』

「…………ギ、ギブギブ…………ツ…………」

怒りのオーラに身を包んだ海衣奈ちゃんが、唯ちゃんの首を両腕で締め上げて、既に虫の息です…………。

そんなやり取りを見ながら、私はある事を考えていた。

この余ったお金、一体どうしよう……………？

そのまま貯金するのでもいいんだけど、これで皆に何かしてあげたいという気持ちが浮かんできた…………。

せめてもの恩返しをしたい。

頭にハツと閃いた考えを私は口にした。

「ねえ、皆？」

「どうしたの、ちいちゃん？」

「これから皆で何か食べに行かない？私が全額奢るから」

「いいんだぞ、ちひろ。別に気を使わなく、どわっ!？」

澪ちゃんの気を使った言葉は、私に凄まじい勢いで駆け寄ってきた律ちゃんと唯ちゃんに身体ごと弾き飛ばされた。

「ねえ、ちいちゃん。私ね、ケーキが食べたい。今日はムギちゃんのケーキ食べてないから、たーくさん食べたいな!!」

「アタシも同じ事考えてた。そういえば、商店街近くのホテルでケーキバイキングやってるらしいから、そこ行かないか!!」

唯ちゃんも律ちゃんも、妖しいまでに瞳を輝かせながら私の手を握ってきた。

「ケーキバイキングって何かしら？」

「ムギ、知らないのか？ケーキバイキングっていうのは、甘いケーキを好きなだけ食べられる、乙女にとって甘い甘い誘惑の事なんだよ」

「まあ、それはなんともダイナミックな話ね」

律ちゃんの力説にムギちゃんものってきた。

『皆、家に帰ったらすぐに晩御飯でしょ？ケーキバイキングに行ったら後で食べられるの？』

海衣奈ちゃんのごもつともな質問に、律ちゃんと唯ちゃんは右手を高々と翳しながら答えた。

「晩御飯は別腹！！」

『……あのね、普通は甘い物が別腹でしょ？』

「うん、そうとも言うね」

『……もう敢えて突っ込まないわ……』

「ねえ、海衣奈ちゃん。ダメ……、かなあ……？」

私は乗り気じゃない海衣奈ちゃんに怖々と尋ねてみる。

『ちひろちゃんがそこまで言うんじゃないわね』

「ああ……、ミイラ取りがミイラに……」

呆気なく私の意見に賛同した海衣奈ちゃんに、漣ちゃんは涙目になつてた……。

「漣ちゃんは来ないの？」

「……わ、私は遠慮しとくよ。御飯食べられなくなるからな……」

「太っちゃんの間違いじゃ」「律ちやん」「ドゴーン

「……おおお……」

漣ちゃんと海衣奈ちゃんの鉄拳制裁で、律ちゃんはたんこぶを二つ拵えて、凄く痛そうに頭を抱えています……。

「じゃあ、漣は先に帰ってていいよ。皆で楽しくケーキ食べてる写真、後で送るから」

「えっ！？べ、別に送らなくてもいい……」



「そっか。じゃあ皆行こうぜ」

「じゃあね、漣ちゃん」

「私達で楽しんでくるわね」

『また明日ね、漣ちゃん』

皆は私を引き連れて歩き出した。

「い、いいの、律ちゃん？漣ちゃん置いてって……」

「大丈夫だって。漣はあと10秒もすれば、泣きながら走ってくる  
って」

律ちゃんは笑いながら、後ろも振り向かず歩いて行く。

そして大体10秒が経った頃……、

「私も行くう~~~~~っ」

「な、言ったとおりだろ？」

本当に半べそを掻きながら、漣ちゃんが走ってきたのには驚いた。

やっぱり、幼馴染みなんだなあ……。

……ねえ、お母さん、お祖母ちゃん……。

私、もう迷わない。

皆と一緒に幸せになります。

どうか、天国から見守っていて下さい……。

そんな事を大好きなスカイブルーの空を見上げながら、そっと呟いた。

「おい、ちいちゃん」

「あ、はーいーい」

遅れをとった私は皆のもとに駆けて行った。

これから歩いて行く皆と肩を並べる為に……。

## 第18話「ちひろの過去（6）未来へのメッセージ」（後書き）

如何でしたでしょうか？

謎と言っても、大した謎ではなかったかもしれませんが……。

前書きで言っていた取り敢えずというのは、中学生時代をまだ明かす事が出来ない為です。

中学生の時の話は後々起こる、ある出来事を紐解く鍵となります。

いずれ掲載しますので、しばしお待ち下さい。

取り敢えず、これで長い長いアニメ第2話分が、ようやく終わりました。

シリアスが長かった分、次回からは楽しい展開にしていきたいと思っています。

次回からは原作にもどりますが、半ばオリジナルの話です。

しかも初の、完全の海衣奈視点でいきます。

それではまた次話でお会いしましょう。

御感想、お待ちしております。

第19話「嗚呼……、最凶のママン」（海衣奈視点）（前書き）

ここ最近PSPを買って、ンハン3ではなく、【けいおん！放課後ライブ】を購入してハマっているエイジです。

いよいよ今回から、ギャグ中心の展開となります。

前半はアニメの展開ですが、後半からオリジナルの展開になります。

そして、今回から新キャラ登場です。

ギターを買った唯とちひろが初の部活動に臨む。

楽しく下校するちひろ、海衣奈、唯、和。

そこへ新キャラが登場し、とんでもない展開に発展していく……。

皆の運命や、如何に……。

ちなみに、この話は今回が前編で次回が後編となります。

それではどうも、御覧下さい。

第19話「嗚呼……、最凶のママン」（海衣奈視点）

唯ちゃんとちひろちゃんが、ギターを買ってから二日目の放課後。

音楽準備室には、いつものように軽音部のメンバーが集まっていた。いつものようにムギちゃんの淹れてくれた香り高い紅茶と、遷ちゃんが大好きだというガトーショコラで至福の時間を過ごしたら、いよいよ練習開始。

「ギターの弦で怖いよね。細くて固いから、指切っちゃいそう……」  
唯ちゃんの不安な言葉に反応して、律ちゃんの瞳は怪しい輝きを放つてた。

またちよっかい出す気でしょ……。

「そっだぜ。気をつけないと指がスパーツと切れて、血がドバーツと」

「きゃああああああっ！！」

律ちゃんの大袈裟なスプラッタ調の言葉に張り裂けんばかりの悲鳴

をあげたのは、唯ちゃんでもちひろちゃんでもなかった。

「痛い話はダメなんだ……」

両手で耳を塞いで、部屋の隅っこで震えている澪ちゃんが可愛くて、  
ついつい記念撮影。

「大丈夫だよ、澪ちゃん。本当に血が出てる訳じゃないし」

唯ちゃんの傷ひとつない手を確認して、照れ隠しの咳払いをひとつ  
した。

「……おほん、まあ練習をしているうちに指の先が堅くなるから、  
血が出たりする事は無いよ、ほら」

澪ちゃんが右手を唯ちゃんの前に差し出すと、唯ちゃんはその指の  
感触を確かめた。

「本当だ、ぶにぶにだあ！！」

感触を確かめるといふよりも、楽しんでる感じがするわ……。

「ぶにぶにいつ……」

あんまり触ってるもんだから、澪ちゃんが恥ずかしくなって頬を紅  
く染めちゃってるわ……。

「……あの……、そろそろいいかな……?」

「も、もうちょっとだけ!」

唯ちゃんはひとつの事に集中すると、それしか見えなくなってしまう。

……良くも悪くも、ね……。

「ところで、ちひろはさっきの話、怖がらないのか?」

確かに律ちゃんの言う通りね。

怖がりのちひろちゃんが、この手の話で平気なんて珍しいわ。

「怖くないと言えば、嘘になるんだけど……」

ちひろちゃんはためらいながらも、私達の前に手のひらを向けて見せた。

「……ひっ!?! ひiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiひっ!?!」



漣ちゃんが甲高い悲鳴をあげながら、高速で壁まで後退りしていく。その華奢な手には、結構な数の切り傷が刻まれていた……。

「どうしたの、ちひろちゃん。その手の傷!？」

「うわ!?!なんだよ、それ?」

『もしかして昔、何かあったとか!?!』

私はもちろんの事、ムギちゃんや律ちゃんも驚きを隠せないでいた。

私はいえ、ちひろちゃんの中学生時代の話が頭の中で引つ掛かっていたから、心配になって聞いてみた。

けれど、ちひろちゃんは首を激しく横に振った。

「ううん、違うの……。ほら私、料理してるでしょ?お母さんが亡くなって料理を始めた当初、慣れない手付きで怪我をしょっちゅうしてたから……」

『そっか。そういう事ね』

昔はお母さんが料理をしてたから、まったく料理をした事がなかったと言っていたわね。

シャープペンを包丁に持ち替えて、どれだけ必死に頑張ってきたのかを、その古傷が物語ってた……。

「いうなれば、この傷はちひろちゃんの実力の賜物、いわゆる勲章なのね」

「ふ、ふええっ！？勲章だなんてそんな……」

両手でそっと、ちひろちゃんの傷だらけの手を優しく包み込むムギちゃん。

ちひろちゃん、瞬く間に紅潮しちゃってるわ。

ちひろちゃんには悪いけど、これも撮影しとかなきゃ。

「昔は本当に指がスパーツと切れて、血がドバーツと出た事もあったなあ……」

『ち、ちひろちゃん！？』

「え、何！？」

「……………」バターンッ！！

「「「「「<sup>ちやん</sup>澪!?!」」」」」

痛すぎる話をまともに聞いてしまい、勢いよく床に倒れ込んだ澪ちゃんに皆が駆け寄った。

ちひろちゃんが無意識の内に、澪ちゃんにとどめを差しちゃう結果になっちゃったわね……。

「ふええっ!?!澪ちゃん、ごめんなさああい……」

泣きベソを掻きながら、澪ちゃんの身体を揺するちひろちゃん。

ちひろちゃんって、結構しっかりものだと思っていたけど、純粹すぎるが故の天然さを持ち合わせているみたいね……。

）  
）

「ところで練習って言っても何から始めていいのか分からないや……」

「うん……。ねえ皆、何から始めたらいいのかなあ?」

途方に暮れてる二人に、なんとか復活を遂げた澪ちゃんが一冊の本を手渡した。

「まずはコードから覚えるといいよ」

「「ありがとう」」

澪ちゃんが渡したのは【サルでも分かるコード】という、いささか著者のネーミングセンスを疑いたくなる本だった。

確かにギターを弾くにあたって、弦を押さえる指の形を司るコードは、基本中の基本。

まずはコードを覚えて、正確な音を出せるようにしなくちゃ。

「」  
「」  
「」  
「」

……あれ？

二人とも目が点になって、固まってる気がするのは気のせいかしら……？

拳げ句の果てには唯ちゃんが頭から煙を吹き出してる……。

嫌な予感しかしないんだけど……。

「……まずは楽譜の読み方から教えて下さい……」

「そこから!？」

「ごめんなさい、私も……」

「ちひろも!？」

私の中では予測範囲内の言葉だったけど、澁ちゃんからしたら、まさかの発言だったみたいね。

『澁ちゃん。二人ともギター初心者なんだから、じっくりと腰を据えて教えていきましよう』

「そうだぞ、澁。澁にとって知ってる事でも、二人は知らない事だらけなんだからさ」

「私達に出来る事はしてあげましよう、澁ちゃん」

他の皆からは、二人を支えていこうとする言葉が聞こえてきた。

「……そうだな、分かった。じゃあ、まずは楽譜の読み方からだな」

「はいっ、澁先生!!!よろしく願いします」

「よろしゅうお願いしますだ、漣先生!!」

「ふえっ!?!」

先生なんて崇められたもんだから、漣ちゃん紅くなっちゃってるわね。

ただ唯ちゃん、よろしゅうお願いしますだっつて、どんなキャラ設定!?!

「よ、よし。それじゃあ先生が分かりやすく教えるよ」

「「はいつ!?!」」

漣ちゃんもすっかりその気、ノリやすい性格なのね……。

それから部活終了の時間まで、二人はみっちりとコード漬けの時間を過ごした。

）  
）

部活に集中していたら、あっという間に下校時間を迎えた。

こういう時は、時間が経つのが早く感じるものよね。

ムギちゃんと別れ、今し方律ちゃんや湊ちゃん達とも別れて、残り  
は私と唯ちゃん、ちひろちゃんの三人。

まあ、御近所だから当たり前なんだけど。

「……………これがCで……………、これがG……………」

おっ、唯ちゃんは早速復習とばかりに、コードの指の形を作り出  
てる。

うんうんっ、感心、感心!!お姉さんは嬉しいっ!!

「そして、これがDで、これがF……………。海衣奈ちゃん、Fって難し  
いね……………」

『Fは人差し指で6本の弦全部を押さえなければいけないから結構  
難しく、初心者が大体つまずくところなの』

「「そうなんだ」「」

『まあ、まずは簡単なコードからひとつずつ、確実に覚えていきま  
しょう』

「「はぁーい」」

ちひろちゃんもコードを覚えようと、一生懸命頑張ってくれてる。

そのひたむきさは、必ず実を結ぶから頑張ってね。

私も出来る限り応援するわね。

「ねえ、海衣奈ちゃん」

『ん、何？』

「最初は色々と不安だらけだったけど、ギターってこんなに楽しいんだね」

ちひろちゃんは凄く楽しそうな表情をしている。

そんな表情を見て、私のある身勝手な想いから軽音部に引き摺り込んだという、後ろめたい想いが少し和らいだ気がした……。

「私もだよ！！もうギターが楽しくて楽しくて、コード覚えてたら高校に入って勉強した事、片っ端から全部忘れちゃったよ」



『忘れちゃダメでしょ!!』

ひとつの事に集中するのはいいんだけど、何かを覚えてたら、その代償で他の何かを忘れていく残念な子なのよね、唯ちゃんて……。

高校に入って少しは進歩したと思ってたんだけど、その点は昔とまったく変わらないわね……。

『勉強した事忘れたら大変よ。だって、あともう少しで』

「唯、海衣奈、ちひろ」

後ろから聞き覚えのある声が出て、振り向くと和ちゃんが私達の方に駆けてきていた。

「「あつ、和ちゃん」「」

唯ちゃんとちひろちゃんも和ちゃんに気がついて、手を上げたまでは良かった。

「……二人とも何それ？新しい挨拶？」

指がコードの形のまま手を上げたものだから、なんともおマヌケな挨拶になっちゃってるし……。

そして、ちひろちゃんの顔が赤くなってるのは、もうお約束。

「今日ね、部活でギターのコード習ってたんだ」

「へえ、そうなんだ。という事は、言わずもがな、ちひろもよね？」

「うんっ」

ちひろちゃんの満面の笑みを見て、普段あまり見せない笑顔を見せた和ちゃん。

辛い過去を持っていたちひろちゃんを心配していたけれど、これで安心したんだと思うわ。

『そういえば和ちゃん、今帰りなの？遅かったわね』

いつもは先に帰る事が多い和ちゃんが私達と帰る事自体、そんなにないから何気に聞いてみた。

「だってもうすぐ中間テストじゃない。だから図書室で勉強してたのよ」

「『へえ〜〜っ』『』」

そう、もうすぐ桜ヶ丘高校に入ってから初めての中間テストが始まる。

さすが和ちゃん、昔から勉強に対する努力を惜しまないわね。

そして少し間が開いた後……、

「えっ！？中間テストお！？」

「……それも、コード……？」

中間テストの存在をすっかり忘れてた唯ちゃん。

ビックリして手を上げたけど、またその指は変な状態だった。

中間テストの存在以前に、今まで勉強した事も忘れてしまってる唯ちゃんに一抹の不安が過ぎる……。

「えっ！？中間テストの一週間前って、部活動一切禁止なんですか？」

「そうね。うちの学校は確かに自由を重んじるけど、勉強が疎かに

なっではいけないから、敢えてそういう決まりがあるの」

「そうなんだ……」

ちひろちゃんも知らなかったけど、私もそれを知ったのは、つい最近の事。

まあ、学校だから勉強が基本重視されて当たり前だけど。

「ていうか唯、あんた中学の時にテスト勉強なんてした事ないじゃない？」

そう、この子は試験前に勉強なんてした事がない。

マンガを読み漁ったり、お菓子を食べたりゴロゴロしたりと、勉強モードに入る傾向がまったく見られない。

そして試験が終わると、予想通りの点数を取って職員室に呼び出され、説教の嵐と追試の宣告……。

その度に私や和ちゃん、果てには憂ちゃんまで巻き込んで、唯ちゃんの勉強を見るハメになるのよね……。

それで追試に受かって、ドヤ顔されるから腹が立つのよ……。

「そっか、なら大丈夫だね」

「……いや、大丈夫じゃないし……」

……プチンツッ!!!

和ちゃんはただ呆れてたけど、私はその呆れた一言で何か切れた……。

『ゆ?い?ちや?ん!?!』

「は、はいiiiiiiiiっ!?!」

両手で握り拳を作って、中指の第二関節を唯ちゃんのこめかみに当てて、容赦なくグリグリと捻る。

「い、痛いよお、ミーナちゃん!?!何を怒ってるのお?」

な?に?を、ですつてえ!?!

まったく分かってない唯ちゃんに、さらに力を込める。

「いひゃいよ、いひゃいよおおおおっ、ミーナちゃん!?!」

泣きながら痛いと懇願するも、怒りモードの私には聞き入れる隙なんてない!?!

それに私はミーナじゃなくて海衣奈だって、いつも言ってるでしょ  
!!!

なんだかチャラチャラしてて嫌だって言ってるのに!!

……なんて思ってた矢先……。

「……だ、だめええつ……」

私の背後から抱き付いて静止を試みたのはなんと、ちひろちゃんだ  
った!!

ちひろちゃんは恐る恐る、私に人指し指を突き出して、「こういった。

「だ、だめでしょ!? 暴力はいけないんだよ、……め……」

……め……?」

「……めっ!!……だよっ」

……。

なんだか腹を立てて怒ってたのが、一気に失せちゃった……。

こんなに震えながら、可愛い声で「めっ!」なんて言われた日には……、

ナデナデナデ……

「はっ!」

ナデナデナデナデ……

「はっ!」

もう可愛くて、ちひろちゃんの頭を撫でまくるしかないじゃない……。

和ちゃんや憂ちゃんでも簡単には止められない怒りモードを、ちひろちゃんは呆気なく打破った。

ある意味、ちひろちゃんは最強なのかもしれないわね……。

『唯ちゃん、今日はちひろちゃんに免じて許してあげる。ただし! テストで赤点とった時は、承知しないわよ』

「……は、はいっ!! 分かりましたあ」

背筋を伸ばして、私に向かって敬礼をする唯ちゃん。

私は別に軍曹じゃないんだけど、さっきので恐怖感を植え付けちゃったみたいね……。

「海衣奈の言う通りよ。ちゃんと勉強しなさいよ、唯？」

「うん、分かった。和ちゃん」

和ちゃんにも釘を刺されてるけど、本当に大丈夫かしら……？

）  
）  
）  
）  
）

誰かからメールが来たみたい。

私はすぐさま新着メールを開いてみた。

f r o m     ママン

海衣奈ちゃん、ママンよ。



久し振りにママンが晩御飯作るから。

張り切りすぎて、今日の夕御飯の材料、特売で大量に買い込んだの。  
ったの。

という訳で、御馳走するからお友達を誘ってきてちょうだい。

|| || || || || || || ||

……ママンが料理……。

私の血の気が一斉に引いていくのが、今ならよく分かる……。

560

「海衣奈、誰から？」

『……ママンよ……』

「ママン!?!」

メールの相手がママン。私のママと知るなり、唯ちゃんも和ちゃんも、少し後退りして警戒体制を取り始めた……。

ちひろちゃんは訳が分からずに、ただ佇んでいる。

「ミーナちゃん、おばさんは何てメールしてきたの？」

唯ちゃんは唯ちゃん、メールの内容次第でいつでも逃げられる用意をしていた。

多分内容を話した瞬間、マッハで逃げるわね……。

『……晩御飯に御招待って……』

「「！！！！！！」」

唯ちゃんも和ちゃんも顔を見合わせて、これからの算段を語り始めた。

「和ちゃん、逃げようと思うんだけど、どうかな？」

「奇遇ね、私もそう思ったところよ」

「え、え！？？どうして逃げる必要があるのぉ？」

訳が分からずにオロオロするばかりのちひろちゃんに、あとの二人は早口でまくし立てた。

「ちいちゃん、詳しい事は後で説明するね」



イルの良い人に見える。

全てを知ってる唯ちゃんは絶望からアスファルトにへたりこみ、和ちゃんはおもわず天を仰いだ……。

「あら、海衣奈も一緒なのね。なら話が早いわ。皆を晩御飯に招待するわね」

……終わった……。

今さら逃げようとしても空手有段者、いや、実際は全日本で5本の指に入る実力者のママンの隠された闘気に気押されて、動くこともままならない……。

そこへ何も知らないちひろちゃんが、ママンの元へと歩み寄っていく。

「あのお……、海衣奈ちゃんのお母さん、ですよね？」

「……あら？あなた、綾瀬ちひろちゃんでしょ？」

「え！？私の事、知ってるんですか？」

マズいわ……あの事がちひろちゃんにバレちゃうじゃない……！

「ええ、ウチにちひろちゃんを写した写真が入ったアルバムがあつてね」

『わーーーーーーーっ!!』

声に出せれば誤魔化せるけど、メールじゃ何の効力も発揮してくれない……。

「……え?えっ!?!えええええっ!!」

ちひろちゃんが真っ赤な顔で、驚きと困惑の表情を浮かべながら見てくる。

ちひろちゃん、ごめんね……。

私が個人的に見るつもりが、私の部屋の掃除をしていたママンに見つかっちゃったの……。

ただ、決して危ない事や怪しい事はしていないわ、断じて!!

……まあ、ちひろちゃんの写真を収集してるだけで、充分怪しいんだけど……。

「ちひろちゃん、本当に可愛いわぁー………」

「ふえええええつ……！」

可愛さあまりに、ママんがちひろちゃんを胸のあたりに引き寄せ、抱き締めた。

力は加減してくれてると思うけど、カ一杯抱き締めようものなら、ちひろちゃんの命が無くなりかねない……。

それ以前にママんの胸の谷間に埋められて、このままじゃ窒息してしまうわ……。

「地味な格好はしてるけど、よく見るとやっぱり可愛いわぁー！」

「んんっ……むぐぐっ……、……キユウッ……」

真っ赤な顔のちひろちゃんは、手をバタバタさせて頭から煙を吹き出していたけど、そのまま卒倒してしまった……。

「あらあら、大変！？どうしちゃったのかしら？」

『大変な目に遭わせたのは、他ならぬママんでしょー！』

「海衣奈ちゃん、そんなに怒っちゃ？イ？ヤ」

『空手のスペシャリストが、何をかわい子ぶってるのよー！』

「身体は大人でも、心は可憐な乙女なの、キャッ」

『ああ、もっつー！！腹が立つわね、本当にいい！！』

私はこんな自由奔放なママンが大の苦手……。

ママンが空手の実力者じゃなければ、拳でツッコミを入れてるところよー！！

でも、そんな事すれば120%返り討ちに遭うのは目に見えてるし……。

「それじゃあ、ちひろちゃんを家に連れてって介抱してあげなきゃ。という訳で、先に行ってるわね」

『ちよつとママン、待って』

とメールするも、目もくれずにちひろちゃんをお姫様抱っこしながら、家の方へと全力疾走で駆けていった……。

ちひろちゃんを介抱するより、速やかに解放してほしい！！

「ちいちゃんが連れ去られちゃった、どうしよう……」

ようやく闘気の呪縛から抜け出した唯ちゃんが動き出した。

「どうするもこうするも、こうなったら行くしかないでしょ？海衣奈の家に」

「……そうだね、ちいちゃんを放っておく訳にもいかないもんね……」

『ありがとう、そして本当にごめんね』

覚悟を決めてくれた二人に心から感謝すると同時に、申し訳なく思った。

) )

後を追った私達は、遂に私の家の前に着いた。

まあ、私からしたら帰ってきただけなんだけど……。

『それじゃあ、入るわよ』

「……うん……」



「…………ええ…………」

緊張から皆の喉が鳴る…………。

ちひろちゃん、どうか無事でいてね…………。

その想いを胸に私の家の玄関、もとい、監獄の牢屋の入口を開けた…………。

これから起きる惨劇を、知る由も無く…………。

第19話「嗚呼……、最凶のママン」（海衣奈視点）（後書き）

如何でしたでしょうか？

ママンはこの作品の内容からしたら、かなり異質なぶっ飛んだキラ設定となっています。

今回はママンを含めて、海衣奈の家族を総出演させます。

そしてちひろ達は無事に、海衣奈の家から生還する事が出来るのでしょうか？

それでまた、次話でお会いしましょう。

第20話「ちひろのピンチと最後の晚餐」(海衣奈視点)(前書き)

エイジ「お待たせしました。最新話の更新です」

海衣奈「やけに遅かったわね、どうかしたの？」

エイジ「仕事が忙しくて書く暇もなかったし、他の先生の作品を読む暇もなくて……。これから読もうと思います」

ちひろ「リア充なんですね」

エイジ「まあ、充実してるかは分からないですけど、忙しいですね。ところで今回の話しについて、いくつか注意点があります」

ちひろ「また、長いんですか？文章……」

エイジ「……………」

海衣奈「いつもの事ですよ」

エイジ「返す言葉も見当たらないです……。そして、一番の注意点はちひろちゃんが冒頭から大変な事になってます」

ちひろ「は、恥ずかしい……」

海衣奈「カメラをお持ちの方はどうぞ、前にお進みください。私もだけど」

お父さん「よし、ここは俺の出番だな」

「ママン」見逃せないわね

「ちひろ」ふえええええっ！..！」

「エイジ」それでは第20話、どっぞ御覧下さい

第20話「ちひろのピンチと最後の晚餐」(海衣奈視点)

急いでちひろちゃんを救出しなきゃ!!

逸る思いでローファーを脱いで、急いでスリッパに履き替えた。

「ちいちゃん、大丈夫かな？」

「おば様が何もしてないのを祈るだけだわ……」

『私のママンだけに、安全の確証なんて1ミリたりとも保障できないわ!!』

スリッパ独特の足音を鳴らしながら、廊下を走った。

ていうか、走り辛い事この上ないわね……。

「あんっ!!だめえっ!!」

ドッターーーーン!!

いきなり聞こえてきたちひろちゃんの卑猥な声に、思わずコケてしまい、頭を打ち付けてしまった……。

とはいえ、他の人なら聞こえないくらいの小さな声。

何処かドアを締め切った部屋の中から聞こえてくる、本当に小さな声。

「ミーナちゃん、大丈夫？」

『……大丈夫よ、私も携帯もね……』

携帯が壊れたら、それこそ私にとって一大事だわ！！

打ち付けた額の痛みと引き換えに、携帯は死守出来たわ……。

「どうかしたの、海衣奈？」

『どこからか、微かだけどちひろちゃんの声が聞こえるの』

「えー？どこどこ？」

「私にはまったく聞こえないわよ。そういえば海衣奈は喋れない分、耳が人一倍聞こえるのよね」

そう、私は喋れないけど耳だけは良く聞こえる。

人の会話を聞き逃さないようにしないと、メールをうつつ労力と携帯のバッテリーが勿体ないから。

『二人とも、静かに……』

口元に人差し指を当てて二人を静まらせ、声を聞くために耳に全神経を集中させる……。

「……あ、そこは……んんっ、いやあっ!」

「こんなに感じちゃって、いけないわね」

「ああっ、お願いですうっ!もっと優しくして下さい!」

「んふふっ、ダメ」

「ああんっ、もうだめえっ!私、どうにかなっちゃいそうですう!」

私の家の中で、史上かつてない卑猥すぎる会話が繰り返されられていた……。

「……海衣奈、大丈夫？顔が恐ろしく真っ赤よ……」

ちひろちゃん、エロすぎるわ……。

このままだと、ちひろちゃんの前に私がどうにかなっちゃいそうよ……。

妄想が暴走する前に、私は声の発信源を特定した。

『二階。しかも、私の部屋からよ！！』

「唯、急ぐわよ！！」

「ガッテンだ！！和ちゃん」

部活の時の「お願いしますだ」発言といい、唯ちゃんは今、時代劇にハマってると見えたわ……。

そんな事はよしとして、私は一段飛ばしで階段を駆け上がった。

「ああんっ！！もう……、だめえええええええええっ！！」

部屋のドア越しに、ベッドがギシギシと軋む音と、ちひろちゃんのなまめかしい声が聞こえ、そして不気味な静寂が訪れた……。



『ちひろちゃん!』『バンッ』

「ちいちゃん!」

「ちひろ!」

ドアを勢いよく開けた先の光景に……。

「はぁ……、はぁ……」

……私は何故か、目を逸らす事が出来なかった……。

しっとりと汗を帯びた身体が、私のベッドの上で艶やかに横たわっている……。

「はぁ、……はぁ……ん……」

唇からは色っぽい声と吐息が漏れてて、長い三つ編みは所在無く乱れてる……。

太ももから素足の爪先まで、ちひろちゃんの見事な脚線美が露になつていた……。

「…………ち…………、ちいちゃんエロい…………」

唯ちゃんは頬に手を当てて、顔を真っ赤にしていた。

お子様には、あまりにも刺激が強かったみたいね…………。

「……………」

和ちゃんはというと、顔を真っ赤ににして目を背けてる…………。

こんな和ちゃん、非常にレアで滅多に見られないわ…………。

…………なんて解説してる場合じゃなかったわ！！

「ちひろちゃん、大丈夫？しっかりして！！」

側にいるママンは今はスルーして、ちひろちゃんの背中を支えて起こしてあげた。

なんだか目が虚ろになってるわね、大丈夫かしら？

「……痛かったけど、気持ちよかったあ……」

『……はい?』

この流れでこの台詞は、あまりにも強烈すぎる……。

ちひろちゃんとも思えない大胆発言に、私の中では想像しちゃいけない事を想像してしまう……。

あんな事やこんな事……。

いやあああああああつ、煩惱退散、煩惱退散つ!!

「……気持ち良かったですう……、……足ツボマッサージ……」

………なんですって?

………あ、足ツボ!!!

「ちひろちゃん、家事をしてるって聞いてたから肩とか腰とか痛いと思っただし、身体の疲れとかも随分ほぐれたでしょ?」

「はいっ!!!お陰様で凄く楽になりました」

そ、そう言われればちひろちゃんは素足だし、ママンが足元にいるし……。

さっきの卑猥すぎると思われた会話も納得がいく……。

なんて私の独り善がり……。

果てしない勘違いしてた事だけは、悟られないようにしないと……。

「海？衣？奈？ちゃん？」

『！！！！！！！』

不意に右肩に手が置かれて振り向くと、ママンがしてやったりの笑顔を浮かべてた……。

「海衣奈ちゃんは一体、どんな勘違いをしてたのかしら？」

……気付かれてる……。

冷や汗が止まらなくなり、返答に困って携帯のボタンを押す指と思考が停止した……。

「海衣奈ちゃん」

『……………はい……………』

「海衣奈ちゃんのエッチ」

『い、いやあああああああああああつー！ー！』

）  
）

「……………ねえ、海衣奈ちゃん、元気出して……………」

『……………私なんて……………私なんて……………』

エッチという不名誉な称号を与えられた私は、部屋の隅っこに座り込んで床にのの字を書きながら落ち込んでいた……………。

ちひろちゃんが必死に宥めてくれてるけど、簡単に立ち直れないほど私の心は荒んでた……………。

「私が誤解を与えるような言葉さえ出さなければ良かったんだもん……………。だから海衣奈ちゃんは悪くないの……………」

ちひろちゃんは自分を責めてまで励ましてくれようとしている……………。

その優しさが、かえって辛い……。

「そうだよ。確かにミーナちゃんはエッチな事を考えてたかもしれないけど、この流れじゃエッチな事を考えてても無理ないよ。海衣奈ちゃんはエッチなんかじゃないよ、エッチじゃ」

唯ちゃんの全然フォローになってない言葉に、私は打ちのめされて床に倒れ込んだ……。

悪気はないんだろうけど……。

「……唯、あまりエッチエッチって言わないの。余計落ち込むでしよっ……」

「あ、そっかあ……。ごめんね、ミーナちゃん……」

「海衣奈ちゃん、私だって逆の立場だったら……。エ、エッチな事……、か、考えてたかも……。しれないし……」

「『え！？』」「」

私を励ます為に、ちひろちゃんは身を呈して、とんでもない爆弾発言をしてしまった……。

これには私のみならず、唯ちゃんや和ちゃんも唾然としていた……。

ちひろちゃんといえば、顔が真っ赤で身体も声も凄く震えてた……

…。

「ちいちゃん、例えば？」

「たとつ!?!」

「『唯!?!?』  
唯<sup>ちいちゃん</sup>!?!?」

私が宥めようとしたところで、唯ちゃんを取り返しのつかない横やりをいれてきちゃった……。

「え、えつと……た、例えば……、例えば、例えばあ……、はつ  
う……」

可愛く腕をブンブン振りながら、なんとか例えようと一生懸命なちひろちゃんの顔は異常なくらい赤く、しかも涙目になっていた……。

「は、はつっ……、あつあつあ……、……ひゃつをっ……!」

ボンッ、ポポボンッ、プシュシュー……ッ……、……バッター……。

「『……………あーあ……………』」

ちひろちゃんの頭は完全にオーバーヒートを起こして、その機能を全面的に停止した……………。

ママンのせつかくの足ツボも、完全に無に帰してしまったわね……………。

……………哀れちひろちゃん、御愁傷様……………。

）  
）

「ちいちゃん、ごめんね。大丈夫？」

「ひゃ、ひゃっえ……………」

あれから30分は経つのに、今だ恥ずかしさから立ち直れないちひろちゃん。

私のベッドで再び横になっていた。

少しでもほてった頭を冷やそうと、おでこには冷えピタが貼られるけど、これって恥ずかしさにも効くのかしら？



コンコンコン

ふと、背後から部屋のドアをノックする乾いた音が響く。

「海衣奈、入っていい？」

聞き慣れた声がして、私は声の主に『いいわよ』とメールで入室許可を促した。

メールの着信音がしてドアが開くと、カジュアルな服に身を包んだ、私の姉が部屋に入ってきた。

「あら、唯ちゃんに和ちゃん。久しぶりね」

「リーナちゃんだ！！ホント、久しぶりだね」

「鈴衣奈さん、お久しぶりです」

私の姉、東雲鈴衣奈。

今年大学に現役合格し、美術を専攻。

大学が家から近い事もあり、一人暮らしはせずにここから通学している。

髪型は腰まで伸びる、艶やかなロングヘア。

顔立ちは私と似てて、私がロングヘアのウィッグを被り、服装と一緒にすれば見分けがつかないくらいなの。

「ところで海衣奈、なんでママンが料理作ってるのよ!？」

姉さんが私に詰め寄って、必死の形相で問い詰めてくる。

『だってもう、有無を言わずに食材を買い込んでるんだもの。逃げようにも逃げられる訳ないじゃない!!』

「…………まあ、逃げられないか、あの圧倒的な闘気からは…………」

姉さんも空手を身に付けてはいるし、私以上の実力者だけど、それでもまだまだママンの足元にも及ばない…………。

あの縛り付けられるような闘気を跳ね返す事は到底無理…………。

「…………で、唯ちゃんや和ちゃんも巻き添えを食らったと?」

『そういう事。いつもはパパンが作るんだけど、久し振りに料理の虫が騒ぎ出したみたいね…………』

そう、いつもは料理が趣味のパパンが作ってくれるんだけど、たまにママンが作りたがって、誰の合意も無しに勝手に作り始めること

がある……。

合意を求めたところで、家族全員が猛反対するのは目に見えてるけど……。

ママンが料理をする事は、我が家にとって非常事態宣言を発令しなければならぬ、由々しき出来事なの……。

「どうするのよ、また誰かが病院送りになるかもしれないわよ!! 下手すれば死人がでるかも!!」

大袈裟でもなんでもない、これは疑いようもない事実……。

「そういえば以前、おば様が作ったハンバーグで、唯が救急車で病院送りになったのよね……」

「うつつ……、思い出させないでよお、和ちゃん……」

唯ちゃん、異常なくらいに身体を震わせてる……。

しっかりとトラウマと化しているみたい……。

）  
）

あれはまだ中学一年生だった唯ちゃんが、ママンお手製のハンバーグを一口食べた時、異変が起きた……。

「……………うぐっ！！ぐふっ！！ @ \$ % 〒 ……………」

突然唯ちゃんが席から立ち上がり、喉元を押さえながら訳の分からない言葉を発し始めた……。

脂汗が止まらなくなり、身体が激しく痙攣して、白目をむいて口から泡を吹いて床に激しく倒れたのを、今でもよく覚えてる……。

救急車で病院に運ばれた唯ちゃんは、そのまま三日間の入院を余儀なくされた……。

「お姉ちゃん、お姉ちゃん………」

憂ちゃん、唯ちゃんの眠っている傍らで泣いてたっけ……。

ちなみに、私達は唯ちゃんが倒れたどさくさ紛れに、ゴミ箱に強制排除して難を逃れたから、どんな味だったかは分からず終いだっただ……。

ちひろちゃんの料理は人を幸せにしてくれる。

でも、ママンの料理は人を不幸のどん底に落とすだけ……。

今日はいったい何人がママンの犠牲になるのかしら？

考えたくもないけど……。

「……あれ？私……」

あ、ようやくちひろちゃんが正気に戻ったわ。

赤い顔もようやく収まったみたいね。

「……あら？あなた確か……、ちひろちゃんよね？」

ちひろちゃんに気が付いた姉さんが、ちひろちゃんの顔をマジマジと見つめながら話しかけた。

「……はい、はい……、そうですけど……」

ちひろちゃんにとっては、まったく知らない人から声を掛けられるから、かなり戸惑っているみたい……。

「海衣奈が言ってた通り、本当に可愛い!!」

「ふえっ!? ええっ!! はわわわわ……」

姉さんの突然のハグに、ちひろちゃんはパニック状態。

また顔が紅潮し始めてる……。

一応私の姉だという補足説明を、ちひろちゃんにメールしておいた。

「ねえ、ちひろちゃん? 今度、私の絵のモデルになってくれないかしら?」

「え、ええっ!? モ、モデルですかあ?」

「うん、ちひろちゃん一度、デッサンしてみたいのよ」

姉さんのデッサン対象になるという事は、気に入られたという何よりの証拠。

会って間もなくデッサン対象になったのは、ちひろちゃんが初かも。

まあ、私の携帯コレクションを見てた時から会ってみたいと言ってたから、姉さんにとっては初めましてではないのよね。

「あのお……、モデルっていうと……」

「ん？なにになに？」

「やっぱり……、服脱いだり……、するんですか……？」

なっ！？ちひろちゃん、またしても大胆発言！！

さっきの二の舞いにならなきゃいいんだけど……。

「……その必要はないんだけど……、どうしてもって言うんだっから……」

姉さんが頬を人差し指で掻きながら、苦笑してる……。

やっちゃったわね、ちひろちゃん……。

そして、しばらくの静寂の後、ちひろちゃんは涙目になりながら顔全体を沸騰させていた……。

「……い、いやあああああああつ！！私ったら、私ったら  
っ、なんて恥ずかしい事を！！」

あまりの恥ずかしさから、身体全体に布団を被せて潜った。

「ふええ……、恥ずかしいよお……」

涙声で後悔しきりのちひろちゃん。

……まったく、可愛いつたらもうつ！！

姉さんは布団をはぎ取り、さらに恥ずかしがるちひろちゃんの様子  
を楽しんでいた。

「はいはい、ちひろちゃん。隠れないの」

「あつっ……、いやあ……」

赤い顔を両手で隠して、私達に背中を見せて寝返りを打つちひろち  
やんに、私も姉さんもピンポイントで萌えた。



「海衣奈がちひろちゃんを気に入る訳、分かった気がするわ」

『でしょ、でしょっ。』

「ううところはやっぱり姉妹だと感じるわ。

「ところで、皆……」

「『何、和ちゃん？』」「『」

「……そろそろおば様の料理、出来上がりそうだけど……、逃げなくていいのかしら？」

「『……！？わ、忘れてたあ……！……！』」「『」

楽しい時間を過ごしてて、すっかりママンの事忘れてたわ……！

ちひろちゃんだけは、さっきまでの事情でママンの料理の真実をまだ知らない……。

「何を忘れてたの？」

久し振り、と言っても一時間弱だけど、誰も待ち望んではいなかった声に、ちひろちゃん以外の時が停止した……。

唯一の逃げ道だった開いているドアの向こう側に、おタマ片手に笑顔  
顔を浮かべるママンが立ちはだかっていた……。

「お待たせ、晩御飯出来たわよ。台所へいらっしやい」

そう言い残し、ママンはスリッパの音を掻き鳴らしながら、階段を  
いそいそと降りていった……。

「……の、和ちゃん……」

唯ちゃんは涙を流しながら和ちゃんに抱き付き、和ちゃんは何も言  
わずに唯ちゃんをそっと抱き締めた……。

「和ちゃん……、私にもしもの事があつたら、……憂を……よろし  
くね……」

「分かったわ……。でも願わくば、皆で生還しましょう……」

『そうね……。無事でさえいれば、いつかは笑える思い出話になる  
わ』

「皆の無事を心から祈るわ。さあ皆、行くわよ……いざ、戦場へ！  
」

「」「」「」『おおーっ！』「」「」

一致団結し、生きる決意を胸に秘めて、生存率数%の戦いへと赴い

た……。

「……あのお……、晩御飯を食べに行くだけなんだけど……」

）  
）

重い足取りで階段を一步一步降りていき、降りきった所にはすぐにキッチンの入口がある……。

息を飲み、大きな深呼吸を一つし、いよいよキッチンへ入る……。

「……おお、海衣奈に鈴衣奈……。唯ちゃん達も一緒か……」

キッチンのテーブルには既に先客が一人座っていて、重苦しい雰囲気醸し出していた……。

……帰ってきてたんだ、パパン……。

少しポツチャリしてて、口髭がチャームポイントのパパン。

公務員のパパンは定時に仕事を終われる事もあり、いつもなら趣味

だという料理の腕をいかに発揮してくれる。

ちひろちゃんの料理の腕の域にはまだまだ及ばないけれど、ママンの料理と比べれば天国と地獄の差よ。

ママンが料理を作る事を断固反対してはいるけれど、一般人のパパにママンを止めるだけの力は無い……。

「はい。じゃあ皆、座って」

誰もなかなか座りたがらない中、何も知らないちひろちゃんが、ママンの指定席の一つ右隣りに座ってきた。

それを皮切りに、半ば諦めた表情の皆が一人ずつ座っていく。

全員が座ったところで、もうこれで何度目か分からない、最後の晚餐が幕を開けた……。

「さあ皆、今日は今までで一番の自信作よ。たくさん食べてってね」  
皆に緊張が走る……。

今までで一番の自信作という事は裏を返せば、今回が一番とんでもない料理だと誰もが感じているはずだから……。

「はい、お待たせ」

ママンがちひろちゃんの目の前に、今回のメニューを置いた。

皆の視線が一斉に、その料理に向けられた……。

「……か……、カレー！？」「……」

そこにあるのは紛れもない、野菜や肉が入った、普通のカレーだった。

「そうよ、今日はスーパーでカレールウと鶏モモ肉の特売だったから、チキンカレーにしてみたの」

その言葉を聞いた瞬間、皆の表情が安堵に包まれていく。

「私の大好物のカレーだよ、和ちゃん」

「よかったわね、唯」

「カレーなら大丈夫そうね、海衣奈」

『ええ、助かったわ』

それもそのはず、市販されている味の決まっているカレールウから作り上げたカレーに、失敗なんてあり得ないものね。

さっきのママンの言葉は、満更嘘じゃなかったみたい。

「それじゃあおば様、いただきます」

「『いただきます』す」

ちひろちゃんの声を皮切りに、皆が手を合わせた。

私も銀のスプーンを手に取り、カレーをすくう。

野菜も鶏肉もちゃんと切られてるし、匂いも普通のカレーね。

ママンもようやく、ちゃんとした食べ物を作ってくれたわ。

そして、皆同時にカレーを口に含んだ。

「『』……………」

キッチンに沈黙の時間が訪れる……。

口にカレーを一口入れた途端、誰も喋ろうとはしない……。

カチャーーーン……………

唯ちゃんの手からスプーンがテーブルに落ちて、その静寂は瞬く間に打ち破られた……。

「びゃああああああああつ！！辛い辛い辛あああああああ  
iiiiiiiiiiiiiiiiっ！！」

口から火を噴いた唯ちゃんが椅子から床に転がり落ちて、喉元を押さえながらのた打ち回ってる……。

「……………」

…。  
和ちゃんは口元を手で押さえたまま、身体を激しく痙攣させてる……。

「……………！！……………！！」

姉さんは声にならないかすれた声を出しながら、テーブルをグーでバンバン叩いていた……。

本当に美味しいカレーなら辛さの中に美味しさがあるって、普通は思うものじゃない!!

何よいつたい、このふざけたカレーは!?

辛さの後に壮絶な辛さが来て、その後針を刺した様な激しい痛みが、身体全体を刺激する……。

夏の季節、かき氷を急いで食べて頭がキーンてなる、いわゆるアイスクリーム頭痛といわれるあの痛み。

その何百倍も痛い!! 痛いつ!! 痛あああいつ!!

辛さが痛みに変わるなんて、人生初の経験だわ!!

脳がカレーを飲み込む事、更には咀嚼する事、拳げ句の果てには口の中にカレーがある事そのものを完全に拒否してる……。

嫌な脂汗が全身の毛穴から溢れ出て、意識が飛びそうになるけど、我慢してママンにメールを震える指で打つ……。

『ママン……、何を入れたの?このカレー……』

ママンは悪びれた様子もなく、笑顔で淡々と説明してくれた。



「チキンカレーは辛口の方が美味しいって聞いたから、この前近所の奥さんからお裾分けで貰った、これを入れてみたのよ。」

ママンが持ち上げた平たい籠の中には、テレビで見た事がある赤いピーマンの様な物がたくさん入ってた。

「……ま、まさか……、それって……」

「これ？あの有名な唐辛子、ハバネロよ。辛くて美味しいでしょ？」

ふ？ざ？け？な？い？で！！

ギネスブックに載るほどの唐辛子、ハバネロをカレーに入れたらどうなるか、いくら体育会系の頭でも分かるはずでしょ！？

それ以前にハバネロをお裾分けだなんて、近所のおばさんはどういう神経してるのかしら！？

いや、お裾分けじゃなくて多分、手に負えなくなってウチによこしたのね……。

カレールウからのカレーだからって、アレンジする事を警戒しなかった私達も浅はかだったわ……。

ガタッ、バターーン！！

椅子に掛けたまま、勢いよく後ろに倒れたのは、辛い物がまったく

ダメという、うちのパパンだった……。

身体を激しく痙攣させて、タラコ唇から泡を吹き出していた……。

あのハンバーグの時の唯ちゃんみたいに……。

「パパン、どうしたの？パパンではあ」

ママンが身体を揺すってみるものの、パパンは完全に意識が飛んでいた……。

「大変！！何があったのか知らないけど、二回の寝室に運ばなくちゃ……！」

自分の作ったカレーが原因だなんて、毛頭思っていないみたいだわ……。

ママンはポツチャリガツチリのパパンを軽々とお姫様抱っこして、二階の寝室に運んでいった。

『皆、生きてるかしら……？』

私の問い掛けに、なんとか頷いている皆。

命だけは無事みたいね……。

……そういえば、ちひろちゃんは？

あんなの食べたら、ちひろちゃんなんてひとたまりも無いに決まってる……！

「「「「「なっ！？」」「」「」

私を含めて、皆が目を疑った……。

ちひろちゃんが……。

皆、一口でギブアップした、あの地獄という表現すら生温い激痛カレーを……。

「……ふっつ」

……完食してるわ……！

『ち、ちひろちゃん……？』

「何、海衣奈ちゃん？」

『いや……、何って……、……辛くないの……?』

「うんっ、私は大丈夫なの、この辛さ」

「……」『嘘っ!?!?』「……」

「実はお父さんもお母さんも大の辛党で、辛い物は平気なの」

「……」『……』「……」

辛いのもそうだけど、ママンの料理自体を完食したのは、ちひろちゃん  
が初めてよ……。

「辛い時は水を飲むよりも、氷を口に含むといいの。試してみて」

ちひろちゃんのアドバイスで、私達はコップの水の中にある氷を急いで口に含んだ。

……確かにいくら水を飲んでも消えなかった辛味が、段々治まっていくわ……。

流石はちひろちゃん、主婦目線のアドバイスね。

「もう時間が無いから、急がなくちゃ」

ちひろちゃんは更に驚くべき行為にうつて出た。

カチャカチャ、パクツッ!!

皆が残しているあのカレーを、ちひろちゃんは食べ始めてる……。

「ちいちゃん、何してるの?」

「おば様がいないうちに皆の分、私が食べちゃおうと思って。そうすれば、皆助かるんでしょ?」

「ちひろちゃん、食べるって……、ここにあるのを全部!??」

姉さんが目を大きく見開いて、あり得ないと言わんばかりだった。

「おじ様のおば様のは食べてしまつとバレてしまつから、それ以外は食べてしまいます」

「ちひろちゃん、無茶よ!!あと私達のだけで四人前はあるのに!」  
「?」

「すみません、おば様が降りてくるまで時間が無いので、急いでいただきます」

ちひろちゃんはスプーンに手を掛け、目まぐるしいスピードでカレーを食べ始めた。

…。  
そっか、そういえば姉さんは知らないのよね、あの日の出来事を…

『姉さんに話したわよね。入学式の日、唯ちゃん家で御馳走になった事』

「うん、聞いたわよ。それがどうかしたの？」

『食べ切れないほどの憂ちゃんの料理をね、ちひろちゃんは涼しい顔で完食したのよ。ただ一人ね……』

「ええっ!?!」

そう、大食い自慢の唯ちゃんをもつてしても食べ切れなかった料理を、ちひろちゃんはペロりと平らげた……。

「御馳走様でした。美味しかったです」

御満悦なちひろちゃん表情とは対称に、皆は啞然としてたわね…  
…。

ちひろちゃんは底無しの大食いな……。

「勇者だわ……」

和ちゃんがそつと呟く……。

皆、勇者ちひろちゃんの勇姿をその目に焼き付けていた……。

）  
）

「皆、お待たせ。あらあら、全員完食じゃない!!」

ちひろちゃんの活躍で皿は綺麗になってて、なおかつ鍋にあったカレーも少し減らしてた。

「おば様、御馳走様でした。凄く美味しかったです」

ちひろちゃんの眩しい笑顔に、ママンも嬉しそうだった。

「ちひろちゃんに喜んでもらえて、とても嬉しいわ。またいつか作るから」

「は!?!はい……」

しまった、という顔をしたちひろちゃん。

ママンの創作意欲に火を着けちゃったわね……。

それだけは阻止しないといけないわ、気をつけなくちゃ……。

）  
）  
夜も更けて私と姉さん、そしてママンは無事生還した皆の帰りを見送った。

パパンはあのまま、ベッドでうなされたままだけど……。

「ねえ、海衣奈」

『何、ママン？』

「あのちひろちゃんて子、凄いわね……」

『あの辛いカレーを食べた事？』

「違うわよ。あれぐらい、辛いうちに入らないわ」

ママンは何事も無く完食してたけど、あのレベルについていけないのは、ちひろちゃんだけよ……。



「そうじゃなくて、私の鬨気を受けてまったく平気なんて、ちひろちゃんが初めてよ」

『…………それは、そうね…………』

という事は、皆を逃がさない為に故意に放ってたのね…………。

「私でも金縛りに遭うわよ、あの凄まじい鬨気は…………。ちひろちゃんは何で、普通に動けるのかしら？」

「それはママが一番知りたいわ…………。ちひろちゃん、何か持っているわね。ちひろちゃん自身も知らない何かを…………」

そう言って、ママは家の中へと入っていった…………。

ちひろちゃんと知り合って、まだ一ヶ月半。

私はまだまだ、ちひろちゃんのすべてを知らないのね…………。

でも、私にとってちひろちゃんはちひろちゃんではない。

あの出会いの日の一言が、私をそう思わせていた…………。

『友達になりたい？でも私、喋れないのよ……』

「喋れない事が、友達になる事に何か支障があるんですか？」

『…………え…………？』

「それでしたらメール交換しませんか？これなら会話出来ますよね」

あの一言で、私はちひろちゃんと友達になった。

私はこれ以上、ちひろちゃんの詮索はしたくない。

私の事を詮索しなかった、そんなちひろちゃんだから……。

過去を乗り越えたちひろちゃんに、もう後ろは向いてほしくない……。

私はちひろちゃん的笑容が見れば、それでいいの。

もちろん、軽音部の皆もね。

皆の幸せが、今の私にとっては一番の幸せよ。

第20話「ちひろのピンチと最後の晚餐」(海衣奈視点)(後書き)

エイジ「いかがでしたでしょうか？最初の文章を読んで変な勘違いをされた方には、もれなくママンからエッチの称号が強制的に与えられます」

海衣奈『良かったわぁ……………』

ちひろ「海衣奈ちゃんがうっとりしてる……………」

お父さん「は、鼻血が止まらない……………」

ちひろ「お父さん、しっかりして!!!」

ママン「ちひろちゃん、いい声してたわ」

ちひろ「言わないでください、恥ずかしいですう……………」

海衣奈『まあ、この責任は作者にあるわけで、作者はもれなく、ママンのカレーが食べられます』

エイジ「え!?!あんなの食べられる訳、ぐっ!?!」

海衣奈『闘気で動けなくなったわね。それじゃアーン、してあげるわね』

エイジ「ち、ちょっと待って……………、しかもそんなたくさん……………、いや、やめ……………」

海衣奈？ママン」「どうぞ召し上がれ」

エイジ「ギャアアアアアアアアアアアアッ！！」

ちひろ「えっと、作者さん再起不能ですので私が次回告知しますね。いよいよ始まる中間テスト。勉強をしなかった唯ちゃんの点数は？」

海衣奈「そして赤点だった場合は、唯ちゃんの公開おしおきもあります」

ち？海「次回をどうぞ、お楽しみに」

第21話「中間テスト〜笑いと涙と五枚のハンカチ〜」（前書き）

お待たせしました。

今回から中間テストに突入します。

ちひろや海衣奈のテスト結果は？

そして、一番心配される唯の運命は？

ギャグ中心ですが、最後の方に少しシリアス展開です。

いつも通り、長めの文章ですがゆっくりとお読み下さい。

それでは第21話、どうぞ御覧下さい。

大した事ではありませんが、つい先日誕生日を迎えました。

ハッピーバースデー、トウ、ミーー！！

第21話「中間テスト」笑いと涙と五枚のハンカチ」

キーン、コーン、カーン……

「それでは、始め」

先生の号令と共にテスト用紙を裏返して、遂に始まった高校生活最初の中間テスト。

沈黙の教室に解答を記入する筆記用具の音だけが、不規則に響き渡る……。

この日の為にギターを弾きたいのも我慢して、テスト勉強を積み重ねてきた。

赤点までいかなくても、悪い点を取れば部活動に影響が出る可能性は否めないから、なんとしても納得のいく点数を取りたい……。

それに私は、お母さんやお祖母ちゃんと交わした夢へ向かっている最中。

その夢を叶える事も含め、私は一心不乱に解答欄を埋めていく……。

「うーん……」

その声でふと前を見ると、唯ちゃんがシャーペンをクルクル回したり、鼻と口の間挟んだりしているのが見えた……。

そのシャーペンは解答欄を埋めるよりも、空を切っている時間の方が遙かに長かった……。

……だ、大丈夫なのかなあ？唯ちゃん……。

）

「よし、それじゃこれから、この前の数学のテスト用紙を返していく」

中間テストがようやく終わって、各科目のテスト用紙返却が始まってきた……。

「今回、初めてのテストという事と少し難しかったのもあったのか、このクラスの平均点は68点と少し低めだったぞ！」

確かに中学の時からみたら、格段に難しくなっていた……。

それは全国レベルの中学にいた私からでも、そう感じた。



「そんな中、嬉しい知らせと嬉しくない知らせがある」

歳を召された数学の先生が解答用紙の束を右手で持ち上げながら、そんな事を言い始めた……。

「嬉しい知らせは、そんな平均点の中で、満点を取った優秀な生徒が二人いた事だ」

教室内から「うわあっ！！」と歓声上がる。

「そして、嬉しくない知らせはこのクラスにただ一人、赤点を取った生徒がいる事だ」

続いてどよめきが沸き上がる……。

「赤点の生徒は一週間後に追試があるから、覚悟しておくように」  
該当者が誰か分からない、天国と地獄の選択肢が突き付けられた中で、遂に結果発表の時を迎えた……。

「では出席番号順に返していく。まずは、綾瀬」

「は、はいっ！！」

私、出席番号一番だったの忘れてたよお……。

皆の視線が集まる中、私は先生の所へと歩いて行く……。

極度の緊張で、心臓の鼓動音だけが聞こえてくる……。

入学式の日のご自己紹介の時と同じ様に……。

「……綾瀬……」

私が先生の所まで行ったのはいいけど、すぐにテスト用紙を返そうとはしてくれない……。

不安と戸惑いの中、立ちすくんでいると……。

617

「君が最初の満点だ!!」

嫌な沈黙の後、拍子抜けするような笑顔を見せた先生から渡されたテスト用紙には、赤ペンで100の数字が大きく書かれていた。

それを確認したのと同時に、教室内が拍手に包まれた。

「綾瀬さん、凄おーい!!」

「綾瀬さんて頭いいんだ!!」

「やったわね、ちひろ」

「さすがはちいちゃん、私の心の友だよ!!」

和ちゃんや唯ちゃん、クラスの皆から惜しめない拍手が送られてくる。

「……はっ、はっはっ……」

急に恥ずかしくなって、真っ赤になった顔をテスト用紙で隠しながら席へと戻っていく……。

「綾瀬さん、顔真っ赤よ。可愛い」

「あれで顔、隠してるつもりなんだ」

クスクスと笑い声が聞こえる中、席に着くと早速手荒い祝福が私を迎えた。

「ちいちゃん、おめでとう!! 私は信じてたよ、ちいちゃんが満点だって」

「ゆ、唯ちゃん……、お願いだから私の腕をそんなにブンブン降らないで……」

これまた入学式の自己紹介の時と同じ様に、私の腕を掴んで上下に激しく振る唯ちゃん。

喜んでくれるのは嬉しいんだけど、リアクションが大きすぎるよお……。

この後、次々とテスト用紙が返されていき、

「平沢、平沢唯」

「はーーーーい」

唯ちゃんの名前が呼ばれ、意気揚々とテスト用紙を貰いに行く。

これが放課後に起きる、惨劇の発端になる事も知らずに……。

）

「凄いなあ、和ちゃんがもう一人の満点だったなんて」

「たまたまよ。ちひろは相当勉強したと見えるわ。家事と両立じゃ

大変だったんじゃない？」

「それなんだけどね……、テスト勉強中はお父さんが家事を手伝ってくれたの」

「そうなんだ、いいお父さんね」

「うんっ」

料理をほとんどした事がないお父さんが、慣れない手付きで時間はかなり掛かったけど、カレーライスを作ってくれた。

お世辞抜きで、本当に美味しかったし、嬉しかった……。

ただ、流しが汚れたお皿と失敗した黒焦げの鍋なんかで掃き溜め状態だったのは、私が片付けるハメになったけどね……。

それ以外にも掃除や洗濯物の片付けも手伝ってくれたっけ。

もちろん、私の下着以外……。

「ところで、唯……」

「……な、何？和ちゃん……」

「いつになったら点数、見せてくれるのかしら……？」

唯ちゃんはテスト用紙を貰った直後から、血の気が引いたような青白い顔をしてて、テスト用紙は机の中に閉まったまま、一向に出そうとはしてくれない……。

私も和ちゃんも、唯ちゃんの点数の予想はあらかたついてた……。

「見せなさい」

仁王立ちして唯ちゃんを見つめる、和ちゃん的眼鏡が怪しく光る。

「……あわわ……」

唯ちゃんは身体を震わせたまま、まだ出そうとしない……。

「……ふうっ……、ねえ、唯？あと5秒で見せないと、今度のちひろの手料理、唯だけおあずけにするわよ？」

「ええええっ!?!」

その会話に、何故か激しく既視感（デジャ？ヴュ）を感じるなあ……。

それに、そういう権限は私が握ってるものなんだけど……。

「はい5、4、3、2、1」

「これです!?!ごめんなさい!?!」

お母さんの時とは違う、容赦なく早いカウントダウンに負けて、唯ちゃんは観念してテスト用紙を素早く和ちゃんに差し出した。

和ちゃんが受け取ったテスト用紙を、私も横から覗き込む。

「……………え……………？」

私達の予想は当たってた……………、ううん、私達の予想を上回る物だった……………。

「……………唯……………」

「……………はい……………」

「……………やってくれたわね……………」

「……………あはは……………、はは……………」

ジト目の和ちゃんに、引きつった笑い声を出すしかない唯ちゃん……………。

私はただただ、その点数に絶句するしかなかった……………。

「……唯ちゃん……、12点で……」

「難しすぎてほとんど分からなかったんだ……。取り敢えず解答欄は当てずっぽで埋めたんだけど……」

「マークシートみたいな選択式の問題ならまだしも、公式を用いた記述式の問題で当てずっぽがまかり通るほど甘くないわよ、唯……」

「……そうですよねえ……」

まさか先生の言っていた、満点二人とたった一人の赤点で追試が私達三人だったなんて、思いもしなかった……。

私達が満点を取っても、唯ちゃんが赤点だった事でなんだか、喜びが半減しちゃったなあ……。

「ところで唯、今日からだったかしら、部活？」

「うん、久し振りにムギちゃんのお菓子が食べられるからね」

「……あなたは何をしに部活へ行ってるのよ……」

「う、うめんなさいっ……!」

「って、何故ちひろが謝るの……?」





「絶対怒られるだけじゃ済まないよお!!どうしよう……」

「まあ、自業自得と思って諦める事ね」

「しょ、しよんなあ……っ、よよよよよお……」

「泣き付いても、今更どうしようもないでしょ?」

泣いて抱き付く唯ちゃんを、和ちゃんはそれ以上フォローする事なく、踵を返して自分の席へと向かった。

「ええ!?待ってよお、和ちゃん……」

抱き付いて離れようとしない唯ちゃんを引き摺ったまま歩いてる!!

和ちゃん、意外に力持ち!?

放課後。テストも無事?終了して、部活動としての入室禁止が解かれた部屋に、いつもの皆が集まっていた。

「う~~~~んっ！！やつとテストから解放されたあ！！」

律ちゃんが思い切り背伸びをして、テスト終了と部活動再会の喜びを噛み締めてる。

「高校に入つて、急に勉強が難しくなつたから大変だったわ」

ムギちゃんでも難しいと感じるほど、この桜ヶ丘高校の授業のレベルは高い。

だからテストも思いのほか、全教科難易度が高かった。

やっぱりこの地元では有名な進学校、桜ヶ丘高校の名前は伊達じゃないみたい。

「そうだな。英語なんか教科書の文章そのまま問題にしてるのかと思つたら、所々単語や文章が違つてて、引っかけになってたりしたからな。丸覚えじゃダメだつて事みたいだ」

という事は、湊ちゃんはその引っかけには引っかけからなかったんだ……。

湊ちゃん、よく見てるなあ……。

「大変と言えば……」

湊ちゃんが部室の片隅を恐る恐る振り向くと……。

「もっと大変そうな奴がここに……、というより……」

そう、大変そうじゃなくて……。

『ゆ？い？ちゃ？んっ！！』

「お、お許しを〜、お代官様あああつ、つい出来心でええええっ……」

『誰がお代官様よ！！それに、出来心で12点なんて赤点取るバカが何処にいるのよ、まったく！！』

「ここにいました……。ごめんなさあああああ……」

『バカ正直に答えなくてもいいわよ！！このバカチン！！』

「……大変だぁ……」

……うん、大変なの……。

この世の物とは思えない、恐ろしすぎる形相で唯ちゃんを睨みつける海衣奈ちゃん……。

唯ちゃんは気迫に押されて、まるで子犬みたいに震え上がってる……。

今までに見た事のない、般若のような怒りの表情に誰一人、怖くて近づく事が出来ずに事の次第を見守るしかなかった……。

澪ちゃんと私は震えて身体を寄せあつてた……。

『……笑えないわ……、まったくもって笑えないわ……』

「ミーナちゃん、許してつかあさい……」

『ミーナと呼ぶなって昔から言ってるのに、まだ分からないのかしら、この子は……！』

「……ご、ごめんなさい、ごめんなさい……」

髪の毛が逆立ちはじめ、なんだかどす黒いオーラが見えるよお……。

唯ちゃんは恐怖のあまり、逃げ出す事も出来ずに固まってしまつてる……。

『……笑えないわ……、だから……』

「……は、はひ……」

『唯ちゃんが笑いなさい……』

「……………へ……………？」

そして怒り全開の海衣奈ちゃんが取ったのは、意外な行動だった……。

「や、やめ……アハハハハハハハ……、脇の下だめえ……、アヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤッ……」

『さあ、笑いなさい。腹がよじれるまで笑い続けなさい!!』

唯ちゃんのお腹に馬乗りになって、海衣奈ちゃんは唯ちゃんのお腹を情け容赦なくすぐっていた……。

「アヒヤウヒヤエヒヤッ……、足の裏はもつとらめえっ!!おにえがい、アハハハ、ゆるひてえ……」

笑いに悶絶しながら必死に許しを乞うけど、海衣奈ちゃんはまるで聞く耳を持ってないみたい……。

「だ、誰か唯ちゃんを助けてあげて!!」

私は皆に助けを求めた。

「助けたいのはヤマヤマだけど、あんな目のイッた海衣奈、怖すぎて近寄れないって……」

「律、お前仮にも軽音部の部長だろ？そんな無責任な事言っていないで、怖がらずに助けるよー!!」

「仮にもって……。海衣奈から目を背けて、耳を塞いでしゃがみ込んでる滯に言われたくないわー!!」

「だって、怖いもん……」

「……おいおい……」

律ちゃんも滯ちゃんも海衣奈ちゃんが怖くて助けに行けないみたい……。

そつだ、ムギちゃんならこの騒動を収めてくれるかも……。

「ムギちゃん、唯ちゃんを助けてあげて……。……ムギ……。ちゃん……?」

ムギちゃんの表情が、あからさまにおかしい……。

右の頬に手をあてて、恍惚とした表情を浮かべてる……。

「……いいわあ……、嫌がる唯ちゃんを無理矢理……」

私がいくら呼び掛けても、完全に自分の世界に浸っているムギちゃん……。

これじゃあ、ムギちゃんも助けに行くのは無理みたい……。

こうなったら私が行くしかない!!

……そう決心はしたものの、どうすれば暴走状態の海衣奈ちゃんを止められるんだろう……？

ただ止めに行けば巻き添えを食らうだけだし、何か効率の良い方法は……？

「ギャヒヒヤ ㄗ%!! ㄥ @!!」

早くしないと、唯ちゃんが訳の分からない言葉を言い始めてるよお……。



……はっ！！そういえば！！

ある事を思い出し、バックを置いてある長椅子に急いで走り出す。

「どうしたんだ、ちひろ？いきなりバックの中を漁り始めて……」

バックの中身を出しながら、手を止める事なく律ちゃんの質問に答える。

「実は今日、久し振りに皆が集まるからと思って、特製のミルクレ  
ープを作ってきたの」

「おお！！それで？」

「あ、あった。これをなんとか海衣奈ちゃんに食べさせて、止めて  
みようと思うの」

「それで止まるもんかなあ？」

「それはわからないけど、やってみるね……。……じゃあ行ってき  
ます」

「ちひろ隊員、どうかご無事で……」

律ちゃんの敬礼を背に受けて、ミルクレープを少しフォークに刺し  
て、私は海衣奈ちゃんの背後から気付かれないよう、ゆっくりと近  
付いた……。

足音を立てないように、ゆっくりと、慎重に……。

そして手を伸ばせば、海衣奈ちゃんの肩に手が置ける距離まで近付いた。

美味しい物を食べれば、人は大抵怒りを忘れるものなの。

だから海衣奈ちゃんも、もしかしたら静まるかもしれない……。

そんな事を考えていた時だった……。

「キヤツ!!」

突然、海衣奈ちゃんが私の方を睨み付けてきた……。

驚いた拍子に、右手に握っていたフォークがまるでスローモーションの如く床に落ちて、金属音が響いていく……。

任務失敗の瞬間だった……。

取り敢えずフォークを拾おうとして床にしゃがみ込んだ時、私の両肩にガツシリと手が置かれた……。

『……………食べ物粗末にするなんて……………、笑えないわ……………』

「……み、海衣奈ちゃん？」

ま、まさか、この展開は……。

『……だから……』

……もしかして……。

『ちひろちゃんが笑ってね……』

や、やっぱりいいいいいいいいっ!!

さっきまでの般若のような表情とは違い、まるで危ない表情の海衣奈ちゃんからは、荒い息遣いが聞こえてくる……。

「……み、海衣奈ちゃん……」

床に押し倒されて……。

「お願い、やめてえ……」

その伸びてきた両手で……。

「いつ、いやあああああああああ……」

……無残にも、悲劇は繰り返された……。

）  
）

「……………なあ、海衣奈……………」

律ちゃんの声が聞こえる……………。

「いつも調子にのって、ふざけた事してるアタシがこんな事言えた義理じゃないのは、よく分かってる……………。でも、敢えて言わせてもらうな？」

次の瞬間、律ちゃんの怒号が飛び交った……………。

「加減って物知らないのか、海衣奈は！？唯どころか、ちひろまで危ない状況に陥ってるじゃないか！！」

床の上で力尽きて転がったままの私に見えたのは、正座をして律ちゃんから説教を受けている、もとに戻った海衣奈ちゃんだった……………。

それに唯ちゃんに至っては、口から泡を吹き出して全身を激しく痙攣させていた……………。

「……………ちひろ、大丈夫か？」

澪ちゃんが私のもとへ駆け寄って、心配そうな表情を浮かべてくれる……。

「……ちひろの場合、危ないの意味……、唯とは違ってるけどな……」

律ちゃんの言葉の意味は、私が海衣奈ちゃんのお母さんから受けた事を回想してくれれば、分かるはずです……。

律ちゃんと澪ちゃんの頬が赤く染まってる訳だから……ね？

そして、その影響で思わぬ二次災害を引き起こしていた……。

「一体何が起きたんだ……？」

律ちゃんが見つめる先には、御満悦な表情を浮かべて床に倒れてるムギちゃんの姿が見えた……。

「……ちひろちゃん、凄すぎるわ……」

ごめんなさい、ムギちゃん……。

）  
）

なんとか復活を遂げた私達は、ようやく恒例のティータイムを開始したんだけど……………。

『……………ごめんね、唯ちゃん、ちひろちゃん……………、皆も……………』

すっかりしおらしくなってしまった海衣奈ちゃん……………。

ムギちゃんのイチゴタルト、私のミルクレープ…少し先が欠けてるバージョン…にも一切手を付けず、俯いたままだった……………。

「大丈夫だよ、海衣奈ちゃん。私、別に海衣奈ちゃんの事、責めてないよ」

『ちひろちゃん……………』

「確かに恥ずかしい想いはしたけど、食べ物に粗末にしてみました私にも落ち度があったんだもの……………」

そう言いつつ、私は海衣奈ちゃんと私のミルクレープを取り替えた。

『…ち、ちひろちゃん……………？』

「口に合うかどうか分からないけど、食べて元気出して」

「ちいちゃん、悪いんだけど私のミルクレープ、ミーナちゃんにあげちゃうね」

唯ちゃんは私に申し訳なさそうな顔を向けながら、海衣奈ちゃんに手付かずのミルクレープを差し出した。

『…………唯ちゃん…………』

「元々は赤点取っちゃった私が悪いんだし、ミーナちゃんにお詫びの意味でも食べてもらいたいから…………」

『…………唯ちゃん、ちひろちゃん…………、ありがとう!』

海衣奈ちゃんは嬉しさのあまりに、私と唯ちゃんが椅子ごと後ろに倒れそうな勢いで抱き付いてきた。

凄いい勢いで怒ったかと思えば、急にしおらしくなったり笑ったりと、普段はお姉さんっぽい海衣奈ちゃんも、やっぱり普通の女の子なんだなあ…………。

私にとって海衣奈ちゃんは、可愛い一面を持ち合わせる、あくまでも普通の女の子でしかない。

喋れる、喋れないなんて私にとっては二の次でしかないし、一緒にいて楽しければ、それでいいの。

「数学以外は大丈夫だったのか？」

澪ちゃんでも心配しそうな点を聞かれる。

「うん、数学以外は大丈夫だったよ。でも、赤点取っちゃった事に  
変わりないし……」

……うん、確かに大丈夫だけど、他も赤点ギリギリの点数という事は、この平穩さを保つ為に黙ってしよう……。

「……だ、大丈夫よ……、今回は勉強の仕方が悪かっただけじゃない？」

「そうそう、ちょっと頑張れば追試なんて余裕、ヨユー」

唯ちゃんにすかさずフォローを入れるムギちゃんと律ちゃん。

「勉強はまったくしてなかったけど」

「励ましの言葉返せ、このヤロー！……」

この発言に怒ったのは律ちゃんだけじゃなかった……。

「……グツ！？み、ミーナちゃん……、ほ、骨があ……」

抱き付いていた海衣奈ちゃんが唯ちゃんだけにしがみつき、鯖折り  
を始めた。



声と共に背骨まで悲鳴をあげてるよお……。

「なんで勉強しなかったのさ？」

私が聞きそびれていた質問を、律ちゃんが聞き出す。

和ちゃんも言ってたよね、勉強なんてした事ないって……。

「いやあ、しようと思ったんだけど、なんか試験勉強中ってさ、勉強以外の事に集中出来たりしない？」

「ああ、それはあるなあ……。部屋の掃除、はかどったりなあ……。私にとっては毎日してる当たり前の事だから、息抜きにはならないなあ……。」

「勉強の息抜きにギターの練習したら、抜け出せなくなっちゃって、結局全然勉強出来なかったの……。」

私が我慢してた事を、唯ちゃんはしてたんだ……。

多分ギター弾いてたら、私も唯ちゃんと同じ末路を辿ってたかもしれない……。

だって、凄く楽しいから……。

「…………でもね!」

唯ちゃんの目が、一気に見開いた。

「おかげでコード、いっぱい弾けるようになったよ!」

「その集中力を少しでも勉強に回せば……」

完全に息抜きの域を越えて、早くもギターコードをかなりマスターしてしまっただ唯ちゃんに、焦りを感じたのは内緒……。

『昔から唯ちゃんはそう!集中力はあるはずなのに、違う方向でそれを発揮しちゃうのよね……。人生、損して生きてるわ……』

「私はいつでも楽しいよ?」

『うん、それは分かってるわ……』

なんとも唯ちゃんらしい。

「そういえば、そういう律ちゃんはどうだったのさ?」

「へ?アタシ?」

律ちゃんはカバンからテスト用紙を取り出し

「余裕ですよ、この通り!!」

自信満々に見せてきたテスト用紙の点数は、まさかの89点!!

「……こんなの、律ちゃんのキャラじゃないよ……」

テスト用紙を見ながら、驚きに震える唯ちゃん……。

私も正直、ビックリしちゃった……。

「オーホッホッホ!!アタシぐらいの人間になると、何でも卒なくこなしちゃうのよ」

「律ちゃんは私の仲間だつて信じてたのに……」

「オーホッホッホッホッホッホッ……」

お嬢様的な笑いを繰り返す律ちゃんに、澪ちゃんが真相を暴露し始めた。

「テストの前日に泣き付いてきたのは、何処の誰だっけ?」

「うわーったあ!!バラすなよ!!」

そういう事だったんだ……。

それを聞いた唯ちゃんは安心したのか、律ちゃんの肩に手を置いて言い放った。

「それでこそ、律ちゃんだよ」

「赤点取った奴に言われたくねえ!!」

『唯ちゃんの言う通りね』

「」「」「うんうん」「」「」

「皆して納得してんじゃねえ!!」

これで律ちゃんも唯ちゃん側の仲間入りが証明された。

とはいえ、前日に泣き付いてきたにもかかわらず、これだけ成績が良いという事は、澪ちゃんの教え方が良いという事が分かる……。

私は人に何かを教えた事なんてないから、正直上手く教える自身がない……。

「そういえば澪ちゃんにムギちゃん、ミーナちゃんは点数どうだったの?」

唯ちゃんが一応参考までにと聞いてきて、他の皆が数学のテスト用

紙を唯ちゃんに手渡した。

唯ちゃんに限らず、律ちゃんや私も点数が気になって、横から覗き込む。

「なっ!!」

律ちゃんが驚くのも無理はなかった……。

その三枚のテスト用紙の点数は、私とまったく同じ点数だったから……。

皆、ちゃんと勉強してるんだ。

こうしてみると、軽音部って成績優秀な人が多いんだなあ……。

……唯ちゃんには申し訳ないんだけど……。

「……そ、そうだよなあ……。アタシ、凡ミスしちゃったからさあ……」

唯ちゃんは皆と律ちゃんの成績を比べて、やっぱり律ちゃんは律ちゃんだと言わんばかりに、うんうんと頷いてる。

「頼むからなんか言ってくれ……」

遂に律ちゃんは、堪らず泣き始めた……。

律ちゃん、例え満点でなくてもその点数は立派だから、自信持ってね。

「そういえば、ちひろはどうだったんだ？」

そっかあ、律ちゃんはまだ私の点数、知らなかったんだ。

「私も漣ちゃん達と一緒になの」

「やっぱりな」

分かってはいたけれど、どうやら私は勉強が出来て、当たり前のように位置にいるみたい……。

そう思われるのは、実はとても心が痛む……。

あの皇中学を出てるだけで、勉強が出来ると思い込まれるのは仕方がないんだけど……。

「皆と一緒にじゃないと思うよ」

唯ちゃんが突然、変な事を言い始めた。

「…………え？だって、唯ちゃんも数学が満点だって事、知ってるはずだよな？」

「うん、それは分かってる。そうじゃなくて、私が言いたいのとは他の教科の事」

「え！？…………そ、それは…………」

あまり触れてほしくない所に触れられて、つい言葉を濁してしまう…………。

「え！？もしかして他の教科、点数悪かったのか？」

「私も、律と同じ事思った」

『もしかして、部活で時間の余裕が無くなったとか？』

なんだか、皆が思わぬ方向に話が進んで…………。

「…………ねえ、ちひろちゃん。差し支えがなかったら全教科のテスト用紙、見せてもらってもいいかしら？」

「…………う、うん…………」

ムギちゃんからのお願いに、気は進まないけれど断る理由も無いから、バックの中から全部のテスト用紙を取り出した。

「……はい、これ……」

私は机の上に全教科のテスト用紙を横一列に並べた。

それを見た、皆の反応はと言えば……。

「「「『えええええっ！！！』」」」

やっぱりと言えば、やっぱりだった……。

「凄いわ、ちひろちゃん！！全教科、満点だなんて！！」

ムギちゃんが羨望のまなざしで私を見つめてくる。

そう、私自身も驚きの、全教科満点だった……。

「漣達はとうだったんだ？」

「さすがにそこまでは……」

「私も……」

『私もよ……』



漣ちゃんもムギちゃんも海衣奈ちゃんも、それは無理だったみたい……。

気が乗らなかつた理由は、この結果を知られる事で嫌味に思われるかもしれないと考えてたから……。

それと、やっぱり勉強が出来て当たり前だと思われるのが、私は嫌だったから……。

「やっぱり凄いな、ちひろは」

律ちゃんの言葉で分かった……。

私はやっぱり、当たり前と思われてしまっただ……。

「やっぱり凄いよ、ちひろは凄い努力家なんだな」

「……………え……………?」

律ちゃんから出たのは、予想外の言葉だった……。

「そうだな、ちひろは昔から努力してきたんだもん。中学受験にお母さんへプレゼントする為の貯金、それに家事一切も」

「そうね、努力する人は報われる。その理想なのよ、ちひろちゃん  
は」

『私達はちひろちゃんを天才だなんて思っ  
てないわ。努力を惜しまない事に秀でる秀才なのよ』

「うん、私もちいちゃんを見習わないとね」

そんな皆の言葉が心に響いて、知らず知らずのうちに涙が溢れてい  
た……。

「え！？ちひろ、私達何か泣かせるような事、言っちゃったのか？」  
律ちゃんが戸惑いの表情を見せながら、ハンカチ片手に私の泣き顔  
を覗き込んできた。

「違うの……。私ね、天才って言葉、嫌いだったの……」

「天才……？」

私にとって、その言葉は昔の心の傷をえぐり出す、嫌な言葉の一つ  
だった……。

「私、小学校も中学校も一生懸命勉強したの。お母さんを目指した

夢を追いかける為に……」

『うん、そうよね』

「そして良い成績を取ると、いつも皆が口を揃えて言うの……。『綾瀬は天才だ』って……。皆より成績が良かったから、褒め言葉というよりは嫌味だったんだと思うけど……。その言葉にいつも傷付いてた……」

涙が大粒で溢れ、律ちゃんが用意したハンカチで拭ってくれる中、私は話を続けた……。

「天才って言葉は、どんなに影で努力をしても、その言葉ですべての努力を全否定されてしまう、そんな怖い言葉だから嫌だった……」

「言われてみれば、確かにそうだよな……」

透ちゃんが私の言葉に頷きながら、ハンカチを濡らしてくれてる……。

「でも、努力って言葉は人にひけらかす物でもないの……。誰かの前で口にすれば、それは努力でも何でも無くなってしまう……。だから、私は天才って言われても反論しなかった……。そして一人で静かに傷付き、泣いてたの……」

「……辛かったのね……。でも、ちひろちゃんその考え方、立派

だと思っわ」

ムギちゃんもハンカチで涙を拭ってくれた。

「でも、皆は私をちゃんと見てくれた。初めてだったから、嬉しくて涙が……」

『本当に涙脆いのね……。でも、そんなちひろちゃんが私達は好きよ』

「うん、私達は自分に素直で頑張り屋さんのちいちゃんが大好きだよ」

皆の優しい言葉の数々がまた一つ、私の心の傷を癒してくれた……。

「……私も……、私の事をきちんと見てくれる……、そんな皆が……、大好き……っ……」

声と共に絞り出した涙は、更に五枚のハンカチを次々と濡らしてしまった……。

なんだかドタバタしたけど、皆との友情を改めて確かめ合う事が出来た、感慨深い一日だった……。

翌日の放課後。

唯ちゃんは職員室に呼び出されて、残りの皆と今日は羊羹を頂いていた。

たまには和のお菓子も悪くないかも。

うーん、美味しーい!!

「おっ、今日は羊羹く〜!!」

ちょうどいい所に唯ちゃんがやってきて、早速羊羹を一口。

「追試の人は合格点取るまで、部活動禁止だって」

そっか、部活動禁止なんだあ。

それにしても、羊羹美味しい。

.....えっ？

「『『『『『えええええっ！！！！！！！！』』』』』」

部室内に皆の絶叫が響き渡り、ここから唯ちゃんの軽音部への存亡を掛けた挑戦が幕を開ける事になった……。

第21話「中間テスト」笑いと涙と五枚のハンカチ」(後書き)

如何でしたでしょうか？

次回、自宅で孤軍奮闘する唯に、強力な助っ人が登場！！

唯の勉強はきちんと進むのか？

そして、助っ人は唯を正しい方向へ導けるのか？

今回のように、オリジナルな展開も用意しています。

それではまた、次話でお会いしましょう。

## 第22話「最強の助っ人、現れる」(前書き)

大変長らくお待たせして、本当にすみませんでした……。

リアルに忙しくなり、本編がおざなりになってしまいました。

短編書く時間はあったのにつて？はい、すみません……。

追試を受ける事になった唯に今回、最強の助っ人が登場します！！

誰の事なのか、読者の方なら分かるとは思いますが……。

それでは第22話、どうぞ御覧下さい。



## 第22話「最強の助っ人、現れる」

「追試の人は合格点取るまで、部活動禁止だつて」

「『『『『えええええっ！！！！！！』』』』」

唯ちゃん、羊羹ほうばりながら言う事じゃないよお…………。

「結構厳しいなあ…………」

澁ちゃんだけでなく、私や皆もそう率直に感じてる。

いくら自由を重んじてても、勉強が出来なければこうなるという、ある意味見せしめなのかもしれない…………。

「そしたら、ここにいるのもマズいんじゃないか…………？」

律ちゃんの言う通りだし、ここで美味しそうに羊羹食べてる場合じゃないよお…………。

先生に見つかったら、大変な事になり兼ねないし…………。

「大丈夫だよ、お菓子食べに来てるだけだし…………、ンン〜」

それにしても、美味しそうに食べるなあ、唯ちゃん。

「そっかあ、それなら安心だ……、ってなんでやねん!!」

「……グググ……」

律ちゃんがノリツッコミと共に決めているこの技は確か、チョークスリーパーだったかなあ？

お父さんがプロレス大好きだから、たまに画面をチラッと見る事がある程度だけ。

私は格闘技、あまり好きじゃないから……。

それにしても、見事に決まってて唯ちゃん、苦しそう……。

「もし唯が部活出来なくなったら、今までの練習もすべて無駄になっちゃうんだぞ……」

『取り敢えず廃部は無いけど、私達と部活出来なくなるのはもちろん、学校でギター弾く事が出来なくなるのよ、それでもいいの?』

「ええっ!?!それは嫌だよ!!」

漣ちゃんや海衣奈ちゃんの忠告で、ようやく事の重大さが分かったみたい……。

もし、唯ちゃんが追試にも落ちるような事があれば、そうなるのは非を見るより明らかだから……。

ムギちゃんが唯ちゃんに、気になる事を聞いてきた。

「追試はいつあるの？」

「一週間後」

「……一週間後かあ……」

「一週間って言っても、油断は出来ない……」。

ちゃんと基礎から復習して、問題を解けるようになるまでは、以外と時間が掛かるもの……。

数学ともなれば、公式を使ってそれを当てはめて解き、場合によっては応用問題も出たりするから、それを理解するまでに尚の事時間が要る……。

「そんだけあれば、毎日ここに来て大丈夫だよな？」

「……だあ……っ……」

のほんとし過ぎてる唯ちゃんの発言は、皆がずっとこけるには充分すぎた……。

「それだけしかないの!!」

一番近くにいた律ちゃんが、私達の気持ちを代弁してツッコんでくれた。

「そうだよね……。皆と一緒に部活がしたいから私、頑張る!!」

そんな決意表明を残し、唯ちゃんは部室を後にして家路に着いた。

これから一週間近く、唯ちゃんのいない部活動が続く……。

寂しいけれど、また一緒に部活をする為にも、唯ちゃんには頑張つて欲しい。

心から、そう願わずにはいらなかった……。

）  
）

『それじゃあ、また明日ね』

「うんっ。またね、海衣奈ちゃん」

夕方。一緒に下校した海衣奈ちゃんと別れて、私は家の前まで歩いてきた。

ふとガレージを見ると、お父さんのワゴン車が入れてあるのが見えた。

いつもは帰りの遅いお父さんだけど、今日は珍しく早い御帰宅みたい。

今日は何作るのかなあ？そんな事を考えつつ、玄関の扉を開けた。

「ただいまあ」

「おお、ちひろお帰りい！！」

お父さんが満面の笑みを浮かべながら、私を出迎えてくれた。

声のトーンがいつもよりワンオクターブ高い時は、お父さんの機嫌が良い証拠。

「なんだかお父さん、機嫌がいいみたい」

「分かるか？凄く嬉しい事があつたからなあ！！」

「へえーっ、そうなんだ。それじゃあ、急いで夕御飯の仕度するね」  
ローファーを脱ぎながら、夕御飯の献立を頭の中で幾つかシュミレーションしようとしたら、

「おっと、今日はその必要はないんだ」

「え！？どうして？」

右の手の平を私に突き出して、夕御飯の仕度を断ってきた。

もしかして、またお父さんが作るのかなあ？

く ピーンポオーン

いきなりチャイムが鳴り響く。

「おっ！！来たみたいだな」

「何が？」

背後のドアが開いて、その答えはすぐ明らかになった。

「毎度お！！ご注文の特上握り寿司三人前、お届けに上がりましたあ！！！」

「おっ、待ってました」

「お、お寿司！？」

現れたのは、ウチにチラシを入れているデリバリー専門の寿司屋さんだった。

特上というだけあって鮮度の良いネタの寿司が、これまた大きな漆塗りの器にビッシリと詰められてる。

お父さんが代金を支払うと、配達した人は玄関を出ていった。

「お父さん、お寿司出前したんだ？」

「ああ、取り敢えずはな」

「取り敢えず？」

「ピンポーン

またしてもチャイムが鳴る。

「チワーツす！！御注文の上うな重の松二人前、お届けに来ましたあー！！」

「う、うな重もー！！」

「ごめんください、シーフードDXピザのLサイズ、お待たせしました」

「ピ、ピザまでえー！？」

「ギョーザ三人前にチャーハン二つ、お待たせアルね」

「……………」

一体、お父さんをそこまで駆り立てる機嫌の良い事って何なのかなあ…………？

その理由を知るのが、何だか怖くなってきた…………。

）

「さあ、ちひろ。遠慮しないでジャンジャン食べる」

「……………うん……………」



キッチンの中にある食卓用のテーブルの上を、デリバリーの限りを  
尽くした品の数々が埋め尽くしていた……。

それによく考えるとお寿司にピザ、うな重、ギョーザにチャーハン  
と、見事なまでに炭水化物のコーポレーションだよお……。

「うーん、美味しいーっ!!」

口の中に入れた途端に無くなってしまった大トロは、デリバリーと  
は思えないほど絶品だった。

脂がのってフワフワのうな重に、豪華なシーフードたっぷりのピ  
ザ、肉汁たっぷりのギョーザにパラパラチャーハン。

あまりの美味しさに、デリバリーの味の進化への驚きを感じ得ず  
はいられなかった。

そして、美味しさと満足感に浸る中、一番の疑問をお父さんに投げ  
掛けてみる。

「お父さん、どんな良い事があったの？」

理由を聞くのは怖いけど、聞かずにはいられない……。

お父さんは冷えたビールを喉に流し込み、嬉しそうな顔で答えてくれた。

「良い事？ふっふっふ……、それは……アレだ!!」

「アレって……？」

お父さんが指差す、私から見てキッチン右手の壁の上の方を何気に見てみる。

「……えっ？ええっ!？えええええっ!？」

信じられない光景に、私は一瞬目を疑った。

今朝までは無かった額縁が、幾つか壁に飾ってあった。

もちろん額縁に驚いたんじゃないで、中身!中身!中身!中身!中身!中身!中身!

「お父さん!!なんで私のテスト用紙なんて飾ってあるの!？」

「いやあ、ちひろの高校最初のテストが全教科満点だなんて、俺は

もう嬉しくて嬉しくて……」

ほろ酔いで顔を赤らめながら、お父さんはしみじみと答えた。

「私はちつとも嬉しくないよお！何処の世界に娘のテスト用紙を、額縁に入れて飾る父親がいるのお！？」

「ここにいる」

「そんな正直に答えてないで、アレ降ろしてよお………」

顔から火が出るほど恥ずかしくて、泣きたくなってきた……。

「せっかく今日、ホームセンターで購入したのになあ………」

私の懇願によって、お父さんは渋々と額縁を降ろした……。

「お父さん、アレが誰かの目に触れたらお父さんの親バカがバレちゃう可能性があるんだよお………」

「！！！！……そうか、それは気付かなかった………」

お父さんはこうと思ったら、勢いだけで物事を進めてしまう事があるから、ちよつと困っちゃうなあ……。

親バカだからこそ成せる業とでも言うべきなのかな？

「まあ、勉強に限らずギターや友達付き合い、何事も一生懸命頑張れ。今しかない高校生活を謳歌するんだ」

「うんっ、頑張るね」

「いやあ、ビールが旨いな！ちひろ、もう一本だけ、いいかな？」

いつもなら飲み過ぎだよ、と釘を刺すところなんだけど、今日は御馳走してもらってるし、家事的にも樂をさせてもらえたから……。

「もう一本だけだからね」

「はいはい」

はいはい言いながら、既にもう飲んでるし！！

いつの間に冷蔵庫から出したんだろう？

）

）

次の日の放課後。

追試まであと六日となった部室は、唯ちゃん以外が集まっていた。

「なんか唯がないと張り合いが無いな……」

『律ちゃんの言う通りね。賑やかな唯ちゃんがないと、こんなにも静かなんて……』

たった一人欠けただけで、こんなにも雰囲気が変わってしまうなんて、唯ちゃんの実在感は意外と大きかったんだ……。

「その割りには二人共良く食べるな？」

澪ちゃんが言う通り、律ちゃんも海衣奈ちゃんも今日のスイーツ、豪華なプリンアラモードを躊躇なく食べていた。

「それとこれとは話が違いますわん」

『せつかくのお菓子だもの。食べなきゃ損じゃない』

よく食べれるなあ……。私なんて……。

「ちひろちゃん、今日のお菓子、もしかして気に入らなかったのかしら？」

ムギちゃんが心配そうな顔して私を見つめてくる……。

それもそのはずだよね……。

だって、一口も手をつけてないんだから……。

「……う、ううん、そんな事ないよ……。わあ、凄く美味しそう……」

私は空元気を出して、震えるプリンを口に運ぶ。

……でも、何故か美味しく感じない……。

こんな事、初めて……。

やっぱり気になって仕方がない……、唯ちゃんの事……。

ちゃんと勉強出来てるかなあ……？

内容が頭にちゃんと入ってるのかなあ……？

……ううん、大丈夫だよな？唯ちゃんの事、ちゃんと信じてあげなくちゃ！！

私の大切な友達だもんね。

気を取り直した私は、なんとかプリンアラモードを平らげる事が出来た。

追試まであと三日……。

今日のお菓子はカステラ。

でも、今日は一口も喉を通らない……。

どうしても気掛かりでならない……。

「唯、勉強進んでるのかな？」

澪ちゃんも私と一緒に、唯ちゃんが気掛かりでカステラに手が伸びていない……。

「進んでるのかなあ……？何だか不安になってきた!!」

昨日まで大丈夫と言い張ってた律ちゃんも、さすがに不安の色を隠せずにはいた……。

その表情が、私の心の焦りを一層募らせていく……。

唯ちゃんを信じて待ちたい……、でももし、勉強が行き詰まっていたら……。

「~~~~~」

バアーーーーーン!!

私が机に勢いよく手を突いて立ち上がったものだから、物凄い音が部室内に響き渡ってしまった……。

皆、一様に驚いて目を丸くしてる……。

……や、やっちゃった……。

「……ち、ちひろさん……、……どうか……いたしましたのですか？」

律ちゃんの変にたどたどしい敬語に、私は恥ずかしさを何とか抑えながら答えた……。

「……私、今頃になって、急を要する些細などうでもいい用事を思い出しました……。……帰っても、いいですね？」

私も訳の分からない日本語を使っちゃった……。

「……う、うん。お大事に……」



「失礼します!!」

なんとも繋がらない会話を終えて、私はバッグとギターケースを背負って部室を急いで後にした。

）

「……ハア……、……ハア……」

息を切らせて走っていると、いつの間にか唯ちゃん家の前に辿り着いてた……。

息を整え、汗をハンカチで拭いてからインターホンのボタンを押す……。

） ピーンポーン……

「はぁーいーい」

玄関が開くと、受け答えた声の主、憂ちゃんが姿を見せた。

「あ、ちひろさん、こんにちは」

「こんにちは……。唯ちゃん、いるかなあ？」

「はい、三階の部屋にいます。どうぞ、上がって下さい」

憂ちゃんが用意してくれたスリッパを履いて、私は三階へと階段を上がっていった……。

“ゆいのへや”

コルクボードにカラフルなひらがなプレートが貼り付けてある部屋の前に辿り着いた……。

ジャーンジャーンジャーン…

勉強しているはずの唯ちゃんの部屋の中から、聞こえてきてはいけない音が聞こえてくる……。

「イエーイ、ノリノリイー!!」

「……………」

絶対勉強していない事を100%確信して、私はそつと扉を開けて部屋の中に入った。

私に背中を向けてギターを爪弾く唯ちゃんは、とても楽しそう……  
じゃなくって!!

「唯ちゃんああああん!!」

「ひいやあああああっ!?!」

危つくギターを落としそうになってたけど、間髪セーフ。

私の顔を見ると、あからさまに気まずい感じの顔をしてた……。

「ち、ちいちゃん……」

「唯ちゃん、ちょっと座って。お話があります……」

「は、はい……」

そして、唯ちゃんと私は正座しながら向き合った。

「ダメでしょう、唯ちゃん！勉強しなきゃ部活出来ないんだよ、めっ…！」

「……………」

半泣きの唯ちゃんに少しばかり罪悪感を覚えたけど、これは唯ちゃんの為でもあり軽音部の為でもあるんだから。心を鬼にしなきゃ…。

「ところで唯ちゃん、勉強は進んでるの？」

「えっ!?!……………えっとお、勉強は進んでるよ……………。ほ、本当……………だよ?」

「……………唯ちゃん、横を向かずに私の目を見て喋って欲しいんだけど……………」

目がやたらと泳いでる所を見ると、その言葉の真偽が一層怪しさを増して来た。

唯ちゃんには悪いんだけど、ここでカマを掛ける事にしてみた。

「それじゃあ唯ちゃん、勉強したノート見せてみて」

「えっ！？え、えつとお……、そのお……」

「勉強したんだもんね？やましい事は何も無いんだよね？」

唯ちゃんの尋常じゃない冷や汗と脂汗で、床がビショビショになっている……。

これで疑惑は確信に変わった。

「唯ちゃん、見せてみて？」

敢えて微笑みを見せながら聞いた、わずか一秒後……。

「ごめんなさああああい！！私、嘔吐いてましたああああああ  
っ……」

遂に観念した唯ちゃんは、頭を床に擦りつけんばかりの土下座で私に泣きながら謝ってきた……。

「最初から本当の事言ってくれば良かったのに……」

「……だって勉強しても、よく内容が飲み込めなくて……。だけど他の皆に、これ以上迷惑は掛けたくなかったし……」

シヨンボリとした唯ちゃんの発言に、つい最近までの私を重ねてしまっ……。

人に迷惑を掛けたくないばかりに、自分一人で全部背負い込んでしまっ……。

こうして逆の立場になって、初めて分かった。

もっと頼って欲しいと言ってくれていた、皆の気持ちが……。

困った人を見たら、放ってなんておけない。

これまで色々と助けてくれた、唯ちゃんの力になりたい……。

「唯ちゃん、私で良ければ勉強見てあげる」

そう言うとき唯ちゃんは俯き加減だった顔を上げて、一筋の希望を見出した表情を私に向けていた。

「……………え！？ちいちゃんが？」

「うんっ！！その為にこうしているんだから。……………ひょっとして、迷惑だった……………かなあ？」

遠慮がちに聞いてみたけど、そんな心配は私に飛び付いてきた唯ちゃんの満面の笑みで吹っ飛んでいった。

勢い余って床に押し倒されてしまっ……。

「そんな事ないよ!! ありがとう、ちいちゃん。さすがは私の心の友だよ!!」

「…………お、大袈裟だよお…………」

かくして、私と唯ちゃんの勉強会が幕を開けた。

) )

「ねえ、ちいちゃん。ここはどうすればいいのかな?」

「ここはね、この公式を利用してみて。そうしたら、このとが

…………

「ふんふん…………。これが、こうで…………。…………わあ、出来たあ!!」

「凄いわ、唯ちゃん。この調子で次の問題も解いてみよう」

「うんっ!!」

こうしてみると、唯ちゃんて飲み込みが結構早い。

ちゃんと分かりさえすれば、あっという間に吸収してしまう。

このずば抜けた集中力は、もしたしたら私以上かもしれない…………。

コンコンッ

「はぁーい？」

唯ちゃんの掛け声でドアの開く音がすると、憂ちゃんがお盆に何かを載せて入ってきた。

なんだか言い匂いがする……。

「あの、晩御飯用意しましたので良かったら一休みしてください」

「わぁっ！！ありがとう、憂~~~~っ！！」

「そろそろお腹空いた頃だと思って。ちひろさんもどうぞ」

「うん、ありがとう」

ふと部屋の壁に掛けてある時計を見ると、もう6時半。

勉強を始めて、もう1時間半も経ってたんだ……。

明るかった外もいつの間にか、ほの暗くなり始めていた……。

さっきの匂いの正体は、具沢山の豚汁の香りだった。

それに、海苔を巻いた三角おむすびと一緒に用意されていた。



勉強の合間に食べやすく、栄養バランスも考えられた料理を作る憂ちゃんは、やっぱり凄い。

「うーん、美味しい!！」

「本当に美味しいよ、憂ちゃん!！」

「お口にあって良かったです。ちひろさんの料理に比べたら、私の料理はまだまだですから……」

「ううん、そんな事無い!! 凄く美味しい!! もっと自信持っていと思う」

「そうですか? ありがとうございます!！」

私の褒め言葉に満面の笑みを浮かべる憂ちゃん。可愛いなあ……。

謙虚だし、よく気が付くし、本当に出来た妹だと感心してしまう……。

こんな妹を持って、唯ちゃんは贅沢すぎるくらい幸せ者だと改めて思う……。

私もこんな妹、欲しいなあ……。

「はあ~~~~っ……、食べた食べたあ!!」

「さあ、それじゃあ唯ちゃん。続きを始めましょう」

「ええ~~~~っ!?少し休もうよお」

「今十分に休んだでしょ?このまま間隔を開けたら、満腹感からいよいよ勉強熱が冷めてしまうんだよお?もう一息だから頑張ろう、ね?」

「……はあ~~~~っい……」

少し拗ねてる感が見受けられるけど、唯ちゃんは再びノートを開いた……。

ヴィーーーーーッ……。

突然、唯ちゃんの携帯が震え始めた。

「ちいちゃん、ちょっとだけゴメンね?」

唯ちゃんが携帯を開いてみると

「澪ちゃんからメールだ」

澪ちゃんから?何か用事でもあるのかなあ?

私も横からメール文を覗いてみる。

『ちゃんと勉強してる？油断大敵だよ』

キツチリと引き締めてくる所が、澁ちゃんらしいなあ……。

「了解です」

唯ちゃんが携帯を閉じて、いざ勉強再開！！

ヴーーーーーッ……

再び携帯が震え始めた。

「今度はムギちゃんだ」

送られてきたメール文はといえば、

『夜分遅く失礼します。無理のないよう頑張ってください。』

美味しいお菓子がまっていますよ』

「おおーっ ありがとう、ムギちゃん」

お菓子という言葉に顔を綻ばせた唯ちゃん。

さすがムギちゃん！！唯ちゃんのバロメーターの上げ方を分かっているなあ。

やる気が俄然上がった唯ちゃん、教科書の問題を勢いよく解き始めた。

グーーーーーッ……

ま、またメール……。

こつ連続じゃ、一向に勉強が進まないよお……。

「あ、今度は律ちゃん。ん？」

「どうかしたの？」

唯ちゃんが首を傾げるから見てみると、

『私からのメールを受け止めろーーーーーっ！……！』

という文章と共に動画が添付されていた。

どんなメールなんだろう？

始まった動画は、どうやら律ちゃんの部屋みたい。

手に持っていたポテチを上にはり上げて、見事口の中に収めた。

これで終わりかと思ったら、どうやら更に高く放り上げてチャレンジするみたい……。

上手くいくのかなあ……？

そして、天井高く放り投げたポテチに律ちゃんの口が照準を合わせ始めた。

ん？そんなに後ろに身体を傾けたら、コーラを載せてるテーブルが……。

「どわあっ!!」

案の定、膝でテーブルをひっくり返してコーラをテーブルの上に派手に零してしまってる……。

「アハハハハハハ……」

「クスッ、アハハハハハ……」

二人して笑いが止まらなくなっちゃった……。

律ちゃんには悪いんだけど、これのどこがエールなんだろう？

まあ笑えた分、ある意味エールなのかも……。

はあ、久々に思いつきり笑ったなあ……。

ヴィーーーーーッ……

この順番でいくと、最後はもちろん

「あ、ミーナちゃんだ」

予測通りの海衣奈ちゃんだった。

海衣奈ちゃんはどんなメールなんだろう？

『この前は色々と厳しい事言っただけど、これも唯ちゃんの為なんだからね。』

今、ちひろちゃんという最強の助っ人が側にいるんだから、頑張って勉強に励んでね』

「はい、頑張ります!！」

……え!? どうして? 私、何も言っていないのに……。

〃 〃 〃

私の携帯も鳴り始めた。

メールの送り主は、やっぱり海衣奈ちゃん。

『ちひろちゃん、お姉さんにはすべてお見通しよ。ちひろちゃんの性格考えたら唯ちゃんの事、放っておける訳無いもの。お疲れ様、頑張ってね』

……バレバレでした……。

皆、私が見越してメールを送ってきてたんだ。

「唯ちゃん、皆がこんなに応援してくれてるんだから、頑張ろうね」

「うんっ、凄くやる気が沸いてきた!！」

やる気アップの唯ちゃんは、そこから私がほとんど教えなくても問題を解けるようになっていた。

皆、ありがとう……。

「……うん、これでテスト範囲は全部終了だね!」

「やったあ!!ありがとう、ちいちゃん!」

勉強を始めて、終わったのが午後10時前。

喜びいっぱい抱きついてきた唯ちゃんをしっかりと抱き締め、頭を撫でてあげる。

「私の力じゃなくて、唯ちゃんの頑張りが凄かったんだよ。これなら追試も大丈夫だよ」

「うんっ、私、頑張る!」

そして私は部屋を後にして、唯ちゃんと憂ちゃんの見送りを受けて家路に着いた。

そして追試前日。



私達は淹れたての紅茶を啜りながら、唯ちゃんの追試について話をしていた。

『ちひろちゃんが教えたのなら唯ちゃん、受かったも同然ね』

「そうね、唯ちゃんもちひろちゃんが来てくれて心強かったと思うわ」

そんな事言われると、凄く恥ずかしいよお……。

「……そんな……、私はただ、唯ちゃんの手助けをしてあげただけだもん……」

「謙遜しちゃってもう!!ちひろは偉い偉い」

律ちゃんは私の頭を撫で回してくる。

「はづづっ!!」

「私もいいかな?一度ちひろの頭、撫でて見たかったんだ……」

まさかの湊ちゃんまで、私の頭を無造作に撫でてきた。

「ふえええっ!!」

『私も私も』

「私もいいかしら？」

「あうあうあ……、髪の毛がクシャクシャです……」

皆に掻き回されて、頭の髪の毛は逆立ってしまった……。

手櫛で直していると突然、部室の扉の開く音が聞こえてきた。

『あら、唯ちゃん。どうした……の？』

そこには唯ちゃんが立っていたんだけど……。

「……………」

なんだか表情が暗い……。

「どうかしたのか、唯？　なんだか暗いぞ？」

「そうだぞ唯？　何かあったのか？」

「私達でよければ、相談にのるわよ」

律ちゃん、澪ちゃん、ムギちゃんも心配になって唯ちゃんのもとへと駆け寄る。

「……………」

でも、唯ちゃんは何も喋らない……。

『隠さずに言つて。困った事があれば助けてあげるから』

「そつだよお、遠慮しないで言つてみて」

海衣奈ちゃんも私も駆け寄つて、唯ちゃんの手を掴んでみる。

そつしたら、少し間を置いて唯ちゃんが重い口を開いた……。

「……………実はね……………」

「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」

「昨日も問題を解けて、安心したらギターを弾きたくなって弾いたんだ……………」

「……………」  
「……………」  
『それで?』  
「……………」  
「……………」

「……………そしたらね……………」

「……………」  
「……………」  
『……………そしたら?』  
「……………」  
「……………」

唯ちゃんの次の言葉を、固唾を飲んで待つ皆……。

「覚えて無かったコードを覚えようと必死で弾いてたら、……勉強した事、全部忘れちゃったんだあ……、エヘッ」

「『『『『『』』』』』」

……はい……？

……わ、忘れた……？

……ぜ、全部う！？

「……ふう……」

バッター……ン……！

「「ちひろ！？」」

「『ちひろちゃん！？』」

「ちいちゃん！？」

私の頭の中は真っ白になり、身体力が抜けて倒れてしまったみた

い……。

あの一緒に頑張った時間が……、すべて無駄になっちゃった……。

「み、ミーナちゃん！？どうしたの、そのどす黒いオーラは？しかも、その振り上げた手がグーなんだけど……？」

ホワイトアウトした意識がブラックアウトする中、私を心配する澁ちゃんや律ちゃん、ムギちゃんの声、そして唯ちゃんの悲鳴が聞こえた……、……気がした……。

第22話「最強の助っ人、現れる」(後書き)

如何でしたでしょうか？

唯はあの後一体どうなったのかは、皆さんの想像におまかせいたします……。

次回、見兼ねた澁達も加わって最後の追い込みに入る。

唯の運命、そして軽音部の運命は如何に？

それではまた、次話でお会いしましょう。

## 第23話「勉強会の果てに」(前書き)

お待たせいたしました。

今回でアニメ第3話「特訓！」分がようやく終了します。

いつもの通り長いですが、どうかご了承下さい。

ギターの弾き過ぎで、ちひろに教えてもらった事を、すっかり忘れてしまった唯。

このままではまずいと、再び勉強会を開く事になった一同。

唯は追試を乗り切り、再び部室でギターを弾く事が出来るのか？

それでは第23話、どうぞ御覧下さい。

### 第23話「勉強会の果てに」

「漣、先に行けって!!」

「いやーだ!!ムギ、遠慮しないで先に行ってくれないか?」

「こういう時は部長の律ちゃんが先に行くべきよ。レディファーストで譲ってあげるわ」

「ムギだってレディだろ!!ここはやっぱり漣が」

「嫌!!絶対に嫌っ!!」

漣ちゃんの提案で再び勉強会を開く事になって、唯ちゃんの家に向かっている最中なんだけど……………。

私と唯ちゃん、海衣奈ちゃんが横一列になって歩いている少し後ろで、律ちゃん達が何故か私達と距離を置いて、先に行く順番の譲り合いをしていた。

私が気を失った間に何が起こったのか全く分からないし、聞いてみたところで、誰も話そうとはしてくれない……………。

そして、私の左側を歩いてる唯ちゃんと言えば……………。

「ちいちゃん、勉強八ちゃんとしナイト命にカカワルンダヨ」



「ゆ、唯ちゃん……、何だか言葉遣いに変なんだけど……?」

「変ぢゃないヨ、至ッテ普通ダヨ?」

うん、全然ダメみたい……。

言葉遣いもさる事ながら、目が虚ろで濁ってる……。

それに何かに怯えてるようで、身体が小刻みに震えてる……。

特に海衣奈ちゃんと目が合おうものなら……。

「ヒイツ!? ごめんなさい、ゴメンなさい、ごめんナさい、ゴメン  
ナさい……」

私の背後に隠れて、制服の裾をギュツと握り締めて尋常じゃないくらいに怯えてしまう……。

後ろの方の三人も皆、更に距離をとって怯えてた……。

そして、海衣奈ちゃんといえば……。

『……皆、もう怒ってないから、そんな怖がらないで……』

「「「「ひいつ!?!」「」」」

唯ちゃんが目散に逃げ出して後方の輪に加わり、皆と一緒に震えてる……。

『お願いだから、皆して怯えないでえ……………(泣)』

本当に半泣きの海衣奈ちゃんは、この状況に耐え切れずに私に抱き付いてきた。

『ちひろちゃんだけよ、私を怖がらないのは!!皆が私を怖がるんだよお……………』

こんな海衣奈ちゃん、初めて見る……………。

いつもは私が頼っている立場だったから、こつやって頼られると困惑する一方で、なんだか嬉しくも感じてしまう。

「皆、なんだかよく分からないけど、海衣奈ちゃんなら大丈夫だよ?」

「「「「ほ、本当に?」「」」」

「うんっ!?!ね、海衣奈ちゃん?」

『うんうんっ!?!…』

「……優しくしておいて、近くにいったらやっぱり豹変するなんて事は？」

『そんな事ないからあ……』

「皆、海衣奈ちゃんを信じてあげて？私が責任持つから」

「……うん……」

私の説得で、なんとか皆の警戒心を解く事が出来て、ようやく一緒に歩き始める事が出来た。

）

「そういえば唯って、確か妹さんいたよな？」

律ちゃんが憂ちゃんの話話を切り出した。

私と海衣奈ちゃんは頻繁に会ってるからよく知ってるけど、皆は私が倒れた時に一度会っただけだもんね。

「うん。多分今、家にいると思うよ？」

「それじゃあ、これだけ大勢押し掛けたら、迷惑にならないか？」

「大丈夫だよ、さっき電話しておいたから」

あの片言で電話したんだ！？よく通じたなあ……。

「結構可愛かったよな、唯の妹さんて？」

澪ちゃんは顔も覚えていてくれてみたい。

「そうね。唯ちゃんにそっくりで、いかにも姉妹って感じだったわ」  
ムギちゃんも憂ちゃんの事、しっかり見てみたい。

「唯にそっくりって事は、もしかしたら性格も一緒だったりして？」

「アハハハ、そうかもしれない」

律ちゃんの何気ない一言に、澪ちゃんもムギちゃんも笑い飛ばして  
る。

『ねえねえ、ちひろちゃん？』

「何、海衣奈ちゃん？」

『憂ちゃんの本当の事を知ったら多分、皆びっくりするわね』

「クスツ、そうかも」

そうなる事を120%確信し、ちょっとしたいたずら心が逸るのを抑えながら、いよいよ唯ちゃんの家の前までやってきた。

「どござ、上がって上がって」

「『お邪魔します』」

私と海衣奈ちゃん以外、唯ちゃん家に来るのは初めてで、立派な家の中の雰囲気を感じてた。

そして、憂ちゃんが階段からいそいそと降りてきた。

「お姉ちゃん、お帰り。ちひろさんに海衣奈さんも、こんにちは」  
「『こんにちは』」

「他の皆さんは、この前一度会ったきりですよ？改めまして、妹の憂です。姉がいつもお世話になってます」

「『はあ』」

礼儀正しい挨拶をする憂ちゃんに驚いて、皆言葉が無いみたい……。

そして続け様に、スリッパを履きやすい様に向きを揃えて、人数分用意してた。

「スリッパをどうぞ」

「出来た子だあ！！」と言わんばかりに開いた口が塞がらない皆の表情を見て、私と海衣奈ちゃんは顔を見合わせ、クスツと笑った。

) )

私達は唯ちゃんの部屋に通されて、中央に位置するテーブルの周りに座った。

701

「いやあ、姉妹でこうも違うもんかねえ？」

「何が？」

「妹さんに唯の良い所、全部吸い取られたんじゃないの？」

「ひっどおーいーい！ー！」

律ちゃんの間違ってはいないかもしれない発言に、唯ちゃんは酷く傷ついている。

でも唯ちゃんには唯ちゃんの良い所だつて、いっぱいあるよ。

屈託の無い笑顔、周りを笑わせる言動、区別する事無く友達になつてくれる性格は、不思議と周りを幸せにしてくれる。

私は可愛くて明るくて、無邪気な唯ちゃんの事が大好き。

コン、コンッ

ドアをノックする音がして、憂ちゃんがお盆に載せたお茶菓子を手に、部屋の中に入って来た。

「あのお、皆さん良かったらお茶どうぞ。……買い置きのお菓子で、申し訳無いんですけど……」

またしても皆のポイントをあげた憂ちゃん。

皆、本当に出来た子だとばかりに目を見張ってる。

私も本当によく出来た妹だと、ただただ感心するばかり。

将来、いいお嫁さんになりそうな予感がする。

煎茶の入った湯呑みを、憂ちゃんが皆の目の前に置いて回り切ったところで、律ちゃんが質問を切り出して来た。

「憂ちゃんは今、何年生？」

「中三です」

「アハッ、ひとつ違いじゃん」

「受験生ですね」

「はい」

ムギちゃんの言う通りで、もう来年は高校受験。

そろそろ進路も決めなくちゃいけないし、その志望校に向けた勉強対策も練る必要がある。

私の場合は色々あって、志望校が桜ヶ丘高校になったのは冬休み前だったけど……。

「何処受けるか、もう決めてる？」

澪ちゃんの質問に憂ちゃんは口元に手を当てながら、少し間を置いて答えた。

「うーん……、出来れば桜ヶ丘に行きたいんですけど、私の学力で



受かるかどうか……………」

「お姉ちゃんでも受かったんだから、大丈夫だよ」

律ちゃんは憂ちゃんを勇気づける為に言ったんだと思うけど、唯ちゃんが傷ついちゃうんじゃない……………」。

「おいで、おいでえ」

気付いてないみたい……………」。

「お姉ちゃんに勉強、教えてもらえばいいんじゃない？」

「うんうん」

「えっ!?!」

湊ちゃんの提案に、憂ちゃんは戸惑いの表情を浮かべてた。

「……………それは……………、自分で出来るから……………」

「アハハツ、断られたぞお」

「ええええっ!?!なんでなんでえ?」

唯ちゃんにしたら憂ちゃんに断られるのは想定外だったみたいだけど、それは断るよね……………」。

勉強が出来るなら追試を受ける必要も、何よりこの勉強会を開く必要が無いもの……。

「でも、お姉ちゃんはやる時にはやる人です!!」

お姉ちゃん想いの憂ちゃんは、必死に唯ちゃんをフォローしてる。

皆、これで完全に憂ちゃんが出来過ぎる位に出来た子だと認めたい。

『憂ちゃん、もし勉強に不安があれば、私達が遠慮無く教えてあげるから』

「ありがとう、海衣奈さん」

確かに、このメンバーなら頭脳の高さは文句無しの御墨付き。

憂ちゃんを全面サポート出来る事間違いない。

「そうそう!!遠慮無く頼ってくれていいんだぞ」

「律には頼らない方がいい」

「なんでだよ!?!」

律ちゃんは無理かな……。

鋭い指摘に頬を膨らませて拗ねる、そんな律ちゃんが何だか可愛く見える。

「ほう、ならもう次からテスト前に私を頼らずに勉強、出来るんだな?」

「えっ!?!?そ、それは………」

「出来るんだな?」

「……お、おうっ!!アタシだって本気出したら、テストの一つや二つ、ちょちょいのちょいだぜ!!」

売り言葉に買い言葉で、律ちゃんは戻るに戻れない意地を張っちゃつてる……。

「よし、分かった。次からは一切教えないから。期末テストの結果、楽しみにしてるからな」

「ごめんなさい!!嘘です!!教えてください、澁先生……っ!!」

「折れるの早っ!!」

まあ、当然こうなるよね……。

）  
）

「じゃあ、あんまり時間無いから集中していくよー!」

「うんっ」

「教科書20ページ。じゃあ、この式」

透ちゃん指導のもと、いよいよ勉強会が始まった。

律ちゃん曰く、透ちゃんは教えるのが上手みだから、私達はどちらかといえばサポート役かな？

そしてこの展開上、する事がまったく皆無と言っていい律ちゃんはいえは……。

「ふ、ふわぁ~~~~っ……」

口元を手で押さえる事もせず、大きな欠伸をしてる……。

女の子なんだから、それはまずくないかなあ………？

退屈みたいで、唯ちゃんの勉強机の椅子に座って回転させたり、拳

句の果てには本棚から何冊かのマンガを拝借して、ベッドに寝そべって読み始める始末……。

「アハッ、アハハハッ!!」

「だぁーっ、もうっ!!」

漣ちゃんから怒りの拳骨をもらった律ちゃんの頭には、それは見事なたんこぶが出来てた……。痛そう……。

律ちゃんはベッドの横に正座させられ、おとなしくしているように、漣ちゃんから釘を刺された。

「ふえ……、足が痺れた……」

ずっと正座したまま勉強してたら痺れるよね、足……。

その言葉を聞き逃さなかった律ちゃんは、その瞳に何かを目論む、怪しい輝きを見せていた……。

気付かれないように唯ちゃんの背後に忍び寄り、右手人差し指を高高と振り上げて……。

「ちよいつ」

「ひいやああああああああっ!!」

痺れる足の裏を触られて、唯ちゃんは堪らず悲鳴をあげた。

あれをされると、何故か人は笑わずにはいられないんだよね……。

「りいっうっうっうっうっ!!」

澪ちゃんの綺麗な顔立ちが豹変するほどの逆鱗に触れた律ちゃんは、雪ダルマみたいなたんこぶを拵えて、部屋の外へ強制退場させられた……。

「まったく……。あれ？そういえば今日は海衣奈の鉄槌がおりない気が……」

「澪ちゃん!!」

「え？……あっ!!」

私がそれは禁句とばかりに目配せをしたんだけど、時すでに遅し……。

私の右隣りに座ってた海衣奈ちゃんの目が、ウルウルと潤んでた……。

『澪ちゃん、酷い……。あの失態の後にまた、恥の上塗りをさせる気……?』

「え!?!いや、あの、そういう訳じゃないんだ、海衣奈……」

『もう、お嫁にいけない……』

またしても、私に抱き付いて落ち込む海衣奈ちゃん。

しばらく暴走する事は無いみたい……。

）  
）

勉強会が始まって、間もなく30分が経とうとしている。

「ふうっ………」

いきなり唯ちゃんが手を止め、シャープペンをテーブルの上に置いた。

「ダメだあ！！集中力が続かない……」

テーブルの上突っ伏してしまった唯ちゃんに、澪ちゃんは少し呆れ顔……。

「おいおい、始めてまだ30分しか経ってないぞ」

そういえば、私が教えていた時もこんな感じだった気がする……。

この後、勉強再開まで持っていくのが、とても難儀だったなあ……。

「唯ちゃん、ケーキ持ってきたから後で食べよう。だからもう少し頑張って」

ムギちゃん持参のケーキの入った箱を見て、俄然闘志の湧いた唯ちゃんは猛スピードで勉強をこなしていった。

さすがムギちゃん、唯ちゃんの扱い方を分かっている。

そっかあ、唯ちゃんは美味しい物があれば集中力を維持出来るんだ……。

時計を見たら、間もなく夕方の方の5時になるところ。

私は思い付いた事を即、実行に移す事にした。

「どうしたんだ、ちひろ？急に立ち上がった」

「うん、ちょっとね」

首を傾げてハテナ顔の澁ちゃん達を尻目に、私は部屋を出た。

「どこ行くんだ？」

「ひゃあっ!？」

ビックリしたあ……。



ドアを開けた途端、ドアの前で正座をしていた律ちゃんがいたから、ああ、ビックリ……。

「ちょっと下へ行つて来るんだけど……、律ちゃんは何をしてるの？」

「どうやって中に入ろうかと思案中」

「そ、そうなんだ……」

普通に入ればいいと思うんだけど……。

取り敢えず、私は階段を降りて二階へと向かった。

）  
）

二階に降りてきた私は、テレビを見ている憂ちゃんをすぐに見つけられた。

「あ、ちひろさん。どうしたんですか？」

「うん、憂ちゃんて今日は晩御飯、まだ作ってないのかな？」

「はい。皆さんもいるから、何を作ろうか迷つて……」

まだと聞いて、私が考えていた事を憂ちゃんに打ち明けてみた。

「よかつたら、私が作ってもいいかなあ？」

「え！？ちひろさんですか？」

「うん、頑張ってる唯ちゃんの集中力を上げる為もあるし、手伝ってる皆にも何か食べてもらいたいと思って……」

私の家ならまだしも、ここは唯ちゃん達の家。

勝手に冷蔵庫を開けたり、キッチンを使う訳にもいかないもの……。

「わあっ！ー！ちひろさんが作ってくれるなんて！ー！どござ、自由に使ってください」

「ありがとう」

「……………あ、ただひとつ、問題が……………」

「問題？」

憂ちゃんの言う問題は、冷蔵庫を開けた時に分かった。

「……あんまりないんだ……、食材……」

「すみません……、買い物に行つてなくて……」

冷蔵庫の中にある物をチェックしてみると、肉や魚類は一切無い。

卵はしっかりあるみたいで、あとは人参や玉葱、モヤシなど野菜類が少しあるだけ……。

「憂ちゃん、御飯は炊けてるかな？」

「はい。今日はお姉ちゃんと私の弁当を作ったので、朝の内に炊けた残り御飯ですけど……」

一応、炊飯器を開けて御飯の量を確認してみると、なんとか皆に行き渡るだけの量はある……。

「良かったら、今から買い物に行つてきましようか？」

「ううん、この残り物でも充分作る事は出来るんだから」

「何を作るんですか？」

く ピーンポーン

「あ、誰か来たみたいです。ちょっと失礼しますね。はい」

頭の中で考え付いたメニューを言おうとしたら、チャイムが鳴って  
阻まれちゃった……。

しばらくすると憂ちゃんと共に、その来訪者が一緒に階段を上がっ  
て来た。

「あら、ちひろじゃない？」

「和ちゃん！？どうしたの？」

バスケット籠を手に現れた和ちゃん。

普段は制服姿しか見ないから、私服姿がとても新鮮に見える。

「唯にね、サンドイッチの差し入れを作ってきたの」

「え！？和ちゃんの手作り？」

和ちゃんの手料理、初めて見た気がする……。

「意外かしら？私が料理するのは？」

「えっ！？そ、そういう意味じゃなくってえ！！どんなサンドイッチなのか、興味があるって意味で……」

「クスツ、いいのよ。ちひろ程ではないけど、私もたまには料理するわよ。まあ、サンドイッチは物を挟むぐらいだから、料理という程の物じゃないけど」

「そんな事無い！！サンドイッチだって立派な料理だもの。中に入る具材や味付けで、その人の個性が見えてくるから」

「個性……か。なんだかちひろらしい言い回しね。でも、タマゴサンドや野菜サンドみたいな平凡なサンドイッチよ」

和ちゃんがバスケットを開けると、一口大の三角や四角のサンドイッチが入っていた。

「美味しそう……。じゃあ、私も今から料理するから、後で食べさせてもらえるかなあ？」

「いいわよ。ちひろは何を作るのかしら？」

「私も大した物じゃないけど、出来上がったからのお楽しみ」

「へえ、それじゃあ私も後で御馳走になろうかしら？」

「うんっ、腕によりをかけて作るね」

「それじゃあ、私は和ちゃんと一緒に上に上がりますね」

憂ちゃんはいつの間にかサンドイッチを盛り付ける大きめの皿と取り皿、それにオレンジジュースとコップを用意していた。

さすが憂ちゃん、用意がいいなあ。

そして、二人が階段を登っていったところで、私は料理を開始した。

【SIDE：海衣奈】

和ちゃん差し入れのサンドイッチとジュースで、私達は一休みしていた。

その前にムギちゃんが差し入れた母のショートケーキを食べてるんだけどね。

軽音部の皆と和ちゃんは、ちひろちゃんの過去の件で一度会ってはいるけど、改めての自己紹介を済ませ、さらに唯ちゃんのアルバムを開いて昔の話をし始めた。

「中学の時、私が熱を出してしばらく休んでただけど、毎日唯がプリントを持って来てくれたんだよね」

「私、風邪ひいたことなくってえ〜」

まあ、何とかは風邪ひかないって言うけどね……。

「でもね、その持って来たプリントの中に、唯のテストが間違っ  
入ってて……」

『その話なら知ってるわ。数学のテストで10点だったアレね……』

その話を聞いた皆は、堪らず大爆笑。

憂ちゃんは凄く恥ずかしそうにしてるけど……。

「変わってないなあ」

本当、昔から変わらないわね、唯ちゃんは。

「でも、本当に助かったんだよ……」

「エへへへ……」

唯ちゃん、照れくさそう……。

友達想いな所も、昔から変わってない……。

私も中学時代、唯ちゃんには色々助けてもらったっけ……。

友達がない私を励ましてくれたし、変わらずに友達でいてくれた……。

こんな唯ちゃんだから、こうやって皆が集まってくれんだと思う。

ハチャメチャな所もあるけど、なんだか憎めないのよね……。

「それだったら律も」

「アワワワ、言っなよあ……」

「なにになに？」

ほほう、律ちゃんの昔話ね。それは唯ちゃんでも興味があるわ。

「実はね、律ったらさあ……」

フムフム、何かしら？



く  
く  
く  
く

「何だろ？メールみたい」

私は送ってないけど、憂ちゃんのメール着信音で会話は一時中断。

「あっ、ちひろさんからだ。ええっと『御飯が出来たから、運ぶのを手伝ってくれる？』あ、それじゃあ私、下へ行つて来ますね」

憂ちゃんはイソイソと部屋を出て、下へと降りていった。

「え？ちいちゃんが料理作ってるの？」

「そうよ、頑張ってる唯や皆の為にって、張り切ってたわよ」

「うわぁ、楽しい！！」

唯ちゃんに限らず、皆楽しみにしてるみたいよ。私もだけど。

しばらくして部屋のドアが開いて、いい香りと共にちひろちゃんと憂ちゃんが入ってきた。

「お待たせしました」

お盆の上に乗せられた料理が、皆の前に差し出される。

これって、餡かけ炒飯ね。

「簡単に作った物だから、恥ずかしいけど……」

赤くなってる顔をお盆で隠すちひろちゃんに、私の萌えポイントは一気に上昇。

そんなに謙遜しなくても、皆の目の色はちひろちゃんの料理に釘付けよ。

「うわあ、美味しそう!!それじゃあ、いただきますあーす!!」

「「「「「いただきます」」」」」

堪らず合掌した唯ちゃんに、皆も続いた。

「おーいしいーっ!!」

「うまあーい!」

唯ちゃんに律ちゃん、この美味しさに大絶賛!!

「本当だ、美味しいな」

『うん。最高の味よ、ちひろちゃん』

「あ、ありがとう……」

恥ずかしそうにはにかむ、ちひろちゃん。

気に入ってもらえて、凄く嬉しそうね。

皆も笑顔が溢れてる。

御飯に卵を混ぜてから炒めたパラパラの炒飯に、細切り野菜が入った餡が絶妙のハーモニーを奏でてるわ……。

ああ、至福の一時……。

「これ、すべて冷蔵庫の余り物で作ってるんですよ。凄いです、ちひろさん」

「へえ、もうすっかり主婦ね、ちひろ」

「ちひろちゃんなら、いいお嫁さんになれるわ」

和ちゃんやムギちゃんの褒め言葉に、いよいよ顔を赤くしてしまうちひろちゃん。

もうさつきから私の携帯は、さつきから動画を録りっ放し。それから私達はさつきの澪ちゃんの話の続きを皮切りに、楽しい話の連続に花が咲きまくった。

「ところで、勉強大丈夫なの？」

和ちゃんの一言で笑い声が一斉に消え、皆冷や汗が出てる……。

すっかり忘れてたわね……。

しかも、いつの間にか8時を過ぎちゃってるじゃない!!

急いで勉強再会よ!!

【SIDE：ちひろ】

「いい？ここまでが試験範囲だからね？」

和ちゃんが帰って、いよいよ勉強再会。

澪ちゃんの指導にも、熱が入って来てるのが分かる。

……ただ、それとは裏腹に唯ちゃんの首が上下に動いてて、目が虚ろになってるような……。

もしかしたら、お腹がいつぱいになって眠くなってきたー!?

「ねえ、漣ちゃん。唯ちゃんが……」

私が指摘すると、漣ちゃんが唯ちゃんの肩を揺すって起こそうとした。

「唯、起きろ」

「起きて下さい」

ムギちゃんも加わって起こそうと躍起になってる。

「ちよっと、唯……」

漣ちゃんが肩の揺すりを強くして、ようやく唯ちゃんは起きた……。ハッと目を見開いた唯ちゃんは次の瞬間、潤んだ目で漫画を読んでいる律ちゃんの方を向いた。

「律ちゃん隊員……、ご、御武運を……」

意味の分からない言葉と共に、嗚咽を漏らしながら泣いてる唯ちゃん……。

怖い夢でも見たのかなあ……？

「どっしたの、唯ちゃん？」

私はそっと抱き寄せて、唯ちゃんの頭を撫でて宥めた。

「律ちゃん隊員が……、雪ダルマ作って、餅を焼いて遊んで……」

「『』はあ!?!?』」

……一体、どんな夢を見てたんだろう……？

) )

もう、夜の10時半になるところ……。

遂に、勉強会も終わりに差し掛かろうとしてた……。

「出来たあっ!!」

最後の問題も自力で解いて、ようやく勉強会もお開き。

「これだけ解いたら、大丈夫だろ」

ようやく勤めを果たして、解放された澁ちゃん。

思いっきり背伸びをしてる、お疲れ様。

「これで追試もバツチリね」

ムギちゃんも安心した表情を見せてる。

全部忘れたなんて言われた時は、どうなるのかな？なんて思ったけど、これで大丈夫みたい。

「ありがとう、漣ちゃん、ムギちゃん、それとちいちゃんにミーナちゃんも」

「ううん、頑張ったのは唯ちゃんの手だもん、お疲れ様」

『追試、絶対受かるのよ』

「うんっ！..！」

「それじゃあ、私達はそろそろ……」

ムギちゃんが立ち上がるうとした時、漣ちゃんがある異変に気が付いた。

「あれ、律は？」

そう言われれば、何処にもいない……。

『さっき、下へ降りていったきりだけ……』

カバンがあるから、帰ってる訳ではないみたい……。

取り敢えず、私達は二階へと降りていった……。

「うわぁ……、また負けたあっ!!！」

賑やかな音がすると思ったら、律ちゃんは憂ちゃんとTVゲームで目下対戦中だった。

またって、これで何回負け続けてるんだらう……。

憂ちゃんはゲームも強いみたい……、本当に出来る子……。

）  
）

次の日。

追試開始のチャイムが鳴り響き、私達は部室内で唯ちゃんの事を案じていた……。

澗ちゃんは落ち着きなく、部室の中を行ったり来たり……。

ムギちゃんは心ここに在らずといった感じで、注いでる煎茶が湯飲



みのキャパシティーをオーバーして、机の上に溢れ出ていた……。

海衣奈ちゃんといえば、私の制服の裾を引っ張りながら、不安気な表情を浮かべてる……。

皆、唯ちゃんの事が気掛かりで仕方が無いみたい……。

かくいう私も、さっきから手を合わせて祈ってばかり……。

そんな中、律ちゃんだけはお煎餅を何ごとも無く、バリバリと食べていた。

「唯、大丈夫かな……?」

澪ちゃんがポロツと零した不安に、律ちゃんは素っ気無く答えた。

「大丈夫なんじゃないの」

「少しは心配しろ!!」

『そうよ!! 律ちゃんは唯ちゃんが心配じゃないの? よく食べられるわね!!』

澪ちゃんは怒りの表情で律ちゃんに吠えてる。

海衣奈ちゃんも律ちゃんを睨み付けてるよお……。

「心配も何も、唯はあれだけ頑張ってたじゃん。アタシ達は唯の事信じて、待っててやるっよ」

「律……、確かにそうだよな……」

『……そうね、私達がジタバタしても仕方無いわね……』

「うん、唯ちゃんが追試に受かる事、信じて待ちましょっ」

皆、冷静になれたみたい。

やっぱり、なんだかんだいっても律ちゃんは軽音部の部長なんだなあ……。

「早く唯ちゃんとギターが弾きたいな」

私は唯ちゃんが受かった先を見据えて、そう呟いた……。

）  
）

数日後……。

遂に追試テストの結果が分かる日がやってきた……。

この前は皆、信じて待つ事にしたけれど、やっぱり不安が募る……。

「今日返却だよね……？合格点、取れてるかな、唯……？」

澪ちゃんもさすがに不安みたい……。

私はすかさず、フォローをしてみる。

「だ、大丈夫だよ……。あんなに頑張ってたんだから……。ね、海衣奈ちゃん？」

『私もそう信じたいんだけど、……やっぱり不安だわ……』

「あれだけ勉強したから、大丈夫のはず」

ガチャッ

ムギちゃんの言葉の途中で、部室のドアが開く音がして、皆一斉にそっちに顔を向ける。

「ほえ……、ほえ……」

唯ちゃんはまるで魂が抜けたみいな蒼白い顔をして、足元もおぼつかない感じでこっちに向かって歩いてくる……。

私も含めて皆、そんな唯ちゃんを見て嫌な予感しか想像出来ていなかった……。

「どっしりよう、澪ちゃん……」

「……え？またダメだった……？」

唯ちゃん言葉に、皆の不安はいよいよ募るばかり……。

ワナワナと身体を震わせながら、皆が一番気になってるテストの答案用紙を見せてきた……。

「……ひ、ひゃ……、100点取っちゃった!!」

「極端な子!?!」

まさかの満点に、澪ちゃんならずとも皆ビックリ!!

私は喜びがふつふつと沸いてきて、気がついたら唯ちゃん目掛けて走り出していた。

「唯ちゃん、良かったあ!!」

「ふおおおっ!?!」

感情の赴くままに、そのまま喜び勇んで抱き付いてた。

「おめでとう、唯ちゃん！！これでまたギター一緒に弾けるよお！」

「ち、ちいちゃん!?!」

『ち、ちひろちゃん……?!』

「はっ!?!?」「ごめんなさい、私ったら……」

海衣奈ちゃんからのメールで我に返った私。

途端に恥ずかしくなって、唯ちゃんから急いで離れる。

「良い物撮らせてもらったわあ!!」

ムギちゃん、いつの間に!!

デジカメ片手に、恍惚とした表情で撮影を完了させていた。

「ムギちゃん、そんな恥ずかしいの撮っちゃだめえっ!!」

私は何とかデジカメを奪い取ろうとしたけれど、海衣奈ちゃん以上に身のこなしが軽やかなムギちゃんは、私を寸でのところでもかわしてくる……。

「うふふっ、これは永久保存させてもらっわ」

「ムギちゃんのいけずう……」

海衣奈ちゃんだけを警戒してたから、ムギちゃんはまったくのノー  
マークだった……。

これからは、2倍警戒しないとダメみたい……。

『ムギちゃん、あとでデータをくれるかしら？』

「喜んでえ!!」

そんな、どこかの飲食店みたいな受け答えであっさり恥ずかしいデ  
ータを海衣奈ちゃんに引き渡さないでえ……。

「ちいちゃん、結構大胆……」

唯ちゃん!? そんな他の人が聞いたら120%勘違いするよつな発  
言を、顔を赤らめながら言うのはやめてえ!!

ああ、もう私、めげそう……。

）  
）

気を取り直して遷ちゃんが、唯ちゃんと満点のテスト用紙を記念撮

影。

「それじゃあ早速練習しようよ、唯ちゃん」

「うん、やるうやるう」

私は堪らずギターを構えた。ずっと我慢してたから、いてもたってもいられなかつたんだもん。

唯ちゃんも待つてましたとばかりに、赤いギターを構えてた。

「まあ、試験前にはうちり練習してコードをバツチリ覚えてたみたいだしな。何ならちひろに教えてもいいんだぞ？」

澪ちゃんからの御指名を受けた唯ちゃんは、なんだか嬉しそうだった。

唯ちゃんはやっぱり凄いなあ。

憂ちゃんの言う通り、やる時にはやる人なんだ。

「ほいほーい！ー！XでもYでも何でもござれ！ー！」

へ！？……X？……Y！？

そんなコード、あつたかなあ？

私達は顔を見合わせるけど、皆同じように横に首を振るだけ……。

そして、唯ちゃんの弾く手が完全に止まっちゃった……。

今度こそ、嫌な予感しかしない……。

「……………どうした……………？」

澪ちゃんが恐る恐る聞いてみると、一時の間を置いて唯ちゃんはポツリと呟いた……。

「……………忘れた……………」

「……………」だぁーっ！……………」

その答えは予測してたけど、私も皆もズッコケずにはいらなかった……。

「ずっとXとかYとか覚えてたから……………」

「またイチからあ！？」

澪ちゃん、御愁傷様です……。



これがXだYだと弾いてはいたけれど、そんなコードは存在するはずも無く、音程の外れた音が空しく響き渡る……。

『唯ちゃんて何かを一生懸命覚えたら、その傍らで物を片っ端から忘れてくの、すっかり忘れてたわ……』

皆の苦勞は、まだまだ続いてくみたい……。

第23話「勉強会の果てに」（後書き）

エイジ「如何でしたでしょうか？さあ、次回からはいよいよ……」

ちひろ「わあっ！！遂に合宿ですね」

海衣奈『遂に水着回なのね！！ちひろちゃんのサービシーン満載でお送りする、神掛かりな展開なのね』

ちひろ「それは嫌ですう！！」

エイジ「合宿……じゃないんだけど……」

海衣奈『何ですつてええええええええええつ！！』

エイジ「ギヤアアアアアアアアアアッ！！」

ちひろ「ああっ！！怒りで我を忘れた海衣奈ちゃんが、エイジさんに合計100コンボを一瞬で叩き込んでる！！」

海衣奈『ちひろちゃんの水着姿が拝めないなんて、私は一体何を生き甲斐にしていけばいいの……？』

ちひろ「他に生き甲斐を見つけて欲しいなあ……」

エイジ「あ、あのね……、まだ合宿じゃなくて……、オリジナルを挟んでいくって事……なんだ……けど……」

海衣奈『オリジナル？水着回よりいい話なの？』

ちひろ「水着から離れてほしいなあ……」

エイジ「大丈夫。幾つかオリジナルを入れるけど、ある意味撮影ションは満載だよ」

海衣奈「そうと分かれれば、早く書き上げなさい!!一分一秒でも早く!!」

ちひろ「海衣奈ちゃん、目の色変わってるよお……」

エイジ「次回あらすじです。梅雨に突入し、お父さんと出掛ける約束をしていたちひろちゃん。しかし、非情にも仕事でキャンセルに!!」

海衣奈「なんですってえ!!」

ちひろ「別にそこまで驚く事ではないと思うんだけど……」

エイジ「悲しみにくれるちひろちゃんを見兼ねて、お父さんはある提案を持ち掛ける」

海衣奈「それでそれで?」

エイジ「その提案に喜ぶちひろちゃん。しかし!!それはちひろちゃんにとって、考えもしなかった未曾有の危機を招く事に!!」

ちひろ「久々にシリアスなんですか?」

エイジ「ちひろちゃんにとってはシリアスでも、海衣奈ちゃん達に

とればギャグですね」

海衣奈『つまり、ピンチに遭うのはちひろちゃんだけね？』

エイジ「まあ、そういう事ですね」

ちひろ「ふえええっ!?!」

海衣奈『それではまた、次話でお会いしましょう』

エイジ「それ、僕の台詞……」

ちひろ「私の意見も聞いてください……」

## 第24話「ソースの香りに誘われて」（前書き）

皆さん、暑中お見舞い申し上げます。

今日あたり、コミケ会場でこの小説を読んでもくださってる方もいらっしゃるかも知れません。お疲れ様です。

さて、今回からしばらくオリジナルの展開となります。

お父さんと出掛ける予定だったちひろだが、急にキャンセルとなってしまう。

そこでお父さんは、ちひろにある提案を持ち掛ける……。

それでは第24話、どうぞ御覧下さい。

## 第24話「ソースの香りに誘われて」

桜ヶ丘も梅雨入りして、ジメジメと鬱陶しい日々が続いてる。

私の心も、どこことなく憂鬱な気分……。

だって、洗濯物が乾かないんだもん……。

一応乾燥機はあるけど、やっぱり洗濯物は燦々と照り付ける太陽の下で乾かしたいのが本音なの……。

あの太陽の香りがする洗濯物を取り込むだけで、何だか幸せな気分になれるから……。

早く、梅雨が明けないかなあ……。

）

そんなアンニュイな気分だったのは、昨日までの事。

今日はとてもウキウキした、晴れやかな気分。

でも、梅雨が明けた訳でもなくて、まだまだそれは先の事。

今日だっていつも通り、一日中雨の予報。

「　　」

家の掃除に余念がないけれど、楽しくてつい鼻歌混じりで歌ってしまふ。

窓枠を指でなぞってみても、埃ひとつ付いてこない。うんっ、完璧！！

「ふうっ……。これで、家のお掃除は終了」

冷蔵庫を開けて、午前中に買ってきた食材の最終チェック。

うんっ、買い忘れは一切無し！！

テーブルの中央には、花瓶にお花も活けてみた。

これでいつでも準備万端！！

こんなに意気込んでる理由は、今日から5日前の出来事に溯る。さかのぼ

）

）

「えっ！？週末、出張？」

「すまない、ちひろ！！どうしても俺が行かなくちゃならない、とても大事な出張なんだ！！」

夕食に青椒肉絲定食を作った、相変わらずの雨降りの日。

お父さんと久し振りに一緒に出かけようと約束していた週末の予定が、突然の1泊2日の出張でキャンセルになっちゃった……。

お父さんは手を合わせ、必死で私に謝ってる……。

「しょうがないよ、大事なお仕事だもん。それじゃあ、それまでにスーツや下着なんかの替えを用意しておくね」

お父さんとお出かけ出来ないのは寂しいけど、お仕事をこなしてくれるから生活が成立ってるんだもんね。

だから我慢しなくっちゃ……。

「……なあ、ちひろ。ひとつ、提案なんだが……」

「ん、何？」

瓶からグラスにビールを注いであげると、お父さんがある提案を切り出してきた。



「今度の土日、友達を家に呼んでお泊まりしたらどうだ？」

「お泊まり？」

「ちひろは今まで、誰かとお泊まりなんてした事が無いだろ？それにこの家に引っ越してきた時、言ってたじゃないか。『お友達が出来たら、このシステムキッチンで料理作ってもてなしたいな』って」

「う、うん……」

そう言われてみれば小学校時代は勉強三昧だったし、中学校時代は……。

確かに友達を家に呼んで、お泊まりなんてした記憶が無い。

「せっかくのいい機会だ。皆を呼んで御馳走を振る舞って、おしゃべりして、次の日は皆で遊びに出かければいいじゃないか」

いつも皆と学校で会ってるし、日々の生活が楽しいと普通に感じるようになって満足してたから、そんな事考えた事も無かった。

お泊まりで、もっと皆との交流を深めていきたい。もっと皆の事が知りたいと思う気持ちが一気に強くなっていた。

それに私には他にも皆を家に呼びたい理由があったから、迷いは無かった。

「うん、そうしてみる」

「よし!! そうと決まれば必要経費と臨時のお小遣い、俺が出してやるから心配するな」

「そんな、無理しなくてもいいよ。ギター買ってもらったばかりだし……」

「そんな事は気にするな。可愛いちひろの為なら、例え全財産使っても後悔はしない!!」

そんな事されたら、家計が火の海になっちゃって私が後悔するんだけど……。

親バカなお父さんは何事においても、私の事を最優先してくれる。

とても嬉しいんだけど、たまにはお父さん自身の幸せを求めて欲しいな……。

お父さんが私の幸せを願うように、私だってお父さんの幸せを願ってるんだからね。

「」「」「」『お泊まり会?』「」「」「」

「うん、今度の土日、皆を家に招待しようと思って。予定とかあるかなあ？」

次の日の放課後。

部室に集まった皆に事情を説明して、早速予定が無いか聞いてみる。

「さてはちひろ、一人で寝るのが怖いんでちゆか？お子ちゃまDEATHツ!？」

毎度ながら、海衣奈ちゃんと澁ちゃんのW拳骨が炸裂して、二つのたんこぶを拵えた律ちゃん……。

『ちひろちゃんをからかったら、痛い目見るわよ』

「叩いてから言っなって……」

「ちいちゃん家にお泊まりかあ!!私は全然大丈夫だよ。ミーナちゃんは？」

『私？私は残念だけど……』

「え!?!海衣奈ちゃん、ダメ……なの……?？」

眉をしかめて、難しい表情を浮かべる海衣奈ちゃん……。

実は一人でも欠けたら、この話はお流れにしようと思ってた……。

だって、誰か一人でも仲間外れなんて、そんなの嫌だから……。

『残念だけど、予定がまったく入って無いの……』

「え？えつと……、それって……??？」

私が頭の中でその言葉の意味を整理してはみるものの、混乱して答えが出せずにいた……。

「結局用事がないからOKなんだろ、海衣奈は！！ていうか、ちひろもこんな簡単な事くらい、すぐ分かれよ！！」

うわっ！！律ちゃんから鮮やかに突っ込まれた！！

『ごめんね、ちひろちゃん。ちょっとからかってみたの』

「はっつ！！気付かなかったよお……」

「ちひろは頭が良いのか悪いのか、分かんない時があるな」

律ちゃんの言う通りかもしれない……。

勉強は出来たとしても、こういう事には頭がうまく回らない私……。

どうも友達付き合いは、まだまだ経験値が足りないみたい……。

「ていうか、なんでアタシがちひろをからかったら殴られて、海衣奈だったらOKなんだよ!？」

今度のツツコミ先は澁ちゃん。

激しいツツコミにもかかわらず、澁ちゃんは慣れた雰囲気ですら平然と答えた。

「普段の行いの差だ」

「不公平だぁーっ!」

頭を抱えながら、事の理不尽さを部室の中心で叫んでる。

どうも律ちゃんは、色々と損な役回りの星の下に生まれてきたみたい……。

「ムギちゃんは、どうかな？」

「私は全然大丈夫よ。皆でお泊まりするの、夢だったの」

嬉しそうに語るムギちゃんから、普通の女の子なら誰でもしているような事に、強い憧れを抱いているのが改めて伺える。

私もお泊まりするのが楽しみだったから、ムギちゃんの気持ちが良い

く分かる。

あとは、漣ちゃんと律ちゃんの二人だけ。

「漣ちゃんは予定、大丈夫？」

「ああ、私は大丈夫。始めから予定無かつたし。……ただ、律は予定がいっぱいだから、今回はダメだそうだ」

「うおー！ーい！！勝手にアタシの予定を埋めるなっつうの！！全然暇だから、アタシも混ぜて！！」

「クスツ、そんなムキにならなくても。冗談に決まってるだろ、律」

「キツい冗談ですね、漣ちゃん……」

まるで夫婦漫才みたいな会話だけど、仲がいいからこそ成せる業なんだよね。

私もいつか、こんな会話出来るのかなあ？

「それじゃあ、今度の土曜日に私の家で」

「『はーい』」

「あ、ちいちゃん。憂と和ちゃんも誘っていいかな？」

「うんっ、もちろん！！一人でも多い方が楽しいから」

これで私を除いて、全員で7人か……。

お泊まり会、とても賑やかになりそう。楽しみ……。

）  
）

数日前の回想も終わり、ふと窓の外を見ると雨はその勢いを増して、いよいよ土砂降りになってきている。

時刻は間もなく午後3時。

それは、私が皆に指定した約束の時間。

） ピンポーン

「はぁーーーーい！！」

逸る気持ちを抑えて玄関まで小走りで駆けていくと、ドアの向こう側から複数のガヤが聞こえて来た。

皆をこれ以上雨で濡らさない為に、急いで玄関を開けた。

「「「「「「おじゃまします」「」「」「」

「いらっしゃい、ようこそ」

顔馴染みの皆が色とりどりの傘を畳んで、一斉に玄関に入ってきた。

「うっひゃあ、服もだけど髪の毛も濡れちゃってら」

「急に雨が強くなってきたからな。傘差しても全然効かなかったな」  
律ちゃんや澪ちゃんに限らず、皆の服や髪の毛がシットリと濡れて  
いた。

そんな光景に、なんだか艶やかさや色っぽさを感じて、つい見とれ  
てしまう……。

「どうしたの、ちいちゃん？顔が赤いけど？」

「え！？ううん、なんでもないよ……」

「はーん……。さてはちひろ、濡れたアタシ達に色っぽさでも感  
じたか？」

「ふえええっ！？そ、そんな事ないよお……」



律ちゃんはこういう時、図らずも鋭い指摘をしてくる……。

部長として、人間観察がよく出来てるみたい。

『ちひろちゃん、相変わらず嘔吐くの下手ね……。顔真っ赤だし、慌ててる雰囲気丸出しよ……』

「はづつっ！！は、はい皆、このタオルで身体を拭いてっ」

話を逸らしたくて、そそくさと何枚かの厚手のバスタオルを皆に手渡した。

「ありがとう、ちひろちゃん。用意がいいわね」

ムギちゃんの綺麗な髪の毛が、この雨のせいで跳ねちゃってる。

普段はサラッとした綺麗な髪の毛だけど、意外に癖っ毛なのかなあ？

「ドライヤーも今用意するから、皆取り敢えず上がって上がって」

人数分のスリッパを急いで揃え、そして階段を上がって二階の私の部屋に皆を通した。

「ここが私の部屋です」

「」「」「わあっ」「」

澁ちゃん、律ちゃん、ムギちゃんは初めて見る私の部屋に歓声をあげた。

他の皆はたまに遊びに来てるから、もう周知の通り。

「……うーん……？」

「どろしたの、澁ちゃん？」

部屋を一通り見渡した澁ちゃんが、なんだか首を傾げてた。

「……いや、こう言うのもなんだけど、なんだか女の子の部屋としては物があまり無いなって感じがしたから……」

「そ、そうかなあ……？」

「だって、普通ならマンガの本やMDコンポなんかがありそうなものだけど、そういう類いが一切無いから……」

確かに私の部屋は、普通の女子高生からしたら殺風景な感じがするのは否めない……。

あるのは勉強机にベッド、本棚には参考書や料理のレシピ本ぐらい

しか置いてないから……。

取り敢えずは、ね……………。

「でも、私の部屋も似たような感じよ」

「そうだね、和ちゃんの部屋もあまり物が無いよね」

「ええ。それにちひろの場合、家事や勉強で忙しかったから、物を揃える時間が無かったと思うんだけど」

「そっか、そうだよな……………。ごめん、ちひろ……………」

「え！？ 澪ちゃん、私、別に気にしてないから」

平謝りの澪ちゃんにフォローを入れつつ、この雰囲気をいち早く変える為に話題を変えた。

「それよりも、早く皆髪の毛乾かして。その鏡台にドライヤーが二つあるから、交代で使って。私、お茶淹れてくるから」

皆が髪の毛を乾かしているのを見計らい、身体の温まる紅茶の用意をする為、一言断ってから部屋を出た。

ドアを閉めると、私はふと隣りの部屋に目を移し、そつと眩く……。

「今のところは大丈夫……」

隣りの部屋のドアには「物置」と書かれたプレートが貼ってあり、鍵が掛かっているから開く事は無いし、物置を開けようとする興味も湧かないはず。

あの部屋の鍵は、私の部屋のある場所に隠してあるから、見つかる心配はまず無いと思う……。

あの部屋……、実は物置とは名ばかりの、絶対誰にも見られちゃいけない、秘密の部屋……。

あの部屋には誰にも見られたくない、ある物を隠してあるから……。

私の過去に関わる物ではほとんどないんだけど、やっぱり見られたくないから……。

あの“パンドラの箱”は絶対開けてはいけないし、見られなくない……。

）

「はあ……、あつたまる……」

唯ちゃんならずとも、皆からホツとする声があがってくる。

皆、私の淹れた特製のアップルティーで身体を暖めていた。

「りんごの香りが素晴らしいわ。このアップルティーは既製品じゃなくて、りんごの皮を剥いてお湯で煮て、そのお湯でセイロンティーを淹れて作ってるわね」

「凄い……、ムギちゃん、分かるんだ……」

紅茶には詳しいムギちゃんならではの正確無比な分析に、ただただ感心……。

「それはそうかもな。ムギはいわば、紅茶のソムリエみたいなものだからな」

「澁ちゃん、そんな事ないわよ。ただ、毎日のように紅茶を飲んでれば、嫌でも分かっちゃうの」

紅茶を飲むムギちゃんの姿はまさしく、可憐なお嬢様を地でいつている。

でも普段は子供っぽさを感じる、なんだか可愛い女の子。

そのギャップがまた、ムギちゃんの魅力なんだけどね。

「お湯の温度も適温だし、カップを温める心遣いまでされて完璧よ、ちひろちゃん」

「あ、ありがとう……」

ムギちゃんから及第点をもらって、美味しい紅茶を淹れなきゃって  
いう、そんな緊張感からようやく解放された。

味には人一倍敏感なはずだから、感想を聞くまでは緊張のしっ放し  
だった。

『いつも紅茶を淹れてくれてるムギちゃんの御墨付きを貰ったんだ  
から、これからはちひろちゃんが淹れても大丈夫ね』

「そ、そんな事ないよお……」

私が思わぬ言葉にたじろいでいると、ムギちゃんから更に思わぬ言  
葉が返ってきた。

「私の日課がひとつ、減っちゃった……」

シヨンボリとして、悲しそうなムギちゃん。

そんなつもりじゃないんだけど、取り敢えずフォローしなくちゃ……！

「あ、あの、ムギちゃんが淹れてくれる紅茶が私の部室に行く最大  
の目的だから、あれが無いと凄く寂しくて……」

慌ててフォローしていると、ムギちゃんはおかしそうに笑った。

「クスッ、冗談よ。ちひろちゃんの腕なら毎日でも飲みたいくらいよ」

「……………ほえっ?」

呆気に取られてると、澁ちゃん達から思わぬ一言が告げられた。

「ちひろ、部室に来る最大の目的は演奏じゃないのか?」

「そうです。それじゃあ、軽音部員として失格だぞ」

律ちゃんからも軽音部員としての心構えを指摘をされて、大いに反省する……………。

「……………「う」ごめんなさい……………」

私が俯いて猛反省していると、笑いを我慢する声が漏れてきた。

「……………ッ、アハハハハハッ!!真に受けるなよ、ちひろは」

「ププッ、そうです。私や律だってムギの淹れるお茶や用意してくれるお菓子、楽しみにしてるんだから」

……もしかして私、またからかわれてる……？

恥ずかしさ最大になって、頭が次第に熱くなってていくのがよく分かった。

「……もうっ！！律ちゃんも澪ちゃんもからかわないで」

部屋の中は大爆笑。

笑いも私の恥ずかしさも、中々収まらなかった……。

「ゴメンゴメン。なんだかちひろってつい、からかいたくなっちゃうんだよな」

ゴメンゴメンと言いながら、お腹を押さえて笑い続ける律ちゃん、笑い過ぎだよお……。

『今日もいい物、撮らせてもらっただわ』

いつの間にか海衣奈ちゃんの携帯は、いつもの如く私一人をロックオン。

「もうっ！！海衣奈ちゃん、撮っちゃだめえっ！！」

今日こそ携帯を奪おうとするけれど、歴然とした身のこなしの差は埋められず、私の手は空を切るばかり……。



そんな必死な私を交わしながらも、海衣奈ちゃんは器用にも私を撮り続けてる。

足掻けば足掻くほど、海衣奈ちゃんにとって良い画が撮れてしまう、そんな悪循環に陥ってしまっ……。

そんな私達のやりとりに、さらに笑い声はヒートアップ。

こんな感じで、楽しい時間？はあっという間に過ぎていった。

）  
）

「ちいちゃん、お腹空いちゃった……」

痺れを切らしてテーブルに突っ伏す唯ちゃんの言葉で、時計をふと見ると夕方の6時。

お喋りだけで、もう三時間が経ってる事にビックリした。

「それじゃあ、晩御飯そろそろ用意するから」

「うわあい、楽しみ!!」

「お姉ちゃんたら晩御飯が楽しみで、お昼抜いて来てるんですよ…」

はうつ！？苦笑いしながら言った憂ちゃんの言葉に、作り手としては絶対美味しいのを作らなきゃいけないっていう、重いプレッシャーがのし掛かる……。

上手く出来なかったら唯ちゃん、キレるかも……。

私が部屋を出て階段を降りていくと、皆も後に続いて降りて来た。

「ねえ皆、晩御飯が出来るまで部屋で待ってた方がいいんじゃないかしら？」

和ちゃんの言う通り、普通ならそうなんだけどね。

「和ちゃん、今日の晩御飯はね、ちいちゃんが皆の目の前で作る料理なんだよ」

「へえ、そうなんだ。って、唯はもしかして今日のメニューを知ってるの？」

「もちろん！！ねえ皆？」

『そうよ。なにせ唯ちゃんがリクエストしたメニューだから』

「そうなんだ。ね、ちひろ、何を作るのかしら？」

「それはね……」

私は今日のメニューを、振り向きざまに告げた。

）  
）

材料の下拵えを終え、テーブルの上に大きめのホットプレートを置き、温める。

数日前、何が食べたいって聞いた時、唯ちゃんのリクエストを皮切りに、皆も食べたいと言い出した広島風お好み焼き、いよいよ調理開始！！

まずは小麦粉を鰹出汁で溶いておいた物を、丸く薄く伸ばす。

それが焼けてきたら、その上に千切りにしたキャベツを鷲掴みにして、大量に山積みにする。

「そんなにキャベツ入れるんですか!？」

憂ちゃんだけじゃなく、皆も驚いてる。

初めて見る人は大体皆、そう言うんだけどね。

「うん、後で火が入るとカサが減ってくるから。これくらい入れないと美味しくないの」

そしてキャベツに火が通り出したら、天かす、モヤシ、豚バラスライスの順に乗せて、上から溶いた小麦粉の生地をかけていく。

「それじゃあ、これをひっくり返すね」

両手に持ったヘラを差し込むと、少し緊張感が走る……。

「律ちゃん隊長、ドラムロールスタートです!!」

「おっしやあ!!ドドドドドドドドドドドドドドドド……」

『無駄に上手いドラムロールね……』

唯ちゃんの無茶振りにもかかわらず、やたらに上手いドラムロールの真似を披露する律ちゃん。

少しじゃなくて、かなり緊張してきた……。

久し振りに作った事もあり、上手くひっくり返す自信もあまり無かった……。

でもここで縮こまっていると、かえって失敗してしまうから思い切りの良さが必要なの。

……………よし……!!

一気にへらを返すと、崩れる事なく、上手くひっくり返す事に成功  
！！

「『おおーっ！！』」「『』」「『』」「『』」

一斉に拍手が沸き起こり、なんだかこそばゆくなっちゃった……。

さあ、ここからはスピード勝負！！

横のスペースで焼きソバ玉を炒めて丸く形を整え、豚バラに火が通ったのを確認し、さっきひっくり返した物をその上に乗せる。

次は卵を割って、黄身を崩しながらやはり丸く形作りし、火が通りきらないうちに、またさっきまでの物を上に乗せる。

この頃には、山盛りだったキャベツもかなり平つたくなってきてる。普通はへらで上から押さえつけて薄くするんだけど、私はフンワリとさせたいから敢えてそれはしない。

卵に火が通ったらもう一度ひっくり返して、ここでオタ クソースを、たつぷりと上から塗る。

「うわあ、いい匂い……」

お好み焼きは今日が初めてというムギちゃんが、横にはみ出したソースの焦げる匂いにうっとりしてる。



「『『いただきまーす』』」

掛け声もそこそこに、さっそくお好み焼きを口に運ぶ皆。

味の評価が気になって、私は食べている皆を食い入るように見つめてる……。

「うわあ……、おーいしーいーい!!」

「うんまあーいーい!!これが広島風なんだ!!」

唯ちゃん、律ちゃんの綻んだ笑顔は私の緊張感をもほぐしてくれた。

『ソースに生地、キャベツやモヤシ、豚バラ肉が混然一体となつて、口の中で味のハーモニーを奏でてるわ。大阪風も美味しいけど、広島風も美味しい』

グルメリポーター張りのコメントで絶賛してくれる海衣奈ちゃんも、至福の表情を浮かべてた。

「ちひろちゃん、お好み焼きって、こんなに美味しい物だったのね」

ムギちゃんは頬に手を当てて、見ているこっちまで嬉しくなるような笑顔を見せていた。

ただ、その笑顔で綻ぶ口の周りにソースや青のりのオプションが付いているのが、なんだか笑えてしまう……。

「じゃあ、どんどん焼いていくね」

まだ食べていない澁ちゃん達にお好み焼きを焼いていて、最後の返しをしようとしてたら、なんだかムギちゃんがウズウズしているのに気付いた。

私が作るお好み焼きを食い入るように見つめながら、何か言いたそうにしてる雰囲気だった。

「はいはい。私、ひっくり返してみたいです」

なるほど、そういう事が……。

ムギちゃんの手の上げ方は、まるで小学生の子が授業参観の日に先生に当ててもらいたくて一生懸命手を上げてる、あの感じだった。

そこまで張り切ってたら、無下に断る事も出来ない。

「はい。じゃあムギちゃん、お願いします」

「わあ……っ！ー！」

嬉しくて目が輝いてる……。



いそいそと駆け寄ってきたムギちゃんに、二つのへらを渡した。

「ねえ、ちひろちゃん。上手くひっくり返すコツってあるかしら？」

「コツかあ……。」

取り敢えず、私なりのコツを教えてみよう。

「うーん……、失敗を恐れて縮こまるとかえって失敗してしまうから、思いっきりいった方がいいかなあ？」

「思いっきりね、分かったわ」

ムギちゃんがお好み焼きの下にへらを差し入れ、律ちゃんのドラムロールが流れて、準備は整った……。

「……せえーの、えいっ!!」

へらを返すと共に、お好み焼きは一気に宙を舞った。

舞った、高く舞った、おもいきり舞った……、ちよっと待ってえー  
ーっ!!

どれだけ飛んでるの、このお好み焼き!?

お好み焼きはムギちゃんの遙か後ろに飛んでいき、このままじゃあ、床に落ちちゃう!!

「うおおおおおおっ!!

律ちゃんが皿を持ちながら、お好み焼きの落下地点へ猛ダッシュしてる!!

落下地点に差し掛かると、床をスライディングしながら皿を差し出す。

そして、お好み焼きは見事皿の上……。

「へっ!?!……ウギヤアアアアアアアアッ!!

……ではなく、なんと律ちゃんの顔に落ちてきた!!

勢い余って滑り過ぎたのが、最大の原因だったみたい……。

熱さから悲鳴をあげてのたうち回る律ちゃんに、原因の発端であるムギちゃんが真っ先に駆け寄り、私や皆もそれに続く。

「律ちゃん、大丈夫！？しっかりして！！」

ムギちゃんは倒れてる律ちゃんの頭を起こし、必死で呼び掛ける。

顔をソースやキャベツ、ソバみれにした律ちゃんが手を震わせながらムギちゃんの手を握った。

「ごめんね、律ちゃん……、私のせいで……」

「……気にすんなって、ムギ……。ナイスファイト……だったぞ……」

「律ちゃん、ダメ！！死んじゃ嫌よお！！」

熱かったとは思っけど、そこまではいかないと思う……。

「……ムギ……、失敗は誰にでもあるんだ……。失敗を恐れずに……、頑張れ……よ……」

その言葉と共に、律ちゃんは事切れた……。

「……律ちゃん……？律ちゃん！！律ちゃん！！嫌あああああ  
あっ……！！」

律ちゃんの亡骸？を胸に抱き、悲しみにくれるムギちゃんの絶叫がキッチンに響き渡る……。

「見事な殉職でありました……、律ちゃん隊員……」

「律ちゃん、私、貴女の遺志を継いで立派に生きていくから」

唯ちゃんとムギちゃんは敬礼を始める始末……。

「……何？この三文芝居……」

和ちゃんは呆れ返ってる……。

「殉職したんじゃ仕方無い。皆で律の分まで、お好み焼きを食べちゃおうか」

今の澪ちゃん言葉に、律ちゃんの身体がピクツと反応してる……。

『そうね、そうしましょう』

皆、一斉にテーブルに戻り始めると、律ちゃんが立ち上がった。

「さて、アタシも続きを食べっ!？」

律ちゃんの後ろ首筋に、海衣奈ちゃんの手ヨップがクリーンヒット  
!!

「……な、なん……で……？」ガクツ

床に倒れこみ、本当に事切れた律ちゃん……。

「律ちゃんは大人しく殉職していなさい」

律ちゃん、御愁傷様です……。

私は密かに心の中で敬礼をしていた……。

第24話「ソースの香りに誘われて」（後書き）

如何でしたでしょうか？

次回、このお泊まり会でちひろにとって、未曾有の危機がいよいよ訪れる！！

しかも、ピンチはそれだけでは終わらなかった……。

次回第25話「パンドラの箱&恐怖の画像」

どうぞ、お楽しみに！！

それではまた、次話でお会いしましょう。

## 第25話「パンドラの箱」(海衣奈視点)(前書き)

大変長らくお待たせして、本当に申し訳ありませんでした。

仕事の多忙の極み、そこから来た体調不良、書き直しと理由を数えあげればキリがありません。

もっとこれからは早く更新します!!

前回の話を忘れてる方も多いと思われるので、簡単におさらいを……。

ちひろの提案でお泊まり会を開催したちひろ。

お好み焼きパーティーも、盛大に執り行われた。

ただ、ちひろは自分の部屋の隣りにある物置に何かを隠していて、見つからないかとハラハラしていた。

ここまでが前回のお話です。

今回はお好み焼きパーティーが終わった後、ある人の好奇心から物置の中身、通称「パンドラの箱」が危機に晒される……。

それではお待たせしました。全編海衣奈視点の第25話、どうぞ御覧下さい。



## 第25話「パンドラの箱」（海衣奈視点）

美味しいお好み焼きの食事会も終わり、一人ずつ交代でシャワーを浴びてる。

皆ほとんど終わってて、後は今浴びてるムギちゃんと、まだのちひろちゃんだけ。

思い思いのパジャマに着替えた皆がちひろちゃんの部屋に集まり、色々なスナック菓子を広げて、お楽しみのパジャマパーティーが始まった。

ちひろちゃんはまだシャワー浴びてないから、普段着のままだけだね。

「なあ漣、食べないのか、お菓子？」

「食べたいのはやまやまだけど、お好み焼き食べ過ぎてお腹一杯だから……」

「太るからの間違いじゃ」

ゴッチーン！！

「そのセリフ、そっくり律に返す」

「ごめんしゃい……」

透ちゃんと律ちゃん、あいも変わらず漫才染みた会話を繰り返して  
るわね。

夫婦漫才、それともドツキ漫才かしら？

でも、なんだかんだで息がピッタリなのよね、この二人。

喧嘩するほど仲がいいって、この事ね。

「お姉ちゃん、ほっぺにポテチの食べカスがついてるよ」

「ありがとう、憂」

「エヘッ」

唯ちゃんと憂ちゃんは、仲睦まじいと言うよりもシスコンね。

この姉妹が喧嘩した所なんて、まず見た事無いし……。

まあ、仲良しなのは良い事ね。

見ているこっちまで微笑ましくなってくるし、幸せな気分になれる  
わ。

「どうしたの、海衣奈？ポーツとしちゃって」

人間観察に浸っている所へ、和ちゃんが烏龍茶の入ったコップを片手に近付いてきて、私の右横に座った。

『うつん、別に。ただ、皆楽しそうだなって』

「そうね。海衣奈だって凄く楽しそうに見えるわよ」

『そ、そう？』

「ええ。海衣奈は気がついてないかもしれないけど、最近の海衣奈って表情が以前より格段に明るくなってるのよ」

『律ちゃんに漣ちゃん、そしてちひろちゃん。皆、唯ちゃん達のようにこんな私を受け入れてくれた……。特別な友達が増えて、嬉しいの』

「別に特別なんかじゃないわ」

『えっ！？』

「海衣奈が肩肘張らずに接する事が出来る友達なもの。自然体でありのまま、特別じゃなく普通の友達よ。皆が海衣奈をそう思ってるようにね」

和ちゃんの言葉が私の胸に突き刺さる……。

そうか……、私は特殊な人間だから、そんな私と友達になりたいと言ってきた皆を特別な人だと思い込んできた……。

でも、それは大きな間違いだったのね……。

皆、ありのままの私を受け入れてくれたんだもの。

変な考えは抜きにして、私も皆と自然体で接しなきゃ。

『ありがとう、和ちゃん』

「別にお礼を言われるほどの事じゃないわよ」

謙遜しちゃって。でも、見返りを求めない性格の和ちゃんらしいわ。

「ふう……、凄く気持ち良かったあ……」

話をしてる間に、ムギちゃんがシャワーから戻ってきた。

「ちひろちゃん、隣りに座ってもいいかしら？」

「う、うん……」

ちひろちゃんは今、炒飯を食べてる。

お好み焼きパーティーは終わったのに？

それには訳があるのよね……。

)

)

「『御馳走でした』『』『』『』『』『』」

「お粗末様でした」

私達はお腹いっぱいお好み焼きを堪能した。

ちひろちゃんは汗だくになりながら、休む事無く一生懸命焼き続けた。

殉職騒ぎの律ちゃんも、素早い復活を遂げてしっかりと食べてたわね。

私も皆もお腹いっぱい。

「ねえ、ちひろ……」

「何、和ちゃん？」

「……ちひろは食べないの、お好み焼き……？」

「……………へっ？」

「「「「「『……………あ……………』「「「「「」

そう言われてみたら、ちひろちゃんはまったく食べてなかったわよね……………。

お好み焼きを満喫してたから、すっかり忘れてたわ……………。

まあ、ちひろちゃんだって自分の分をちゃんと用意しているはず……………。

「……………私の……………、残すの忘れてたあ……………」

「「「「「『ええええええええっ！！？』「「「「「」

なんてドジっ子なの、ちひろちゃんは！？

労働で輝いてた汗は瞬く間に冷や汗となって、ちひろちゃんの顔を怒濤の如く流れてる……………。

「……………は、はにゃあっ……………」

そして身体の力が抜けたのか、床にへたりこんじゃった……………。

「……お……、お腹空いたよお……」

「ちひろ、大丈夫か!？」

「憂、何か作ってあげて」

「うん、お姉ちゃん」

）  
）

澪ちゃんが空腹のちひろちゃんを介抱して、憂ちゃんが今さっき、炒飯を作り上げた。

ようやくお腹が満たされてきたら、今度は恥ずかしさから顔を赤くしてるわね。

「意外だけど、ちひろちゃんてドジっ子なのね」

「はづっ!?!」

「ちいちゃんて、結構おっちょこちょいなんだね」

「はづっ!?!」

「超おつちよこちよいの唯に言われたんじゃ、ちひろも形無しだな……」

「はっはっはっ！ー！」

「漣ちゃん、ヒドい！ー！」

ムギちゃん、唯ちゃん、漣ちゃんから次々と痛い所を突っ込まれて、食べながらシヨックを受けてるちひろちゃん。

でも一番シヨックを受けてるのは、唯ちゃんみたいね……。

皆、そんなやりとりがおかしくて笑ってるわ。

「恥ずかしくて食欲も湧かないよぉ……」

「いいだけ食べといてどこがだよっ！ー！」

「ひゃうんっ！ー！」

律ちゃんの鋭いツツコミが冴え渡り、またしても笑いの渦に包まれていく。

ちひろちゃんといると、本当に退屈しないわぁ！ー！

動画のコレクションが、またひとつ追加ね。



炒飯を食べ終わり、ちひろちゃんもようやくシャワーを浴びに行っ  
た。

階段を降りていく音がフェードアウトしていくと、律ちゃんがニヤ  
けた怪しい笑みを浮かべてる。

何か企んでると思ったたら、案の定ちひろちゃんの勉強机の引き出し  
を漁り始めたんだけど……。

『何してるの、律ちゃん？』

「何って見れば分かるじゃん？ちひろのお部屋探索」

『そんなの見れば分かるわよ。何を探しているのか聞いてるのよ？』

「いやあ、ちひろの部屋って殺風景だからさ、何か乙女チックな物  
が無いかなって思ってたさ」

『乙女チック？』

「ちひろって恥ずかしがり屋だからさ。そういう乙女チックな物を  
持つてるとしたら、恥ずかしいから何処かに隠してる可能性だっ  
てあるわけじゃん？」

『まあ、確かにその可能性はゼロでは無いけど……』

「ちいちゃん家は何回も遊びに来たけど、そんな物見た事無いよ。ねえ、憂？」

「うん。それにこの部屋、本棚と勉強机以外に物を収納するスペースが無いですし、服は下の階にある洋服タンスの中にすべて置いてあるみたいですから、この部屋に何かを隠すのは無理ですよ、律さん」

「くっ！！それじゃあ、この部屋いくら探索してもムダじゃんかさあー！！」

一気に熱が冷めたのか、引き出しを閉めて落胆の表情を浮かべてる律ちゃん。

実は私も少し期待してただけに、ちよつと残念……。

「……………あつー！！」

突然唯ちゃんが、何かを思い出したかのような声をあげた。

「どっしたんだ、唯？」

「湊ちゃん私ね、ある事を思い出したんだ」

「「「「「ある事?」「「「「「」

「ねえ憂、一週間前にちいちゃんの家の前を通った時の事、覚えてる?」

「一週間前?あ、もしかして夜にコンビニへ行った帰り道のアレ?」

「そうそうっ、アレ!」

「なんだよ、唯達だけで盛り上がってないでアタシ達にも教えるよ!」

「そうだぞ、ちゃんと分かるように説明してくれないと」

『律ちゃんはよしとして、なんで澁ちゃんがノリノリなの?』

「い、いや、乙女チックな物に興味は無いんだけど、一応気になるだろ?」

つまり、澁ちゃんも興味津津という訳ね……。

「コンビニに行って、帰り道にちいちゃんの家の前を通ったんだ。それでふと、二階の明かりのついてた部屋が目止まったんだ」

「「「ふんふん」「」

さらにムギちゃんまで乗っかってきたわね……。

「そしたら、ピンクのカーテン越しにちいちゃんがこれ以上無い笑顔を浮かべてたのが見えたの」

ピンクのカーテン？

その言葉に私はある疑問を抱いてた。

『おかしいわね……。この部屋のカーテンはちひろちゃんの大好きなスカイブルーのカーテンだし、他の二階の部屋にピンクのカーテンなんて無かったわよ？』

その話を聞いたうえで、和ちゃんがある論理を組み立てた。

「つまり、この部屋じゃない何処かに、唯や海衣奈も開けた事の無い部屋があつて、そこにちひろが喜ぶ何かがある……。そういう事かしら？」

「「「「「「「「「「「「おおっ！「「「「「「

さすが和ちゃん、頭の回転が早いわね。

ただ、この二階で一度も開けた事が無い部屋って……。

……あるじゃない、ただひとつだけ！！

『あつたわ!! 私達が一度も開けた事が無い部屋!!』

「「「「「何処?」「「「「「

『この隣りの部屋、物置よ』

「「「「「物置?」「「「「「

『そう、唯ちゃん達や和ちゃんも入った事無いでしょ、隣りの物置?』

「「「無い」「「

『しかもあの物置、この家の中で唯一、鍵を掛ける事が出来る部屋なのよ。いつも鍵が掛かってて入れないし……』

緊張から静寂が訪れて、皆の喉が一斉に鳴る……。

疑惑が確信に変わった瞬間だったわ……。

「ようし!! 皆で手分けして鍵を探すぞ」

「「「「「「おおーっ!!」「「「「「

ちひろちゃんに聞こえないように小声で掛け声を掛けて、物置の鍵

の大捜索が始まった。

ちひろちゃんは髪が長いから、乾かすのに時間が掛かる。

さらにそれを三つ編みにするのに、結構な時間を要する。

時間はたっぷりあるわ。

）

）

あれから15分が経過……。

「何処にあるんだよ、物置の鍵はさあ!？」

いまだ、誰も鍵を見つけ出せてない……。

机の中、本棚にある本の間、ギターの置いてある周辺……。

後はこの部屋に限らず、他の部屋も隅々まで探し回った。

でも家の鍵以外、鍵らしい鍵は出でこない……。

皆さすがに、疲労と諦めの色が隠せずにいる……。

「……律ちゃん、もう私疲れたから抜けるね……」

「唯が一番ノリノリだったくせに、一番に諦めるのかよ!?!」

「そんな事言われたって、これだけの人数で探しても出てこないだもん……」

「唯の言う通りだな……。これ以上探しても時間と体力の無駄だ……」

「そうね……。第一、物置に必ずしも乙女チックな物があるとは限らないし」

「漫に和まで……。くっそおっ！！これまでか……」

完全な諦めモードが、この部屋全体を支配してた……。

「あつ、あの目覚まし時計、針が止まってる……」

突然憂ちゃんが部屋の片隅にある、アナログな針の目覚まし時計が止まっているのに気付いて、そっちを指差した。

あれは確か、ちひろちゃんが朝早く起きる為に使ってる目覚まし時計。

電池が切れてたら困るわよね。

「本当だ、……って鍵の在処あじかとは関係ないか……」

律ちゃんは僅かな期待を抱いてたみたいだけど、空振っちゃったわ

ね……。

「確か机の中に電池のスペアがあっただから、私交換しますね」  
さすが面倒見のいい憂ちゃん。

損得感情抜きで、気付いたら言われなくてもキチンと対応。

将来、いいお嫁さんになりそうね。

電池を机から取り出して、目覚ましの裏蓋を開けた……までは良かったんだけど……。

「……………?」

どうしたのかしら？憂ちゃんの動きが止まったわ……。

目覚ましを持ち上げて、裏から何かを覗いてるみたいだけど……。

「どづかしたの、憂ちゃん?」

ムギちゃんの問い掛けに、憂ちゃんは何故か目覚まし時計を持ちながら近寄ってきた。

「……………み、皆さん……………、これ……………」

目覚まし時計の裏を見せてくると、私や皆も顔を近付ける。



ハツとした表情を一番に浮かべた律ちゃんが、震えた人差し指を時計に向かって差した。

「……………か、か……………鍵だああああああつ！！！」

「本当だ、あつたあつたあ！！！」

唯ちゃんと律ちゃんは、共に抱き付いて大喜び。

まさか時計から単一電池を抜いた所に、小さな鍵を斜めに挿し込んで隠してるなんて、まったく考えもなかったわ……………。

「憂、大手柄だよおおおおおおつ！！！」

憂ちゃんに抱き付いて大喜び。

「お、お姉ちゃん！？……………ひ、人前だから……………」

頬を赤く染めて恥ずかしそうにしてるけど、嫌そうではないみたい。むしろ喜んでる。

人前じゃなかったら、どんなスキンシップをとってるのかしらね、この二人？

「こんな手の込んだ所に隠してあるという事は、いよいよ乙女チツクな可能性が出てきたってわけだ！！ようし、皆行つくぞー！！」

律ちゃんは鍵を手にとると、意気揚々と部屋を出ていった。

私達も胸を踊らせながら、続いて部屋を後にした。

）  
）

律ちゃんを先頭に、皆が物置と書かれた部屋のドアの前に集まった。

「さて、いよいよ開かずの扉の封印を解きますか」

いよいよ謎が渦巻く部屋の扉に、あの鍵が差し込まれる。

「ちょっと待って！！」

「だああああああっ！！」

張り詰めた緊張の糸が和ちゃんの制止で一気に緩み、律ちゃんなら  
ずとも、皆思い切りずっこけた……。

「なんだよ、和！？いいところだったのに……」

「ひとつだけ確認したい事があるんだけど……」

「なんだよ？」

「……もし、この中に隠されてるのが、ちひろの辛い過去に関する  
物だったら……、どうするの？」

「……え……？」

うかれてて、ついすっかりしてたわ……。

ここまでして隠してるんだから、その可能性も否認ないわよね……。

皆も途端に後ろめたい気持ちに駆られて、さっきまでの浮かれモー  
ドは一気に消え去っていた。

律ちゃんは少し考えて、律ちゃんなりの結論を喋り出した。

「もし、ちひろの過去に関する物が入ってたなら、アタシは一切見な  
かった事にするし、皆も見なかった事にして胸の中にしておこ  
うぜ。それでいいよな？」

いつもはふざけてるけど、こういつ時の発言はしっかりしてるのね。

私も皆も律ちゃんのかな約束に、静かに頷いた……。

「それじゃ、改めて行くぞ？」

静かに鍵を鍵穴に通して、音を立てないようにゆっくりと回す……。

……ガチャッ……

二階の静かな廊下に、静かな金属音が響く……。

一応下の階を階段の上から覗いてみるけど、ちひろちゃんが姿を現さない所を見る限り、気付かれてはいないみたい……。

律ちゃんは更に音を立てないように、静かにドアを引っ張った。

「……………」

静かに扉が開かれたその奥に広がる、未知の景色……。

先頭に立つ律ちゃんは、言葉を失ってた……。

私達も物置とは程遠い中の景色に、呆然と佇んでいた……。

その静寂しじまを打破ったのは、やっぱり律ちゃんだった……。

「……………な……………な……………、なんじゃこりゃあつ、むぐぐう……………」

「律、声大きい……………」

口を澪ちゃんに押さえられ、悪い悪いと手を顔の前にかざしてる……。

「わあっ！！凄いいすごおおおいつ！！！」

「うわあ、夢みたーい！！！」

澪ちゃんの気遣いも虚しく、仲良し姉妹は歓喜の声をあげて、部屋の中へ駆けていった。

「ここは、天国ですか……………？」

「そうみたいね、澪ちゃん」

呆然と突っ立っている澪ちゃんの手を、ムギちゃんが引いて一緒に部屋の中に入っていた。

「……物置……じゃないわね、少なくとも……」

「……だな……」

和ちゃんと律ちゃんは、部屋の入口で立ち尽くして傍観してるわ。

まあ、無理もないわよね……。

だって物置と言えば普通、掃除用具や普段あまり使わない物をしまっておく、埃が立ちそうな暗めの場所。

間違ってもピンクの壁紙やカーテンに彩られた空間にウサギやクマ、子犬や子猫なんかの大小様々なぬいぐるみが所狭しと並べられてる場所ではないわ、少なくとも……。

6〜8畳はありそうな部屋の壁伝いに、ざっと見ただけでも1000体以上のぬいぐるみが鎮座してる……。

ちひろちゃん、これを見られなくなかったのかしら？

まあさしずめ、律ちゃん達にからかわれるのが嫌だったからだと思っけど……。

「このちっちゃいワンちゃんのぬいぐるみ、すっごく可愛いよ、憂  
くっ!!」

「この大きいクマさんのぬいぐるみ、抱き心地最高だよお、お姉ち  
ゃん!!」

仲良し姉妹はぬいぐるみを取っ替え引っ換え、抱き締めて楽しんで  
る。

普通なら子供っぽいなんでからかわれるけど、あの二人なら何の違  
和感も感じられないわね。

「この大きいウサちゃん、肌触りがモフモフしてて最高!!」

ムギちゃんは大きめの白ウサギのぬいぐるみがお気に入りみたい。

お腹の辺りに顔を埋めて、ギュッと抱き締めてる。

可憐なお嬢様も、こうしてみると可愛い物好きの普通の女の子よね。

「よかったら澪ちゃんも抱いてみる?」

「え!?わ、私はいいよ……」

「そう?こんなに可愛いのに」

澪ちゃんはぬいぐるみ抱くのを断ってきた。

律ちゃんに茶化されるのが嫌だし、皆の手前で体面を気にしてるのね。

「……………ああ……………可愛い……………だ、抱きたい……………。でも、抱けば律にからかわれるし……………」

身体を震わせながら、誰にも聞こえないくらいの小声で呟いている。

でも、私にはハッキリと聞こえてましてよ、澪ちゃん。

せっかくの宝物を前に、余計なプライドが邪魔をして生殺し状態。

人生、損してるわね。

「しっかしまあ、よくもこれだけ集めたもんだな、ちひろは」

「ちひろも普通の女の子だったって事よ、律」

「って和、これだけ集めたら普通じゃないじゃん!？」

「勉強や家事一辺倒に見えるちひろも、こんな可愛い一面を持つ、そんな女の子っていう意味よ」

「まあ、それは言ってるな」



そうね、ちひろちゃんも私達と同じ、いたって普通の女の子なのよ  
ね。

可愛い物好きな一面が分かって、私の知らないちひろちゃんを発見  
出来たわ。

）  
）

「さあ唯、そろそろ行きましよう?」

「えーっ!? まだここにいたいよお、和ちゃん」

「そろそろ離れないとちひろが戻って来るわよ?」

「嫌だ、嫌だあっ!! もつとぬいぐるみ抱いてたあ~~~~~  
いつ!!」

「高校生にもなつて駄々っ子とは……」

和ちゃんの提言に抵抗し、床で脚や腕をばたつかせて地団駄を踏ん  
でる……。

澪ちゃんならずとも、ただただ呆れるわ……。

もう充分すぎるほど、ぬいぐるみ抱いたでしょ?

『ほら、唯ちゃん。いい子だから行きましょっねっ』

容赦無く唯ちゃんの右腕を掴んで、扉の前まで引き摺っていく。

「わぁー！ーん！！ミーナちゃんのいけずう！！！」

つて、まだぬいぐるみを離さずにいるわ！！

しかも何、その気味の悪いぬいぐるみ！！

この可愛いぬいぐるみの中にあつて、鋭い眼光で爪の鋭いクマのぬいぐるみが混じってる！？

これもちひろちゃんの嗜好なのかしら？

「海衣奈さん、お姉ちゃんをいじめちゃダメじゃないですか！！もっつ、めっ！！！」

「めっ！！」の本家本元、憂ちゃんが私の前に立ちはだかつてきた。

ちひろちゃんといい憂ちゃんといい、可愛い顔して「めっ」なんて言われたら、もうそれは私にとって反撃不可能の最強ウエポン。

『べ、別にいじめてはないんだけど……、ちよつとからかってるだけよ……』

「一緒ですっ！！！」

『……「う、ごめんね、憂ちゃん……」』

「分かってもらえればいいんです」

「相変わらず憂に弱いわね、海衣奈は……」

『だって反則よ和ちゃん、あれは……』

「海衣奈も昔から変わらないわね、可愛い物好きは……」

私、昔から可愛い物には目がなくて、憂ちゃんには何故か頭があがらない……。

ちひろちゃんも可愛いから、今は私のペースだけど、いつか逆転しそう……。

「ほら唯、早くぬいぐるみを元に戻して。ちひろが戻ってきたら大変よ」

「……はぁーい……」

和ちゃんの説得にようやく重い腰をあげた。

あの少々不気味なぬいぐるみを、元あった部屋の一番奥隅に返しに行ったわ。

「……………あれ？」

目覚まし時計を見に行つた憂ちゃんと同じように、唯ちゃんもその動きを止めた……………。

なんだか床の辺りをマジマジと見つめてるみたいだけど……………？

「唯ちゃん、どうかしたの？」

「あ、ムギちゃん……………。こんな物が床の上にあつただけ……………」

私や皆も唯ちゃんの周りに集まつた。

「これって、ブルーレイディスクね……………」

唯ちゃんから受け取つたムギちゃんの手の内にあるのは、透明のケースに入った一枚のブルーレイディスク。

さらに律ちゃんが何かに気付いたみたい。

「なんかタイトルが書いてあるな……………。なになに？」ちひろの輝かしい成長記録【高校生編】……………？」

成長記録？ちひろちゃんの！？

「あの不気味なぬいぐるみの下に、わざわざ隠してたって事が……。  
となると、これが一番隠したかった本命かもしれないな……。」

律ちゃんの読みは間違いないわね。

わざわざ鍵を掛けてる部屋にある、たくさんのぬいぐるみの下に隠してたんだから。

見せたくないと思う物ほど、なおさら見たくなくなるのが世の常。

「一階のテレビの部屋に行って早く見ましよう！！多分お宝映像満載だわ！！」

「なんでムギがそんなノリノリなんだよ！？」

律ちゃんでもなくてもつっこみたくなるほど、目を輝かせているムギちゃん。

その原動力はどこから出てきてるのかしら……。

さっさと出ていってしまったムギちゃんを、皆で慌てて追いかけていった。

「あれ？ムギちゃん、どうかしたの？」

階段を降りてる途中で、ちひろちゃんの声が聞こえてきた。

手摺越しに覗いてみると、ちひろちゃんがまだ三つ編みにしていない長い髪をバスタオルで丹念に拭きながら、ムギちゃんと対峙している。

ちょうどシャワーから出てきて、廊下の先のムギちゃんを見つけたみたいで、私達のいる側にちひろちゃん、奥にムギちゃんがいる状態。

まずい、マズいわ！！お願い、ムギちゃん。どうか、この難局を乗り切って！！

「私、見たい映画があっつね、今日レンタルしてきたの。テレビの部屋、借りてもいいかしら？」

「うん、いいけど……。どんな映画？」

ムギちゃん、どんなジャンルの映画を選ぶのかしら？

アクション物やアットホームな感じの映画じゃ、「私も見たい」なんて言いかねないし……。

「えっとね、ホラーなの」

「……………はい？」

「暗く錆びれた廃墟に迷い込んだ人達が、悲鳴と共に一人、また一人と謎の死を遂げてしまうの……………」

「……………」

「そしてヒロインの背後にただならぬ不気味な気配がして、振り向くと……………」

ムギちゃんが恐怖に怯えた表情をしながら、ちひろちゃんの後ろを指差す。

ちよつどその時、急に電気が消えて真っ暗になる。

「ぶ、ふえ……………っ……………」

ちひろちゃんが怯えながら振り向いた、その先には……………。

「みい〜〜たあ〜〜なああああああつ〜!!」

「キヤアーーーーーッ!」

携帯のライトで顔を不気味に照らし出した律ちゃんに、こっちまでビックリするような大きな悲鳴をあげる……。

「はふう……っ……」ドサツ!!

案の定、ちひろちゃんは気絶してしまい、ムギちゃんが背面から支え込む。

「律ちゃん、ナイスフォローだったわ。……ただね……」

「ただ?」

「本当は、ただ怖がらせて『私は見ないから』って言わせるだけだったんだけど……、ちひろちゃんに悪い事しちゃった……」

「ありやりや……。まあとにかく、これで時間が稼げるな」

『それにしてもムギちゃん、よく思い付いたわね、ホラー映画からのこの展開』

「この前ね、家で実際レンタルして見た映画がそれだったの。凄く面白かったわあ!」



怖かったじゃなくて、面白かったのね……。

ムギちゃんは遊園地でジェットコースターに乗ったら坂を下る時、間違なく両手を上げるタイプね。

「ところで、皆」

『何、和ちゃん？』

「ここにもう一人、巻き添えがいるんだけど……」

電気が付いた先に見えたのは、白目で泡を吹いて気絶してる漣ちゃん、介抱してる和ちゃんだった……。

「漣ちゃんまで……、ちよつとやり過ぎたかしら……」

「気にすんなって、ムギ！！作戦遂行に多少の犠牲は付きもんだって！！さ、早いところ見ようぜ」

律ちゃんは悪びれる様子もなく、少々困り気味のムギちゃんを強引に引き連れて、テレビの部屋へと入っていった。

漣ちゃんが気がついて、この会話のやり取りを聞いたら、間違なくフルボッコ確定よ、律ちゃん……。

漣ちゃんは、和ちゃんと唯ちゃんが両手と両足をそれぞれ持ち、テ

テレビの部屋へ連れていった。

ちひろちゃんは私が二階の部屋にお姫様抱っこで抱えて、ベッドに寝かし付けてあげた。

ごめんね、ちひろちゃん。

これもすべて、ちひろちゃんの秘蔵映像を見る為よ。欲望に打ち負けた私を、どうか許してね……。

）  
）

一階に降りていくと、テレビ画面に【ちひろの輝かしい成長記録？高校生編】のタイトルが映し出された。

「ミーナちゃん、はやくはやく！！始まっちゃっよ」

『はいはい。律ちゃん、隣り失礼するわね』

「おーい遷、起きろーっ」

「……はっ！？私は一体？」

「どんな映像なのか、楽しみだわあ……」

「何をうつとりしてるんですか、ムギさん？」

「憂、世の中には知らなくてもいい事があるのよ……」

さあ、上映会の始まり始まりいーーーーっ！！

ホワイトアウトして、白い靴下を履いたちひろちゃんの足元が映し出された。

そして段々上へと画面が進み、桜ヶ丘の制服に身を包んだちひろちゃんが、恥ずかしそうにはにかんでいた。

『今日は、桜ヶ丘高校の入学式当日です』

この声はおじ様ね。

弾んでる声が、楽しそうに撮影してる様子を伺わせるわ。

さあ、どんな展開になるのかしらね？

『どうだ、ちひろ？生まれて初めてのブレザーは？』

『うん……、なんだかこそばゆいな……』

「ちいちゃん、初々しいね」

「お姉ちゃんも初々しかったよ。時計見間違えて大慌てしなければ、もっと良かったのにな……」

「憂うつ、それは言わないでよお……」

『それに……、この制服のスカート、短いから脚がスースーするよお……』

頬を赤らめながら、スカートの裾を下に引っ張るちひろちゃん。

乙女の恥じらい全開ね。

「ちひろの気持ち、分かる気がする……。私も最初、凄く恥ずかしかった……」

「そうだったな。溲ってば入学式の朝、恥ずかしがりながら家を出てきたもんな」

まあ、かく言う私もスカートの短さに、少し戸惑った一人だけだね。

『その恥じらいがまたいい！！よし、さっそくポーズを取ってみようか？』

『えっ！？ほ、本当にするのぉ……？』

『当たり前だろ。すぐ終わるから、な？』

『……………うん……………』

どうしたのかしら？

なんだかちひろちゃん、思い詰めたような表情してるけど……………。

そして、画面上のちひろちゃんは徐に、おもむきいわゆる女の子座りで床に座り込む。

そして、おじ様のカメラはちひろちゃんをナメ回すように、周りながら撮影を始めた。

ここから私達は、とんでもない映像の数々の目撃者となる事を、まだ知るよしもなかった……………。

『いいぞお、ちひろ。桜ヶ丘高校の制服を着せたら日本一、いや！  
！世界一可愛いぞおおおおおおおつ！！！』

あのハンサムなおじ様からは想像もつかないほど、テンションの高い声を出してる……………。

「……なあ……、ちひろの親父さんて、こんなハイテンションな性格だったっけか……？」

「いや……、以前見た時は、かつこよくて大人の男って感じしかなかったけど……」

律ちゃんや澪ちゃんに限らず、皆戸惑ってる……。

『よし、ちひろ。ここで自己紹介、入れてみよう』

『……え、えっと……。綾瀬ちひろ、15才。今日から高校生になります……』

少しばかり沈黙の時間が訪れ、おじ様のダメ出しが入ってきた。

『ちひろ、恥ずかしくてないで続きだ、続き!!』

『ほ、本当にしなきゃいけないの……、アレ……?』

『そつだ!!早くしないと登校する時間が来てしまうぞ!!』

『……は、はうっ……』

顔を異常なまでに赤くしているちひろちゃん……。

その意味はこの直後、すぐに分かった……。

「……ち、ちひろちゃん!？」

「ちひろ!？な、なんてポーズ取ってるの……」

ムギちゃんや和ちゃん、他の皆も驚きを隠せない……。

四つん這いになってからおしりを突き上げ、頭を床に近付ける、水着のグラビアアイドルが取るようなポーズを始めたんだもの……。

『今日、また大人の階段を一步、昇りました……』

ドパアーーーーーッ!!!

あまりにも刺激的なちひろちゃんの言動に耐えられず、ムギちゃんが鼻血で床を真っ赤に染め上げてしまってる……。

「ムギちゃん、大丈夫!？しっかりして!！」

唯ちゃんがティッシュの箱を持って近寄り、介抱してる。

「だ、大丈夫……。ドンとこいよ……」

と言いつつも、いつこうに鼻血は止まる気配がないんだけど……。

「……ち、ちひろさんて、こんな大胆な人でしたっけ……?」

憂ちゃん、顔を赤くしながら目を背けてるわ……。

あまりにも刺激が強すぎたみたいね……。

「ちひろは自ら進んで、こんなポーズを取る性格じゃないわよ……。見てる限り、撮影してるおじ様の指示が聞こえてるから……。」

和ちゃんの冷静な分析に、皆もなんとか納得。

「……こ、今度はベッドに寝始めたぞ……。」

顔が沸騰しかけてる澁ちゃんの声で画面に目を戻すと、ちひろちゃんはベッドの上に仰向けで寝そべってる……。

靴下を脱いで素足になってて、右足は伸ばしたままで左足を膝から曲げて、なんともなまめかしいポーズを取ってる。

ちゃんとスカートの中が見えないように、絶妙のカメラワークで撮影をしてるおじ様。

『綺麗だぞ!! 高校生になったちひろは、一段と綺麗になったぞ!! イヤッホウツ!!!!』

もう、私達の知ってるおじ様じゃないわ……。

なんだか荒い鼻息まで聞こえてきてるもの……。



「……なあ……、ちひろのお父さんて……、もしかして相当の親バカ……、なのか……？」

「漣、違うぞ」

「違うって？何がだよ、律？」

「親バカじゃないぞ。……単なるバカだ……」

「『『『『』』』』……確かに……』』』』」

おじ様の本性を垣間見た私達は、かなりドン引きしてた……。

これもちひろちゃんが隠したかった事なのね……。

「あ、場面が変わってる……」

唯ちゃんの声で再び画面に目を戻すと、これは台所手前の廊下ね。

そこから台所へカメラが入っていくと、そこにいたのは……。

「「「「「「ええっ！！！！」「「「「「「」

皆、思わず声をあげた！！

『…………お、お帰りなさいませ、御主人様…………』

あのちひろちゃんが、メイド服姿で立ってるじゃない！！

眼鏡、三つ編みはそのままに、黒のメイドドレス、白いフリフリのエプロンにメイドカチューシャを装備。

足元はお約束のニーソックスで固め、男には眩しい絶対領域を作り出してる！！

おじ様はどこで用意したの、こんな服！？

817

「こ、これはアリかもしれないわ……。凄く似合ってるわ、ちひろちゃん…………」

「「「「「『うんうん』」「「「「「」

ムギちゃんに激しく同意！！

確かに眼鏡っ娘で三つ編みのちひろちゃんに、ことのほかメイド姿がピッタリだわ！！

メイド喫茶にいても、違和感無しよ…………。

『…………ご、御注文は何になさいますか、御主人様…………』

恥ずかしさと戦いながら、なんとか定番の台詞を話すちひろちゃん…………。

そして一切の迷いもなく、おじ様が告げたメニューは…………。

『お絵描きオムライスをひとつ、貰おうかな?』

『…………かしこまりました…………。少々お待ち下さいませ、御主人様…………』

そしてちひろちゃんは、メイド姿のまま台所で調理を始め、毎度ながら見事な手捌きでオムライスを作り上げていく。

「…………あ、あのお…………、お絵描きオムライスって何ですか?』

怖々と手を上げながらの憂ちゃんの質問に、律ちゃんは苦笑しながらも答えた。

「出来上がったオムライスにはケチャップをかけないで、メイドさんが御主人様の希望通りの文字や絵を描く、カオスなオムライスの事々』

「ああ、そういう事ですか。お姉ちゃんがよくリクエストするのでよく分かりました」

「そうそう、よく憂に描いてもらってるよね〜っ！ネコとかクマとかの絵」

描いてもらってるんだ……。

多分、今からちひろちゃんが描くのは、それと似て非なる物だと思うけど……。

『……お、お待ちせしました……。お絵描きオムライスでございませう。』

チキンライスを卵で包んだ、楕円形の見事なオムライスが運ばれてきた。

さあ、大体予想はつくけど、どんな絵を描かせるのかしら？

『それじゃあ、最初はアルファベットの《I》で』

『……か、かしこまりました。』

『次は感覚を開けてLを……』

予想通りだわ……。

後は更に予測した通りの文字が足されていき……。

『出来上がりました……。う、御主人様……』

オムライスの上には、《I LOVE お父さん》のケチャツ  
プ文字が描かれてた。

ちひろちゃんの顔と同じぐらい、赤い文字でね……。

820

『ありがとう、ちひろ。お父さんの為に一生懸命作ってくれたんだ  
な』

おじ様の問い掛けに、ちひろちゃんは思わぬ返答をした。

『……べ、別に貴方の為に作ったんじゃないわ……。注文を受けた  
から仕方なくよ……。か、勘違いしないでほしいわ……』

うっはぁー……っ！

まさかのツンデレでくるなんて、お姉さんビックリだわ……！

いつもデレのちひろちゃんだけど、ツンも中々いいじゃないのよー！  
顔が真っ赤なのは、いつもの事だけど……。

『……は、はい、御主人様、アーン……』

ちひろちゃんはいがいしくも、オムライスをスプーンで掬って、  
おじ様に食べさせた……。

『うっ、上手あーいー！』

おじ様は、かつてこの上ない味とシチュエーションに大喜び。

対してちひろちゃんは、少し涙目になってる……。

『……よ……、よかった……ニヤン……』

グッハアーーーーッ！！

もう私も限界点に達したわー！！

この後も体操服にエプロンだったり、ナース服だったりと何でもあ  
りの撮影会が続いた……。

これ以上の描写説明は、ちひろちゃんのプライバシー保護の為に伏せさせてもらっわ……。

今さらだけどね……。

そして欲望を優先した私、反省しても後悔はしてないわ！！

）  
）

刺激の強すぎた成長記録とは名ばかりのコスプレ上映会は、ようやく幕を閉じた……。

皆、真っ白に燃え尽きたまま、微動だに動こうとしない……。

あまりの衝撃映像の数々に皆、魂が抜けて抜け殻になってるみたい……。

あまりにも長い静寂を打ち破ったのは、和ちゃんだった……。

「……こ、これはある意味、過去よりも何十倍も辛い物かもしれないわね……」

『……そ、そうね……』

律ちゃんはあまりにも気まずい雰囲気を打開しようとして、さっきのあの約束事を持ち出した。

「……み、皆、これは見なかった事にしよう……。その方がちひろの為だし、皆の為でもあるんだ。いいよな……？」

その言葉に皆、激しく首を縦に振った。

そう、これは見なかった……。

私達は何も見てなかったのよ……。

「……み……み……、見られちゃったよお……」

「「「「「「『！！！！！！！！！』「「「「「」

よく聞き覚えのある涙声に、私達は恐る恐る、顔を後ろに向けた……。

そこには身体を震わせながら、床にへたりこんで涙目のちひろちゃんがい……。

「……どっして、どっして……！？」



皆、何かフォローを入れようとしてるけど、もう見終わった後だもの。

言い訳なんて出来る訳無いじゃない!!

「携帯が普及してるから、時計は携帯でしか見ないと思って、わざわざ目覚まし時計の中に物置の鍵を隠したのに……っ……!!」

「万が一見つかって開けられたとしても、たくさんぬいぐるみの下に隠しておけば見つからないって、……そう……、思ったのに……!!」

ちひろちゃんは号泣しながらその場を離れ、二階へと猛ダッシュで駆け上がった……。

「追っかけようぜ!!ちひろを放っておいたら何しでかすか分からないって!!」

律ちゃんを先頭に、皆二階へ急いで駆け上がる。

「……お父さん……、あの成長記録のディスク、皆に見られちゃったんだよ……」

二階に辿り着いた私達に聞こえてきた声は、物置の中から聞こえてきた。

「…………だから、…………だから、やめようって言ったのにっ！私、もう恥ずかしくて学校行けないよっ！！」

どうもおじ様と電話してるみたい…………。

「落ち着いていられる訳ないでしょっ！お、お、お父さんのお……………」

震えた声が次の瞬間！！

「バカアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ！！」

ドッカー————ン！！ゴロゴロゴロ…………

近くに落ちたと思われる雷鳴と共に、ちひろちゃんの怒りの声が爆発した…………。

「…………うっうっ…………、うわあああああああ、うっ、わああああああああんあああああああ……………」

ちひろちゃんの号泣が聞こえてきたところで、私は物置に急いで入り、泣き崩れるちひろちゃんを抱き締めた。

『ごめんね、ちひろちゃん。勝手に見ちゃってごめんなさい』

自分の携帯に文章を打って、ちひろちゃんに見せた。

「……………う、うわあああああああん！！海衣奈ちゃんのバカア  
！！皆のバカア……………ッ……………、わあああああああん……………」

子供のように泣きじゃくるちひろちゃんが泣き疲れて眠るまで、私  
や皆は誠心誠意、ひたすら謝りつづけた……………。

こうして、あまりにも気まぐずすぎる形で、お泊まり一日目は終わっ  
た……………。

二日目、どうなるのか想像出来ないわ……………。

第25話「パンドラの箱」（海衣奈視点）（後書き）

賢明な読者の方ならお気付きかと思われませんが「ちひろの輝かしい成長記録」は、第一話の冒頭部分でちひろが触れています。

一年前に投稿した話ですから、覚えていなかった方も多いかもしれません……。

更新の間が空きすぎているせいですね、反省です……。

さあ次回、ちひろちゃんは立ち直っているのでしょうか？

それではまた、次話でお会いしましょう。

## 第26話「秘密の共有」（前書き）

毎度ながら、お待たせ致しました。

今回は、お泊まり会二日目のお出かけ前のお話です。

前回、パンドラの箱を開けられて、恥ずかしい映像を見られてしまったちひろ。

皆は、ちひろの機嫌を直す事が出来るのか？

そして、誰かの新たな秘密を知る事になるちひろ。

その時、ちひろが取る行動は？

シリアスとギャグが入り交じった第26話、どうぞ御覧下さい。

## 第26話「秘密の共有」

「「「「「「『めんなさい！！！！！！！』「「「「「「」

いつの間にか、ぬいぐるみだらけの物置で寝てしまって、気がつけばもう朝の6時すぎ。

まだ頭がボーッとしている、そんな私の目の前に広がっていた景色は、いきなりすぎて理解不能だった……。

私が起きた後に、ムギちゃんや憂ちゃんや霧ちゃんが起き出し、それから和ちゃんや海衣奈ちゃん、澪ちゃんと続いて起きた。

唯ちゃんと律ちゃんは海衣奈ちゃんと澪ちゃんに、半ば強制的に起こされた。

そして全員が起きた後に繰り広げられた光景は、全員の土下座という状態で今に至るんだけど……。

そんな中、律ちゃんが下げている頭をゆっくりと上げた。

「昨日は本当にゴメン！！アタシの好奇心から部屋を荒らして、拳の果てにちひろを泣かせてしまった………」

……あ……！！

今ようやく、昨日の恥ずかしすぎる出来事を思い出した……。

「私も同罪だ……。律を止める事だって出来ただろうし、私だって乙女チックな物を探すと聞いて、つい調子にのってしまったんだ……。ちひろを悲しませる事になるのは分かってたのに……。」

優ちゃんも頭を深々と下げて、昨日の非を潔く詫びてくれる……。

「ううんっ!!私が一番……。いけなかったんです!!私が止まってる時計の電池を換えようなんて言わなければ……。鍵を見つけた事も……。なくて……。っ……。ちひろさんを……。泣かせずに……。っ……。済んだ……。っ……。」

優ちゃんが言葉を詰まらせ、涙を拭いながら謝ってる……。

自分が事の発端だったと、自分自身を責めてるんだ……。

優ちゃんの泣く姿は正直見るに堪えなくて、凄く辛い……。

「憂は悪くないよ……。私がぬいぐるみで遊ぶのをすぐにやめてれば、こんな事にはならなかったんだから……。」

泣きじゃくる憂ちゃんを優しく抱き締める唯ちゃん。

今の唯ちゃんは、妹を優しく庇う姉の表情、そのものだった……。

「私がちひろちゃんの成長記録見たさに、ちひろちゃんに会った時に嘘を吐いたんだもの。私が一番悪いの!！」

ムギちゃんは唯ちゃんや憂ちゃんの前に塞がって、やっぱり皆を庇ってる……。

『私が一番悪いのよ……。ちひろちゃんの可愛い姿見たさに、ずっと見続けたんだから……』

「私だって、皆を止めるチャンスはいくらでもあったのに、つい好奇心から取り返しのつかない事をしてしまったわ……」

海衣奈ちゃん、和ちゃんも土下座をしたまま、何度も何度も頭を縦に振って謝り続けてる……。

……皆のこんな悲痛な表情を見てたら、もう怒る気にもなれなかった……。

私は泣きじゃくる憂ちゃんに無言で近付いて、頭を優しく撫でてあげた。

「もう怒ってないから……、泣かないで、ね、憂ちゃん……」



「……ち、ちひろさん……。ごめんなさい……。ごめ……。な……。な……。つ……」

泣きながら、ひたすらごめんなさいを繰り返す憂ちゃんの姿が私とダブる……。

唯ちゃんから離れ、私に抱き付いてきた憂ちゃんはまだ泣きやむ事が出来ないでいた……。

私は優しく背中を擦って、憂ちゃんを宥めた。

「もう大丈夫だから、泣かないで。せつかくの楽しいお泊まり会なんだから。私こそごめんね、憂ちゃん……」

「……っ……。ひんっ……」

泣き顔が可愛いなんて不謹慎な事を考えつつ、ひたすらにあやしてあげると落ち着きを取り戻した憂ちゃんが、私の大好きな笑顔を見せてくれた。

「まだ時間が早いから、もう一眠りして朝御食べよっ？美味しい物食べれば元気が出るし、笑顔になれるから。皆も、ね？」

「……ちひろ、許してくれるのか？」

律ちゃんはまだ、困惑気味みたい……。

「……うん。それに隠し事をしてた私にも非はあるんだから、これでおあいこにしよっよ」

『……ちひろちゃん、ありがとう……』

「それじゃあ私は洗濯物を干して、それから朝御飯の用意をするから、皆はそれまでもうひと眠りしてて」

笑顔で部屋を出ると、私は軽やかな気分で一階に降りていった。

）

今、朝の8時過ぎ。

昨日の土砂降りが嘘のように晴れ渡り、絶好の洗濯日和だった。

洗濯物を干し終えた私は、台所で味噌汁に入れる長ねぎを包丁でリズミカルに刻んでいた。

美味しくなつてと願いを込めて、そして心も込めて朝御飯を作り上げていく。

「わあ〜っ、いい匂い……」

背後からする声にお玉を持ったまま振り向けば、さっきまでの泣き虫さんが鼻を訊かせてた。

「あ、憂ちゃん。もう起きたの？」

「はいっ。お陰様でグツスリと眠れました」

すっかり笑顔の憂ちゃんを見て一安心。

やっぱり憂ちゃんはこうでなくちゃ。

「久し振りです。こんな時間まで寝てたのも、私以外の誰かが作る朝食の匂いで目覚めるのも」

「あ、そっか……。憂ちゃんはいつも唯ちゃんの御飯、作ってるんだもんね」

「はい。でも辛いとか思った事なんて無いですよ。だって、いつも美味しそうに食べる、あのお姉ちゃんの顔に癒されますから」

「クスッ、それは言ってるかもね」

「アハハハッ！！」

笑い声が重なった時、複数の人数が階段を降りてくる音が聞こえて

きた。

「よし、憂ちゃん。御飯やおかずをよそっていくから、テーブルの上に並べるの、手伝ってもらえるかな？」

「はいっ、喜んで!！」

憂ちゃんとの共同作業を楽しんでるうちに、大欠伸の唯ちゃんを先頭に、皆が台所へとなだれ込んできた。

さあ、楽しい朝食の始まりね。

）

「『御馳走様でした』」

皆、美味しそうに食べてくれてよかったあ……。

その笑顔に私も釣られて、つい顔が綻んでしまう。

「なあ、ちひろ……?」

「ん?何、律ちゃん?」

「…………いや、その…………」

何か言いたそうにしてるけど、そこから先を中々喋ってくれない……。

「律、言いたい事があるならハッキリ言え。もどかしいぞ」

漣ちゃんに促されて、ようやく重い口を開いてくれた。

「ちひろってさ…………、どうしてあんなの、撮ったんだ？」

「……………えっ？」

思わぬ質問に、開いた口が塞がらなくなってしまっ…………。

「お前はせっかく和んだ雰囲気を、どうしてあの話題でぶち壊すんだ!？」

「だって漣がハッキリ言えって言ったじゃないか!！」

「確かにそう言ったけど、まさかそんな事言うなんて誰も思わないだろ!！」

「躊躇してる時点で悟れって」

「私、変わりたかったの!！」

「「「「「「「「「「「「「「」

私の一言で、騒がしかった場は静けさを取り戻す。

「……私ね、このとおり地味な出で立ちでしょ？ 漣ちゃんやムギちゃん、海衣奈ちゃんみたいに、綺麗な人に憧れていたの……」

「……私達が……綺麗……」

「面と向かって言われると、結構恥ずかしいわね……」

『……あ、ありがとう……』

漣ちゃんやムギちゃん、海衣奈ちゃんが私の正直な想いに照れてる。

なんだか、言った私まで恥ずかしくなってきた……。

「どうせアタシ達は綺麗じゃありませんよーだ」

「しよーいだあ、しよーいだあっ！……」

「律ちゃん、唯ちゃん、別にそういう意味で言ったわけじゃないよ  
お……」

「わーっつてるって!!冗談、冗談」

もうっ……、律ちゃんはすぐに話の腰を折るんだから……。

「つまり、変身願望ね」

ムギちゃんの言う通り。私はそつと頷いた。

「中学時代の事もあったし、自分を一新したくて……。それでお父さんに、私の成長記録を撮ってっってお願ひしたの……。そしたら……」

「ああいう物が出来上がったのね……」

恥ずかしくて先を言えない私に代わって、和ちゃんが助け船を出してくれた。

私は真つ赤な顔ごと、頭を縦に振る……。

「お父さんたら、『せつかくの機会だから可愛く撮ろう』って言い出して……。そしたらどこから分からないけど、いろんなコスプレ服を用意し始めて……」

皆、ただただ苦笑い……。

あれだけの物を見てたら、当然といえば当然だよね……。

「似合ってもないのに……、変だよね？」

ああいう服は基がいいから似合うのに、私が着たって不釣り合いなだけだもの……。

「そんな事無いです！！ちひろさん、凄く似合っていました」

「え！？……に、似合っ………！！！」

憂ちゃんが、似合ってるなんて言うてくる事をまったく想定してなかったから、完全に吃どもっちゃった！！

「うんうん、特にメイド服姿は秀逸だったな」

なっ！？漣ちゃんまで、なんて事を言い出すの！！

「私から見ても、あのメイド服姿は凄く似合ってたわ。本物みたいよ」

本物のメイドさんを雇っているムギちゃんからの、これ以上無い褒め言葉……。



「……あつ……、ふえつ……、はつづ……」

恥ずかしすぎて、湯気を上げてる顔の頬に両手を当てる……。皆が喋ってる事も、まったく耳に入らない状態……。

「おい、ちいちゃん？」

「ちひろさん、照れちゃってますね……」

『完全に上の空ね……』

「……なあ、溼？」

「ん？」

「ちひろの恥ずかしがり度は、もしかしたら溼以上かもな？」

「……そうかも……」

）  
）

携帯を見ると、9時半を少し回ったところ。

これから市街地へ遊びに出掛けるから、皆仕度して家の外に出ただけ……。。

「澪ちゃん、遅いわね……」

「忘れ物を取りに戻って、かれこれ10分は経つわね……」

ムギちゃんや和ちゃんが気にするのも無理ないよね……。

まだ忘れ物が見つからないのかな、澪ちゃん？

「……なあ、ちひろ？」

「なあに、律ちゃん？」

「ちょっと澪の様子、見に行ってきたりしてくれないか？」

「うん、いいよ」

私は家の中に入っていった。

「……いないなあ……」

一階はくまなく探したけど、何処にも見当たらなかった。

そして今、二階の私の部屋を見たけど、やっぱりいない……。

もしかして、体調でも崩しているんじゃない？  
なんだか心配になってきちゃった……。

「……………クススツ……………」

廊下に出た時、何処からか溼ちゃんらしき声が聞こえてきた……。

辺りを見渡した時、ある部屋のドアがひとつだけ、少し開いてるのに気がついた……。

……………隣の部屋……………、あの物置のプレートを掛けている、あの部屋……………。

もう皆に分かってしまってるから、あの部屋の鍵は掛けていなかった。

静かにドアに近付いて、そっと隙間から覗いて見る……………。

「……………!……………」

……………今、なんだか見てはいけない物を見てしまったような気がする……………。

間違いかもしれない……、もう一度見てみよう……。

「わあ……っ！…このクマちゃん、可愛いなあ！…」

あの大人な感じが漂う澪ちゃんが、クマさんのぬいぐるみを抱き締めて、得も言われぬ笑顔を見せていた……。

「このまま時が止まればいいのに、アハハハハ……」

遂にはぬいぐるみを抱き締めたまま、床を転がる始末……。

いつもの澪ちゃんからはとても想像がつかない事が、ドア一枚向こうの空間で繰り広げられてる……。

澪ちゃんも、私や唯ちゃんに負けなくらいの可愛い物好きだったなんて……。

いつ声を掛けよう……？

そんな事を考えていた時、予想外の出来事が私の身に起きようとしていた……。

ギギギッ……

「!!!!!!!!!!」

漣ちゃんを覗くのに集中するあまり、ドアに私の体重が乗っかってしまい、開き始めちゃった!?

足を踏ん張ろうとしたけど、もうドアが半分以上開いちゃってて、既に手遅れ……………。

その勢いそのままに、よろけてケンケンパーで部屋の中央まで進んじやった……………。

床を転がり切って、ちょうど天井を見上げた形の漣ちゃんと、バツチリ目が合っちゃった……………。

「!!!!!!!!!!ち、ちひろ……………?」

「……………あ……………、アハハ……………」

……………気まずい……………、凄く気まずいよお……………。

なんて声を掛ければいいんだろう……………。

そんな事を思案してる間に、漣ちゃんは何事も無かったかのようにぬいぐるみを元の場所に戻していく。

そして私の前に歩み寄ってきて、ひとつ咳払いをする……………。

「えーとだな、ちひろ？」

「……は、はい……」

私、てつきり見られて慌てふためくんじゃないかって思ってたんだけど……。

なあんだ、いたって冷静「これは違うんだ！！ちひろおおおっ！  
！私は決してぬいぐるみの可愛さのあまり、じゃれていたんじゃないんだああああっ！！」

「はiiiiiiiiiiiiっ！！」

前言撤回！！冷静じゃなかったよおおおおおっ！！

私の両肩を鷲掴みにして、半泣きになりながら顔を近付けて必死に弁解してる！！

「間違つてもぬいぐるみに名前を付けて呼んだり、ぬいぐるみと会話をしたりして遊んでた訳じゃないんだああああっ！！信じてくれええええええ！！」

「……み、澪ちゃん、落ち着いて！！」

まるで、サスペンスドラマの終盤あたりの真犯人みたいに、聞いてもない事を次から次へと暴露してるよ、澪ちゃん！？

慌てて理性を失って、自分で何を言ってるのか分かってないみたい……。

とにかく、澪ちゃんを落ち着かせる事が最優先事項！！

「こんな事が律や海衣奈に分かられたら、私はいい笑い者になってしまっ！ー！」

「澪ちゃん、私は何も見てないからー！」

「……………へっ！？」

「私は何も見てないし、聞いてない……………。今あった事は忘れるし、誰にも喋らないから、……………ね？」

「……………ち、ちひろ……………」

誰かの秘密なんて喋ったところで何の得も無いから……………。

何もなかった事にすればいい……………。そう、これでいいの……………。

「……………ちひろって、本当に優しいな……………。ありがとう……………」

澪ちゃん、落ち着いたみたい……………。

いつもの綺麗な笑顔が戻ってきた。

さて、あとは……………。

「だからね、澪ちゃん……………」

「ん？どうして」「ああああの恥ずかしい内容、誰にも言わないでえええええっ！！」

「ち、ちひろ！？」

「あんなの他の皆に知られたら、本当に学校行けなくなっちゃっよ  
おおおおおおおっ！！」

「ちひろ、落ち着けっ！！って、なんで立場がいきなり逆転してるんだ！？」

なりふり構ってなんていられない！！

まだ皆からの箝口令の約束を取り付けてなかったから！！

私の未来は、皆の口の堅さと心持ちひとつで大きく変わってしまう！！

黒歴史をこれ以上広めない為なら、どんなお願い事でも聞く用意があるもん！！



「お願い、漣ちゃん！引越して来たばかりで、すぐ引越してなんて嫌だ！嫌だよお！！」

「だーかーらー落ち着けて！！大丈夫だ、私も皆も絶対喋らないから」

「……ほ、本当？」ウルルン

「！？……ボソツ「……か、可愛い……」」

「ふえっ？」

漣ちゃん何か呟いてたみたいだけど、説得するのに必死でよく聞き取れなかった……。

「絶対誰にも喋らないから、約束する。律や唯達も昨日、絶対に喋らないし胸の内に閉まっておくって言ったんだ。皆の事、信用出来ないか？」

「……そ、それは……」

ゆっくり、そしてハッキリと諭すように私の目を見つめながら話す漣ちゃん。

私の過去を受け止め、その事に関しては他の誰にも一切喋らなかつた皆……。

その事実だけでもう、私の胸の内は決まっていた。

「信用出来るに決まってるもん……」

「そうだろ？ま、お互いに秘密は共有しとこう、な？」

そう言いながら頭を撫でてくる漣ちゃんは、律ちゃんによく見せるような、とても親しげな笑顔を見せていた。

私達、さらに親密度がアップしたのかな？

そう考えるだけで自<sup>おの</sup>ずと嬉しくなってしまう……。。

「おーい、漣にちひろ、何やってんだあ？早くしないと置いていくぞー！ー！」

「律！？いつの間にな？」

部屋の入口あたりで、待ちくたびれた律ちゃんが、遅い私達を大きい声でけしかけてきた。

でもしかめっ面じゃなくて、なんだか意地悪な笑顔を見せていた。

「律、お前覗いてただろ？聞いてただろ？」

胸ぐらを掴んで、威圧的に尋問してる漣ちゃん、なんだか怖い……。

「アタシ？聞いてないし見てないし、喋らないし。ま、秘密の共有って事で」

……律ちゃん、それ絶対聞いてたよね……？

どのタイミングからいたんだろう？

「待たせた罰としてアタシにお昼奢りな、漣？」

「聞いてた罰とで相殺だろ！！しかも、なんで私だけなんだ！？」

「ちひろはおいしい御飯作ってくれたんだから、これで完全にチャラ。それに漣がイチャイチャしてたのが、そもその原因だろ？」

「いつ!?!？」

「ひよえっ!?!？」

唐突すぎる言葉に私達は揃って赤面状態!!

「な、な、なんで私とちひろがイチヤイチャしなきゃならないんだ？」

「そうだよお！！私と漣ちゃんがイチヤイチャする訳、ないよお……」

すると何故か、キョトンとして固まる律ちゃん……。どうしたのかなあ？

「アタシはぬいぐるみとの事を言っただけだけど……。……顔を赤くして慌ててるって事は……。二人はそういう関係なのかなあ？」

プツと吹き出しながら、意地悪なしたり顔を見せてきた。

勘違いに私が慌てると、横にいる漣ちゃんが禍々しいオーラを纏ってた……。

「……こんのおおおおっ！！待てこら、律うううっ！！」

「漣が怒ったあー！！」

「当たり前だろ！！すべて覗いてたくせに！！」

「それよりも、勘違いした漣が悪いんだろお？」

「勘違いするような発言をした律が悪いんだ!!」

堂々巡りになりそうな論争をしながら、部屋を出て階段を駆け足で降りていく二人を、私は呆然と見送るしか無かった……。

やっぱり私はまだ、あの域には達してないなあ……。

でも、焦らなくてもいいか。

進歩はあったんだもん。少しずつ仲を深めていけばいつかは、ね……。

……って、急がなくちゃ!!

私が一番遅い人になっちゃってる!!

部屋を出て、急いで玄関へと向かった。

）

「ちいちゃん、遅いよお!!」

「ごめんね、唯ちゃん」

澪ちゃんが忘れ物を取りに行ってから、もう20分以上が経過して……。

それは怒られて当たり前だよね……、って私は10分経ってから行ってるんだけどなあ……。

「唯、ちひろは悪くない。悪いのは忘れ物を中々見つけれなかった、私だからな」

「そつかあ。ごめんね、ちいちゃん。じゃあ、なんで律ちゃんは遅れた澪ちゃんからゲンコツ食らってるの？」

……あ……、結局たんこぶ拵えてるんだ、律ちゃん……。

「痛てて……。まあ、悪ノリが過ぎちゃってさ……」

「まあ、いつもの事だ」

「それじゃあ、そろそろ行きましょう。もうすぐ10時になるわよ」

「……………はい……………」

和ちゃんに促され、私達は市街地へと向け、歩き始めた。

ポンポンツ「ほえっ？」

いきなり肩を叩かれて驚きながら振り向くと、海衣奈ちゃんが携帯の画面を私に見せてきた。

『さつきから、ちひろちゃんに何度も会話メールを送ってるんだけど、【送信出来ませんでした】って返ってきてちゃうのよ……』

へ？そんな事は無いはずと思いつつ、ポシエットから私の携帯を取り出す。

「……………あれっ？電源が入らない……………？うつん、電池残量がゼロなんだあ！！」

そういえば昨日、いつの間にか寝ちゃったから、携帯充電するの忘れてた……………。

……………どうしよう……………、これじゃあ海衣奈ちゃんと会話出来ないよお……………。

『電池切れね。私のと会社が違うから、予備のバッテリーも合わないわね……………』

「ごめんね、海衣奈ちゃん。私が抜けてるばかりに……………」

落ち込む間も無く、海衣奈ちゃんは有無を言わずにハグをしてきた。

『別にしよげなくてもいいのよ。今日は一緒にいるんだから大丈夫。こうやって画面を見せればいいんだし』

「……………まあ、それもそうだよね……………」

この時点では納得した私だったけど、この後この電池切れの携帯が、とんでもない事態を引き起こす引き金になってしまう……………。

『さあ皆！！今日は遊んで遊んで、遊び倒すわよ！！』

「海衣奈さん、今日はなんだかノリノリですね？」

『それはそうよ、今日が凄く楽しみだったから。行きたい所、満載だから』

「海衣奈ちゃんも？私も今日が凄く楽しみだったの」

ムギちゃんも海衣奈ちゃんも、ううん、皆楽しみにしてるって顔が勢揃い！！

もちろん、私も楽しみな一人だけど。

こうしてようやく、私達のお泊まり会二日目は始まった。



## 第26話「秘密の共有」（後書き）

如何でしたでしょうか？

今回は出掛けた先で、パンドラの箱に関してのある謎が解明します。

同時に、ちひろの意外な特技が分かります。

あと2話ほど、お泊まり会のお話にお付き合いください。

それではまた、次話でお会いしましょう。

p . s . pipi先生、キャラ提供を承諾いただいて、ありがとうございます。  
うございました。

まだ先の話ですが、面白い話にしますので楽しみにしてください。

第27話「嬉し恥ずかしいお出かけ」（前書き）

エイジ「毎度ながらお待たせしました。今回はお出かけ編の前編です」

ちひろ「どんな事が待ってるんでしょうか？」

海衣奈『私の画像コレクションが増える事、請け合いね』

ちひろ「そ、そんな事」

エイジ「大ありですね」

ちひろ「ふえええんっ!!」

一同「」『それでは第27話、どうぞ御覧ください』「」

## 第27話「嬉し恥ずかしいお出かけ」

「わあっ、もう人でいっぱい……」

この本屋は二階建てで、奥行きも広くてかなりの大きさ。

その分、取り揃えてる本のジャンルや冊数もかなりあって、何度か来ては料理本やギターコードの教本を購入してる。

「そんじゃあ、アタシ達は立ち読みしてるから、お目当ての本探し  
てきなよ。ちひろ、和」

「うん、じゃあ行ってくるね。行こう、和ちゃん」

「そうね」

家を出てからアーケード街に来る途中、律ちゃんが皆に今日行きたい場所を聞いていた。

律ちゃん曰く、「時間はたっぷりあるから皆の行きたい場所を全部  
回ろう」との事。

買い物系統は売り切れてしまう可能性があるからと、まず私達が最初  
になった。

「良かった、あったわ」

一階の中ほどの特設コーナーに平積みされている、二冊一組の本を手にした和ちゃん。

それは今話題のファンタジー本で、映画化もされている、社会現象にもなっているタイトル。

「和ちゃんて、そういう本読んだ？」

「そうよ。意外？」

「意外と言うか……、何だか和ちゃんて大人だから、堅そうな知識が詰まった本を読んでそうで……。ごめんね、勝手なイメージだね……」

「気にしないでいいのよ、よく言われるから慣れてるわ。私はジャンルを問わず、色々な本を読むの。ひとつのジャンル一辺倒じゃ、偏った知識しか入ってこないから。ひとつの事にもいろんな見解があるでしょ？その発見が楽しいの」

和ちゃんは真正銘の本の虫。

だからこそ知識が抱負で、様々な意見や言葉がスツと出てくるんだ。

……それに比べたら、私の読むジャンルは偏ってる……。

料理のレシピ本に参考書、ギターのコード教本、あとは……。

「それじゃあ、ちひろのお目当ての本がある所に行きましょう」

「……………うん……………」

正直、ああいう本の後で私の買いたい本の場所へ行くのは気が引ける……………。

けれど、今買わないと売り切れてしまうほど人気がある本だから……………。

恥ずかしさを忍んで階段を昇り、二階へと上がっていった。

）  
）

「えっ！？あともう二冊しかないよぉ！！」

売り場に向かって歩いてると、お目当ての本がたったの二冊しか置いていないのが見えた。

万が一売り切れでもしたら、次に入荷するまで待たなきゃいけない。

そんなの、やだやだやだっ！！

何が何でも読みたい一心で、小走りで本がある場所へ駆けていった。

もう少しで辿り着く……………。

「良かったあ、ギリギリセーフ!」

私が欲しかった雑誌『月刊きらら』を取る手と声が、私と誰かの二つ、ピッタリと重なった。

「……ご、ごめんなさい……」

私は何だか気まずくなって手を離し、深々と頭を下げた。

「……い、いえ、こちらこそ……、……ってち、ちひろ!？」

「……え!？そ、その声……」

その聞き慣れた声に、ゆっくりと顔を上げていく……。

「……み、湊ちゃん!？」

湊ちゃんが私と同じ雑誌を手に取り、私と同じく目を見開いて驚いてた……。

「ちひろも読んでるんだ?月刊きらら……」

「う、うん……。実は私、マンガも読むけど、一番読みたいのは橘たちばな文先生の小説なの」

ガシィッ!「きゃんっ!？」

漣ちゃんたら、いきなり両肩を掴んでくるから、声がつわずつちや  
ったー!!

「ち、ちひろも橘先生のファンなのか!？」

「……………え?“も”って事は、漣ちゃんも!？」

「ああ!!こんな身近に橘先生のファンがいたなんて、嬉しすぎる  
!..!」

「……………わ、私も!..!」

同志となった私達は手を取り合い、そこから橘先生談義に花が咲き  
まくった。

「私、連載を始めた頃からのファンで、先生にファンレターを出し  
た事もあるの!..!」

「私も出したぞ!!あの胸がときめくような文章の羅列に、夜が明  
けるのも気付かないくらいに読みふけたなあ!..!」

「私も私も!!実は私、あのぬいぐるみの部屋でぬいぐるみを膝の  
上に乗せながら、先生の作品読んでるの。そうするとファンシーな  
気分が高まって、さらに先生の作品に没頭出来るの!..!」

後で思い出したら、沸騰するほどに恥ずかしい事を言ってたけど、

気分が高まったこの時の私はそんな事、一切お構いなしだった。

「いいなあ!!今度、私も混ぜてもらっていいか?」

「うんっ!!是非来て!!」

「……あの……、盛り上がってるところ、大変申し訳ないんだけど……」

「……の、和!?!」

「和ちゃん!?!」

あからさまに引き気味の和ちゃんの言葉に、ようやく我に帰った私達……。

「正直声を掛けるのもためらうくらい、店に迷惑よ、アナタ達……」

辺りを見渡せば、私達を見ながらクスクスと笑ってる人達の視線が、痛いほどに突き刺さる……。

「……し、失礼しましたあ!!」

いたたまれなくて、私と澪ちゃんはこの場から猛ダッシュで逃げ出しました。

「お客様あ、御勘定忘れてますよ……っ!!」



）  
）  
……は、恥ずかしいよお……。

しばらく、あの本屋には行けない……。

「どうしたの？ちいちゃんも澁ちゃんも、ずっと顔が真っ赤だけど何かあったの、二人共？」

アーケード街を再び歩き始め、恥ずかしさで異常なまでに顔を真っ赤にしている私と澁ちゃんに、唯ちゃんが顔を覗かせてくる……。

って唯ちゃん、顔近すぎ！！

「えっ！？な、なんでもないよお、本当だよお………」

「そ、そうだぞ！！別に何でもないんだ！！」

「そう？変なの」

そんな私達を何故かクスクスと笑いながら見てる律ちゃんと海衣奈ちゃん……。

まさか、一部始終を見られてたなんて事は無いよね……？

わ、私の考えすぎ、思い過ぎたよね、うん……………。

）  
）

「さあ、次は漣とアタシの希望でこちら！！」

あつという間に着いた次の目的地は、もうお馴染みの店“10GI  
A”

律ちゃんはドラムの新しいスティック、漣ちゃんはベースの張り替え用の弦が欲しいとの事。

「そんなに時間掛からないからさ、皆は待っててくれよん」

下りのエスカレーターで降りて行く二人を見送り、残った私達はここの一階のCD売り場で時間を潰す事にした。

「ねえねえ、ちいちゃん。こっちに洋楽のCDがいっぱい置いてあるよ！！」

「わあっ！！」

さすが楽器店と言わんばかりに、ギターやベースの有名なアーティストの皆さんのCDが数多く陳列されている。

アイウエオ順に並べられてるCDを目で追うと、サ行のシでふと目が止まった。

「ねえ、唯ちゃん。これ見て」

私は三枚のCDを取り出し、唯ちゃんに渡した。

「え？何これ、……ジミ？ヘンドリックス、ジミー？ページにジェフ？ベック？………あっ！！」

私達にとって、この三人のアーティストは切っても切れない、そんな思い出深い人達。

「思い出した？」

「うんうんっ！！私が軽音部に入るのを断ろうとした時に、湊ちゃんの口から出てきたアーティストだよ」

あれから二ヶ月経つのに、まるで昨日の事みたいに思い出す。

私が過去のしがらみから抜け出すきっかけとなった、あの一日は簡単に忘れられない。

「あ、これ試聴出来るみたい。聴いてみようよ、唯ちゃん」

「うんっ」

二台並んでる試聴用プレイヤーの前に立ち、ヘッドフォンを装着してCDを回転させると、のっけからかなり早弾きのギター演奏が始まった。

「……す、凄い……」

音の嵐が待った無しで、私の身体を支配する……。

重厚な演奏に合わせて、これまた力強い声で歌が紡がれていく……。今までにあまりこういう音楽を聴かなかった私だけど、ギターを始めた途端、急に興味が沸き始めてしまう。

いつか私もこんな演奏、出来るようになるのかな……？

でも、まずは基本をしっかりと身に着けなきゃね。

「……………」

もうかれこれ5曲目に差し掛かった。

澪ちゃんに律ちゃん、まだかなあ？

気になって、唯ちゃんに声を掛けてみた……………。

「つて、いない!？」

慌ててヘッドフォンを外し、辺りを見渡してみる。

「あら、今頃気が付いたみたいですよ、唯さん」

「そつでございますわね、律さん」

ひゃああああああつ!!

皆、入口近くで私を見ながらクスクス笑ってた……………。

まさかの私一人だけ、置いてけぼりなんて……………。

私は律ちゃんに事の真相を問い質してみた。

「どうして皆、私だけ声掛けてくれなかったの？」

「だってあんな状態じゃあ、声掛けられないって……………」

「あんな状態？」

疑問符だらけの私の目の前に、海衣奈ちゃんが携帯の画面を見せて

きた。

そこに映し出されたのは、CDを聴いている私の後ろ姿を撮った動画だった。

動画というだけで、なんか嫌な予感しかしないんだけど……。

「……………なっ！？はわわわわ……………」

見進めていくうちに、どうしようもない恥ずかしさが襲ってくる……。

多分、無意識の内だったんだと思う……………。

聴いているうちに、身体が上下に動いてリズムを刻み始め、終いはエアギターまでし始めてる……………。

一体何をしちゃってるの、数分前の私……………。

そんな恥ずかしすぎる動画には、周りの人の吹き出し笑いのBGMがオマケとして流れていた……………。

「……………い、いやああああああああっ……！」

その場にいるのがいたたまれなくなり、ダッシュで女子トイレの個室に逃げ込んだ……。

「ちひろちゃん、良い子だから出てきて」

「ちひろゴメン、アタシが悪かった。海衣奈も謝ってるから」

ムギちゃんや律ちゃんの言葉にも、怒りとかじゃなくて純粹かつ猛烈な羞恥心から出られなかった……。

あつっ！！ここも暫く来れないよお……。

）  
）

逃げるように『10GIA』を離れた私と皆が次に向かったのは、唯ちゃんと憂ちゃんのリクエストで最近出来たという、アミューズメントパーク。

ゲームセンターとアミューズメントパークの違いって、何なのかなあ？

テレビゲームコーナーにメダルゲームコーナー、プリクラなんかが目白押しのかかなり大きなお店。

「凄いわあ！！まるで遊園地みたい！！」

ムギちゃん、まるで子供のように目を輝かせてる。その気持ち、分

かるなあ。

さっきまで恥ずかしくていじけてた私も、何だかウキウキしてきた。  
やった。

「よし、皆。おもいつきり遊び倒そうぜー！」

「こら律、危ないから走るな。ほら、唯も。ってムギや憂ちゃんまで！？」

「澪ちゃん、ここにきて堅い事は言いつこなしだよ」

『そうそう。今日はいっぱい遊び倒すって決めてるんだから』

「早く行かないと、置いてかれるわよ」

「……ちひろ、海衣奈、和まで……。それもそうだな。私達も行くか？」

やっと全員参加出来る所に来た事で、皆のテンションも上がりっ放し。

押さえろって言うのが無理な話だよな。

さあ、何で遊ぼうかな？ 思案のしどころだよな。

）

）



「なあ漣、久々にセッションしないか？」

「これが、いいな」

律ちゃんが早々と座ったのは、ドラムとギターの音ゲー。

漣ちゃんはギター側に立ち、お互いにコインを入れてゲームスタート。

スタートした途端に律ちゃんのスティックが唸りをあげ、漣ちゃんの華麗な指捌きが炸裂する。

かなりレベルの高い曲だけど、この二人は難なくこなしていく。

「漣さんも律さんも凄い、凄い！！！」

憂ちゃんも思わず感嘆してる。

やっぱりこの二人は、阿吽の呼吸がピッタリみたい。

本物の楽器も凄いけど、ゲームでもその腕は健在してる。

いつの間にか出来たたくさんのギャラリーが、二人のレベルの凄さを物語ってた。

そして、ほぼパーフェクトな演奏が終わり、拍手喝采が沸き起こる。

「凄いぞ、姉ちゃん達!!」

「ブラボー!!」

「皆、ありがとうーっ!!」

「……あ、あっ……」

ギャラリーに笑顔で応える律ちゃんに、恥ずかしさで顔を真っ赤にしてる澁ちゃんが対照的で、なんだか笑える。

「澁ちゃん、凄いなあ。改めて見直しちゃった」

「えっ!? あ、ありがとう、ちひろ……」

私が澁ちゃんの手を握って労をねぎらうと、今度は海衣奈ちゃんがギター側に立った。

『律ちゃん、私とセッションして』

「海衣奈もか? よし、いっくぜえ!!」

第2ラウンド開始。

海衣奈ちゃんも澁ちゃんに負けず劣らず、凄まじい指捌き。

またしても沸き上がるギャラリーの声に比例して、スコアもどんどん鰻登り。

終わって見たら、さっきの漣ちゃん達よりスコアが上だから凄い！！

声援に応えるのもそこそこに、海衣奈ちゃんは私の方へ駆け寄ってきた。

『どう、ちひろちゃん？凄かったでしょ、私？』

「うんっ！！海衣奈ちゃんの事、改めて尊敬しちゃった」

『ああ、その言葉が聞きたかったの！！』

「ふえっ！？ひゃうっうんっ！！」

私の視界は海衣奈ちゃんの熱い抱擁で、正確には胸の谷間で真っ暗に……。

まだギャラリーがいるのに、恥ずかしいよお……。

「海衣奈さ、もしかしたら漣に嫉妬したのかもな？」

「海衣奈が私に？」

「海衣奈にしたら、溼にちひろを取られたみたいで悔しかったんでスッ！！」

暗黒の表情を浮かべた海衣奈ちゃんが律ちゃんの頭を思い切りグーで殴り付け、律ちゃんは昨日に引き続き、殉職……。

ギャラリーが一瞬にして、引いていなくなっちゃった……。

「海衣奈ちゃんてば、もうっ！！ダメでしょっ、面前の前で暴力振るったら。めっ、だよっ！！」

『ち、ちひろちゃんに怒られちゃった……』

「力の強い海衣奈も、ちひろには敵わないみたいね」

海衣奈ちゃんのテンションはみるみるうちに下がって、半泣き状態で落ち込んでる……。

海衣奈ちゃんがやきもちかあ……。ちよっと嬉しいかも。

「私はUFOキャッチャーに行きます。絶対に欲しいぬいぐるみがあるんです」

憂ちゃんはお目当てのぬいぐるみがあったみたいで、真っ先にその場所へと向かった。

それはアニメでお馴染みの、ピンクの帽子を被ったシカのような可愛らしいぬいぐるみ。

コインを入れてボタンを押すと、アームはぬいぐるみの方へ動き出す。

ちょうど真上にアームが差し掛かり、憂ちゃんがボタンから手を離すと、ぬいぐるみ目掛けてアームが下がっていく。

「お願い、取れてっ！！」

手を合わせて祈る憂ちゃん。

アームが閉じて上がるまでの一瞬が、ドキドキする緊張の時間帯。

「あっ、持ち上がった！！」

ちょうど頭の辺りが持ち上がってるみたいだけど、多分……。

ポトツ!!」「あーあ……」

頭でっかちなぬいぐるみだから、持ち上がったもすぐに落ちてしまった。

「あきらめないもん!!もう一回!!」

さらに挑戦する憂ちゃんだけど二回、三回とチャレンジしても結果は同じだった……。

「これ、絶対欲しいのに……、ダメなのかなあ……」

落胆する顔を見ていられなくて、私は憂ちゃんの肩にそっと手を置いた。

「憂ちゃん、ちょっと代わってくれる?」

「え!?!ちひろさんがするんですか?」

驚いてる憂ちゃんを余所に、私はコインを入れてアームを動かした。

よくよくこのぬいぐるみを見たら、頭の所に紐がある。

「この紐にアームを引っ掛けていけば……」

アームの先が上手く紐の輪っかの中を通り抜けた。

紐が掛かったままアームが上がり、そのまま私達がいる場所までぬいぐるみを引き摺ってくる。

「どうか、落ちませんように……」

憂ちゃんの必死の願いは無事叶い、ぬいぐるみは取り出し口に落ちてきた。

「わあっ！！やったやったあっ！！」

可愛いぬいぐるみを抱きながら大喜びしてる憂ちゃん、目茶苦茶可愛いつ！！

「ちひろさん、ありがとうございます！！」

「ふえええっ！？」

嬉しさのあまり、憂ちゃんが私に抱き付いてきた！！

嬉しいけれど、いきなりすぎて大混乱！！

普通なら抱きかえしたり頭を撫でたりするんだけど、突然の事に思考停止……。

「ああっ、憂だけずるうーい！！私も私もお！！久々にちいちゃん分補給っ」

さらに唯ちゃんまで！！

あうっっ……、二人とも可愛いよお……。

このまま時が止まればいいなんて、ちよっぴり考えちゃった……。

「ところでちいちゃん、私のも取れないんだよお……。」

抱き付いたまま、唯ちゃんが半べそを掻いてる……。

唯ちゃんに案内してもらった所にあつたのは、箱に入った人気アニメのDXフィギュアだった。

「さっきから開いてる横の穴にアームを入れてはいるんだけど……、持ち上げてアームが動き出した途端に落ちちゃうんだよおおおおお  
おおおっ！！！」

唯ちゃん、半べそというより泣きかけてる……。

取り敢えず、アームを確認してみる。

「この台、アームが弱いみたい。アームの先が開いちゃってるから、掴む威力が強くなって落ちちゃうの」



「えええっ！？それじゃあ諦めるしかないのおっ！！もう千円も注ぎ込んでるのにいいいいっ！！」

いよいよ泣き顔になりつつある唯ちゃん。

「ちょっと待ってて。諦めるのはまだ早いから」

私は箱のある部分に注目した。それは、箱の上の面。

上の蓋になつてるところから側面にかけて貼つてある、固定用のセロテープに着目してみる。

この店、完全には目貼りしてないから、蓋と側面の間に僅かな隙間が出来てる。

それとアームを動かすボタンも確認。アームを回転する事が可能みたい。

「唯ちゃん大丈夫、これ取れるよ」

「えっ！？本当に？」

「あれ、唯達UFOキャッチャーやってるのか？」

律ちゃん達が私達を見つけて、合流してきた。

「あ、これアタシもさっきやったんだ。アームが弱くて落ちるから

諦めたんだよなあ……」

「私も。でもちいちゃんが取れるって」

「マジで!？」

律ちゃん達が固唾を飲んで見守る中、私はコインを入れてアームを動かした。

「あれ?これじゃあ箱の中心からずれてて、横の穴にアームが通らないじゃないか?おいおい、何で更にアームを回転させてるんだ?これじゃあ取れな、ングウンツ!？」

「はいはい、ちひろが集中出来ないから、ちょっと黙ってような?」

とても心配性で色々指摘してくれてる湊ちゃんのを、律ちゃんが塞いでくれた。

そう、もう横穴なんて関係ないの。そして、アームが狙ってるのは……。

グサツ!!「刺さったあ!!」「」「」「」

そう、箱の蓋の僅かな隙間にアームの先を刺し込むの。

これならアームの強弱なんて関係ないから。

「うわあ、刺さったまんま持ち上がってる!!」

唯ちゃん、普段は見ない取り方に驚いてる。

深々と刺さったら、後はこのまま取り出し口に、といきたいところ  
なんだけど……。

「店員さん、すみませーん」

刺さって落ちないから、店員さんに取ってもらわなければいけない  
の……。

「わあーい、やったあーっ!!取れた取れた取れたあっ!!」

無事、お目当ての景品を手にした唯ちゃんは興奮気味。

「ちいちゃん、凄おーい!!あんな取り方初めて見たよ。まるで  
必殺仕事人だよね」

「そんな、大袈裟だよお……」

別に褒められなくてしたんじゃないから、恥ずかしいやらこそばゆ  
いやら……。

でも、唯ちゃんの笑顔が見られただけで、頑張った甲斐があったかな。

「ちひろちゃん、私もぬいぐるみ取って」

『私もお願いしようかしら?』

「遷はいいのか?」

「えっ!? わ、私は……………」ゴニョゴニョ……………」

この後、皆のリクエストする景品を取るはめになっちゃった。

まあ結果的に、なんとか全部取る事が出来たからホッとした…………」。

）  
）

皆、思い思いの景品を手に御満悦の様子。

もちろん、私の分も忘れてはいないけど。

「ちひろ、ぬいぐるみがビニール袋二つにギッシリね……………」

和ちゃんならずとも私もビックリの大収穫!!

店員さん、泣いてたなあ…………」。ちょっとやり過ぎたかも…………」。

「ちひろ凄いなあ！！なんでこんなにUFOキャッチャー上手いんだ？」

でっかいぬいぐるみを抱き抱えながら、澪ちゃんが尋ねてくる。

この答えが暗くなるかもしれないから、ちょっと答えるのをためらったけど、今さら隠す事も無いよね……。

「……私ね、中学時代に学校の誰かと遊ぶ事が出来なかったから、一人でゲームセンターによく遊びに行ってたの……。可愛いぬいぐるみが、私の傷付いた心を癒してくれたから……」

やっぱりと言えばそれまでだけど、澪ちゃんは地雷を踏んでしまったと言わんばかりに、後悔しきりの表情になっちゃってる……。

「……ご、ごめんちひろ……、私そんなつもりじゃあ……」

「ううん、気にしないで。こんな暗い話した私が悪かったんだもの。澪ちゃんは悪くないから」

「……本当に優しいな、ちひろって……」

暗い話はここまで。私は明るくなる方向に話を進めた。

「私ね、UFOキャッチャーに使う金額に制限を設けてたの。そうすれば限られた金額の中でチャレンジするから、自ずと腕も上がるの。色んな攻略法も身に付いたし。これでコレクション、また増えちゃった」

両手いっぱいビニール袋を満面の笑みで持ち上げると、皆私の最後に言った言葉の意味に気がついたみたい。

『……ち、ちひろちゃん？も、もしかして、あの物置のぬいぐるみって……？』

「うんっ、全部戦利品」

「「「「「「『どっひゃあーっ！』」「」「」「」

驚く声が見事に八モってる。息ピッタリだよお……。

）

「なあ、皆でプリクラ撮らね？今日の記念にさ」  
「律ちゃんの提案に、皆賛成してた。」

「私、プリクラって初めてで……」

「ちひろちゃん、私もよ。今日がプリクラデビューね、私達」

ムギちゃんも初めてみたい。なんだかお仲間意識で嬉しくなる私達。

「人数多い事だし、4人ずつ組み合わせを代えながら撮ろうか？」

漣ちゃん曰く4人が限界との事で、まずは唯ちゃん達姉妹と和ちゃんにムギちゃん。

そして律ちゃんと漣ちゃん、それに海衣奈ちゃんと私の組み合わせが決まった。

）

「わあっ！！これがシールなんだ」

最初に撮ったムギちゃんは、シールを手に大喜び。

シールには色々な言葉が書かれてて、皆の名前はもちろん、大好きとか可愛いとか色々な落書きもされてた。

これがプリクラなんだあ……。

「じゃあ、次はアタシ達だな」

律ちゃんは漣ちゃんの手を引いて入っていった。

『私達も行きましょ、ちひろちゃん』

私も海衣奈ちゃんに手を引かれて、中に入っていった。

「フレームはこれでよし、と。最初は皆、ピースサインでいこうぜ」  
前で操作してる律ちゃんのピースサインに、皆も続く。

私、写真に写る時ってピースサインした事無いから、なんだかぎこちないピースになってるかも……。

“それじゃあ、撮りますよ。はい3、2、1、カシヤッ”

「次は私と透、海衣奈とちひろで思い思いのポーズを撮ろう」

海衣奈ちゃんと？どんなポーズにしようかな……？

「きゃんっ!？」

海衣奈ちゃんが有無を言わずに、私の肩を引き寄せてきた。

思わず声はうわずるし、多分顔は真っ赤になってると思う……。

でも、凄く嬉しそうな海衣奈ちゃんの笑顔に、私もつられて笑った。

そして、シャッター音が聞こえて撮影は終わった。



「なんで律はいきなりこういう事するんだー！」

「だって面白いじゃん。記念だしさ……」

「こんな恥ずかしい記念、あつてたまるか!？」

私が手にしたシールには、律ちゃんの手によってベロベロバアをしたような、澪ちゃんの壮絶な変顔が写ってた……。

私も皆も吹き出し笑いが止まらない……。

律ちゃんはお約束通り、たんこぶを拵える始末……。

「いやあ、しかしミーナちゃんとちいちゃんは、ラブラブで嫉けますなあ」

『茶化さないの、唯ちゃんは』

と打ちつつも、海衣奈ちゃん嬉しそう。

肩を引き寄せられて、やっぱり真っ赤になってる私達のシールに書かれてる文字をジッと見つめる。

“私の親友、ちひろちゃん”

“この子は私の嫁”

海衣奈ちゃん、嫁って……。私も私で恥ずかしいなあ……。

シールをさっそく携帯に貼って、思わず笑みを浮かべる。

大切な仲間、掛け替えのない親友と一緒に撮ったプリクラに、私はこう書き込みした。

“これからもずっと友達”

“皆、大好き”

ある意味、私も恥ずかしい事書いたけど、これしか思い付かなかったし……。

これが私の初プリクラ記念日、なんてね。

## 第27話「嬉し恥ずかしいお出かけ」（後書き）

エイジ「皆さん、如何でしたでしょうか？」

海衣奈「動画に画像も、たくさん増えたわあ」

ちひろ「やっぱり見てたんだ、本屋の出来事……」

海衣奈「それにしても、UFOキャッチャー上手ね、ちひろちゃん」

ちひろ「あ、あれはまだ初歩中の初歩のテクニクで、難易度の高い技もいっぱいあるの。ところでエイジ先生はするんですか、UFOキャッチャー？」

エイジ「もちろん。特にけいおん関係の景品は、出たら必ずと言っていいほどゲットしています。もちろん、ぬいぐるみやお菓子なんかも取ってますよ」

海衣奈「ちひろちゃんみたいにズラズラあるの？」

エイジ「さすがにそこまでは……。それと僕、プリクラ撮った事無い……」

海衣奈「うん。まあ、そうでしょうね」

エイジ「あっさり納得しないでよ！！だって彼女いないし、男性のみは立ち入り禁止じゃない、プリクラコーナーって」

ちひろ「よかったら今度、私と一緒に撮りませんか？」

エイジ「あ、ありがとうおおおおいおいおい……」

海衣奈『マジ泣きね……』

エイジ「ふうっ、落ち着きました。さあ、次回でお出かけ編完結です。次回、ある人のリクエストをきっかけに、仁義なきバトルが勃発します。その結果が招く出来事とは？そしてラストに待ち受ける、想像もしなかった結末とは？」

一同「『それではまた、次話でお会いしましょう』」「」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9932n/>

---

けいおん！～ピュアガールズ～

2011年10月21日09時03分発行